図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
34	小玉	0.9	0.9	0.6	0.4	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q30 孔径0.2cm	PL36
35	小玉	0.8	0.8	0.7	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q31 孔径0.2cm	PL36
36	小玉	0.9	1.0	0.6	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q32 孔径0.3cm	PL36
37	小玉	0.8	0.9	0.7	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q33 孔径0.2cm	PL36
38	小玉	0.9	0.9	0.5	0.4	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q34 孔径0.2cm	PL36
39	小玉	0.85	0.85	0.6	0.6	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q36 孔径0.2cm	PL36
40	小玉	0.8	0.75	0.55	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q37 孔径0.2cm	PL36
41	小玉	0.8	0.8	0.5	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q40 孔径0.2cm	PL36
42	小玉	0.8	0.9	0.6	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q42 孔径0.2cm	PL36
43	小玉	0.8	0.8	0.6	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q44 孔径0.2cm	PL36
44	小玉	0.8	0.9	0.5	0.4	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q45 孔径0.2cm	PL36
45	小玉	0.8	0.8	0.4	0.7	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q49 孔径0.2cm	PL36
46	小玉	0.7	0.8	0.6	0.4	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q52 孔径0.2cm	PL36
47	小玉	0.8	0.9	0.5	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q53 孔径0.2cm	PL36
48	小玉	0.9	0.8	0.6	0.7	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q61 孔径0.2cm	PL36
49	小玉	0.9	0.7	0.5	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q62 孔径0.2cm	PL36
50	小玉	0.8	0.7	0.7	0.6	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q63 孔径0.2cm	PL36
51	小玉	0.9	0.8	0.6	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q64 孔径0.2cm	PL36
52	小玉	0.9	0.9	0.7	0.7	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q65 孔径0.2cm	PL36
53	小玉	0.7	0.8	0.6	0.5	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q66 孔径0.2cm	PL36
54	小玉	0.5	0.5	0.3	0.1	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q24 孔径0.1cm	PL36
55	小玉	0.55	0.6	0.4	0.2	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q25 孔径0.2cm	PL36
56	小玉	0.6	0.7	0.3	0.2	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q35 孔径0.2cm	PL36
57	小玉	0.6	0.6	0.45	0.2	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q39 孔径0.2cm	PL36
58	小玉	0.5	0.6	0.5	0.2	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q46 孔径0.2cm	PL36
59	小玉	0.8	0.7	0.4	0.3	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q47 孔径0.2cm	PL36
60	小玉	0.5	0.5	0.4	0.2	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q48 孔径0.1cm	PL36
61	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q18 孔径0.1cm	PL36
62	小玉	0.4	0.3	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q38 孔径0.1cm	PL36
63	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q41 孔径0.1cm	PL36
64	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q43 孔径0.1cm	
65	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q50 孔径0.1cm	PL36
66	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q51 孔径0.1cm	PL36
67	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q54 孔径0.1cm	PL36
68	小玉	0.5	0.5	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q55 孔径0.2cm	PL36
69	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q56 孔径0.1cm	PL36
70	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q57 孔径0.1cm	PL36
71	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q58 孔径0.1cm	PL36
72	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q59 孔径0.1cm	PL36
73	小玉	0.3	0.3	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q67 孔径0.1cm	PL37
74	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q68 孔径0.1cm	PL37
75	小玉	0.3	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺覆土	Q69 孔径0.1cm	PL37
76	小玉	0.9	1.1	0.6	0.7	不明	第2箱式石棺覆土	Q70 孔径0.4cm	PL37

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第97図77	不明鉄製品	2.7	2.6	0.2	6.2	鉄	周溝覆土	M8	PL37
78	不明鉄製品	(7.4)	5.1	0.8	(101.3)	鉄	周溝覆土	M9	PL37
79	不明銅製品	(1.6)	2.3	0.2	(2.0)	銅	周溝覆土	M10 0.2cmの孔が2つあり	PL37
80	鉄鏃	(2.9)	1.8	0.4	(2.2)	鉄	周溝覆土	M11	PL37
81	鉄鏃	(5.2)	0.3	0.2	(2.4)	鉄	周溝覆土	M12	PL37
82	鉄鏃	(5.3)	0.4	0.3	(3.8)	鉄	周溝覆土	M14	PL37
83	鉄鏃	(5.8)	1.1	0.4	(4.0)	鉄	周溝覆土	M16	PL37
84	鉄鏃	(4.3)	1.3	0.6	(3.5)	鉄	第2箱式石棺覆土	M15	
85	鉄鏃	(3.8)	(1.6)	0.1	(1.6)	鉄	第2箱式石棺覆土	M17	
86	不明鉄製品	(3.2)	(2.2)	0.1	(2.0)	鉄	第2箱式石棺覆土	M18	

遺物　周溝からは，第1箱式石棺に隣接する南コーナーの$C4_{j9}$区の覆土の1層の上面から雲母片岩の集石が確認され，周溝が堆積した後に石を投棄したものと考えられる。この集石よりも下層から，第97図80・81・82・83・84の鉄鏃がそれぞれ比較的近い位置で出土している。第96図1の須恵器平瓶は，集石の南側からつぶれた状態で出土している。第2箱式石棺からは，第97図85の鉄鏃が出土している。また，数多くのメノウ製勾玉や水晶製切子玉やガラス玉はこの箱式石棺の北東コーナーからまとまって出土しているので，首飾りとして利用されたものと考えられる。

所見　本跡は，箱式石棺の埋葬位置が墳頂部でなく墳裾部であること，長方墳であること，須恵器平瓶から判断して7世紀末葉から8世紀初頭と考えられる。

第4号古墳（第98・99図，PL34）

現況と確認状況　調査前まで畑として利用されていた。事前調査の段階では，墳丘が既に失われていたため，全くその存在は不明であった。古墳は，試掘・表土除去・遺構確認の一連の調査の過程で，周溝が確認され，始めてその存在が明かになったものである。

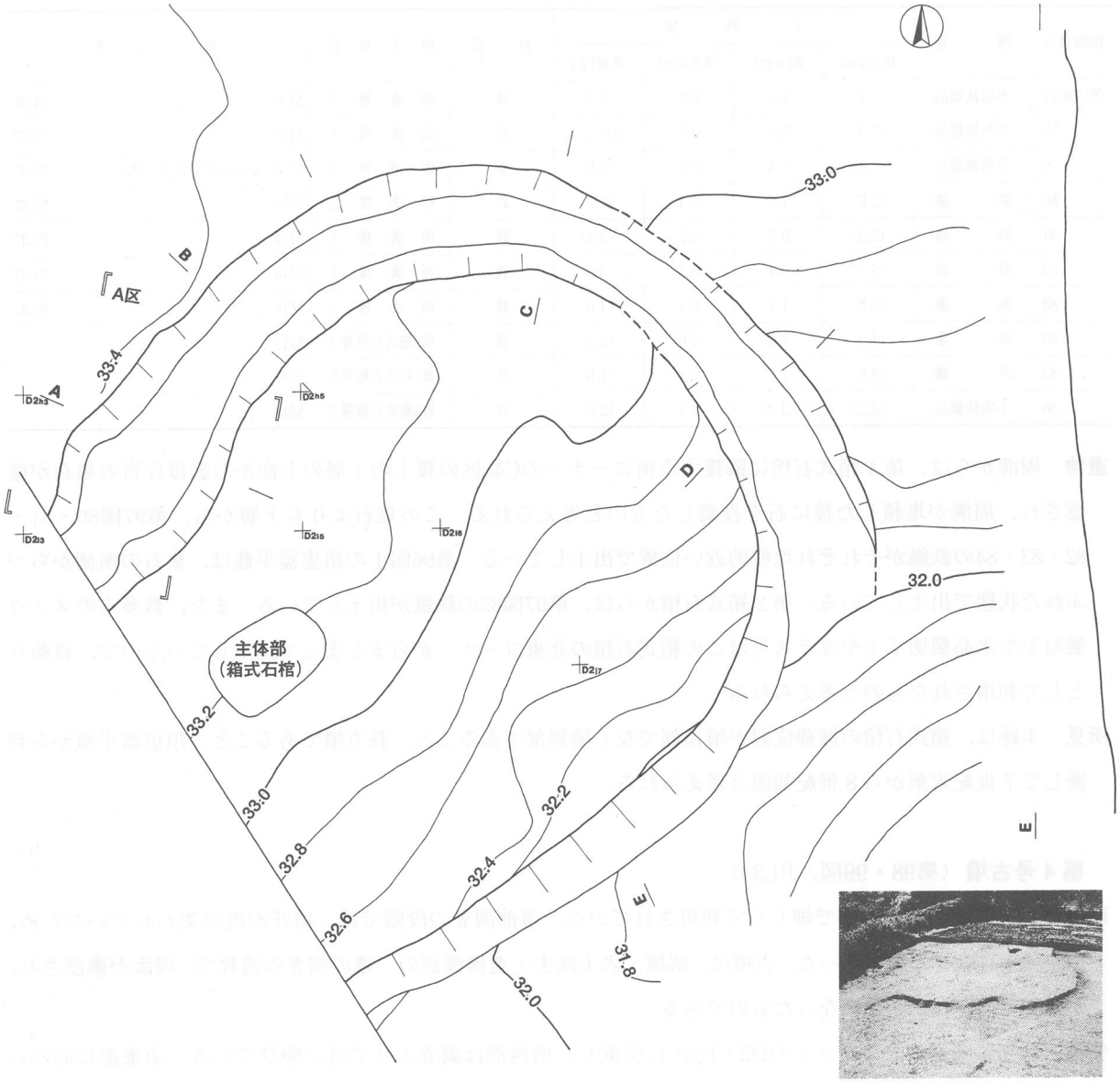
位置　調査区南部の大グリットのD2・E2区に位置し，南西部は調査エリア外に伸びている。南東部に向かってなだらかに傾斜した場所に確認されている。

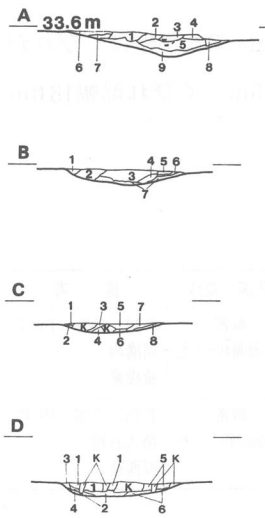
墳形及び規模　南西部が調査エリア外に伸びているので，明確ではないが，$D2_{i3}$・$D2_{i4}$区でわずかにくびれが確認できたので前方後円墳と判断した。周溝内法で，全長（16.6）m，後円部径15.5m，くびれ部幅13.0mである。

第4号古墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	長頸瓶 須恵器	B (6.0)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。口縁部に釉付着。	黒色斑点・緻密 灰黄褐色 (釉)暗オリーブ色 良好	P14 15% PL37 周溝内 猿投産
2	壺 須恵器	B (1.6)	体部上端片。体部は内彎して立ち上がる。肩部に沈線が巡る。	ロクロ成形。肩部に釉付着。	黒色斑点・緻密 灰白色 (釉)暗オリーブ色 良好	P15 5% PL37 箱式石棺 湖西産

第100図3（TP4）は須恵器甕の体部片で，外面平行叩き，内面同心円の当て具痕が施されている。4（TP5）は須恵器甕の口縁部片で，8本単位の櫛状工具による波状文が施されている。





第4号古墳周溝土層解説

A－A'
1 褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
2 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土少量
3 褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4 暗褐色　ローム粒子・黒色土少量
5 黒褐色　黒色土多量，礫中量，ローム粒子少量
6 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
7 暗褐色　黒色土中量，ローム粒子少量
8 褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
9 暗褐色　黒色土中量，ローム粒子少量

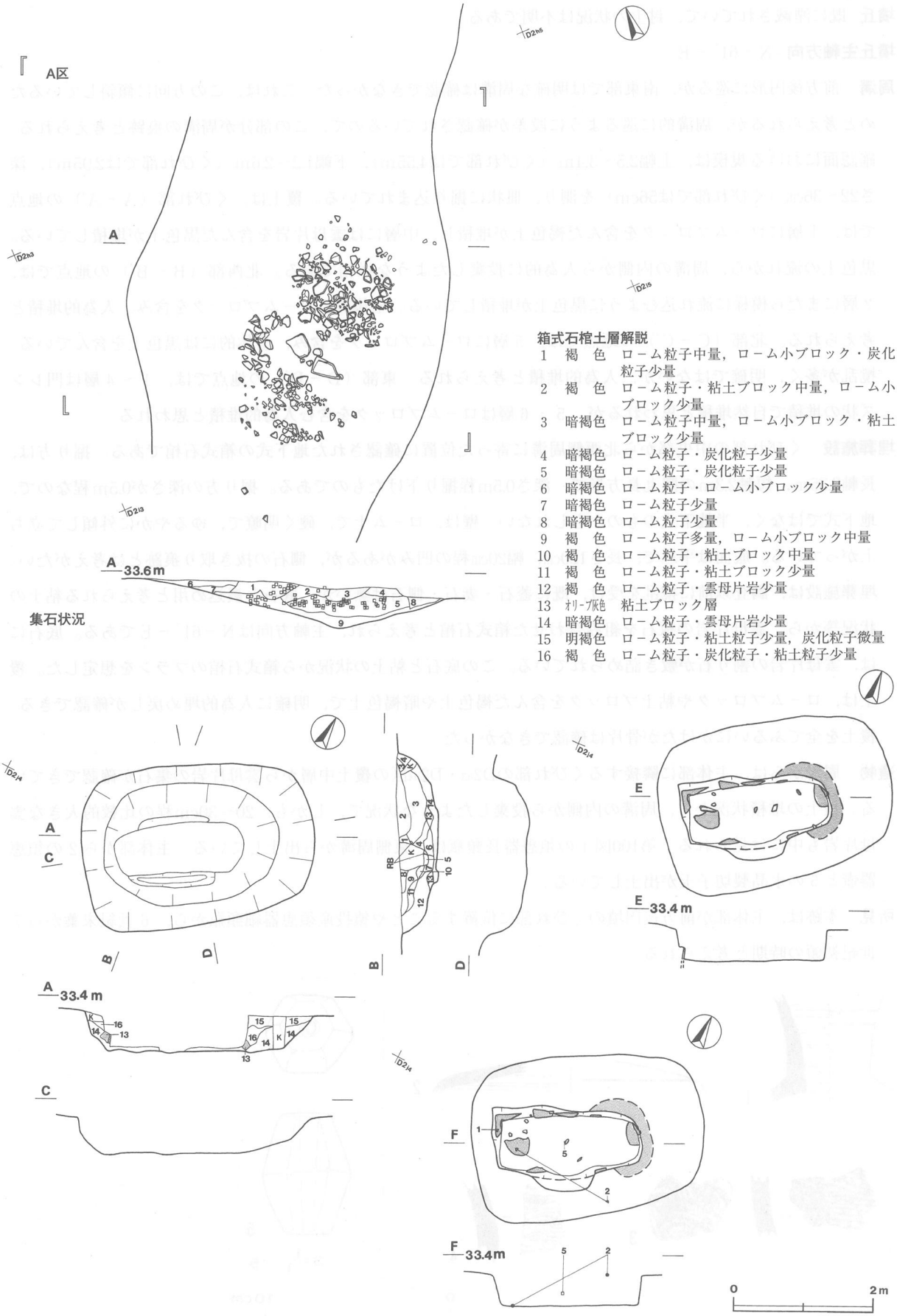
C－C'
1 暗褐色　ローム粒子・黒色土中量
2 褐　色　ローム粒子多量
3 褐　色　ローム粒子中量，黒色土少量
4 黒褐色　黒色土多量，ローム粒子微量
5 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土少量
6 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土少量
7 暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色土少量
8 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

B－B'
1 黒褐色　黒色土中量，ローム粒子少量
2 黒褐色　黒色土多量，ローム粒子少量
3 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
4 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
5 暗褐色　ローム粒子少量
6 褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
7 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量

D－D'
1 褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
2 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
3 褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量
4 褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
5 黒褐色　黒色土中量，ローム粒子・ローム小ブロック少量
6 暗褐色　ローム粒子中量，黒色土少量

0　5m

第98図　第4号古墳(1)



箱式石棺土層解説

1	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
2	褐　色	ローム粒子・粘土ブロック中量，ローム小ブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・粘土ブロック少量
4	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量
7	暗褐色	ローム粒子少量
8	暗褐色	ローム粒子少量
9	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
10	褐　色	ローム粒子・粘土ブロック中量
11	褐　色	ローム粒子・粘土ブロック少量
12	褐　色	ローム粒子・雲母片岩少量
13	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	粘土ブロック層
14	暗褐色	ローム粒子・雲母片岩少量
15	明褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
16	褐　色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

第99図　第4号古墳(2)

墳丘 既に湮滅されていて，封土の状況は不明である。

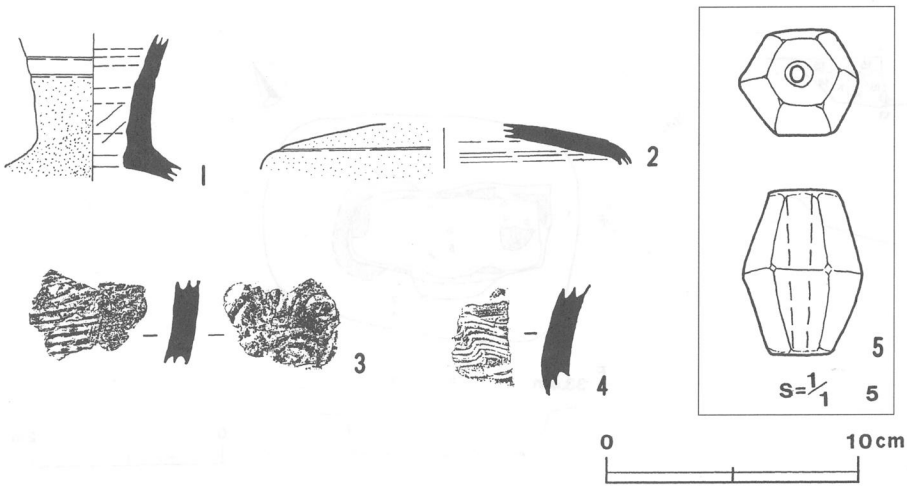
墳丘主軸方向 N－61°－E。

周溝 前方後円形に巡るが，南東部では明確な周溝は確認できなかった。これは，この方向に傾斜しているためと考えられるが，周溝的に巡るように段差が確認されているので，この部分が周溝の痕跡と考えられる。確認面における規模は，上幅2.5～3.4m（くびれ部では4.55m），下幅1.2～2.6m（くびれ部では2.95m），深さ22～36cm（くびれ部では56cm）を測り，皿状に掘り込まれている。覆土は，くびれ部（A－A'）の地点では，上層にローム－ブロックを含んだ褐色土が堆積し，中層には雲母片岩を含んだ黒色土が堆積している。黒色土の流れから，周溝の内側から人為的に投棄したような様相である。北西部（B－B'）の地点では，2層にまだら模様に流れ込むように黒色土が堆積している。全体的にローム－ブロックを含み，人為的堆積と考えられる。北部（C－C'）の地点では，5層にローム－ブロックを含み，全体的には黒色土を含んでいる。撹乱が多く，明確ではないが，人為的堆積と考えられる。東部（D－D'）の地点では，1～4層は凹レンズ状の堆積で自然堆積と思われるが，5・6層はローム－ブロックを含む人為的堆積と思われる。

埋葬施設 くびれ部の中央部から北西側周溝に寄った位置に確認された地下式の箱式石棺である。掘り方は，長軸3.35m，短軸2.3mの隅丸長方形で，深さ0.5m程掘り下げたものである。掘り方の深さが0.5m程なので，地下式ではなく，半地下式のものかもしれない。壁は，ローム土で，硬く明瞭で，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で，長さ120cm，幅20cm程の凹みがあるが，側石の抜き取り痕跡とは考えがたい。埋葬施設は，調査以前に撹乱を受け，既に蓋石・妻石・側石は無いが，底石と裏込め用と考えられる粘土の状況等から，雲母片岩の板石を組み合わせた箱式石棺と考えられ，主軸方向はN－61°－Eである。底石には，雲母片岩の割り石が敷き詰められている。この底石と粘土の状況から箱式石棺のプランを想定した。覆土は，ローム－ブロックや粘土ブロックを含んだ褐色土や暗褐色土で，明確に人為的埋め戻しが確認できる。覆土を全てふるいにかけたが骨片は確認できなかった。

遺物 周溝からは，主体部に隣接するくびれ部の$D2_{h3}$・$D2_{h4}$区の覆土中層から雲母片岩の集石が確認できている。覆土の堆積状況から，周溝の内側から投棄したような状況で，しかも，20～30cm程の比較的大きな雲母片岩も中には見られる。第100図1の須恵器長頸瓶は，東側周溝から出土している。主体部から2の須恵器壺と5の水晶製切子玉が出土している。

所見 本跡は，主体部が前方後円墳のくびれ部に位置することや猿投産須恵器細頸瓶から，6世紀末葉から7世紀初頭の時期と考えられる。



第100図　第4号古墳出土遺物

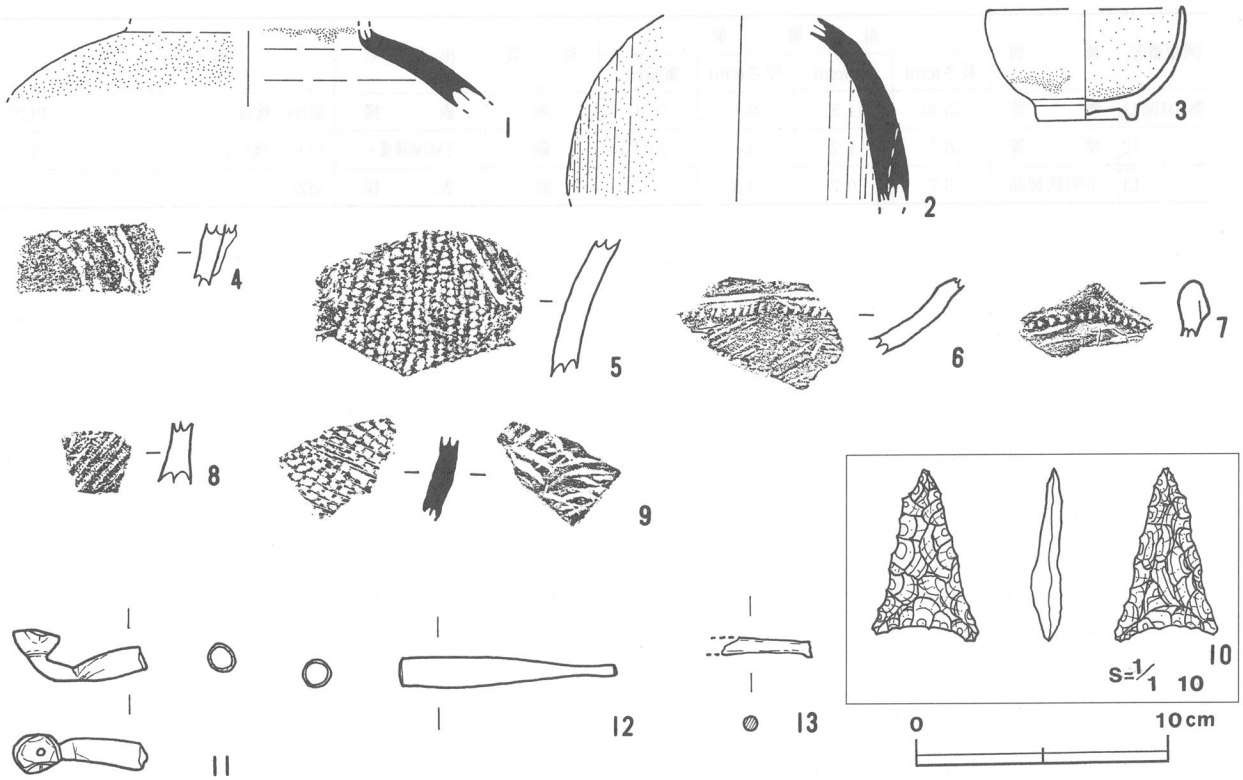
図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第100図5	切子玉	1.6	1.4	2.2	5.6	水晶	箱式石棺覆土	Q71　孔径0.3cm　PL37

表5　札場古墳群古墳一覧表

古墳名	位置(区)	墳形	墳丘規模（m）					墳丘主軸方向	埋葬施設			周溝			備考 旧→新
			全長	後円部径	くびれ部幅	前方部幅	残存高		主体部	主軸方向	遺物	幅(m)	深さ(cm)	遺物	
1	C2・D2	円墳	27.8	−	−	−	2.5	N-32°-E	箱式石棺	N-47°-W	須恵器(甕, 横瓶), 不明鉄製品	上幅3.4〜5.3 下幅1.1〜2.8	64〜90	須恵器(甕), 管状土錘, 不明鉄製品	6世紀末葉
2	A3・B3	円墳	22.5	−	−	−	0.8	N-1°-E	横穴式石室	N-1°-E	土師器(坏)	上幅2.0〜3.1 下幅0.8〜2.2	30〜44	砥石, 不明鉄製品	6世紀後葉
3	B4	長方墳	長軸17.5 短軸[12.5]		−	−	−	N-60°-W	第1箱式石棺	N-30°-E		上幅1.1〜2.25 下幅0.9〜1.8	6〜40	須恵器(平瓶, 長頸瓶), 鉄鏃	7世紀末葉〜8世紀初頭 第1箱式石棺→第2箱式石棺
									第2箱式石棺	N-27°-E	勾玉, 切子玉, ガラス玉, 鉄鏃, 須恵器（長頸瓶）				
4	D2・E2	前方後円墳	(16.6)	15.5	13.0	−	−	N-61°-E	箱式石棺	N-61°-E	須恵器（長頸瓶), 切子玉	上幅2.5〜4.55 下幅1.2〜2.95	22〜56	須恵器(長頸瓶)	6世紀末葉〜7世紀初頭

2　遺構外出土遺物

当遺跡からは，表土層及び遺構確認面から遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは，主なものの実測図及び拓撮図を掲載した。



第101図　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	短頸壺 須恵器	B (3.0)	体部上端片。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ成形。体部外面及び内面上端に釉付着。	黒色斑点 褐灰色 (釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P16 5% PL37 湖西産
2	ﾌﾗｽｺ形長頸瓶 須恵器	B (7.2)	体部片。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ成形。体部外面に釉付着。	白色粒・黒色斑点 灰白色 (釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P17 15% PL37 湖西産
3	碗 陶器	A [7.8] B 4.4 D 3.9 E 0.6	輪高台で，体部は内彎して立ち上がり，口縁端部に至る。	削り出し高台。体部内面全面及び外面に釉付着。体部下端及び高台部無釉。	緻密 オリーブ褐色 (釉)黄褐色 良好	P18 30% PL37 黄瀬戸

第101図4（TP3）・5（TP7）は縄文時代中期の土器である。4は胴部片で，隆帯に沿って2列の角押文が施されている。5は胴部片で，単節LRの縄文が施されている。6（TP2）・7（TP6）は縄文時代後期の土器である。6は浅鉢の胴部片で，キザミ目が施されている。7は口縁部片で，隆帯上にキザミ目が施されている。8（TP8）は弥生土器胴部下端片で，附加状1種（附加2条）の縄文が施されている。9（TP9）は須恵器甕の体部片で，外面格子目叩き，内面同心円の当て具痕が施されている。

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第101図10	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.8	チャート	TM4周溝覆土	Q72 PL37

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第101図11	煙管	(5.3)	(1.5)	0.1	(6.4)	銅	表採	M20 雁首 PL37
12	煙管	(8.7)	1.2	0.1	(10.8)	銅	TM2周溝覆土	M6 吸い口 PL37
13	不明鉄製品	(3.7)	0.7	0.6	(1.7)	鉄	表採	M21

第4節 まとめ

札場古墳群は，『北浦史資料考』[1]によると5基の古墳によって構成されていることが報告されている。しかし，調査エリア外を踏査したが，周辺には古墳らしき高まりは確認できなかった。

この札場古墳群で確認された4基の古墳は，いずれも埴輪をもたず，古墳において埴輪樹立が行われなくなった後の古墳である。これらの4基の古墳について若干のまとめを行う。

1 古墳の形態

墳形をみると，円墳・方墳・前方後円墳とバラエティに富んでいる。円墳は，第1・2号古墳，方墳は，第3号古墳，前方後円墳は，第4号古墳である。この前方後円墳は前方部がエリア外に伸びているので，明瞭ではないが，後円部径に比べて前方部が小さく，くびれ部が明瞭でない古墳であろう。方墳について考えてみると，茨城県内では約100基存在し，特に北浦・霞ケ浦周辺に多く分布している[2]。時期的には，7世紀以降のものがほとんどである。これは，千葉県の状況とも一致する部分が多く，県内でも南部に多く見られる所以であろうと思われる[3]。県内での方墳の例は，土浦市石倉山1・2・8・9号墳，東台3・9号墳，寺家ノB第1・2・3号墳，十三塚B第1号墳，鹿嶋市宮中野第99－1号墳，つくば市高山第1号墳，平沢1号墳（佐渡ケ岩屋古墳），水戸市吉田古墳，真壁郡関城町船玉古墳，石岡市峠1・2号墳，道祖神1号墳，舟塚山10号墳，竜ヶ崎市長峰第29・31号墳，西茨城群岩瀬町花園3号墳，間中第1号墳，鹿島郡鉾田町安房西古墳第3号墳，東茨城郡桂村頓（徳）化原古墳等がある[4]。

札場古墳群で確認された古墳は，すべて周溝に集石が見られる。石材はすべて雲母片岩である。この集石の位置は，埋葬施設に近い周溝の部分からである。埋葬施設の石材との関係は，第1・4号古墳の箱式石棺と第3号古墳の第1箱式石棺が雲母片岩であり，第2号古墳の横穴式石室と第3号古墳の第2箱式石棺がシルト岩である。このように，埋葬施設の石材と同じ石材が周溝から確認される訳ではない[5]。

埋葬施設は，横穴式石室と箱式石棺とである。第2号古墳の横穴式石室は，シルト岩の切り石を小口積みにした地下式の無袖形横穴式石室であり，側壁及び奥壁を持ち送り的に内傾されて立ち上がっている。横穴式石室については，阿久津久氏[6]と石橋充氏[7]の編年研究がある。阿久津氏は，横穴式石室をⅠ型－乱石積み横穴式石室，Ⅱ型－切り石積み横穴式石室，Ⅲ型－板石・乱石積み折衷形横穴式石室，Ⅳ型－板石台形組み横穴式石室，Ⅴ型－板石箱形組み横穴式石室の5型式に分類し，さらに平面構造からA類（無袖のもの），B類（片袖のもの），C類（両袖のもの），D類（無袖で玄室が胴張りのもの）の4類に分けている。この分類によれば，Ⅱ型－A類と考えられる。石橋氏は，横穴式石室をⅠ型式－側壁を小口積により構成する無袖単室構造の石室，Ⅱ型式－側壁を小口積と板石によって構成する片袖単室構造の石室，Ⅲ型式－側壁を板石により構成する両袖単室構造の石室，Ⅳa型式－側壁を板石により構成する両袖複室構造の石室のうち，L・U字状に加工された袖石を組み合わせた門構成を含まないもの，Ⅵb型式－側壁を板石により構成する両袖複室構造の石室のうち，L・U字状に加工された袖石を組み合わせた門構成を含むもの，5型式に分類している。この分類によれば，Ⅰ型式と考えられる。

箱式石棺については，次のような編年研究がある。阿久津久氏は，埋葬施設の位置と構造，追葬の有無を編年の軸とし，石棺が墳頂部に置かれ，一墳一人埋葬の原則を保つものを相対的に古式のものとし，それ以後は，棺の増設，埋設される平面・断面上での位置の相違から次第に新しいものへと変遷していくとしている[8]。黒沢彰哉氏は，側石の数量・構築方法に着目し，3つの類型（A類－側石が左右とも1枚か2枚の板石でどちらも横位で構築しているもの，B類－側石は左右またはどちら側かが大小2枚の板石になり，大きめの石を横位に

置き小さな石を縦位に立てるもの，または，３枚の板石を横位に並べて築いているもの，Ｃ類－側石を３枚以上の板石で縦位に組むもの）に分け，古いものほど石材の数を少なくし，横位の状態で構築し，新しい時期になると３枚以上の石材を縦位で使用するとしている。[9] 石橋充氏は，箱式石棺の底石に着目し，４つの類型（Ⅰ型式－棺の内法の２分の１を越える大型の板石を含む，１～３枚で構成するもの，Ⅱ型式－棺の内法の２分の１を越えない小型の板石のみで，３枚以上で構成するもの，Ⅲ型式－不定形な板石を組み合わせる，あるいは割石を併用して構成するもの，Ⅳ型式－片岩の割石・川原石・木炭等を敷きつめて構成するもの）に分け，大型で少数の石材を使用するものから，小型で多数の石材を使用するものへと変化していくとし，Ⅰ型式→Ⅵ型式への変遷を考えている。[10] 第１号古墳の箱式石棺は，所見の所でも述べたように石材に蓋石しか使用しない可能性が考えられたので除外して考えたい。第３号古墳の箱式石棺は２基確認され，第１箱式石棺が先に作られ，後に第２箱式石棺が作られたと考えている。阿久津氏の箱式石棺の分類によれば，箱式石棺は，墳頂部に置かれていないこと，石棺が２つあること，地下式であることの指摘ができよう。黒沢氏の分類によれば，第１箱式石棺は側石１枚しか残っていないので，明確ではないが，１枚の板石を横位に使用しているのでＡ類あるいはＢ類のいずれかと考えられる。第２箱式石棺は切り石を使用しているので，この分類からは何とも言えないが，箱式石棺の規模と構造から言えば，横穴式石室クラスのものと指摘できるであろう。石橋氏による分類によれば，第１箱式石棺の底石は，片岩の割石を敷きつめているので，Ⅵ型式と考えられる。第４号古墳の箱式石棺は遺存状況は悪く，明確ではないが，底石の状況から判断すれば，石橋氏の箱式石棺の分類によれば，Ⅵ型式と考えられる。

２　遺物

第２号古墳を除く，３基の古墳から須恵器が出土している。第１号古墳からは甕と横瓶の２点が出土している。横瓶は，胎土に礫を多量に含み，やや黒みを帯びた褐灰色で，焼成は普通であり，在地産の須恵器と考えられる。[11] 時期は６世紀末葉である。第３号古墳からは平瓶２点，長頸瓶２点，フラスコ形長頸瓶２点の計６点が出土している。平瓶は最大径20.9㎝と大形で，白色粒・黒色斑点を含み，黄灰色で，焼成は良好で，東海系（東部の可能性あり）の土器と考えられる。時期は７世紀末葉から８世紀初頭と考えられる。平瓶の県内での出土事例は少なく，当遺跡を除くと，管見では19遺跡24例程[12]（表６参照）しかない。平瓶１点，長頸瓶１点，フラスコ形長頸瓶２点の４点は湖西産の須恵器である。第４号古墳からは細頸瓶と長頸瓶の２点である。細頸瓶は緻密で，黒色斑点を含み粘土質であり，表面に暗オリーブ色の釉が付着し，焼成は良好である。猿投産の須恵器である。時期は，６世紀末葉から７世紀初頭と考えられる。

表6　茨城県内平瓶出土遺跡一覧表

	所在地	出土地	窯跡	文献
1	日立市	吹上１号墳		鈴木裕芳「久慈　吹上」『日立市文化財調査報告』第８集　1981年３月
2	日立市	瓜ボッコ横穴墓		生田目和利「瓜ボッコ横穴墓・吹上３号墳」『日立市文化財調査報告』第27集　1992年３月
3	常陸太田市	釜田Ｂ－14号横穴墓		関根忠邦『釜田横穴群発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1979年３月
4	常陸太田市	幡山Ａ－10号横穴墓		海老澤稔他『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1977年３月
5	常陸太田市	幡山Ｂ－１号横穴墓		海老澤稔他『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1977年３月
6	常陸太田市	幡山Ｂ－９号横穴墓		海老澤稔他『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1977年３月
7	常陸太田市	幡山Ｂ－12号横穴墓		海老澤稔他『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1977年３月
8	常陸太田市	幡山Ｃ－９号横穴墓		海老澤稔他『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1977年３月
9	石岡市	道祖神１号墳	湖西産	石岡市教育委員会『茨城県石岡市　道祖神古墳発掘調査報告』　1995年３月

	所在地	出土地	窯跡	文献
10	石岡市	鹿の子遺跡8号住居跡	湖西産	石岡市教育委員会『鹿の子－鹿の子地域の調査報告11－』 1997年3月
11	新治郡千代田町	大塚2号墳		茨城県教育財団「大塚古墳群他」『茨城県教育財団文化財調査報告』『V 1980年3月
12	新治郡八郷町	半田原遺跡第4号住居跡		茨城県教育財団「半田原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第122集 1997年3月
13	新治郡霞ケ浦町	風返稲荷山古墳		『茨城県史料 考古資料編古墳時代』 1974年 田中広明「霞ケ浦の首長－茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究－」『婆良岐考古』第10号 1988年5月
14	新治郡霞ケ浦町	乳母神古墳群		霞ケ浦町郷土博物館『霞ケ浦の首長－古墳にみる水辺の権力者たち－』 1997年8月
15	土浦市	南丘遺跡第5号溝		茨城県教育財団「南丘遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』第64集 1991年3月
16	土浦市	愛宕山古墳群	在地産	千葉隆司「宮脇B遺跡・愛宕山古墳群出土の土師器と須恵器について」『婆良岐考古』第19号 1997年5月
17	つくば市	柴崎遺跡第190号住居跡		茨城県教育財団「柴崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集 1992年3月
18	つくば市	熊の山遺跡第25号住居跡		茨城県教育財団「熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第120集 1997年3月
19	つくば市	熊の山遺跡第49号住居跡		茨城県教育財団「熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第120集 1997年3月
20	稲敷郡東町	平台遺跡04号住居址		伊東重敏「平台」『稲敷郡東村文化財報告』第1集 1982年3月
21	水海道市	大塚戸篠山第5号墳	湖西産	水海道市教育委員会「大塚戸篠山古墳群 第5号古墳発掘調査報告」『水海道市埋蔵文化財調査報告』第2集 1993年3月
22	真壁郡協和町	寺山古墳群Ⅲ号墳		『茨城県協和町文化財調査報告書』第1集 1986年3月
23	猿島郡総和町	前林古墳		『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(関東Ⅰ)』東京国立博物館 1983年4月
24	鹿嶋市	西谷A遺跡8号住居跡		鹿島町文化スポーツ振興事業団「西谷A遺跡」『鹿島の文化財』第88集 1995年3月 平安時代

須恵器以外には，第3号古墳の第2箱式石棺から，メノウ製の勾玉8点，水晶製切子玉2点，グリータフ製の小玉4点，トンボ玉1点，ガラス製小玉52点，材質不明小玉1点[13]の合計69点が出土している。第4号古墳の箱式石棺から水晶製切子玉1点が出土している。一般に，古墳群の場合は中心墓になるものには，玉も質の良いものを副葬しようとする。第3号古墳の第2箱式石棺からはメノウ製の勾玉が8点出土したことは，この古墳の性格を示しているように思える。

3 古墳の年代観について

第1号古墳は，須恵器横瓶から6世紀末葉と考えられる。第2号古墳は，古墳に伴うと考えられる遺物が無いため，明確では無いが，横穴式石室の構造から6世紀後葉と考えられる。第3号古墳は，須恵器平瓶から7世紀末葉から8世紀初頭と考えられる。第4号古墳は，猿投産の細頸瓶から6世紀末葉から7世紀初頭に位置づけられると考えられる。

以上から札場古墳群は，6世紀後葉から8世紀初頭の古墳群と考えられ，第2号古墳→第1号古墳→第4号古墳→第3号古墳といった一応の編年が考えられるであろう。ただし，第4号古墳と第3号古墳との間に時間的空間がある。また，ここで，気にかかるのは，埴輪樹立という点である。茨城県においては，埴輪の消滅が6世紀末葉から7世紀初頭と一般に考えられている[14]が，この地域ではもう少し早い時期に埴輪が消滅したのではないかと思われる。

《註》

(1)北浦村教育委員会『北浦史資料考』 1985年2月

(2)安藤鴻基「終末期方墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 1992年3月によると「終末期方墳の分布でまず第一に注目されるのは，千葉県の異常なまでの多さである。総数67基に達し，実に全体の4割近くを占める。(中略) 茨城県の10基も千葉県の影響下にあることを思えば，なおさらである。」との指摘がある。

(3)茨城県鹿島郡旭村教育委員会『浜山古墳群発掘調査報告書』 1988年3月

(4)方墳に関しては

・西宮一男『土浦市烏山遺跡群』 茨城県住宅供給公社 1975年3月

・土浦市遺跡調査会『木田余台Ⅰ』 土浦市教育委員会 1991年3月
・茨城県教育財団「永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 寺家ノA・B遺跡,十三塚A・B遺跡,永国十三塚遺跡,旧鎌倉街道」『茨城県教育財団文化財調査報告』第60集 1990年3月
・茨城考古学会『茨城県鹿島郡鹿島町宮中野古墳群調査報告』 茨城県教育委員会 1970年3月
・茨城県教育財団「科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 ツバタ遺跡・高山古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第22集 1983年3月
・寺内のり子「平沢・山口古墳群」『筑波古代地域史の研究』 筑波大学 1982年3月
・箕輪健一『茨城県石岡市道祖神古墳発掘調査報告』 石岡市教育委員会 1995年3月
・松田政基『石岡市 峠遺跡発掘調査報告書』 石岡市教育委員会 1990年3月
・黒沢彰哉「舟塚山古墳群(10号・12号古墳)発掘調査報告書Ⅱ」 石岡市教育委員会 1978年3月
・茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集 1990年3月
・茨城県教育財団「鹿島線関係遺跡発掘調査報告書 徳宿遺跡・塙遺跡・安房西古墳群・安塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』Ⅵ 1980年3月
・伊東重敏「花園壁画古墳(第3号墳)調査報告書」『岩瀬町文化財調査報告書』第7集 西茨城郡岩瀬町教育委員会 1985年3月
・西宮一男『間中古墳』西茨城郡岩瀬町教育委員会 1982年8月
・伊東重敏『頓(徳)化原古墳成美調査報告書』東茨城郡桂村教育委員会 1985年2月

(5)古墳の周溝に集石が見られる現象は，成田古墳群のまとめの項で触れる。

(6)阿久津久「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 1992年3月

(7)石橋充「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号 筑波大学歴史・人類学系 1995年3月

(8)註6文献に同じ

(9)黒沢彰哉「常総地域における群集墳の一考察」『婆良岐考古』第15号 婆良岐考古同人会 1993年6月

(10)註7文献に同じ

(11)在地産の須恵器については，既に炭焼遺跡のまとめの中で触れている。この横瓶は，胎土の様子から，在地産と考えられる。ただし，炭焼遺跡第14号住居跡出土坏身と比較する胎土に違いが見られることから，別の窯式が考えられ，仮に在地産Ⅱ式としておく。

(12)既に箕輪健一氏が，9件13例の集成を行っている（箕輪健一「古墳時代後期須恵器受容の一側面」『婆良岐考古』第16号 婆良岐考古同人会 1994年5月)。

(13)材質不明の小玉を，ミュージアムパーク茨城県自然博物館に見ていただいた所，この小玉は「同心円状の構造を持ち全体に黄白色で部分的に赤褐色を呈し，同心円状構造の間には多くの発泡構造が見られ，やや多孔質になっている。剥離した砕片を用い希塩酸に対する反応を観察したが二酸化炭素は生じなかった。外形的特徴から考えると，天然物だとすれば，例えば温泉水が緩やかに流れる川で温泉沈殿物が木の根のような棒状のものに付着し結晶成長したものというような可能性も考えられる。この場合，温泉水の流速の変化により黒緑色の粒子が付着し，発泡構造ができたということになる。人工物だとすれば，細い棒状のものに粘土鉱物のような素材を巻き付け層状構造をつくり，"きらもの"として黒緑色の粒子を故意に挟み込み，加熱して制作したという可能性もある。この場合，発泡構造は加熱の際できたということになる。現段階では後者が有力と考えられる。」とのご教示を得ている。

(14)筆者もつくば市の中台遺跡の古墳群の整理をして，埴輪の消滅を筑波地域では7世紀前半と考えている。(茨城県教育財団「(仮称) 北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集 1995年3月)

第5章　三　和　貝　塚

第1節　遺跡の概要

三和貝塚は，北浦町の北東部に位置し，北浦西岸の行方台地の縁辺部に立地している。台地は，標高29～34mで，北浦西岸の低地面との比高は24～29mである。調査区域は東西80m，南北35m，面積2,515m²で，現況は畑である。

今回の調査では，縄文時代前期の竪穴住居跡6軒，早期の炉穴9基，前期の地点貝塚5か所，土坑20基を検出した。

遺物は，縄文土器（深鉢・手捏土器），石器（磨製石斧），貝（ハマグリ・シオフキ・オキシジミ・アサリ・サルボウ・オオノガイ・カガミガイ・ツメタガイ・アカニシ・ウミニナ・カキ・ハイガイ・ヤマトシジミ・ヘナタリ）が出土している。

第2節　基本層序

三和貝塚においては，調査区北西部のB1$_{do}$区にテストピットを設定し，第102図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は，厚さ10～33cmで，暗褐色の耕作土である。

第2層は，厚さ12～24cmで，やや赤みを帯びた暗褐色土層である。

第3層は，厚さ14～20cmで，ローム ブロックを中量含む明褐色のハードローム層への漸移層である。

第4層は，厚さ34～50cmで，粘性もしまりもつよい明褐色のハードローム層である。

第5層は，厚さ32～42cmで，4層に比べ，ややしまりがよわい明褐色のハードローム層である。

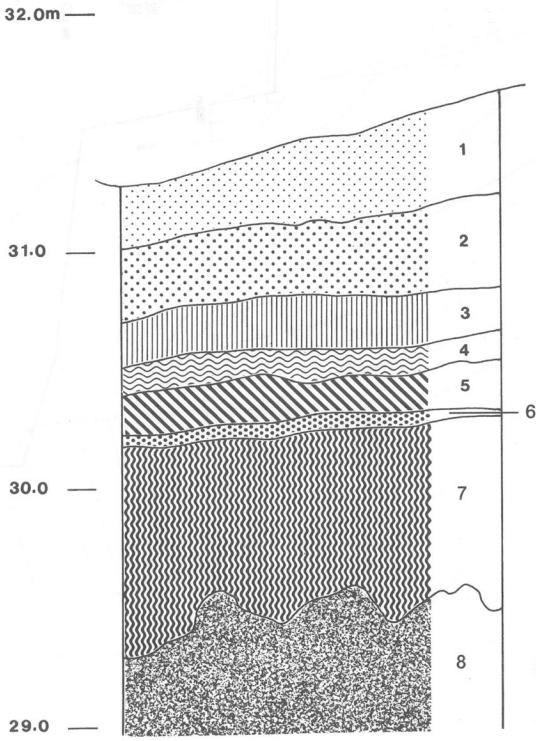
第6層は，厚さ52～66cmで，5層に比べ，やや粘性もしまりもよわい明褐色のハードローム層である。

第7層は，厚さ25～40cmで，極めてしまりのつよい明褐色のハードローム層である。

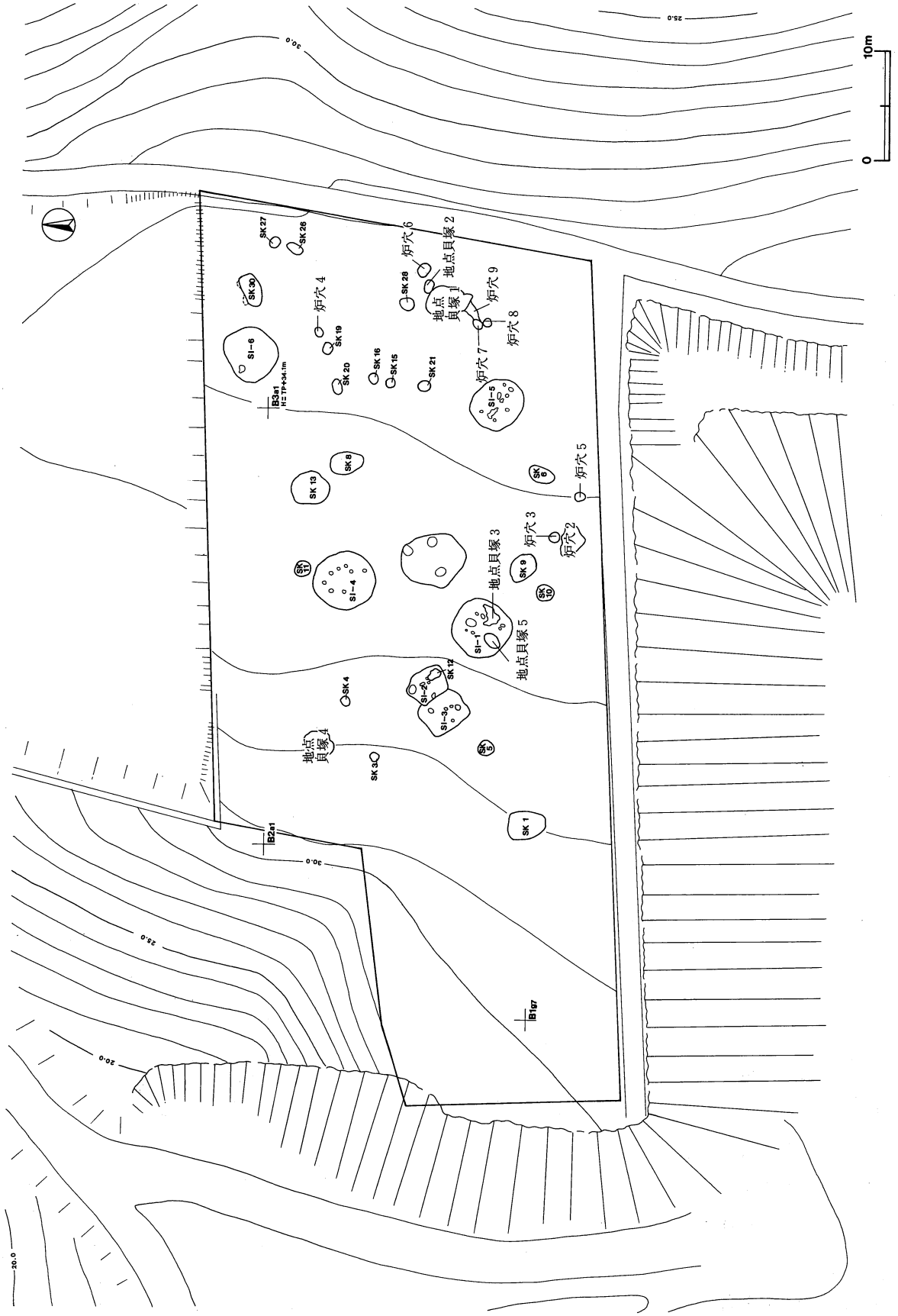
第8層は，厚さ16～25cmで，粘土ブロックを中量含む灰褐色の粘土層への漸移層である。

第9層は，粘性の極めてつよい褐灰色の粘土層である。

遺構は，第2層上面で確認できた。



第102図　三和貝塚基本土層図



第103図　三和貝塚遺構配置図

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査では，縄文時代前期の竪穴住居跡6軒を検出した。以下，検出した住居跡の特徴や遺物について記載する。

第1号住居跡（第104図，PL40・41）

位置　調査区の中央部，B2e5区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西部床面に，第23号土坑（第5号地点貝塚）が確認されている。

規模と平面形　長軸5.03m，短軸4.98mの隅丸方形と考えられる。

主軸方向　N－31°－E

壁　壁高26～42cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦で，炉跡の周辺を中心によく踏み固められている。

炉　3基確認している。炉Aは，P_1とP_4を結んだ直線上に位置し，長径92cm，短径70cmの楕円形をした地床炉で，床面をわずかに掘り凹め，炉床面は赤変しかなり硬化しているので，一番使用頻度が高いものと考えられる。炉Bは，P_4の南西側に位置し，長径34cm，短径24cmの楕円形の地床炉で，床面をわずかに掘り凹め，炉床面は赤変しているが硬化していない。炉Cは，P_1の南西側に位置し，長径44cm，短径36cmの楕円形の地床炉で，床面をわずかに掘り凹め，炉床面は赤変しているが硬化していない。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_4は，径22～40cmの円形・楕円形，深さ48～60cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

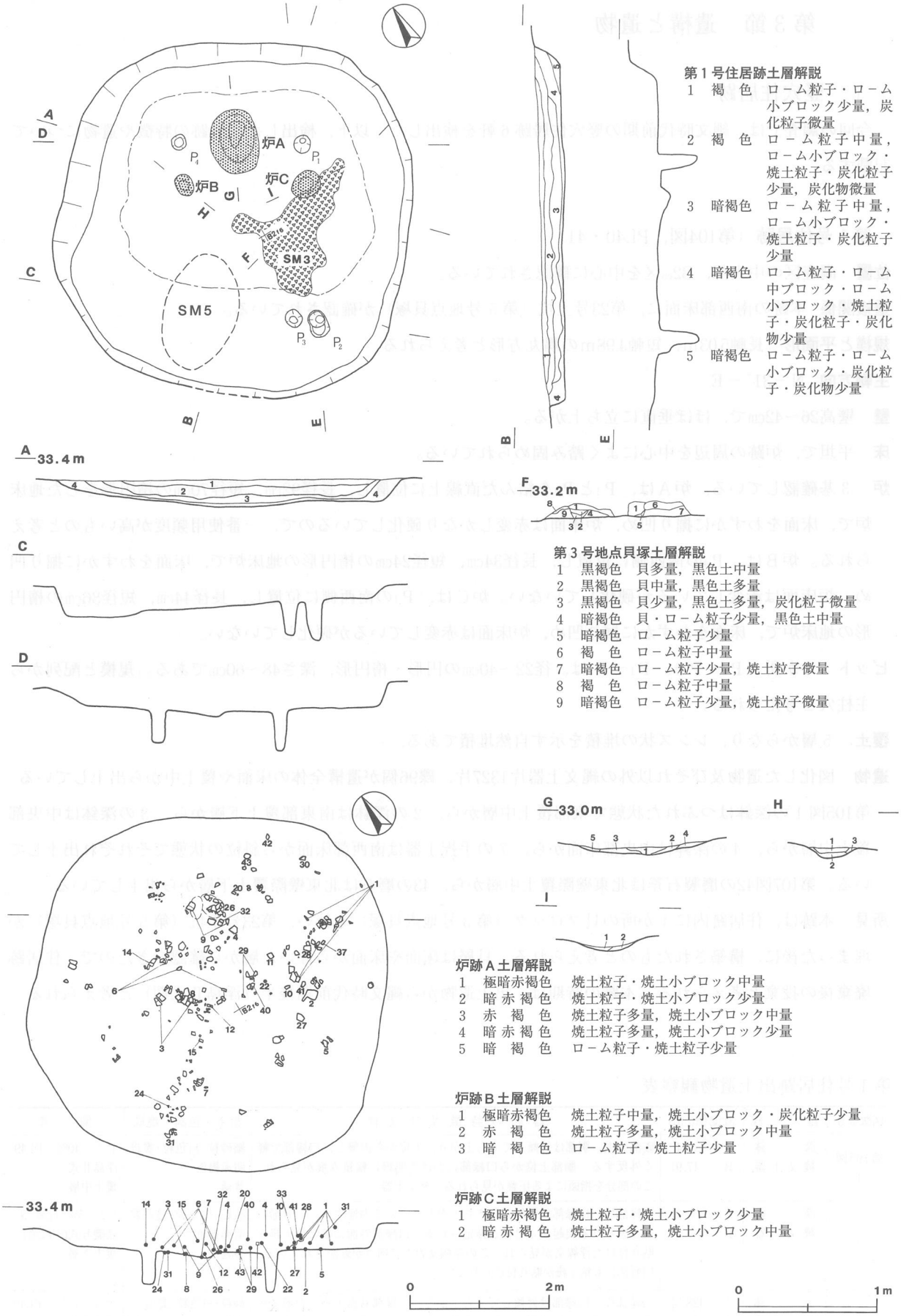
覆土　5層からなり，レンズ状の堆積を示す自然堆積である。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片1327片，礫96個が遺構全体の床面や覆土中から出土している。第105図1の深鉢はつぶれた状態で東部覆土中層から，2の深鉢は南東部覆土下層から，3の深鉢は中央部覆土中層から，4の深鉢は中央部床面から，7の手捏土器は南西部床面から斜位の状態でそれぞれ出土している。第107図42の磨製石斧は北東壁際覆土中層から，43の磨石は北東壁際覆土下層から出土している。

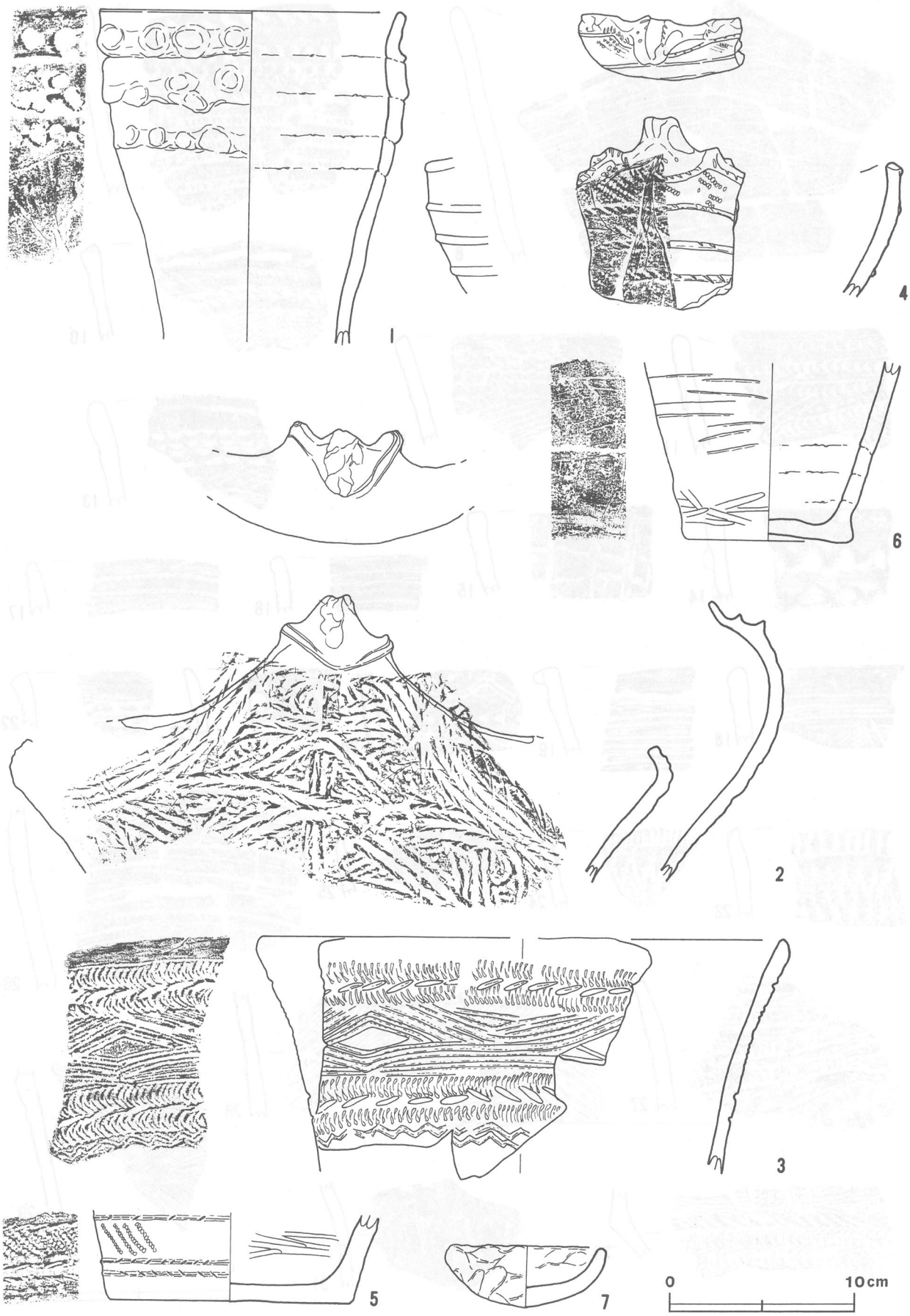
所見　本跡は，住居跡内に1か所の貝ブロック（第3号地点貝塚）を伴い，第23号土坑（第5号地点貝塚）が埋まった後に，構築されたものと考えられる。貝層は床面や床面から浮いた層から確認できたので，住居跡廃棄後の投棄と考えられる。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代前期後半（浮島Ⅱ式期）と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

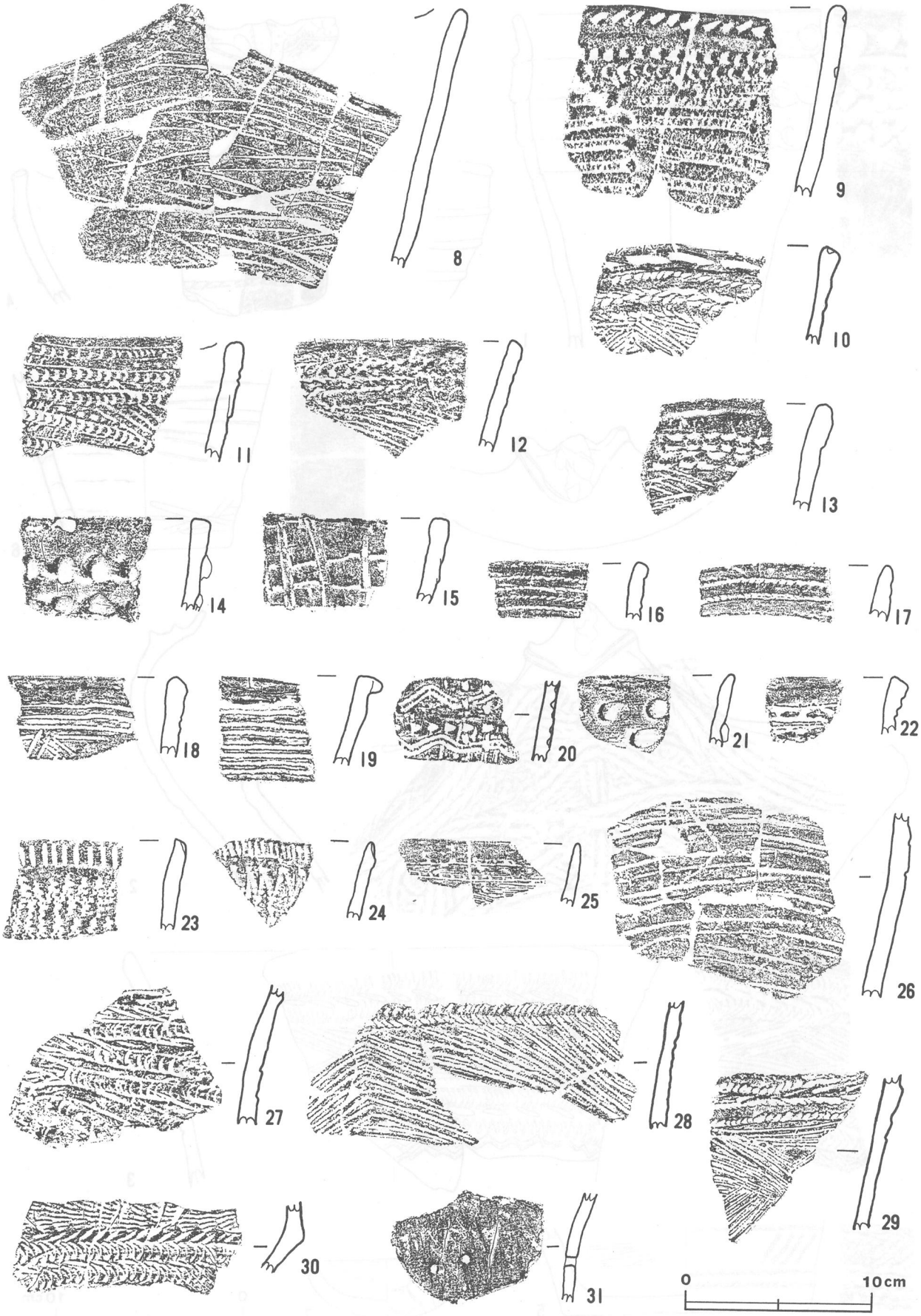
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	深鉢 縄文土器	A　16.4 B　(17.9)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，上位から内彎し，口縁部で軽く外反する。胴部上位から口縁部にかけて明瞭に輪積み痕が見られ，この部分を指頭による圧痕が見られる。無文土器。	細砂粒・白色粒・雲母 明赤褐色 普通	P1　40%　PL49 浮島Ⅱ式 覆土中層
2	深鉢 縄文土器	A　[34.2] B　(7.2)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり，上位で内彎する。口唇部に鳥と思われる突起が4単位と推定される。口縁部外面に細い粘土紐を貼り付けた浮線文が見られ，この浮線文の上に縄目が転がされている。口唇部にも粘土紐が貼り付けられている。	砂粒・白色粒・透明粒 明赤褐色 普通	P2　15%　PL49・50 諸磯b式(中段階) 覆土下層
3	深鉢 縄文土器	A　[28.5] B　(12.7)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部外面下位に山形文が施され，その上に2列に2段に爪形文が施され，その間に菱形状の沈線の文様が見られる。	砂粒・白色粒・雲母 橙色 普通	P3　10%　PL49 浮島Ⅱ式 覆土中層



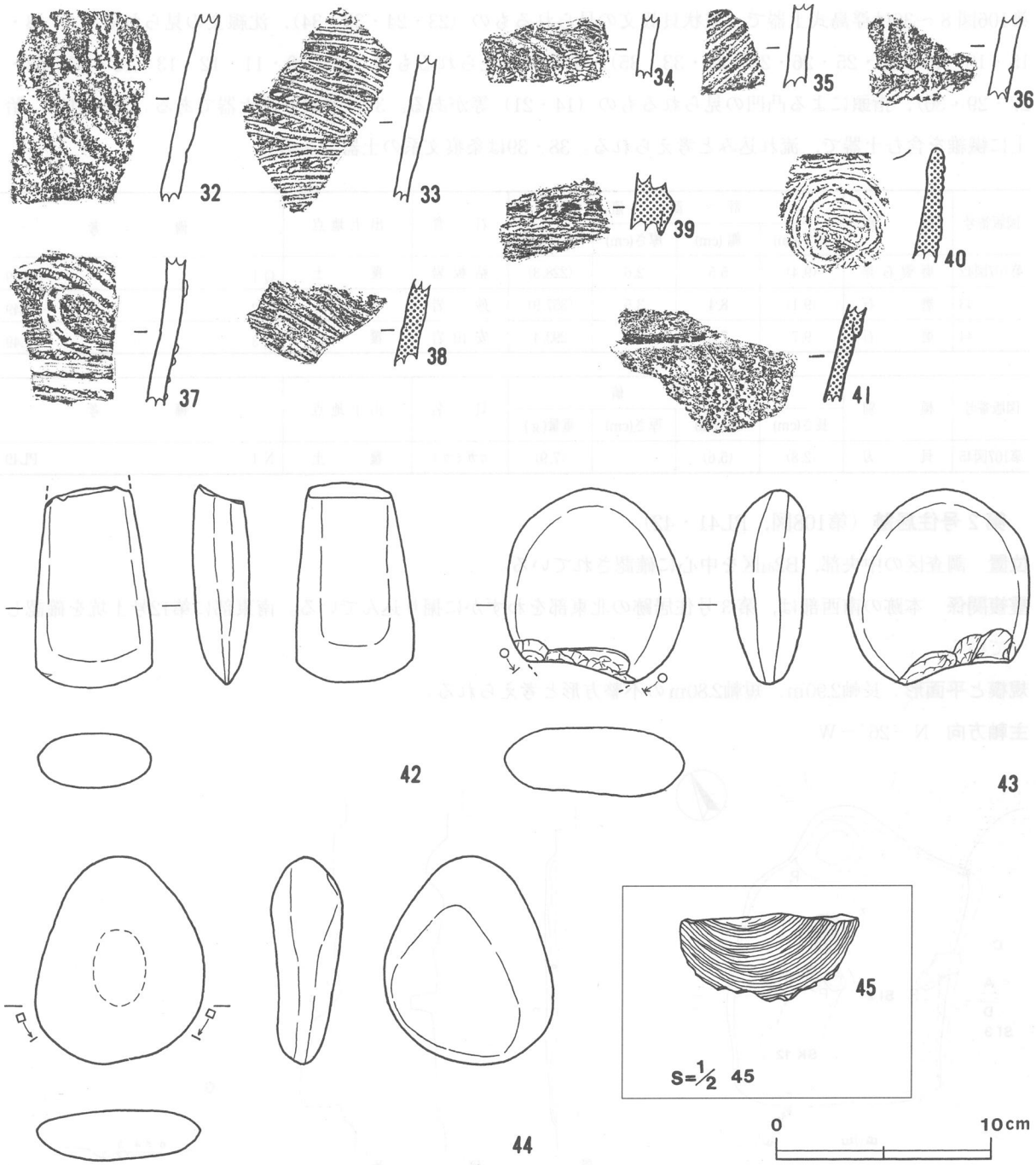
第104図　第1号住居跡



第105図　第1号住居跡出土遺物(1)



第106図　第1号住居跡出土遺物(2)



第107図　第1号住居跡出土遺物(3)

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
4	深　鉢 縄文土器	A　[25.0] B　(7.3)	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部に細い粘土紐を貼り付けた浮線文が見られ，この浮線文及び地文に単節RLの縄文が施されている。口唇部に獣と思われる突起が見られる。	細砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 4　10%　PL49・50 諸磯 b 式(中段階) 中央部床直
5	深　鉢 縄文土器	B　(4.8) C　13.1	底部片。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部下端に2条の細い粘土紐を貼り付けた浮線文が見られ，その浮線文の上にキザミ目が施されている。地文には単節RLの縄文が施されている。胴部内面ヘラ磨き。	砂粒・白色粒・雲母 橙色 普通	P 5　20%　PL49 諸磯 b 式 床直
6	深　鉢 縄文土器	B　(9.8) C　8.8	底部から胴部片。やや凹んだ平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面に沈線が施され，下位にヘラ磨きが施されている。輪積み痕が残る。	砂粒・白色粒・雲母 赤褐色 普通	P 6　20%　PL49 浮島式 覆土下層
7	手捏土器 縄文土器	A　8.1 B　3.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部から体部内・外面指頭による圧痕後横ナデ。	砂粒・白色粒・雲母 明赤褐色　普通	P 7　80%　PL49 南西部床直

第106図８～36は浮島式土器で，波状貝殻文の見られるもの（23・24・32・34），沈線文の見られるもの（8・15・18・19・20・25・26・28・29・33・35），爪形文の見られるもの（９・10・11・12・13・16・17・22・27・29・30），指頭による凸凹の見られるもの（14・21）等がある。37は緒磯ｂ式土器である。38～41は，胎土に繊維を含む土器で，流れ込みと考えられる。38・39は条痕文系の土器である。

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第107図42	磨製石斧	(9.4)	5.5	2.6	(228.3)	粘板岩	覆土	Q１	PL49
43	磨石	(9.1)	8.4	3.5	(357.9)	砂岩	覆土	Q２	PL49
44	磨石	9.7	7.8	3.3	293.4	安山岩	覆土	Q３	PL49

図版番号	種別	計測値				貝名	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第107図45	貝刃	(2.8)	(5.6)		(7.9)	カガミガイ	覆土	N１	PL49

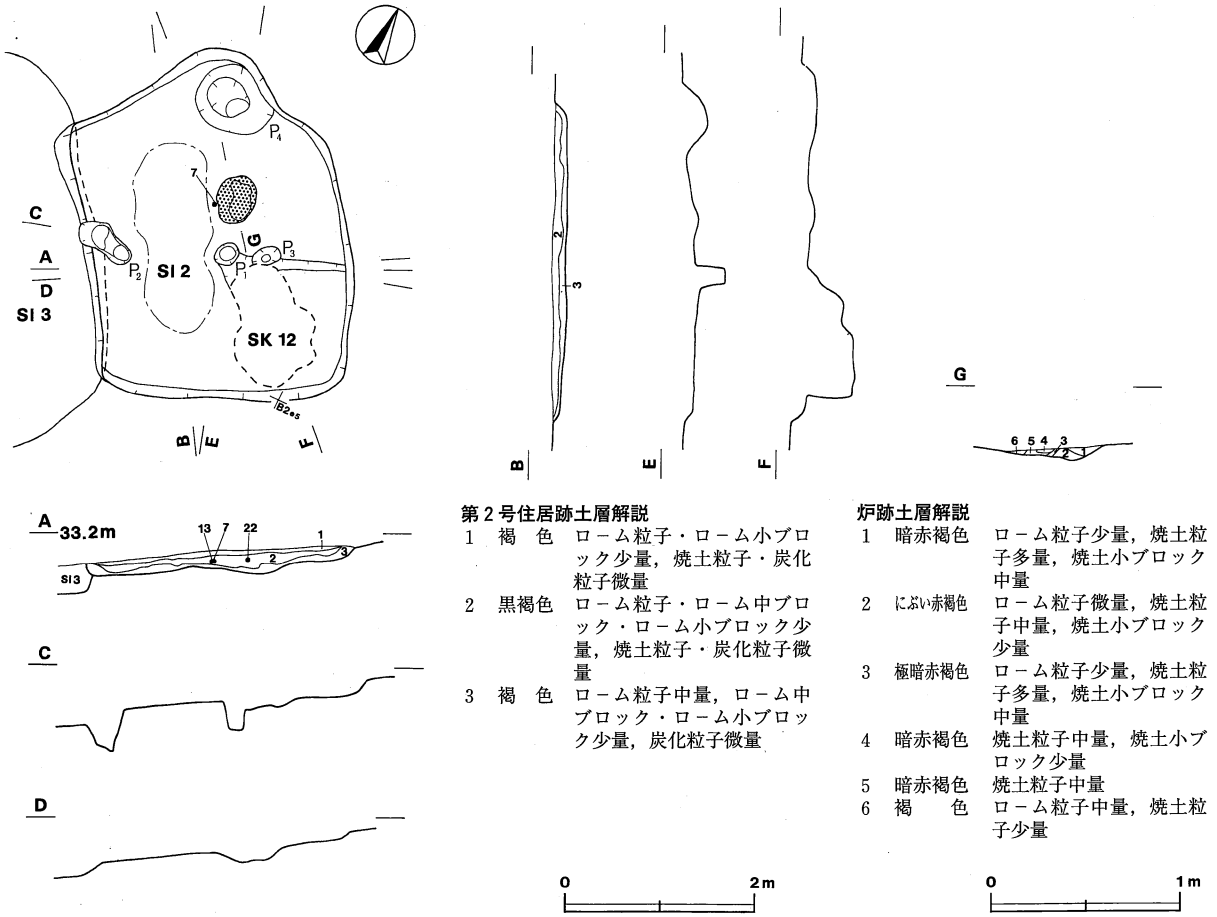
第２号住居跡（第108図，PL41・42）

位置　調査区の中央部，B2d4区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南西部は，第３号住居跡の北東部をわずかに掘り込んでいる。南東部に第12号土坑を確認している。

規模と平面形　長軸2.90m，短軸2.80mの不整方形と考えられる。

主軸方向　N－26°－W



第108図　第2号住居跡

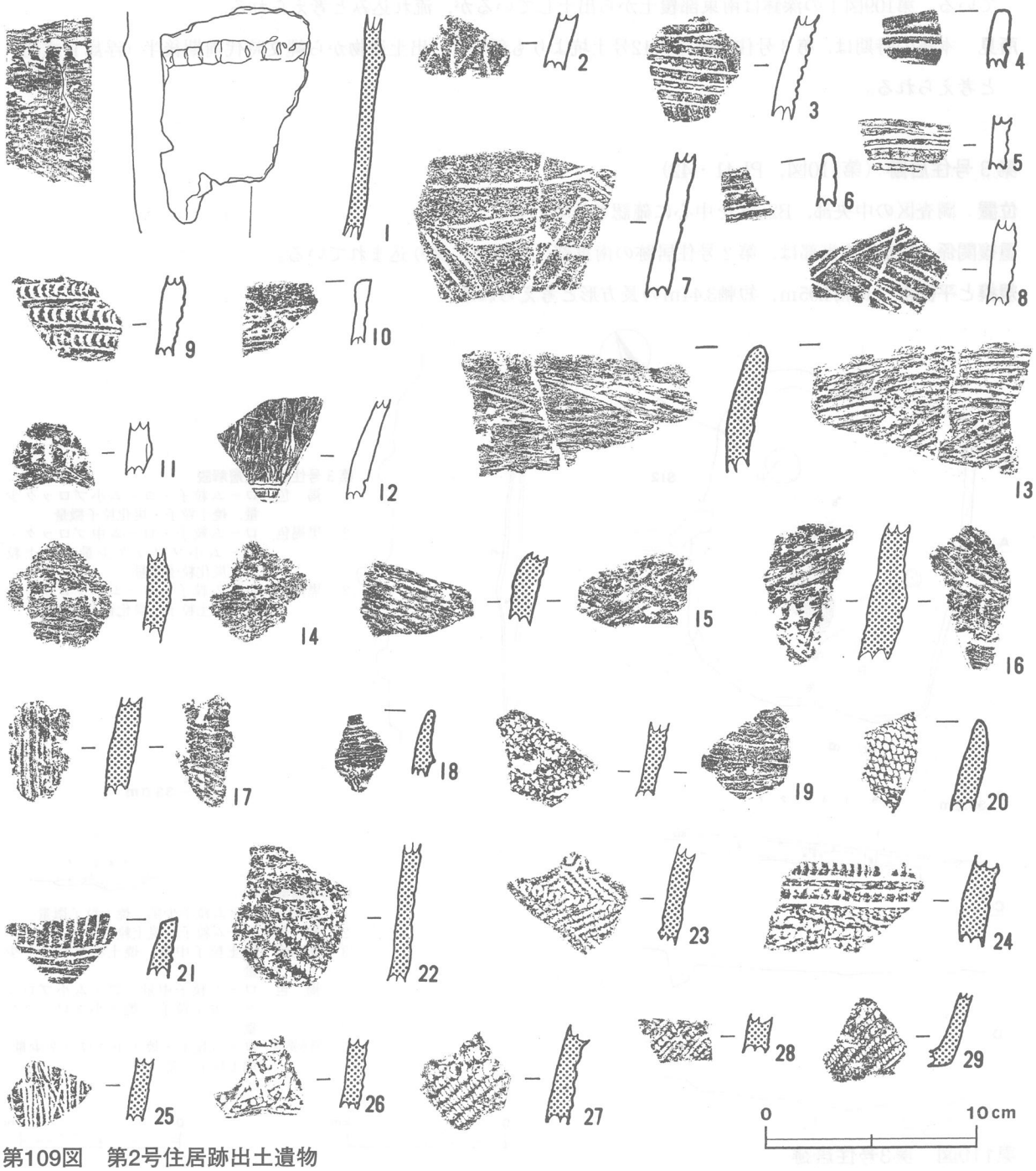
壁　壁高10～16cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦で，炉跡の南西側を中心によく踏み固められている。

炉　中央部からやや北西寄りに寄った位置に確認している。平面形は，長径52cm，短径40cmの楕円形をした地床炉で，床面をわずかに掘り凹め，炉床面は赤変しかなり硬化している。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1・P_2は，長径26～64cm，短径22～30cmの楕円形，深さ30～46cmである。規模から主柱穴と考えられる。P_3は，長径29cm，短径18cmの楕円形，深さ18cmで，性格は不明である。P_4は，長径82cm，短径68cmの楕円形，深さ22cmで，北西壁際に張り出す様に確認され，性格は明らかではないが，規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。

覆土　3層からなり，レンズ状の堆積を示す自然堆積である。



第109図　第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第109図 1	深　鉢 縄文土器	B　(10.6)	胴部片。胴部は直立して立ち上がる。胴部中位に隆帯が巡らされ，その上にキザミ目が施されている。胴部内・外面条痕文が施されている。	細砂粒・白色粒・透明粒・雲母・繊維 にぶい橙色　普通	P 8　10%　PL51 南東部覆土 流れ込み

第109図2～12は浮島式土器で，波状貝殻文が見られるもの（2），沈線文が見られるもの（3～8），爪形文が見られるもの（9・10），指頭による凹凸の見られるもの（11）等がある。13～29は胎土に繊維の含む土器で，流れ込みと考えられる。13～19は条痕文系の土器で，20～29は縄文時代前期前半の土器である。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片117片，礫2個が遺構全体の床面や覆土中からまばらに出土している。第109図1の深鉢は南東部覆土から出土しているが，流れ込みと考えられる。

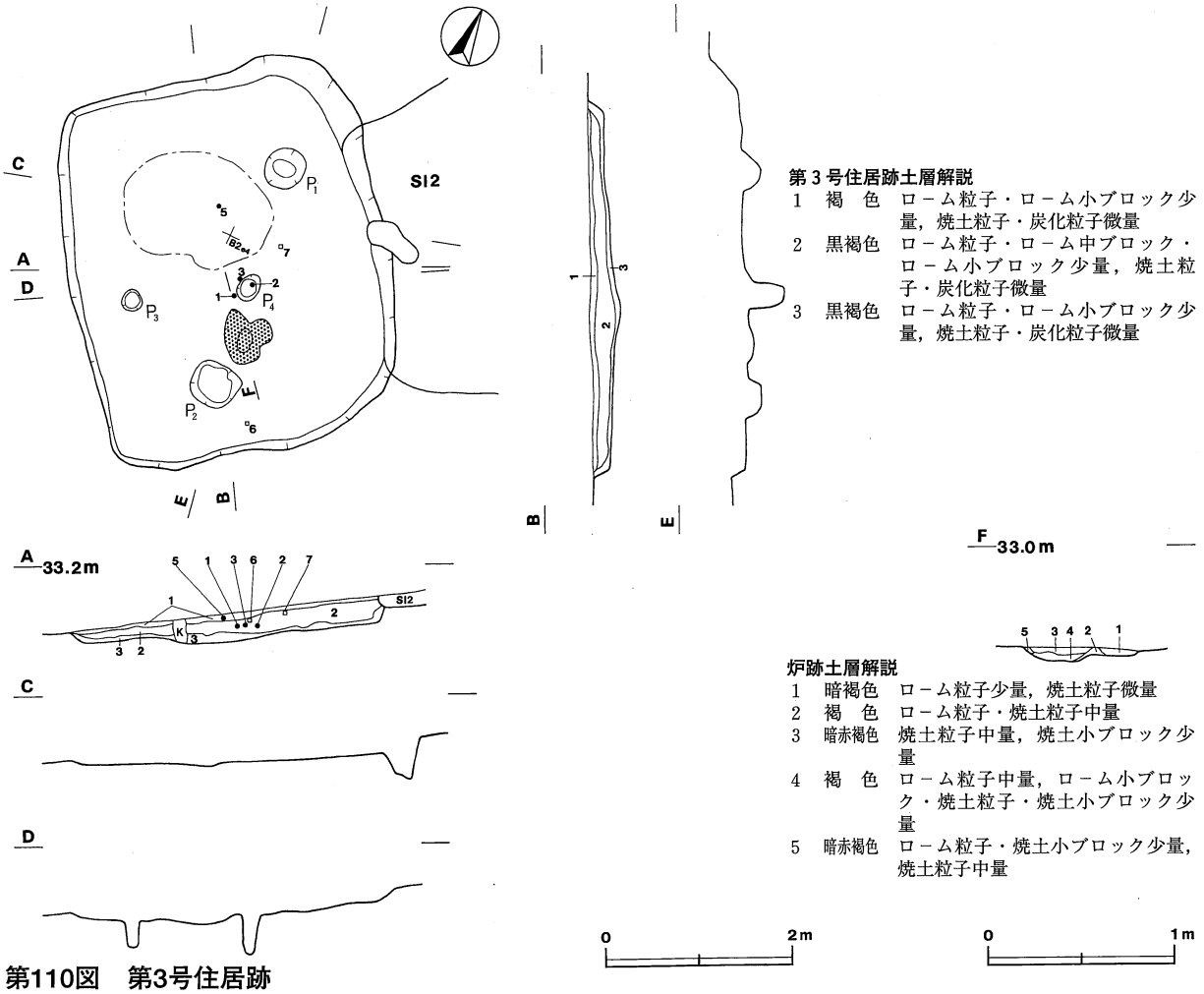
所見　本跡の時期は，第3号住居跡や第12号土坑よりも新しく，出土遺物から縄文時代前期後半（浮島Ⅱ式期）と考えられる。

第3号住居跡（第110図，PL41・42）

位置　調査区の中央部，B2e4区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東部は，第2号住居跡の南東部にわずかに掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.05m，短軸3.44mの長方形と考えられる。



第110図　第3号住居跡

主軸方向　N－37°－W

壁　壁高6～32cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦で，炉跡の北西側を中心によく踏み固められている。

炉　中央部からやや南東寄りに寄った位置に確認している。平面形は，長径62cm，短径34cmの楕円形をした地床炉で，床面をわずかに掘り凹め，炉床面は赤変しているが硬化は弱い。

ピット　4か所(P1～P4)。P1～P3は，径24～56cmの円形，深さ19～30cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P4は，長径30cm，短径22cmの楕円形，深さ42cmで，炉跡の北側に位置し性格は不明である。

覆土　3層からなり，レンズ状の堆積を示す自然堆積である。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片7片，礫2個が炉跡の周辺の床面や覆土中からまばらに出土している。第111図6の磨石は南東壁際覆土中層から，7の敲石は中央部覆土中層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少なく明確ではないが，遺物から縄文時代前期前半(黒浜式期)と判断したい。

第111図　第3号住居跡出土遺物

第111図1～5は，胎土に繊維を含む土器である。1～3は地文に単節の縄文RLが施されている。4は附加条の縄文(縄文LR＋Rか)が施されている。時期は黒浜式期に該当するものか。5は条痕文系の土器である。

第３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第111図6	磨　石	9.4	7.6	3.2	309.2	流紋岩	覆　土	Q４	PL51
7	敲　石	10.3	7.1	3.4	(219.3)	安山岩	覆　土	Q５	PL51

第４号住居跡（第112図，PL42・43）

位置　調査区の中央部，B2b7区を中心に確認されている。

規模と平面形　長径5.74m，短径5.15mの楕円形と考えられる。

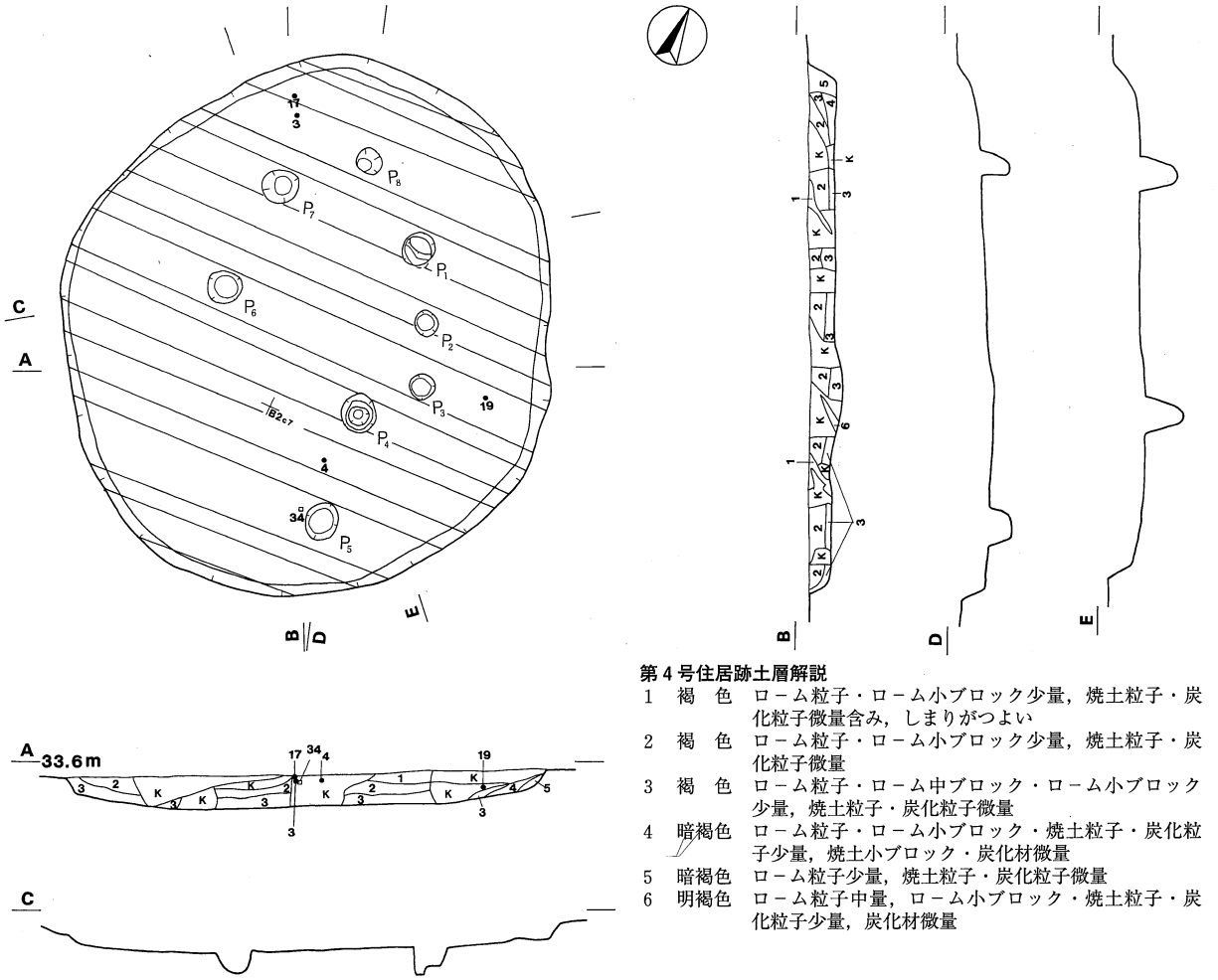
主軸方向　N－4°－W

壁　壁高20～30cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦である。トレンチャーによる攪乱がひどく明確ではないが，踏み固められた面は認められない。

炉　確認できなかった。

ピット　８か所（P1～P8）。P1～P8は，径27～44cmの円形・楕円形，深さ21～42cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

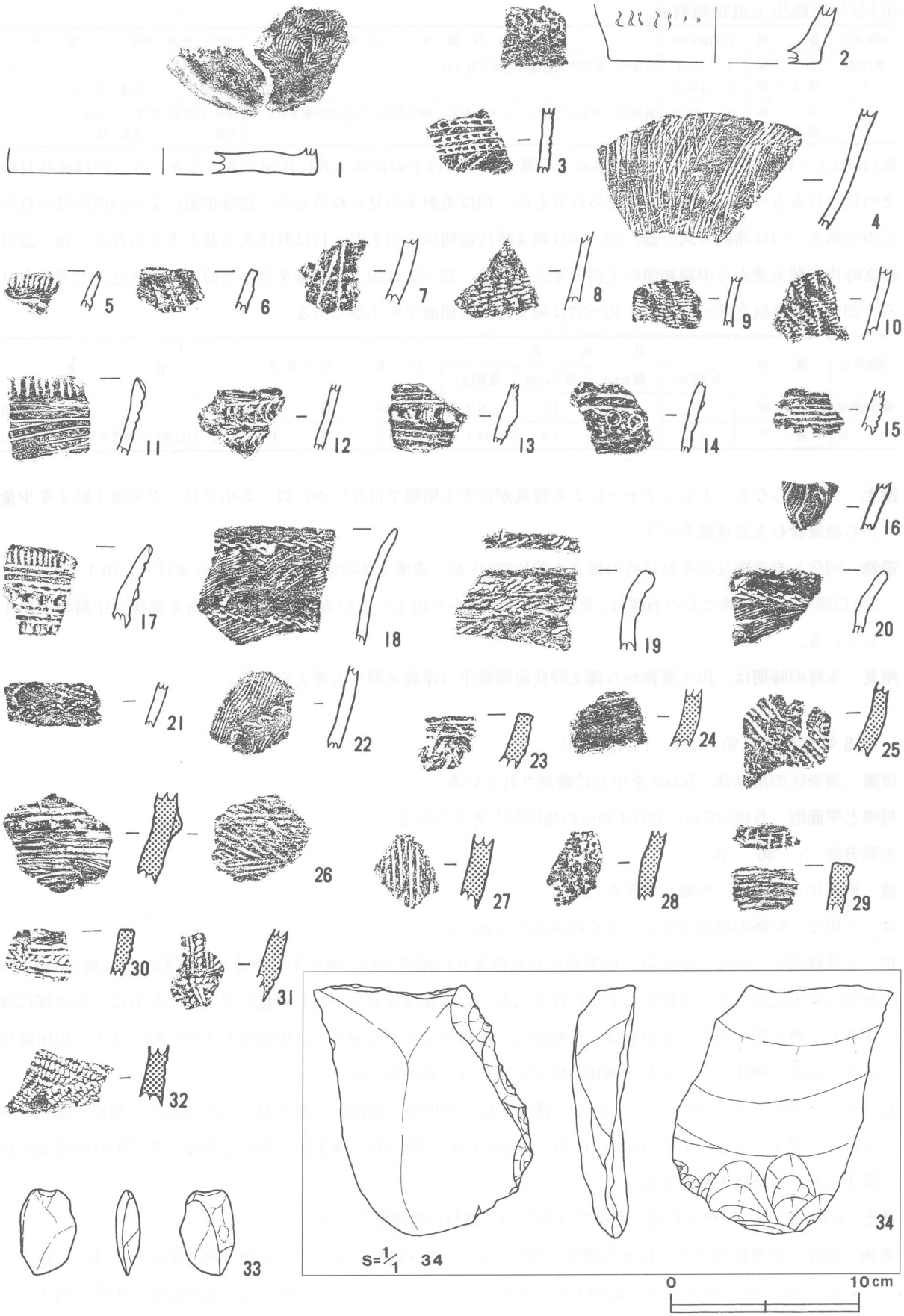


第４号住居跡土層解説

1　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量含み，しまりがつよい
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・炭化材微量
5　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　明褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，炭化材微量

0　2m

第112図　第4号住居跡



第113図　第4号住居跡出土遺物

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第113図 1	深　鉢 縄文土器	B　(1.4) C　[16.4]	底部片。底部内面櫛描の圧痕が施されている。	砂粒・雲母 明赤褐色　普通	P 9　5％ 覆土中
2	深　鉢 縄文土器	B　(3.2) C　[11.4]	底部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面に爪形文が施されている。	砂粒・白色粒・雲母 橙色　普通	P 10　5％ 覆土中

第113図3～13浮島式土器で，3と拠糸文の地文の4は古手の浮島Ⅰ式に比定できようか。5～10は波状貝殻文の見られるもの，11は沈線文の見られるもの，12は爪形文の見られるもの，13は指頭による凸凹の見られるものである。14は諸磯b式土器，15・16は縄文時代前期後半の土器，17は興津式土器と考えられる。18～22は縄文時代前期末葉から中期初頭の土器と考えられる。23～32は胎土に繊維を含む土器で，流れ込みと考えられる。23～29は条痕文系の土器で，30～32は縄文時代前期前半の土器である。

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第113図33	石　錘	4.6	3.0	1.3	20.2	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	覆　土	Q 6　PL51
34	剥　片	4.2	3.4	1.0	18.4	頁　岩	覆　土	Q 7　旧石器の可能性あり　PL51

覆土　6層からなる。トレンチャーによる撹乱がひどく明確ではないが，ローム小ブロックや焼土粒子を少量から微量含む人為堆積を示す。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片276片が，遺構全体の床面や覆土中からまばらに出土している。第113図1・2の深鉢と33の石錘は，北西部覆土中層から出土している。34の剥片は，南東部覆土中層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代前期後半（浮島式期）と考えられる。

第5号住居跡（第114図，PL42・43）

位置　調査区の南東部，B3fl区を中心に確認されている。

規模と平面形　長径5.07m，短径4.39mの楕円形と考えられる。

主軸方向　N－46°－W

壁　壁高10～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，炉跡の周辺を中心によく踏み固められている。

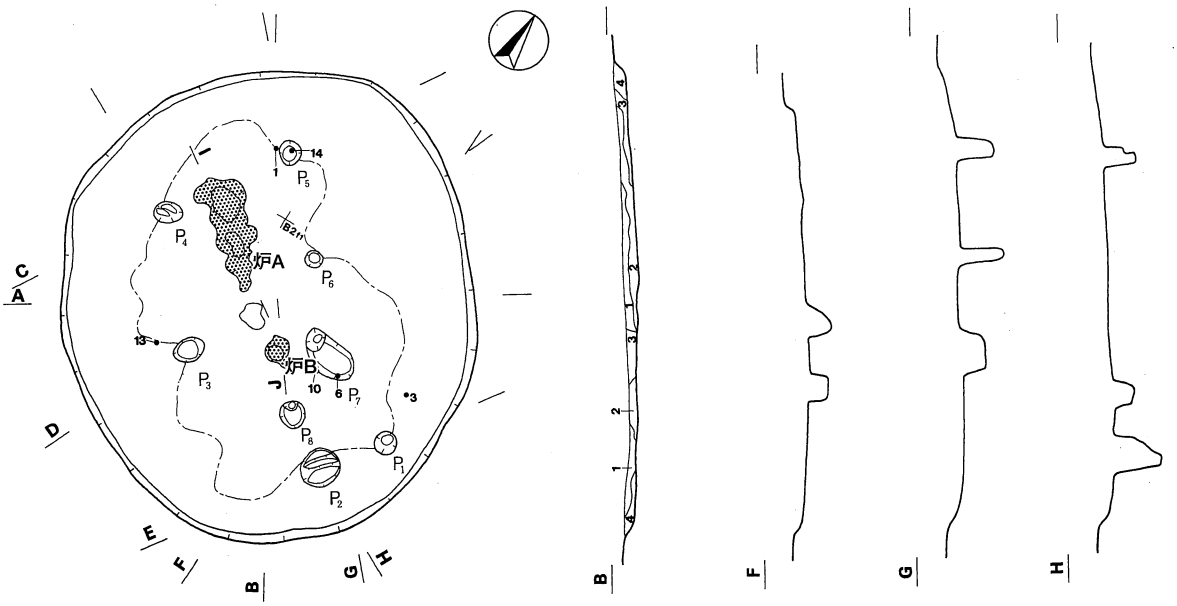
炉　2基確認している。炉Aは，中央部やや北西寄りに確認された地床炉である。平面形は，長軸126cm，短軸40cmの不定形をし，床面をわずかに掘り込み，炉床面は赤変しかなり硬化している。炉Bは，中央部に確認された地床炉である。平面形は，長軸38cm，短軸24cmの不定形をし，床面をわずかに掘り込み，炉床面は赤変しかなり硬化しているが，硬化の度合いは炉Aに比べると弱い。

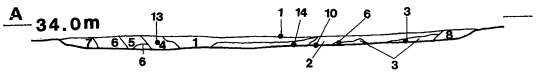
ピット　8か所（P_1～P_8）。P_1～P_6は，径20～42cmの円形・楕円形，深さ24～60cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7・P_8は，径28・64cmの円形・楕円形，深さ26・38cmである。共に炉Bの周辺に位置するが，性格は不明である。

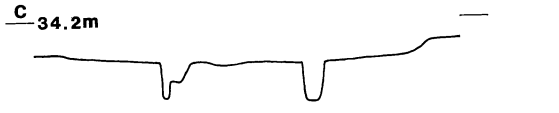
覆土　8層からなり，覆土が浅く明確ではないが，概ね自然堆積を示す。

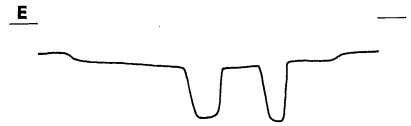
遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片116片，礫6個が，炉周辺の床面や覆土中からまばらに出土している。第115図1の深鉢は，北西部覆土中層から出土している。16の磨石は，北西部覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代前期後半（浮島Ⅱ式期）と考えられる。





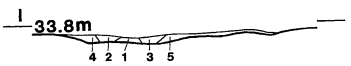




第5号住居跡土層解説

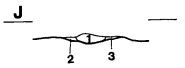
1　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック微量
6　明褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
7　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
8　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量

0　2m



炉跡A土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子中量
2　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子中量
3　極暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子中量
4　暗赤褐色　ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
5　暗赤褐色　ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子多量

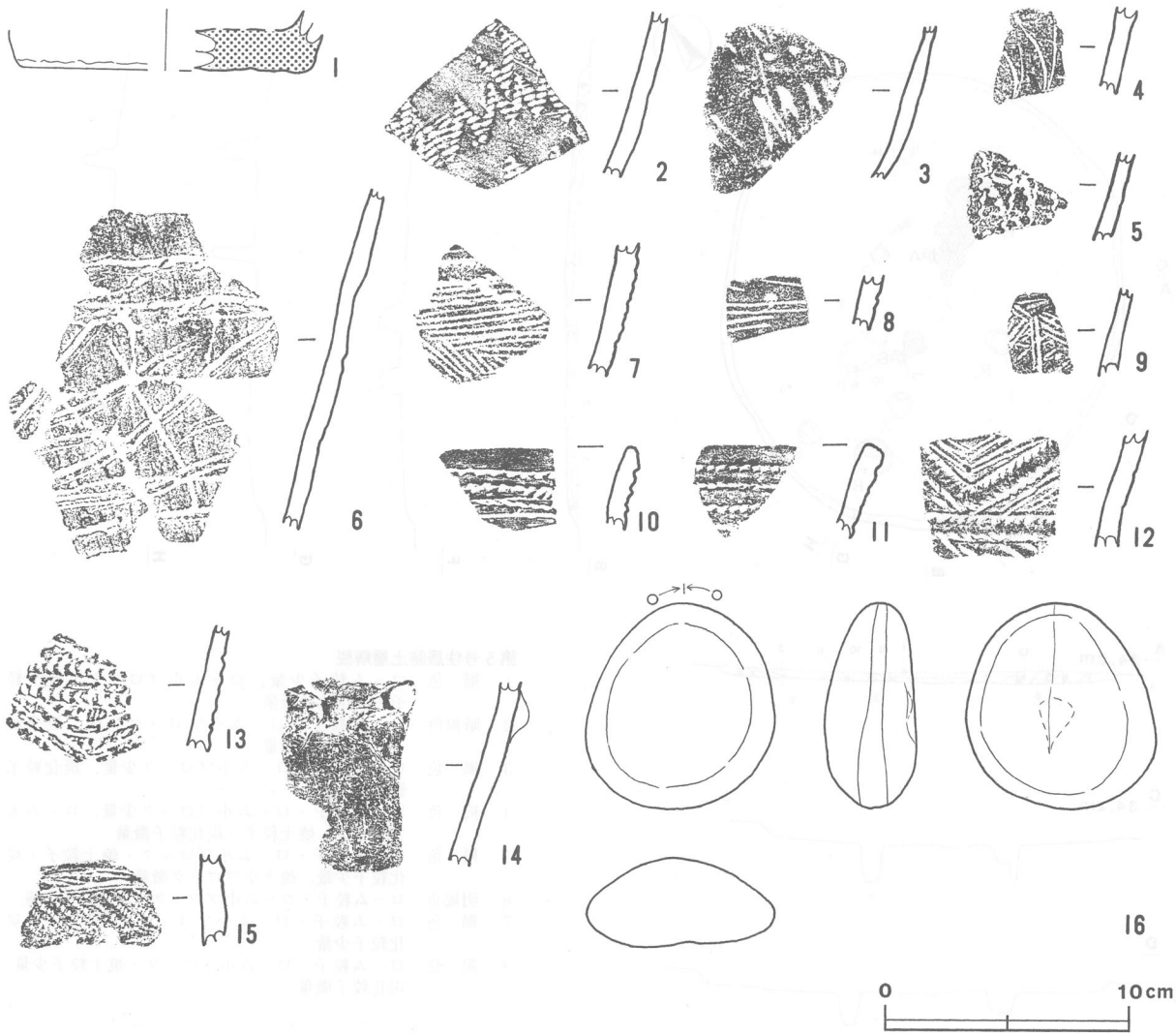


炉跡B土層解説

1　極暗赤褐色　ローム粒子・ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子中量
2　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック多量，炭化粒子微量
3　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック多量，炭化物微量

0　1m

第114図　第5号住居跡



第115図　第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第115図 1	深　鉢 縄文土器	B　(2.6) C　[11.3]	底部片。胴部外面及び底部に条痕文が施されている。	礫・白色粒・雲母・繊維 橙色　普通	P11　5% 覆土中層

第115図2～14は浮島式土器で，波状貝殻文の見られるもの（2～5），沈線文の見られるもの（6～9），爪形文の見られるもの（10～13），指頭による凸凹の見られるもの（14）等がある。15は諸磯式土器である。

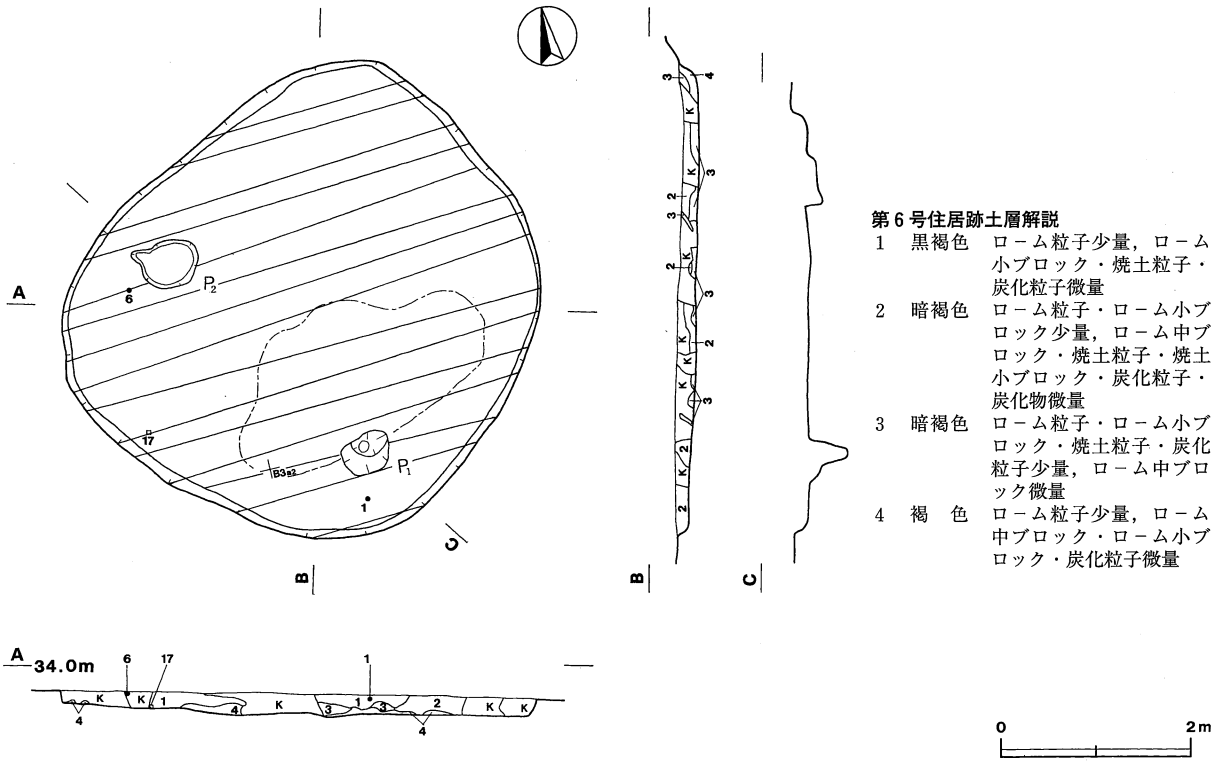
図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第115図16	磨　石	8.5	7.8	3.9	316.3	花崗岩系	覆　土　中	Q8　PL51

第6号住居跡（第116図，PL44）

位置　調査区の北東部，A3j2区を中心に確認されているが，北部は一部調査区外に延びている。

規模と平面形　長径4.90m，短径4.65mの不整円形と考えられる。

主軸方向　N－33°－E



第6号住居跡土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・炭化物微量

3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量

4　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量

第116図　第6号住居跡

壁　壁高12～18cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦である。トレンチャーによる撹乱がひどいが，南部を中心によく踏み固められている。

炉　確認されなかった。

ピット　2か所（P_1・P_2）。P_1は，長径54cm，短径40cmの楕円形，深さ43cmである。規模と位置から主柱穴と考えられる。P_2は，長径62cm，短径54cmの楕円形，深さ14cmで，性格は不明である。

覆土　4層からなる。トレンチャーによる撹乱がひどく明確ではないが，ローム小ブロックや焼土粒子や炭化粒子を少量から微量含む人為堆積を示す。

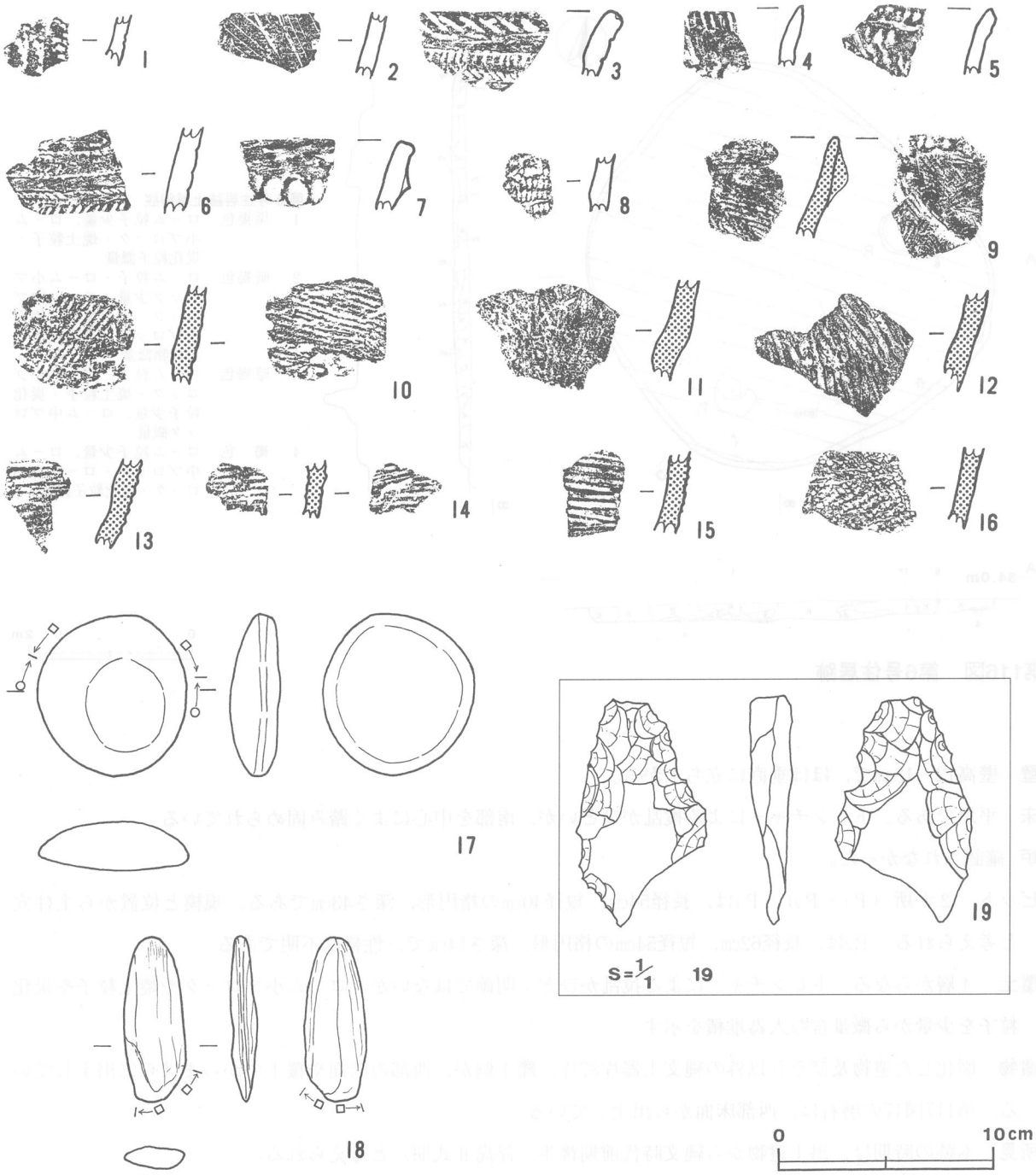
遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片87片，礫1個が，西部の床面や覆土中からまばらに出土している。第117図17の磨石は，西部床面から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代前期後半（浮島Ⅱ式期）と考えられる。

第117図1～7は浮島式土器で，波状貝殻文の見られるもの（1），沈線文の見られるもの（2），爪形文の見られるもの（3～6），指頭による凸凹の見られるもの（7）等がある。8は諸磯式土器である。9～16は，胎土に繊維を含む土器で，流れ込みと考えられる。9～15は条痕文系の土器である。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第117図17	磨　石	7.5	7.0	2.3	149.4	凝灰岩	覆　土	Q9　西部床面	PL51
18	敲　石	7.7	3.0	1.2	29.4	ｸﾞﾘｰﾝﾀﾌ	覆　土	Q10	PL51
19	剥　片	3.5	2.0	0.6	4.0	メノウ	覆　土	Q11	PL51



第117図　第6号住居跡出土遺物

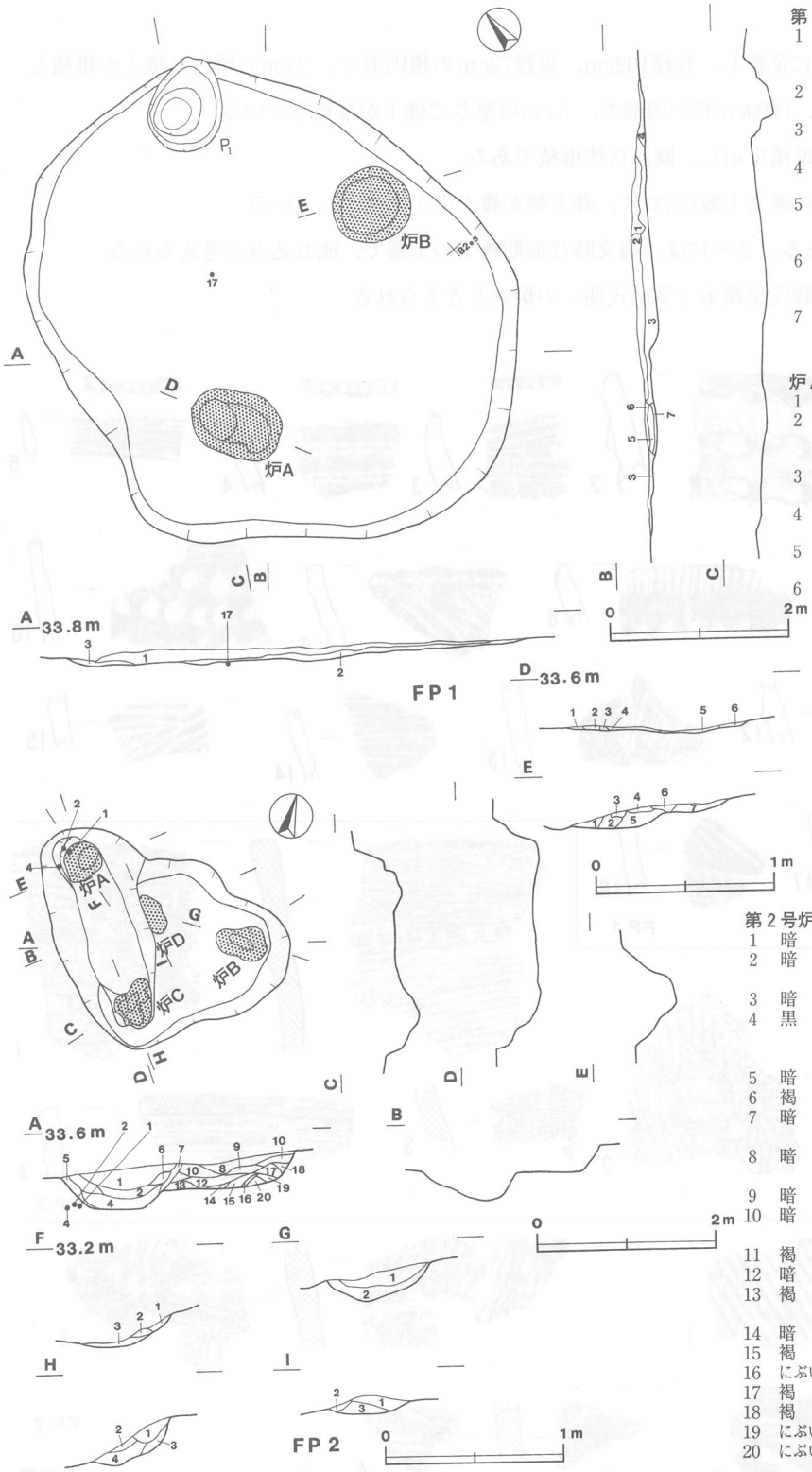
2　炉穴

今回の調査では，縄文時代早期の炉穴9基を検出した。以下，検出した炉穴の特徴や遺物について記載する。

第1号炉穴（FP1　SX1　第118図，PL44）

位置　調査区の中央部，B3$_{d7}$区を中心に確認されている。

規模と形状　長軸5.95m，短軸4.70mの不定形で，深さ22cmである。底面は平坦で，北部に長径104cm，短径82cmの楕円形で，深さ28cm程のピットを確認した。形状から見ると貯蔵穴的であるが，性格は不明である。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。



第1号炉穴土層解説

1 褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子・炭化物少量，焼土粒子中量
2 褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子中量
3 褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
4 褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
5 赤褐色　ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子多量
6 赤褐色　ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，焼土粒子多量，炭化粒子中量
7 暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量

炉A・D－D'

1 にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
2 暗赤褐色　ローム粒子・焼土中ブロック少量，焼土粒子・焼土小ブロック少量
3 暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土中ブロック少量
4 暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック中量，焼土粒子少量
5 暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
6 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量

炉B・E－E'

1 暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
2 極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
3 暗赤褐色　焼土粒子中量
4 暗赤褐色　焼土粒子中量
5 暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック少量，焼土小ブロック中量
6 にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
7 褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量

第2号炉穴土層解説

1 暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
2 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3 暗褐色　ローム粒子少量
4 黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
5 暗褐色　ローム粒子少量
6 褐　色　ローム粒子中量
7 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
8 暗褐色　ローム粒子・炭化材少量，焼土粒子微量
9 暗褐色　ローム粒子少量
10 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
11 褐　色　ローム粒子中量
12 暗褐色　ローム粒子少量
13 褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
14 暗褐色　ローム粒子少量
15 褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
16 にぶい赤褐色　焼土粒子中量
17 褐　色　ローム粒子中量
18 褐　色　ローム粒子中量
19 にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
20 にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量

炉A・F－F'

1 にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量
2 にぶい赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・焼土小ブロック中量
3 暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック多量

炉B・G－G'

1 にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，焼土粒子中量
2 褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量

炉C・H－H'

1 暗赤褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2 暗赤褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
3 にぶい赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック中量，焼土中ブロック少量
4 暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック中量，炭化粒子少量

炉D・I－I'

1 にぶい赤褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
2 暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック多量，焼土中ブロック中量
3 暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック多量，焼土中ブロック中量

第118図　第1・2号炉穴

長径方向　N－7°－W

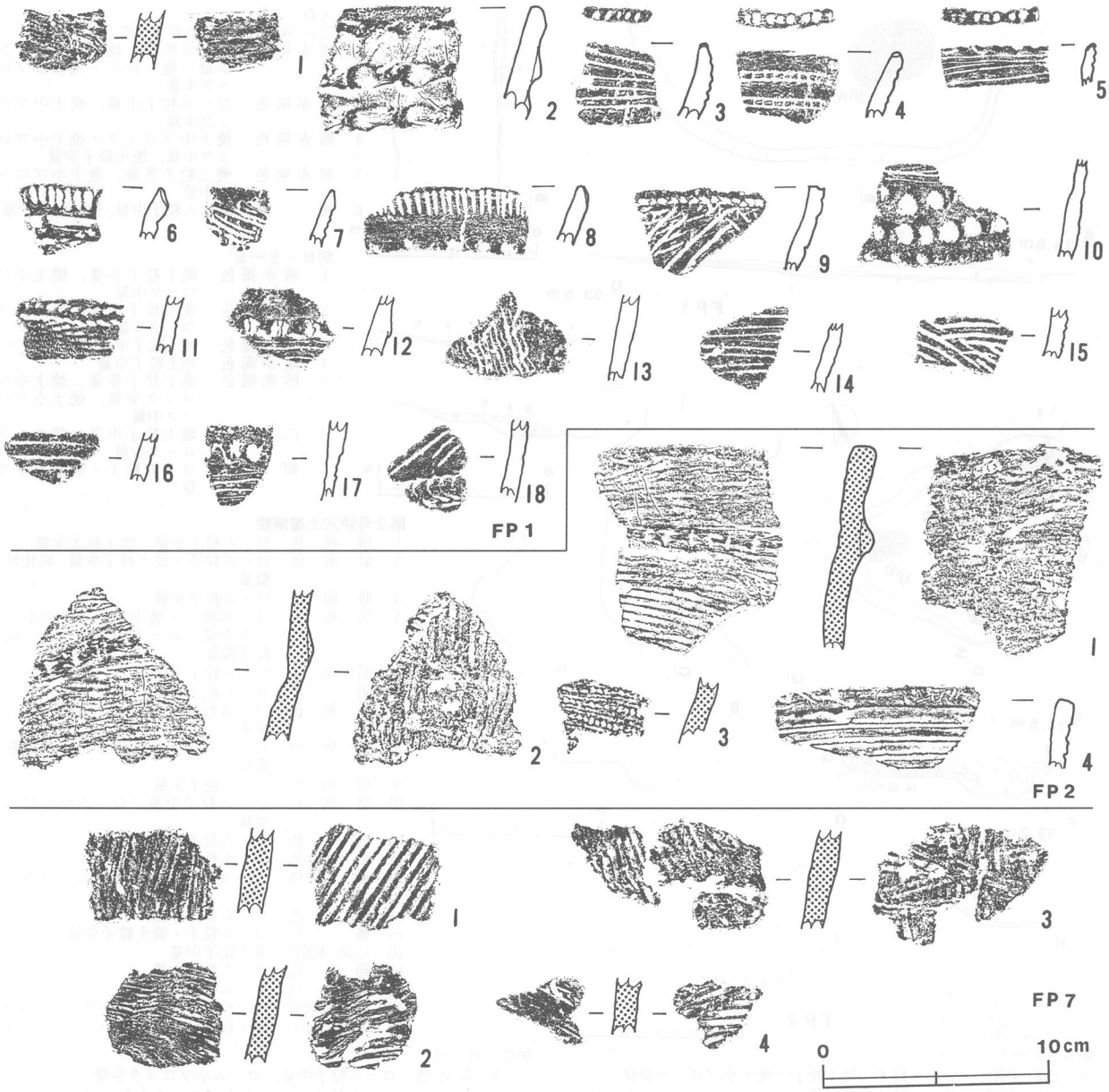
炉床部　2か所。炉Aは，南東部に位置し，長径102cm，短径72cmの楕円形で，2cmの厚さで焼土が堆積している。炉Bは，東部に位置し，径90cm程の円形で，5cmの厚さで焼土が堆積している。

覆土　7層からなり，レンズ状の堆積を示し，概ね自然堆積である。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片232片，礫1個が覆土中から出土している。

第119図1は条痕文系の土器である。2～17は，縄文時代前期後半の土器で，流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，出土遺物から縄文時代早期末（茅山式期）の炉穴と考えられる。



第119図　炉穴出土遺物

第２号炉穴（FP２　SK７　第118図，PL44）

位置　調査区の南部，B2$_{g7}$区を中心に確認されている。

規模と形状　長軸2.60m，短軸2.58mの三角形状の不定形で，深さ54cmである。底面は平坦であるが，炉床はわずかに掘り込まれている。壁は緩やかに外傾して立ち上がる箇所と，急激に外傾して立ち上がる箇所とがある。

長径方向　N－33°－W

炉床部　４か所。炉Ａは，北西部に位置し，径40cmの円形で，４cmの厚さで焼土が堆積している。炉Ｂは，東部に位置し，長径56cm，短径40cmの楕円形で，16cmの厚さで焼土が堆積している。炉Ｃは，南部に位置し，長径56cm，短径42cmの楕円形で，12cmの厚さで焼土が堆積している。炉Ｄは，中央部に位置し，長径48cm，短径20cmの楕円形で，11cmの厚さで焼土が堆積している。

覆土　20層からなり，遺構の西部（Ａ区）が東部（Ｂ区）を掘り込むような堆積状況で，２つの時期が考えられる。Ａ・Ｂ共にローム小ブロックを少量から微量含む人為堆積を示す。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片36片が，炉床から出土している。

第119図１・２は条痕文系の土器である。３は縄文時代前期前半の土器，４は縄文時代前期後半の土器で，流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，出土遺物から縄文時代早期末（茅山式期）の炉穴と考えられる。

第３号炉穴（FP３　SK14　第120図，PL45）

位置　調査区の南部，B2$_{g8}$区を中心に確認されている。

規模と形状　長径0.98m，短径0.86mの楕円形で，深さ20cmである。底面は平坦であるが，炉床はわずかに掘り込まれている。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向　N－３°－E

炉床部　１か所。中央部に位置し，長径36cm，短径30cmの楕円形で，６cm程の厚さで焼土が堆積している。

覆土　３層からなり，レンズ状の堆積を示し，概ね自然堆積である。

遺物　全く出土しなかった。

所見　本跡は，遺物が全く出土しなかったため，時期は明確ではないが，遺構の形態から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

第４号炉穴（FP４　SK17　第120図，PL45）

位置　調査区の北東部，B3$_{b2}$区を中心に確認されている。

規模と形状　長径0.88m，短径0.74mの楕円形で，深さ34cmである。底面は平坦である。壁は急激に外傾して立ち上がる。

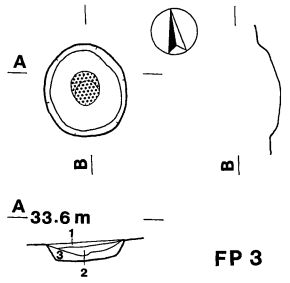
長径方向　N－83°－E

炉床部　１か所。南部に位置し，長径58cm，短径30cmの楕円形で，10cmの厚さで焼土が堆積している。

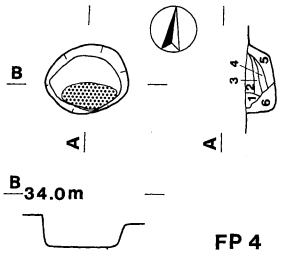
覆土　６層からなり，ローム小ブロックを中量から少量含む人為堆積を示す。

遺物　全く出土しなかった。

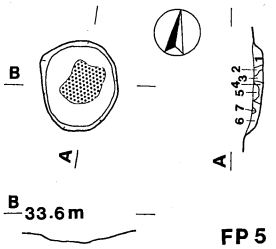
所見　本跡は，遺物が全く出土しなかったため，時期は明確ではないが，遺構の形態から縄文時代早期の炉穴と考えられる。



FP 3



FP 4



FP 5

第3号炉穴土層解説

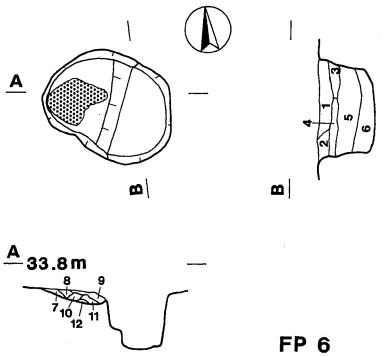
1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
2　赤　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック中量，炭化粒子微量
3　にぶい赤褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子多量

第4号炉穴土層解説

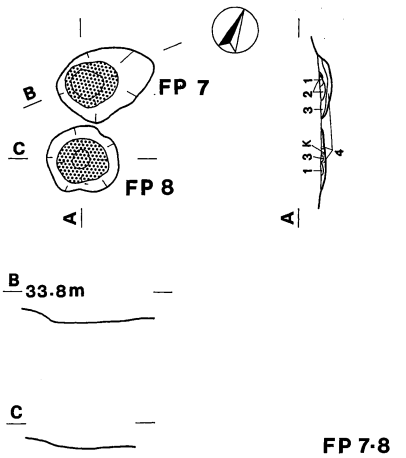
1　にぶい赤褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子中量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子多量
6　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック中量

第5号炉穴土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量
5　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量
6　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
7　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量



FP 6



FP 7·8

第6号炉穴土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土大ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子中量
6　褐　　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量，炭化粒子中量
7　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子少量
8　赤　褐　色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子中量
9　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック中量，焼土中ブロック少量
10　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
11　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック中量，炭化粒子少量
12　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量

第7号炉穴土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子中量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子中量，炭化物微量
4　暗赤褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子・焼土小ブロック中量，ローム小ブロック微量

第8号炉穴土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子・炭化物微量
2　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子中量，炭化粒子微量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子中量，炭化粒子微量

0　2m

第120図　第3・4・5・6・7・8号炉穴

第5号炉穴（FP 5　SK25　第120図）

位置　調査区の南部，B2$_{h8}$区を中心に確認されている。

規模と形状　長径0.98m，短径0.86mの楕円形で，深さ11cmである。底面は平坦であるが，炉床はわずかに掘り込まれている。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向　N－5°－E

炉床部　1か所。中央部に位置し，長軸52cm，短軸48cmの不定形で，焼土がわずかな厚さで堆積している。

覆土　7層からなり，人為堆積を示す。

遺物　全く出土しなかった。

所見　本跡は，遺物が全く出土しなかったため，時期は明確ではないが，遺構の形態から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

第6号炉穴（FP 6　SK29　第120図，PL45）

位置　調査区の東部，B3$_{d4}$区を中心に確認されている。

規模と形状　長径1.36m，短径1.04mの楕円形で，深さ60cmである。底面は平坦であるが，炉床はわずかに掘り込まれている。炉床部は北西部に位置し，その反対側の南東部に60cm程の掘り込みが見られる。炉から掻き出すための掘り込みの可能性も考えられる。壁は，緩やかに外傾して立ち上がる箇所と垂直に立ち上がる箇所とが見られる。

長径方向　N－44°－W

炉床部　1か所。北西部に位置し，長軸66cm，短軸50cmの不定形で，18cmの厚さで焼土が堆積している。

覆土　6層からなり，ローム小ブロックやローム中ブロックを少量から中量含む人為堆積を示す。

遺物　全く出土しなかった。

所見　本跡は，遺物が全く出土しなかったため，時期は明確ではないが，遺構の形態から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

第7号炉穴（FP 7　SK31　第120図）

位置　調査区の東部，B3$_{e2}$区を中心に確認されている。本跡の南東側に第8号炉穴が隣接している。

規模と形状　長径1.05m，短径0.69mの楕円形で，深さ13cmである。底面は平坦であるが，炉床はわずかに掘り込まれている。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向　N－42°－E

炉床部　1か所。中央部に位置し，長径56cm，短径49cmの楕円形で，焼土がわずかな厚さで堆積している。

覆土　4層からなり，ローム小ブロックや炭化粒子を少量から微量含む人為堆積を示す。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片38片が覆土中から出土している。

第119図1～4は条痕文系の土器である。

所見　本跡は，出土遺物から，縄文時代早期末(茅山式期)の炉穴と考えられる。

第8号炉穴（FP 8　SK32　第120図）

位置　調査区の東部，B3$_{e2}$区を中心に確認されている。本跡の北西側に第7号炉穴が隣接している。

規模と形状　長軸0.77m，短軸0.69mの楕円形で，深さ5cmである。底面は平坦であるが，炉床はわずかに掘

り込まれている。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向　N－65°－E

炉床部　1か所。中央部に位置し，径20cm程の不整円形で，焼土がわずかな厚さで堆積している。

覆土　4層からなり，各層に焼土粒子や炭化粒子を含む人為堆積である。

遺物　全く出土しなかった。

所見　本跡は，遺物が全く出土しなかったため，時期は明確ではないが，遺構の形態から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

第9号炉穴（FP 9　SK33　第121図）

位置　調査区の南東部，B3e3区を中心に確認されている。本跡の北東側は第1号地点貝塚に掘り込まれている。

規模と形状　長軸（1.52）m，短軸0.90mの不定形で，深さ46cmである。底面は平坦であるが，炉床はわずかに掘り込まれている。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向　N－48°－E

炉床部　1か所。南西部に位置し，長径36cm，短径20cmの不整楕円形で，焼土がわずかな厚さで堆積している。

覆土　1層からなる。ローム粒子やローム小ブロックを少量含んだ暗褐色土で，人為堆積を示す。

遺物　縄文土器は全く出土しなかったが，礫が24個出土している。

所見　本跡は，時期を決められる遺物が出土しなかったため，時期は明確ではないが，第1号地点貝塚よりも古く，遺構の形態から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

3　地点貝塚

今回の調査では，縄文時代前期の地点貝塚5か所を検出した。以下，検出した地点貝塚の規模や堆積状況等を中心に記載する。

第1号地点貝塚（SM 1　第121図，PL45・46）

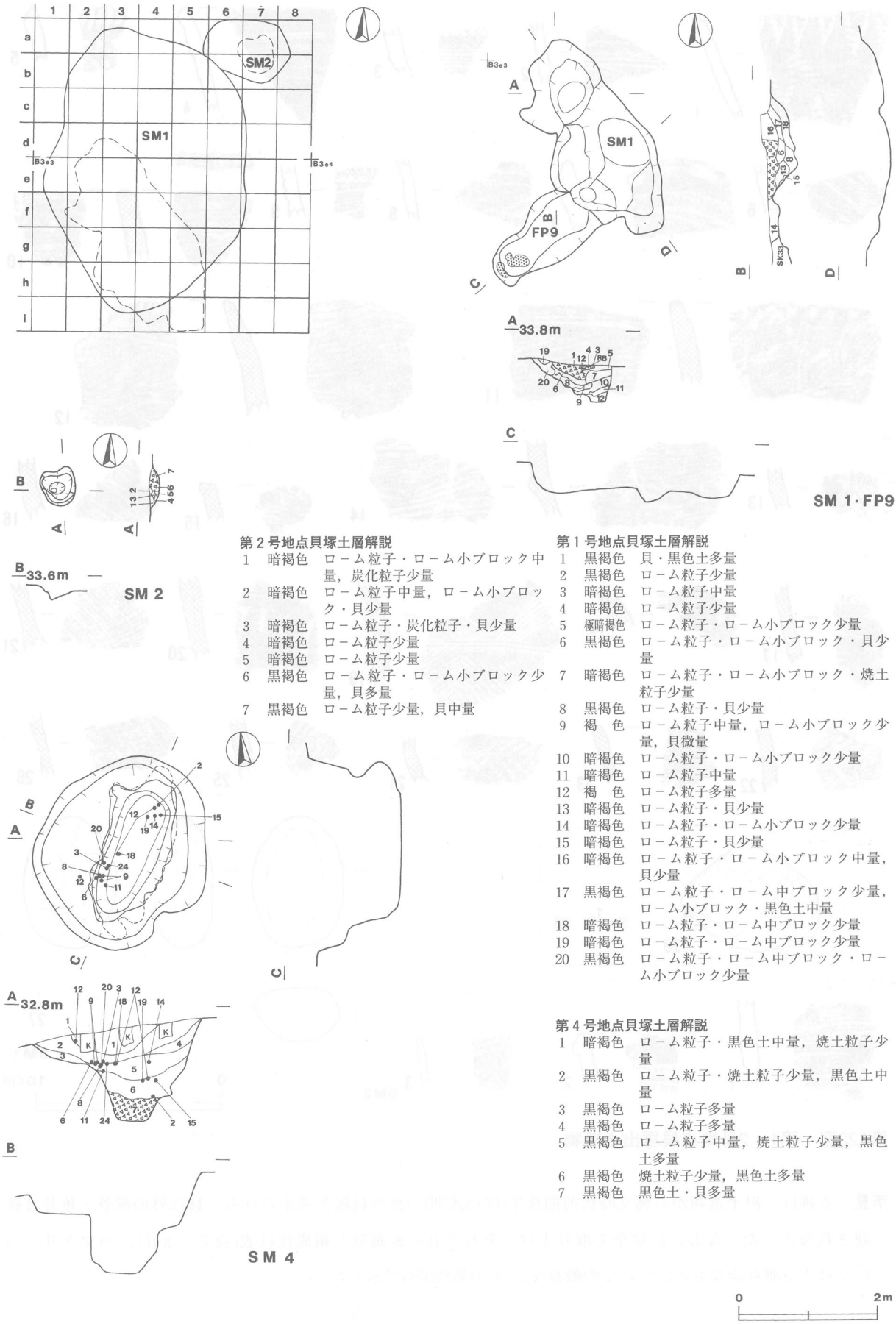
位置　調査区の南東部，B3e3区を中心に確認されている。

規模と形状　掘り方は，長軸3.08m，短軸1.56mの不定形で，深さ36cmである。底面は凸凹し，壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向　N－26°－W

覆土　20層からなり，下層には貝は混じらず，中層から上層にかけて貝が混じる様な堆積状況で，人為堆積である。1層は混土貝層，6・8・9・13・15・16層は混貝土層である。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片126片，土師器片5片，礫2個が中央部から南部にかけて出土している。TP296の深鉢胴部片は覆土中層から出土している。第122図28の貝刃は，確認面からの出土である。貝種は，ハマグリが大部分で，その他にシオフキ・オキシジミ・アサリ・サルボウ・オオノガイ・カガミガイ・アカニシ・ツメタガイ・ウミニナ・カキ・ハイガイ・ヤマトシジミ・ヘナタリである。第122図1～9は浮島式土器で，波状貝殻文の見られるもの（1），沈線文の見られるもの（2・3），爪形文の見られるもの（4～9）等がある。10～26は，胎土に繊維を含む土器で，流れ込みと考えられる。10～18は，条痕文系の土器で，19～26は縄文時代前期前半の土器である。27は花崗岩製の磨石で，長さ7.2cm，幅4.9cm，厚さ3.2cm，重量155.8gである。28はハマグリ製の貝刃で，長さ（4.1）cm，幅5.1cm，重量（7.8）gである。



第2号地点貝塚土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・貝少量
3　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・貝少量
4　暗褐色　ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子少量
6　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，貝多量
7　黒褐色　ローム粒子少量，貝中量

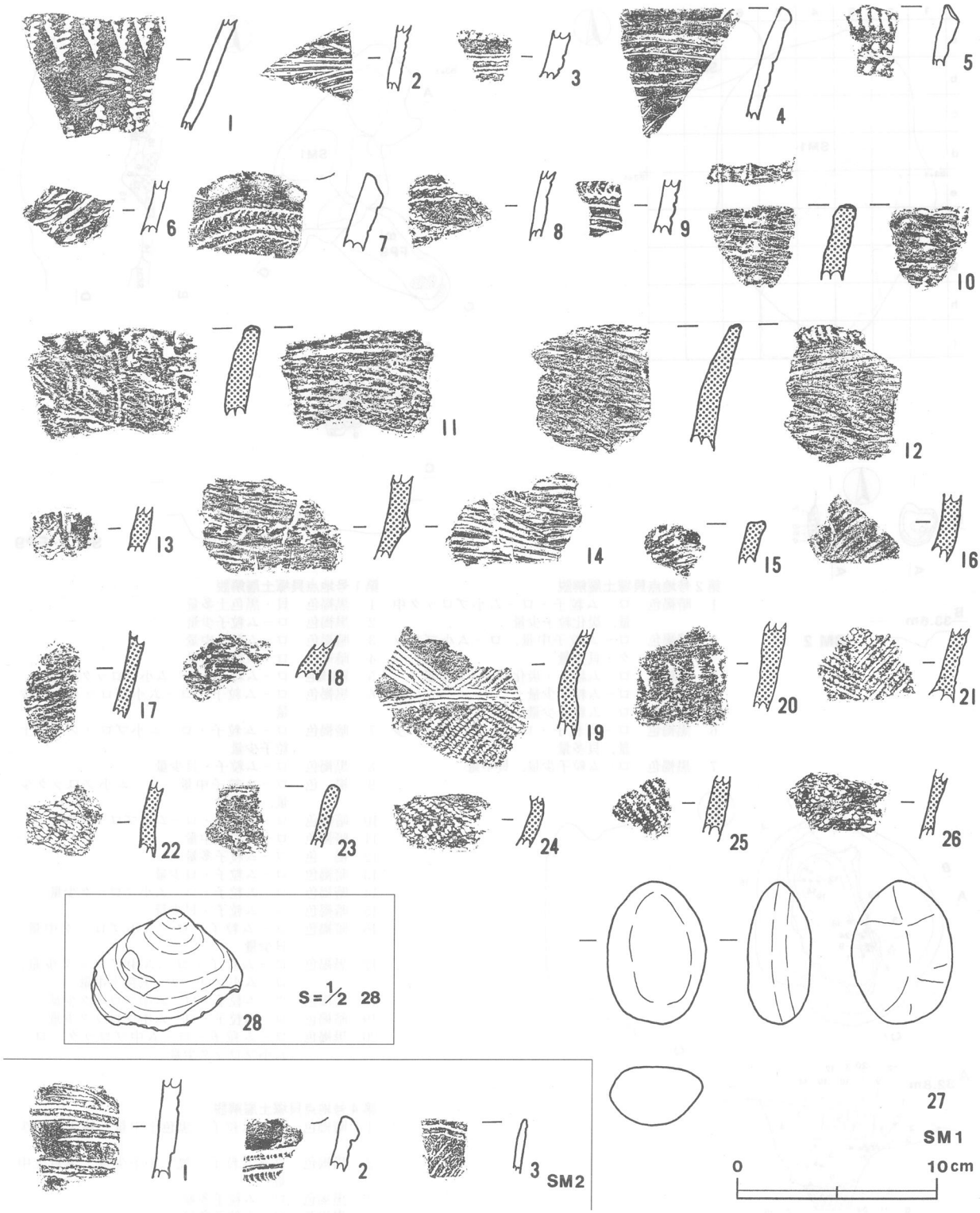
第1号地点貝塚土層解説

1　黒褐色　貝・黒色土多量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量
4　暗褐色　ローム粒子少量
5　極暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
6　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・貝少量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
8　黒褐色　ローム粒子・貝少量
9　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，貝微量
10　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
11　暗褐色　ローム粒子中量
12　褐　色　ローム粒子多量
13　暗褐色　ローム粒子・貝少量
14　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
15　暗褐色　ローム粒子・貝少量
16　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，貝少量
17　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・黒色土中量
18　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック少量
19　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック少量
20　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

第4号地点貝塚土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・黒色土中量，焼土粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，黒色土中量
3　黒褐色　ローム粒子多量
4　黒褐色　ローム粒子多量
5　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，黒色土多量
6　黒褐色　焼土粒子少量，黒色土多量
7　黒褐色　黒色土・貝多量

第121図　第1・2・4号地点貝塚，第9号炉穴



第122図　第1・2号地点貝塚出土遺物

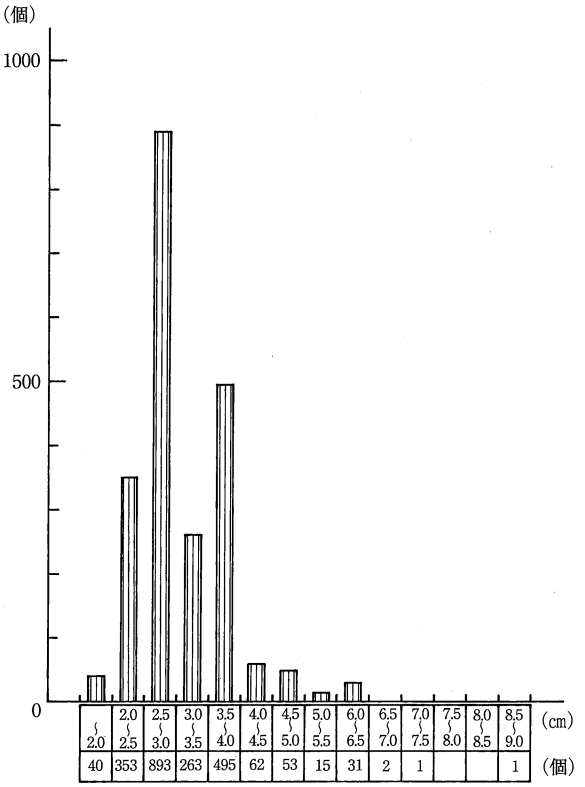
所見　本跡は，出土遺物から縄文時代前期後半(浮島式期)の地点貝塚と考えられる。貝以外の獣骨・魚骨は確認されなかった。なお，貝は全て取り上げ，それぞれの総重量と組成比は表(表７・８)に，ハマグリについては，計測可能なものについての殻長をグラフ(第123図)で示した。

表7　第1号地点貝塚貝遺存体組成表

貝種名	総重量(g)	組成比(%)
ハマグリ	18158.1	93.1
シオフキ	180.7	0.9
オキシジミ	252.2	1.3
アサリ	164.7	0.8
サルボウ	14.4	0.1
オオノガイ	1.0	0.0
カガミガイ	265.4	1.4
ツメタガイ	41.6	0.2
アカニシ	230.1	1.2
ウミニナ	21.5	0.1
カキ	158.2	0.8
ハイガイ	21.5	0.1
ヤマトシジミ	3.7	0.0
ヘナタリ	2.5	0.0
合計	19515.6	100

表8　第1号地点貝塚e-2区貝遺存体組成表

	覆土上層		覆土下層	
貝種名	総重量(g)	組成比(%)	総重量(g)	組成比(%)
ハマグリ	2720.1	92.0	43.2	95.2
(焼かれたもの)	(1280.1)	ハマグリの 47.1	(37.2)	ハマグリの 86.1
シオフキ	30.0	1.0	2.2	4.8
オキシジミ	46.6	1.6		
アサリ	40.2	1.4		
サルボウ				
オオノガイ				
カガミガイ	78.4	2.7		
ツメタガイ				
アカニシ	1.3	0.0		
ウミニナ	11.9	0.4		
カキ	27.3	0.9		
ハイガイ				
ヤマトシジミ				
ヘナタリ	0.9	0.0		
合計	2956.7	100	45.4	100



第123図　第1号地点貝塚出土ハマグリ殻長分布図

第2号地点貝塚（SM 2　第121図）

位置　調査区の東部，B3d3区に確認されている。

規模と形状　掘り方は，長軸1.12m，短軸1.06mの不定形で，深さ20cmである。底面には凹んだ面が見られる。壁は，緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向　N－22°－E

覆土　7層からなり，貝は北側壁際に混じる様な堆積状況であり，この北側から貝を投棄した可能性が考えられ，人為堆積である。2・3層は混貝土層，6・7層は混土貝層である。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片23片が覆土中から出土している。第122図2・3の縄文土器深鉢口縁部片は覆土中からの出土である。貝種は，ハマグリが大部分で，その他にシオフキ・アサリ・オキシジミ・アカニシ・ウミニナ・カキである。

第122図1～3は浮島式土器で，沈線文の見られるもの（1・2），指頭による凸凹の見られるもの（3）等がある。

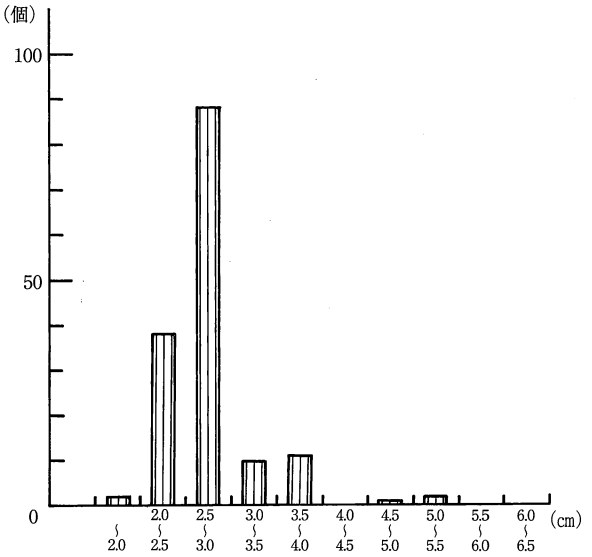
所見　本跡は，出土遺物から縄文時代前期後半(浮島式期)の地点貝塚と考えられる。貝以外の獣骨・魚骨は確認されなかった。なお，貝は全て取り上げ，それぞれの総重量と組成比は表（表9・10）に，ハマグリについては，計測可能なものについての殻長をグラフ（第124図）で示した。

表9　第2号地点貝塚貝遺存体組成表

貝種名	総重量(g)	組成比(%)
ハマグリ	895.6	96.0
シオフキ	18.2	1.9
オキシジミ	2.0	0.2
アサリ	9.9	1.1
サルボウ		
オオノガイ		
カガミガイ		
ツメタガイ		
アカニシ	3.7	0.4
ウミニナ	2.4	0.3
カキ	1.4	0.1
ハイガイ		
ヤマトシジミ		
ヘナタリ		
合計	933.2	100

表10　第2号地点貝塚a-7区貝遺存体組成表

	覆土上層		覆土下層	
貝種名	総重量(g)	組成比(%)	総重量(g)	組成比(%)
ハマグリ	410.3	97.6	57.3	91.1
シオフキ	4.9	1.1	1.0	1.6
オキシジミ	2.0	0.5		
アサリ	0.3	0.1		
サルボウ				
オオノガイ				
カガミガイ				
ツメタガイ				
アカニシ	0.8	0.2	2.9	4.6
ウミニナ	2.1	0.5	0.3	0.5
カキ	1.4	2.2		
ハイガイ				
ヤマトシジミ				
ヘナタリ	0.1	0.0		
合計	420.5	100	62.9	100



第124図　第2号地点貝塚出土ハマグリ殻長分布図

第3号地点貝塚（SM3　SI1の内　第104図，PL40・41）

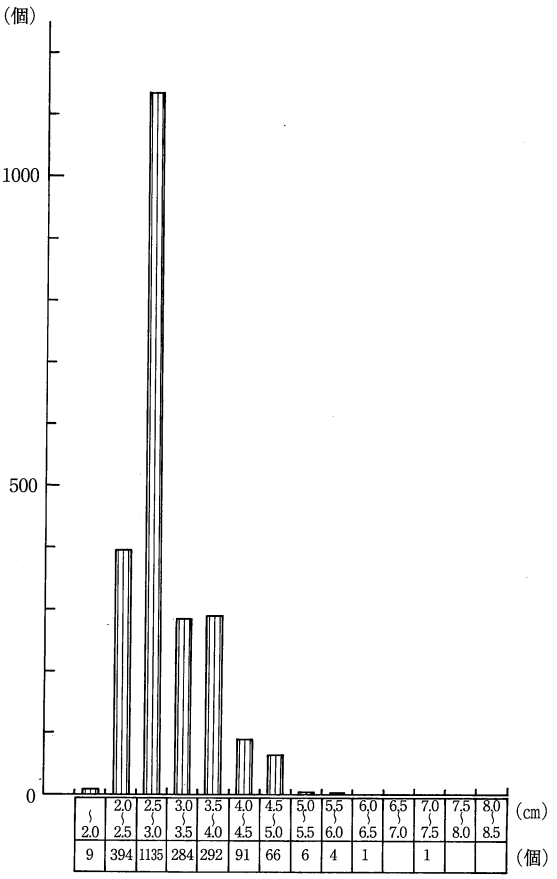
位置　調査区の南部，B3f6区を中心に，第1号住居跡の南部の覆土中層から下層にかけて確認されている。

規模と形状　長軸2.00m，短軸1.44mの不定形で，厚さ20cm程である。

覆土　9層からなり，貝は上層から中層にかけては多量に混じり，中層から下層にかけては少量混じる様な堆積状況で，人為堆積である。1・2層は混土貝層，3・4層は混貝土層である。

表11　第3号地点貝塚貝遺存体組成表

貝種名	総重量(g)	組成比(%)
ハマグリ	10274.3	89.1
シオフキ	697.0	6.0
オキシジミ	31.3	0.3
アサリ	84.8	0.7
サルボウ	28.6	0.3
オオノガイ	0.8	0.0
カガミガイ	21.4	0.2
ツメタガイ	2.9	0.0
アカニシ	109.0	0.9
ウミニナ	15.7	0.1
カキ	270.8	2.4
ハイガイ		
ヤマトシジミ		
ヘナタリ	1.0	0.0
合計	11537.6	100



第125図　第3号地点貝塚出土ハマグリ殻長分布図

遺物　縄文土器片38片が覆土中から出土している。貝種は，ハマグリが大部分で，その他にシオフキ・オキシジミ・アサリ・サルボウ・オオノガイ・カガミガイ・ツメタガイ・アカニシ・ウミニナ・カキ・ヘナタリである。

所見　本跡は，出土遺物から縄文時代前期後半（浮島式期）の地点貝塚と考えられる。貝以外の獣骨・魚骨は確認されなかった。なお，貝は全て取り上げ，それぞれの総重量と組成比は表（表11）に，ハマグリについては計測可能のものの殻長をグラフ（第125図）で示した。

第４号地点貝塚（SM４　SK２の内　第121図，PL46）

位置　調査区の北西部，B2b3区を中心に確認されている。

規模と形状　掘り方は，長径2.80m，短径2.44mの不整楕円形で，深さ145cmである。底面は平坦で，壁は急激に外傾して立ち上がる所やオーバーハングして立ち上がる所や２段に立ち上がる所等がある。

長径方向　N－33°－E

覆土　７層からなり，レンズ状の堆積を示し，概ね自然堆積である。貝は最下層に混じっている。

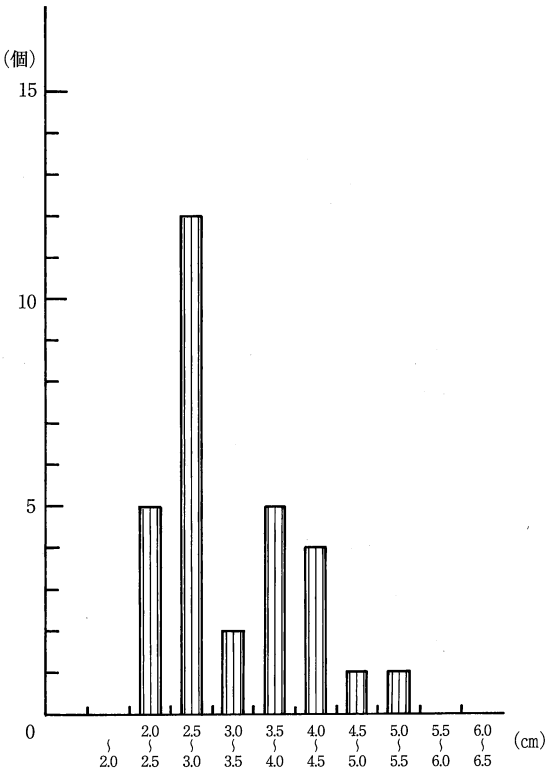
遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片128片，礫３個が覆土中から出土している。第127図６の深鉢口縁部片は覆土中層から，２の深鉢胴部片は覆土最下層（７層）から出土している。貝種は，ハマグリが大部分で，その他にカキ・ハイガイ・アサリ・オキシジミ・アカニシ・ヤマトシジミ・シオフキである。

第127図１～10は浮島式土器で，波状貝殻文の見られるもの（１～３），沈線文の見られるもの（４・５），爪形文の見られるもの（６～９），指頭による凸凹の見られるもの（10）等がある。11～24は，胎土に繊維を含む土器で，流れ込みと考えられる。11は条痕文系の土器である。

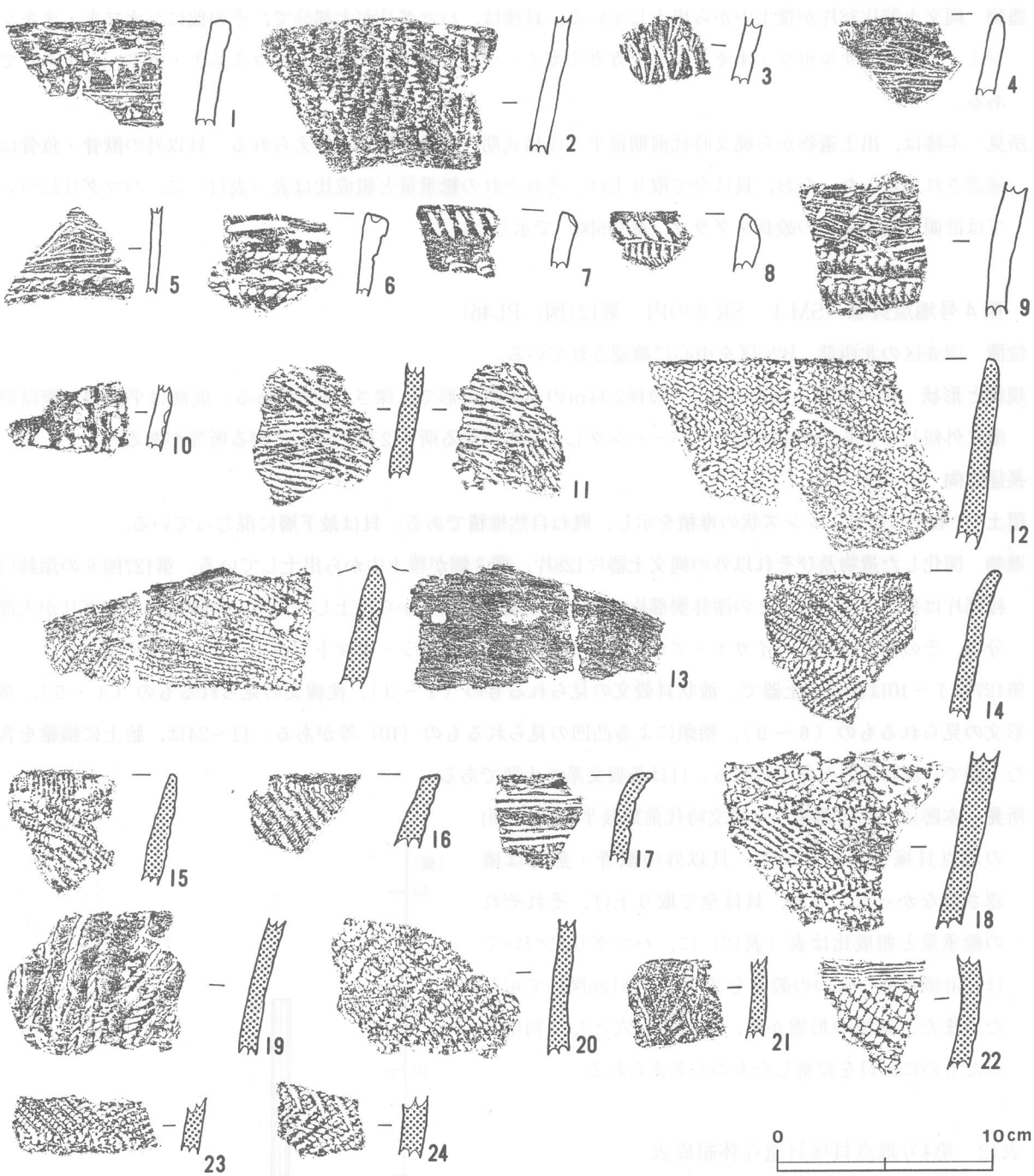
所見　本跡は，出土遺物から縄文時代前期後半(浮島式期)の地点貝塚と考えられる。貝以外の獣骨・魚骨は確認されなかった。なお，貝は全て取り上げ，それぞれの総重量と組成比は表（表12）に，ハマグリについては，計測可能なものの殻長をグラフ（第126図）で示した。また，遺構の形態から，当初陥し穴として利用されたものに，貝を投棄したものと考えられる。

表12　第4号地点貝塚貝遺存体組成表

貝種名	総重量(g)	組成比(%)
ハマグリ	414.9	82.1
シオフキ	6.5	1.3
オキシジミ	1.5	0.3
アサリ	2.0	0.4
サルボウ		
オオノガイ		
カガミガイ		
ツメタガイ		
アカニシ	67.4	13.3
ウミニナ	0.2	0.0
カキ	4.6	0.9
ハイガイ	5.4	1.1
ヤマトシジミ	3.1	0.6
ヘナタリ		
合計	505.6	100



第126図　第4号地点貝塚出土ハマグリ殻長分布図



第127図　第4号地点貝塚出土遺物

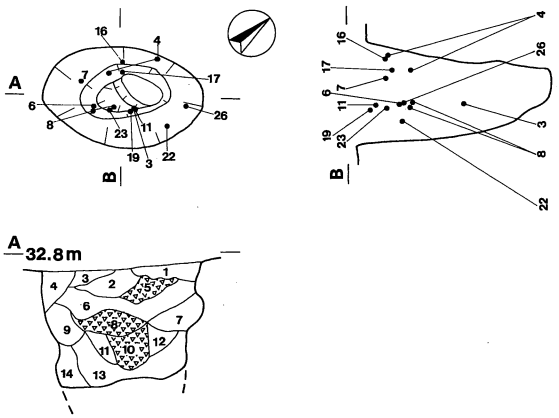
第５号地点貝塚（SM５　SK23　第128図，PL46）

位置　調査区の中央部，第１号住居跡内のB3d7区を中心に確認されている。

規模と形状　掘り方は，長径1.68m，短径1.06mの楕円形で，深さ206cmである。底面はＶ字状で，壁は急激に外傾して立ち上がる。

長径方向　N－41°－E

覆土　下層の堆積状況は不明であるが，ローム小ブロックや焼土粒子や炭化粒子を中量から少量含む人為堆積を示す。貝は中層から上層に混じっている。



第５号地点貝塚土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，貝中量
6　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
8　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，貝中量
9　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量
10　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，貝・黒色土中量
11　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
12　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
13　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
14　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量

0　2m

第128図　第5号地点貝塚

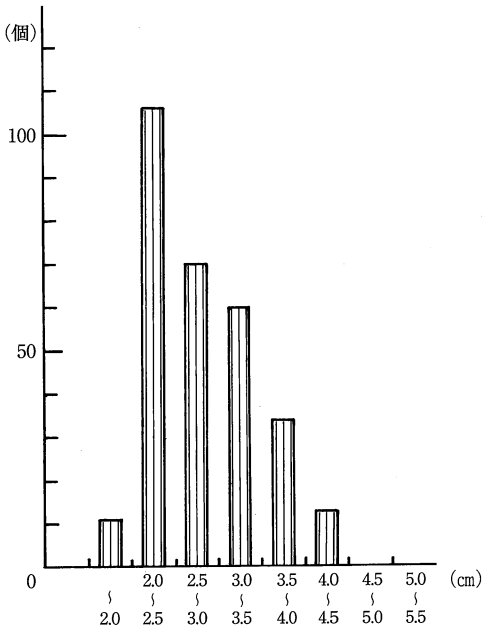
遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片321片，礫９個が覆土中から出土しているが，全体的に遺物量は多い。第130図１の深鉢は覆土上層から，３の深鉢は覆土中層からそれぞれ出土している。

第130図４～25は浮島式土器で，波状貝殻文の見られるもの（４～７），沈線文の見られるもの（８～15），爪形文の見られるもの（16～22），指頭による凹凸の見られるもの（23～25）等がある。26も縄文時代前期後半の土器であろう。27は胎土に繊維を含む縄文時代前期前半の土器で，流れ込みと考えられる。

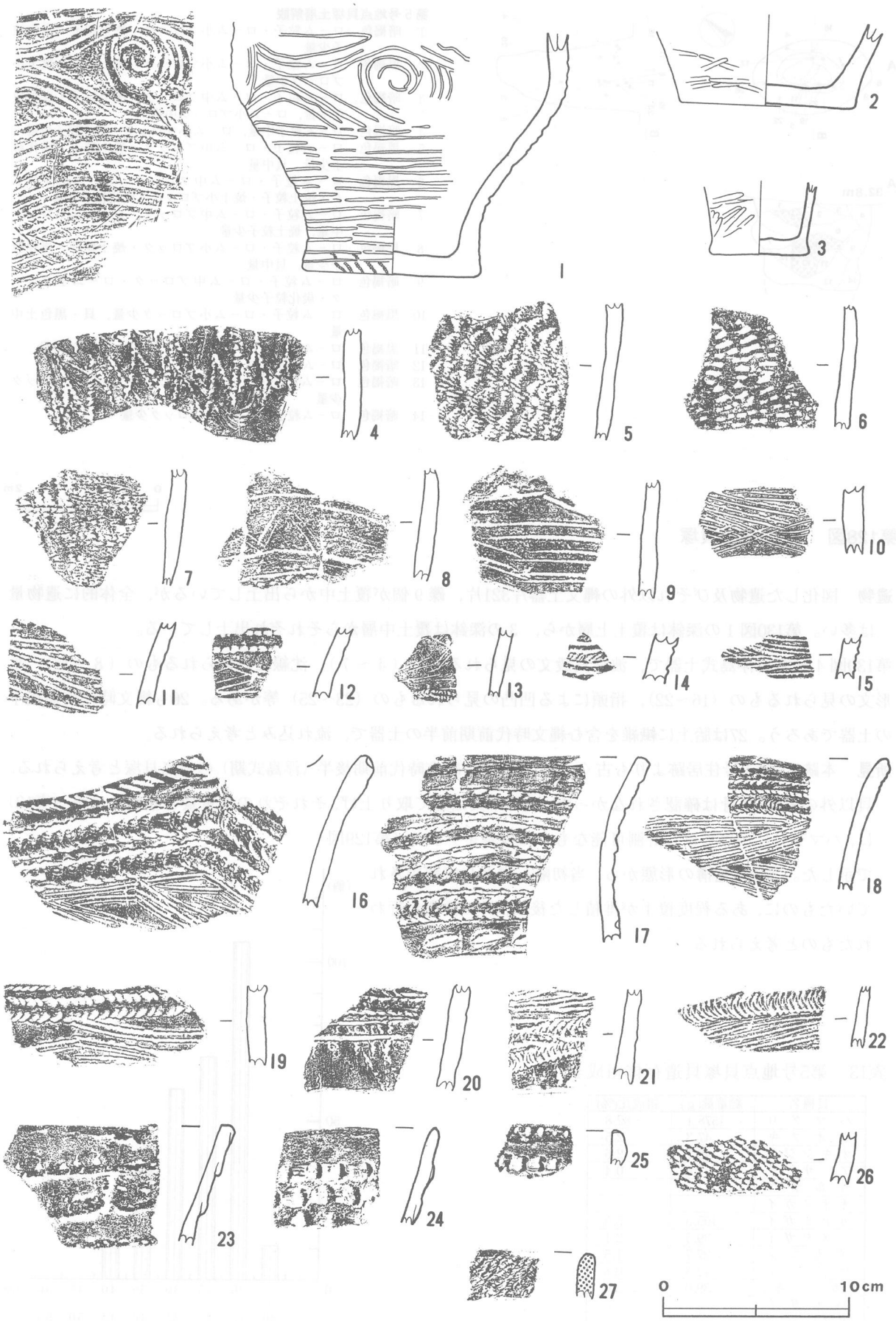
所見　本跡は，第１号住居跡よりも古く，出土遺物から縄文時代前期後半（浮島式期）の地点貝塚と考えられる。貝以外の獣骨・魚骨は確認されなかった。なお，貝は全て取り上げ，それぞれの総重量と組成比は表（表13）に，ハマグリについては，計測可能なものの殻長をグラフ（第129図）で示した。また，遺構の形態から，当初陥し穴として利用されていたものに，ある程度覆土が堆積した後に，貝の投棄が行われたものと考えられる。

表13　第5号地点貝塚貝遺存体組成表

貝種名	総重量(g)	組成比(%)
ハマグリ	1578.1	82.8
シオフキ	47.3	2.5
オキシジミ	48.7	2.6
アサリ	7.4	0.4
サルボウ		
オオノガイ		
カガミガイ	105.3	5.5
ツメタガイ	39.5	2.1
アカニシ	27.7	1.5
ウミニナ	12.3	0.6
カキ	39.0	2.0
ハイガイ		
ヤマトシジミ		
ヘナタリ		
合計	1905.3	100



第129図　第5号地点貝塚出土ハマグリ殻長分布図



第130図　第5号地点貝塚出土遺物

第5号地点貝塚出土遺物観察表

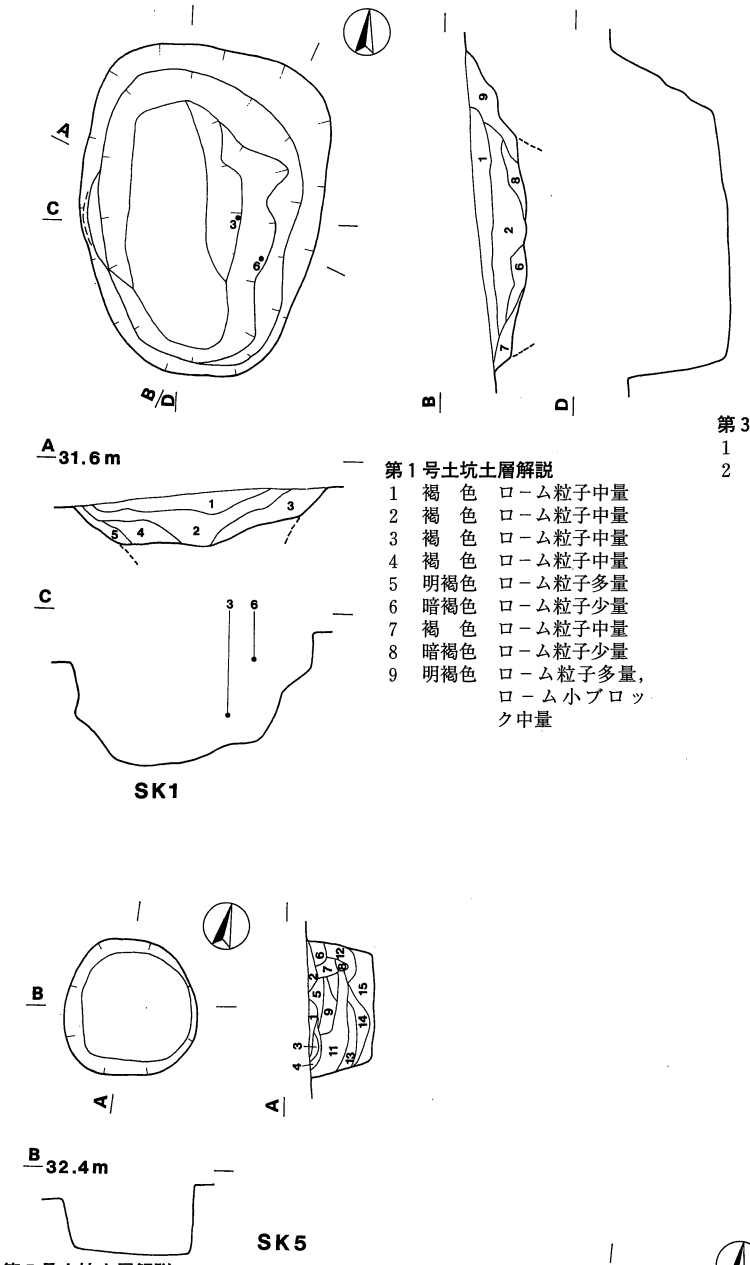
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第130図 1	深　鉢 縄文土器	B　(13.3) C　[8.4]	底部から胴部片。平底。胴部は内彎して立ち上がる。胴部外面下位に単節LRの縄文の地文の上に平行沈線が施され，胴部中位に4単位に渦巻き状の沈線が施され，その間に山形の沈線が施されている。	小礫・砂粒・白色粒 明赤褐色 普通	P12　30%　PL52 覆土上層 諸磯b式(中段階)
2	深　鉢 縄文土器	B　(4.6) C　9.4	底部片。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面及び底部へラ磨きが施されている。無文。	礫・砂粒・雲母 明赤褐色　普通	P13　10%　PL52 覆土
3	深　鉢 縄文土器	B　(4.0) C　5.3	底部から胴部下端片。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面へラ磨きが施されている。無文。	砂粒・白色粒・雲母 明赤褐色　普通	P14　20%　PL52 覆土中層

4　土坑

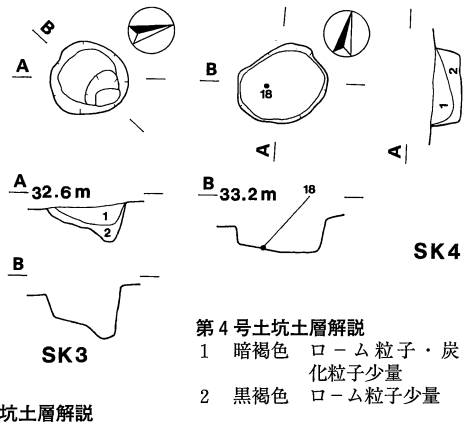
今回の調査では，土坑20基（SK１～33，SK18・22・24は欠番，SK２・23はSM４・５に，ＳＫ７・14・17・25・29・31・32・33はFP２・３・４・５・６・７・８・９に変更）を検出した。土坑の性格が明瞭にできた土坑内貝塚（地点貝塚）と炉穴については，既に説明をした。ここでは，その他の土坑について実測図と一覧表を掲載する。

表14号　三和貝塚土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (旧)→(新)	図番号
1	$B2_{g1}$	N－6°－W	不整長方形	3.46×2.46	146	外傾	平坦	自然	縄文土器74片		131
2	$B2_{b3}$	N－33°－E	不整楕円形	2.80×2.44	145	急傾	平坦	自然	縄文土器128片，礫３個，貝	第４号地点貝塚，陥し穴	121
3	$B2_{C2}$	N－46°－W	不整円形	0.80×0.80	56	急傾	皿状	自然	縄文土器１片，礫１個		131
4	$B2_{b4}$	N－61°－E	楕円形	1.00×0.78	36	垂直	皿状	自然	縄文土器１片，礫１個		131
5	$B2_{f3}$	N－22°－W	不整円形	1.44×1.40	70	垂直	平坦	人為	縄文土器６片		131
6	$B2_{g9}$	N－25°－E	楕円形	2.42×1.40	84	外傾	皿状	人為	縄文土器24片		131
7	$B2_{g7}$	N－33°－W	不定形	2.60×2.58	54	外傾	凸凹	人為	縄文土器36片	第２号炉穴	118
8	$B2_{b9}$	N－11°－W	楕円形	3.08×2.14	48	垂直	平坦	人為	縄文土器80片		131
9	$B2_{f7}$	N－49°－W	楕円形	2.90×2.06	28	外傾	皿状	自然	縄文土器３片	ピット２つあり	132
10	$B2_{g6}$	－	円形	1.60×1.56	22	外傾	皿状	自然	縄文土器２片		132
11	$B2_{a7}$	－	円形	1.58×1.46	26	急傾	平坦	自然			132
12	$B2_{d4}$	N－35°－W	不定形	1.30×0.86	37	垂直	平坦	人為	縄文土器71片，礫１個	本跡→ＳＩ２	132
13	$B2_{a9}$	N－2°－E	不定形	3.54×2.96	28	外傾	平坦	自然	縄文土器21片，礫１個		132
14	$B2_{g8}$	N－3°－E	楕円形	0.98×0.86	20	外傾	皿状	自然		第３号炉穴	120
15	$B3_{c1}$	N－77°－W	楕円形	0.84×0.74	24	外傾	平坦	人為			132
16	$B3_{c1}$	N－84°－W	楕円形	0.99×0.89	30	外傾	皿状	人為	縄文土器３片		132
17	$B3_{b2}$	N－83°－E	楕円形	0.88×0.74	34	垂直	平坦	人為		第４号炉穴	120
19	$B3_{b2}$	N－87°－W	楕円形	1.08×0.94	20	外傾	平坦	人為	縄文土器３片		133
20	$B3_{b1}$	N－75°－E	楕円形	1.36×0.84	36	外傾	凸凹	人為	縄文土器13片		133
21	$B3_{d1}$	N－10°－W	楕円形	1.16×1.00	30	外傾	平坦	人為	縄文土器１片，磨石１個，礫11個		133
23	$B3_{f5}$	N－41°－E	楕円形	1.68×1.06	206	急傾	V字状	人為	縄文土器(深鉢)，縄文土器片321片，礫９個，貝	第５号地点貝塚，陥し穴 本跡→ＳＩ１	128
25	$B2_{h8}$	N－5°－E	楕円形	0.98×0.86	11	外傾	皿状	人為	縄文土器１片	第５号炉穴	120
26	$B3_{a4}$	N－29°－E	楕円形	1.56×0.88	14	外傾	平坦	人為	縄文土器８片		133
27	$B3_{a4}$	N－32°－W	楕円形	1.08×0.96	24	外傾	平坦	人為	縄文土器５片		133
28	$B3_{d3}$	N－17°－E	楕円形	1.33×1.18	40	外傾	凸凹	人為	縄文土器14片		133
29	$B3_{d4}$	N－44°－W	楕円形	1.36×1.04	60	外傾・垂直	２段	人為		第６号炉穴	120
30	$A3_{j3}$	N－59°－E	楕円形	3.10×1.74	142	外傾・急傾	皿状	人為	縄文土器79片，礫３個	陥し穴	133
31	$B3_{e2}$	N－42°－E	楕円形	1.05×0.69	18	緩傾	皿状	人為	縄文土器38片	第７号炉穴	120
32	$B3_{e2}$	N－65°－E	不定形	0.77×0.69	5	緩傾	皿状	人為		第８号炉穴	120
33	$B3_{e3}$	N－48°－E	不定形	(1.52)×0.90	46	外傾	皿状	人為	礫24個	第９号炉穴　本跡→ＳＭ１	121

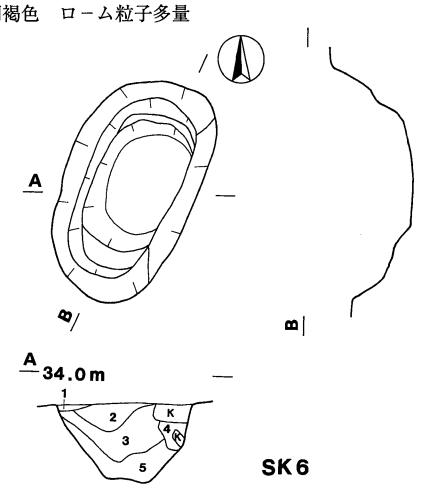


第1号土坑土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子中量
5　明褐色　ローム粒子多量
6　暗褐色　ローム粒子少量
7　褐　色　ローム粒子中量
8　暗褐色　ローム粒子少量
9　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量



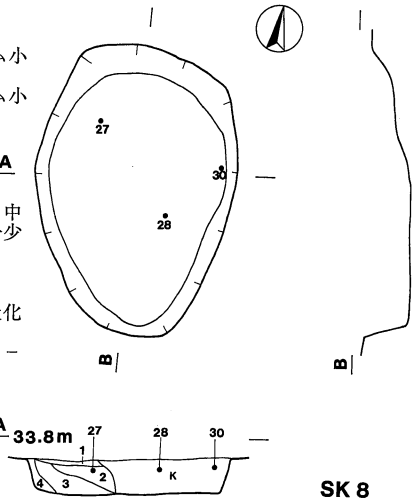
第3号土坑土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量
2　明褐色　ローム粒子多量

第4号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子少量



第6号土坑土層解説
1　耕作土
2　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

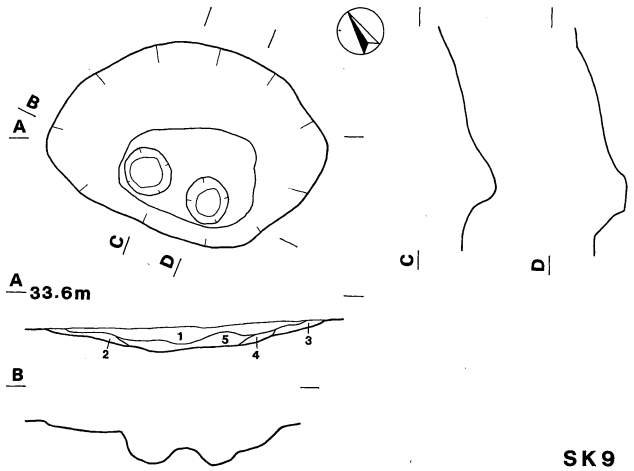
第5号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
5　褐　色　ローム粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量
6　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子少量
10　褐　色　ローム大ブロック中量，ローム粒子少量
11　褐　色　ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
12　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
13　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
14　褐　色　ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
15　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量



第8号土坑土層解説
1　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック少量，炭化粒子・炭化材・炭化物中量
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量，炭化粒子中量
3　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
4　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量

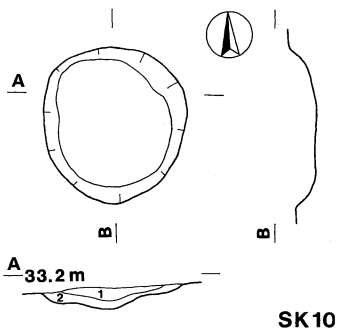
0　2m

第131図　土坑(1)



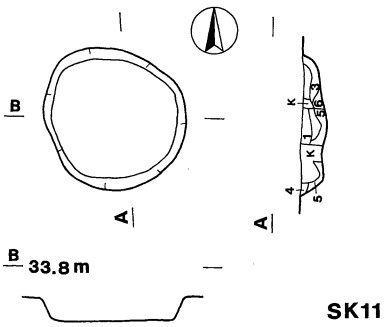
SK9

第9号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量



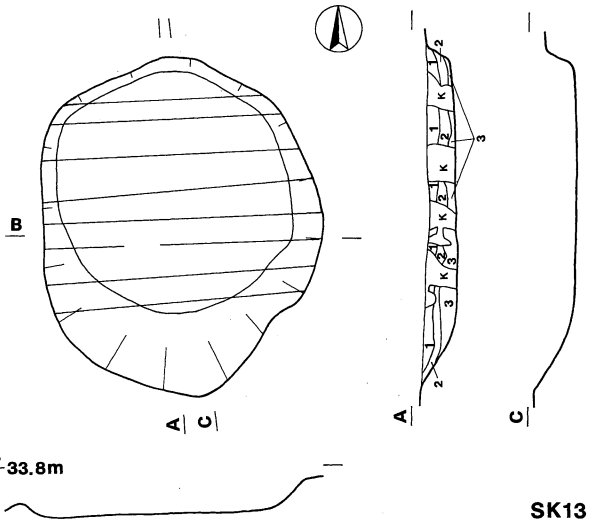
SK10

第10号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
2　褐　色　ローム粒子多量



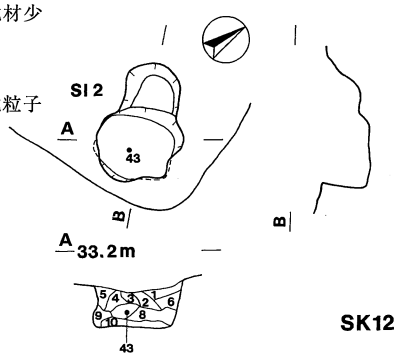
SK11

第11号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・炭化材少量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量



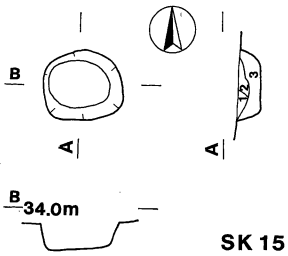
SK13

第13号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子微量
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量



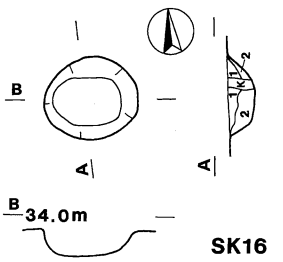
SK12

第12号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，黒色土中量
3　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・黒色土中量
4　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・黒色土中量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
7　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量，黒色土中量
8　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
9　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
10　暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量



SK 15

第15号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

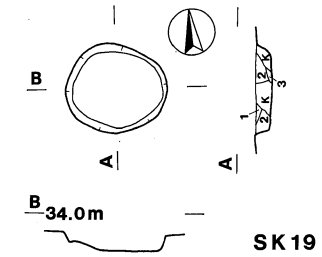


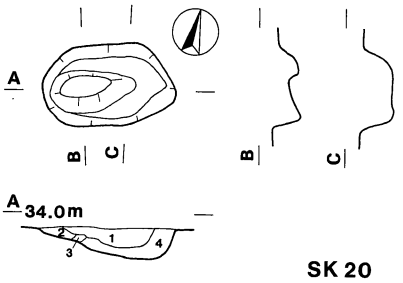
SK16

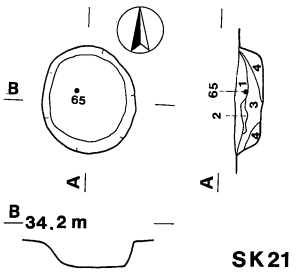
第16号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

0　2m

第132図　土坑(2)







第19号土坑土層解説

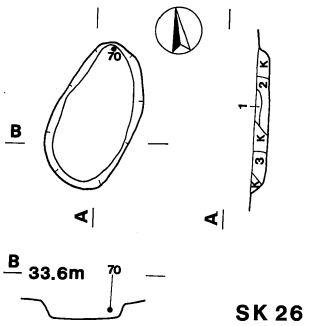
1　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
3　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量

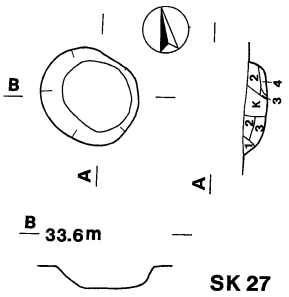
第20号土坑土層解説

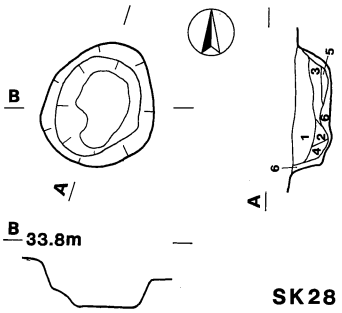
1　褐　色　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量

第21号土坑土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子中量







第26号土坑土層解説

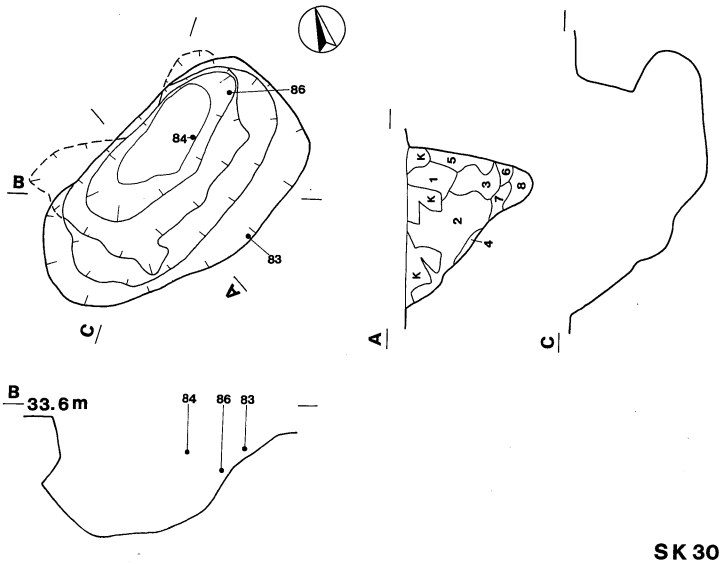
1　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
2　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量

第27号土坑土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子・炭化物微量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子・炭化物微量
3　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

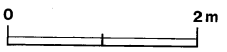
第28号土坑土層解説

1　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

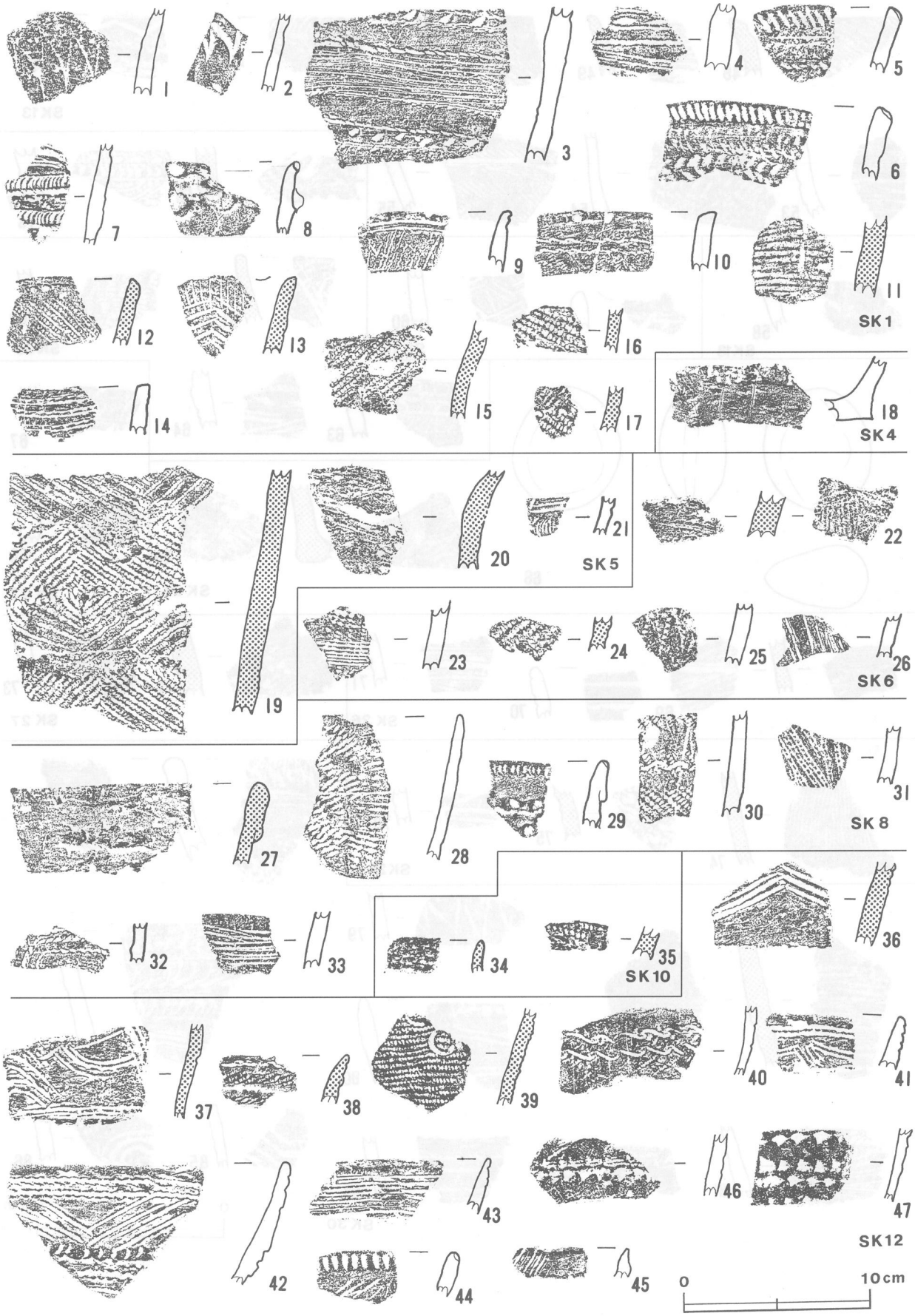


第30号土坑土層解説

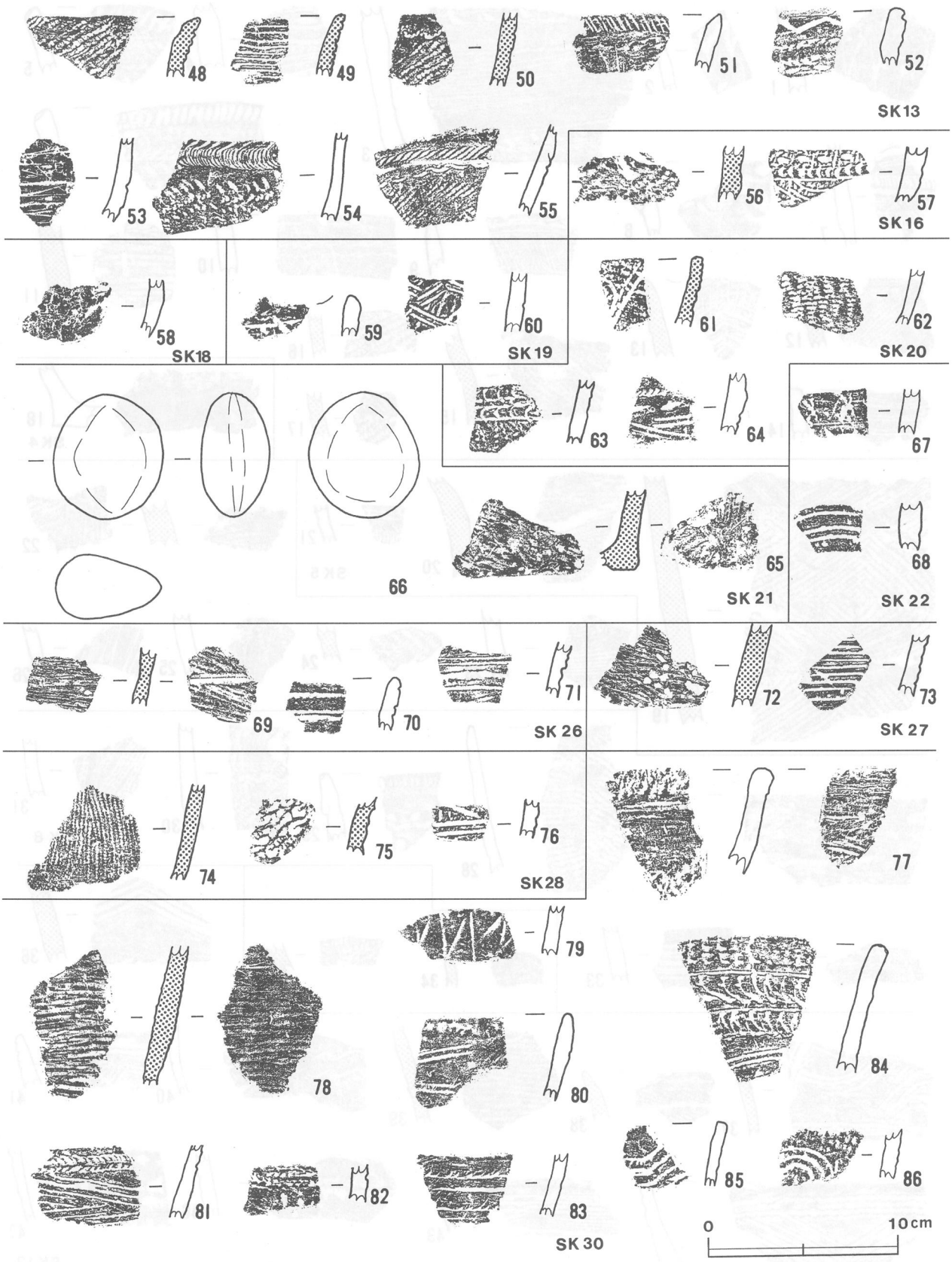
1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，黒色土中量
4　暗褐色　ローム粒子少量
5　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
7　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
8　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量



第133図　土坑(3)



第134図　その他の土坑出土遺物(1)



第135図　その他の土坑出土遺物(2)

その他の土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第135図66	磨石	6.7	5.8	3.5	182.0	花崗岩	SK21覆土	Q12	PL52

5　遺構外出土遺物（第136・137図）

当遺跡からは，表土層及び遺構確認面から遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは，主なものの実測図及び拓撮図を掲載した。

（1）縄文時代

第1群　縄文時代早期の土器

条痕文系の土器（1）

第2群　縄文時代前期前半の土器

縄文が施され，繊維の含んだ土器（2・3）

第3群　縄文時代前期後半の土器

波状貝殻文の見られる土器（4・5）

沈線文の見られる土器（6～9）

爪形文の見られる土器（10～14）

指頭による凸凹の見られる土器（15～17）

刺突文の見られる土器（18）

円形の竹管文の見られる土器（19）

（2）古墳時代

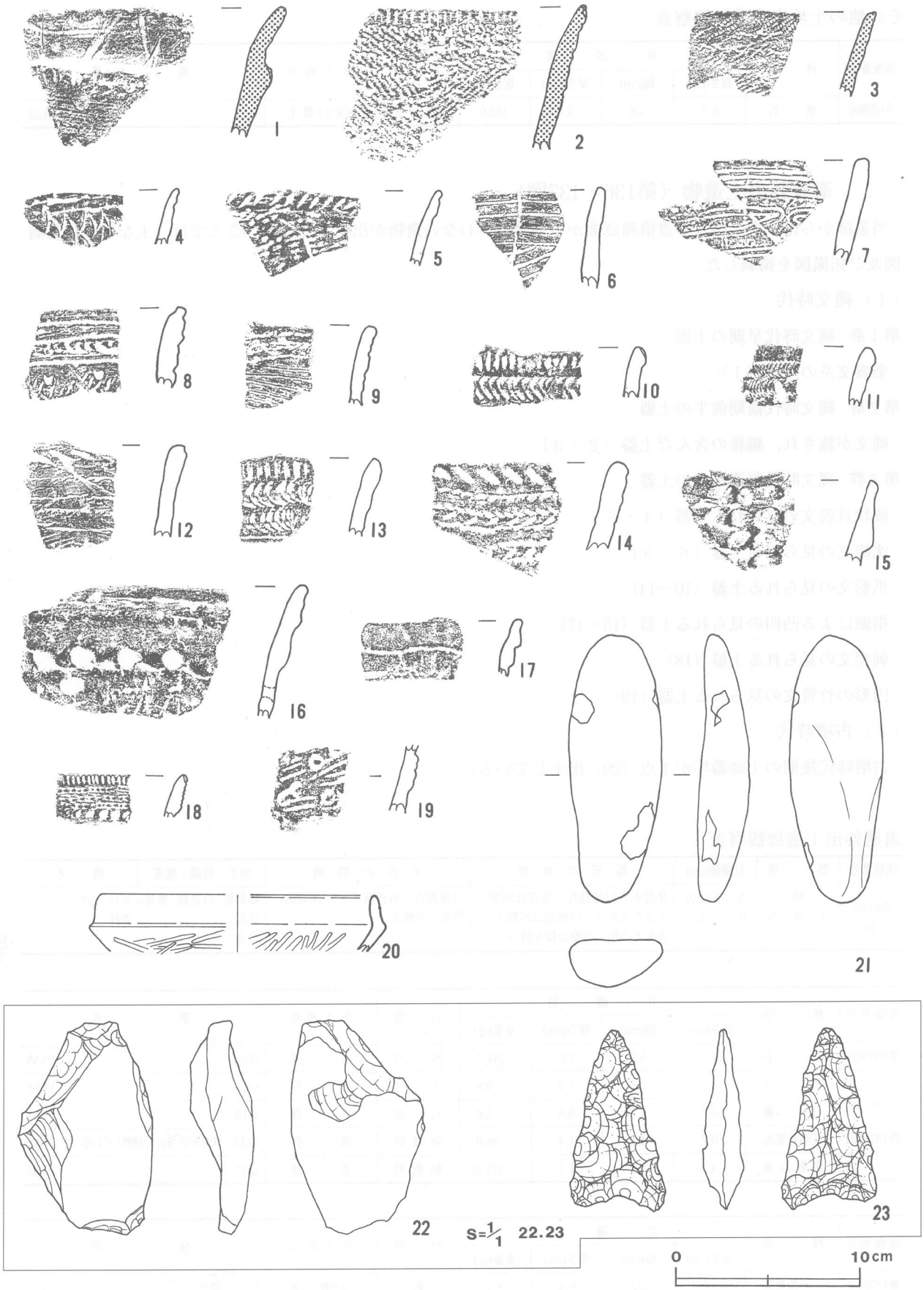
古墳時代後期の土師器坏が1点（20）出土している。

遺構外出土遺物観察表

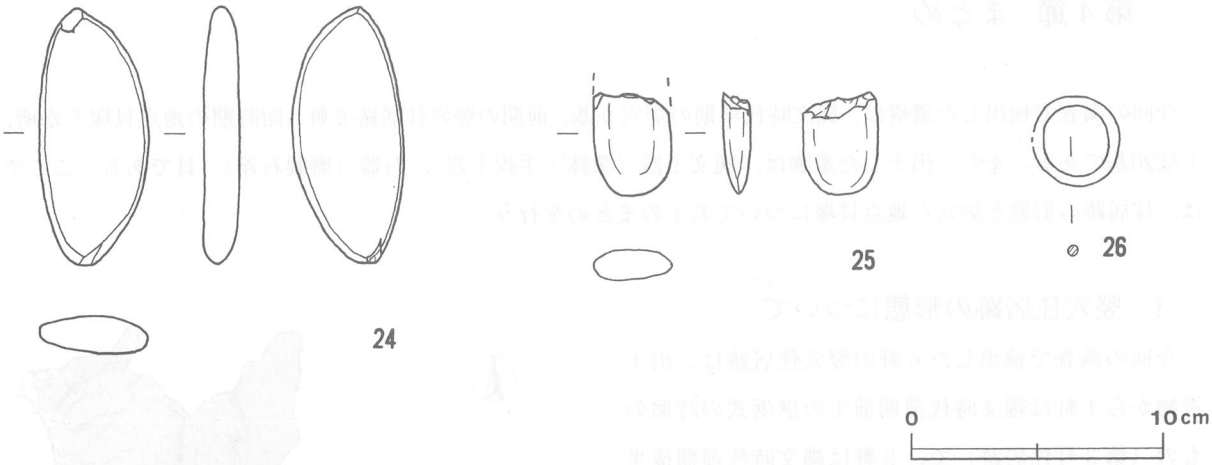
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 20	坏 土師器	A　[15.0] B　(3.1)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は内傾する。体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ磨き。	細砂粒・白色粒・雲母 橙色 普通	P15　10% 表採

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第136図21	敲石	14.7	5.3	2.9	248.7	砂岩	表採	Q13	PL53
22	剥片	3.8	2.5	1.2	9.8	メノウ	表採	Q14	PL53
23	石鏃	3.2	1.7	0.8	3.0	石英	表採	Q15	PL53
第137図24	不明石製品	10.2	4.3	1.4	98.0	粘板岩	表採	Q16　表面をていねいに研磨している。	PL53
25	磨製石斧	(4.0)	3.1	1.1	(24.4)	粘板岩	表採	Q17	PL53

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第137図26	不明鉄製品	3.5	3.5	0.4	8.4	鉄	SK23覆土上層	M1　環状	PL53



第136図　遺構外出土遺物(1)



第137図　遺構外出土遺物(2)

表15　三和貝塚住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)(長径×短径)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設					炉	覆土	出土遺物	備考 旧→新
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	B2e5	N－31°－E	隅丸方形	5.03×4.98	26～42	平坦	－	4	－	－	－	炉3	自然	縄文土器，礫	第3号地点貝塚あり，SK23(第5号地点貝塚)→本跡
2	B2d4	N－26°－W	不整方形	2.90×2.80	10～16	平坦	－	2	－	2	－	炉1	自然	縄文土器，礫	ＳＩ３→本跡
3	B2e4	N－37°－W	長方形	4.05×3.44	6～32	平坦	－	3	－	1	－	炉1	自然	縄文土器，磨石，礫	本跡→ＳＩ２
4	B2b7	N－4°－W	楕円形	5.74×5.15	20～30	平坦	－	8	－	－	－	－	人為	縄文土器，石錘，剥片	
5	B3f1	N－46°－W	楕円形	5.07×4.39	10～16	平坦	－	6	－	2	－	炉2	自然	縄文土器，磨石，礫	
6	A3j2	N－33°－E	不整円形	4.90×4.65	12～18	平坦	－	1	－	1	－	－	人為	縄文土器，磨石，礫	

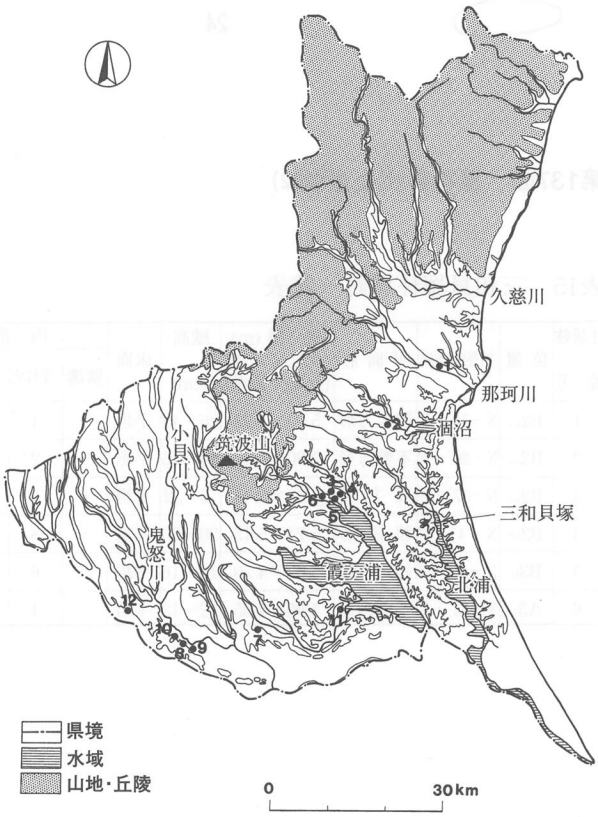
三和貝塚出土貝計測風景

第４節　まとめ

今回の調査で検出した遺構は，縄文時代早期の炉穴９基，前期の竪穴住居跡６軒，同時期の地点貝塚５か所，土坑20基である。また，出土した遺物は，縄文土器（深鉢・手捏土器），石器（磨製石斧），貝である。ここでは，住居跡の形態と炉穴と地点貝塚について若干のまとめを行う。

１　竪穴住居跡の形態について

今回の調査で検出した６軒の竪穴住居跡は，出土遺物から１軒は縄文時代前期前半の黒浜式の時期のもの（第３号住居跡）で，５軒は縄文時代前期後半の浮島式期の時期のもの（第１・２・４・５・６号住居跡）である。ここでは，浮島式期の住居跡について考えてみる。浮島式期の住居跡の確認例は，現在の所，12遺跡70数軒程であり，比較的少ない[(1)]。その分布を見てみると，利根川流域や霞ケ浦の北部や涸沼周辺に多く見られ，霞ケ浦と北浦の両湖に挟まれた行方台地では，これまで浮島式期の住居跡は確認されていなかった。そういう意味で三和貝塚の住居跡は，この地域の浮島式期の住居跡の初めての確認例である（第138図参照）。



第138図　茨城県内浮島式期住居跡確認遺跡分布図（註1の番号に対応する）

当遺跡の住居跡の平面形をみると，円形のもの（第４・５・６号住居跡）と方形のもの（第１・２号住居跡）とが見られる。また，規模は，３ｍ前後のもの（第２号住居跡）と５ｍ前後のもの（第１・４・５・６号住居跡）とに分けられる。これは，この時期の茨城県内での特徴である「平面形は，方形の系統と円形の系統に大別される。（中略）規模は，径５ｍ程度のものと３ｍ程度のものに大別されるが，前者は方形系統のものが多く，後者は円形系統のものが多いように思われる。これは，前期前半に円形系統が増加するものの，前期後半に至っても基本的には早期以来の方形の平面形に対する意識が強く残っていることが原因と考えられる[(2)]」と言う指摘がある。確かに当遺跡でも，平面形が円形のものと方形のものとが見られ，規模も３ｍ前後のものと５ｍ前後のものとに分けられる。しかし，規模と平面形との関係では，当遺跡においては，必ずしも「５ｍ前後のものに方形が多く，３ｍ前後のものに円形のものが多い」と言う指摘は当てはまらない。

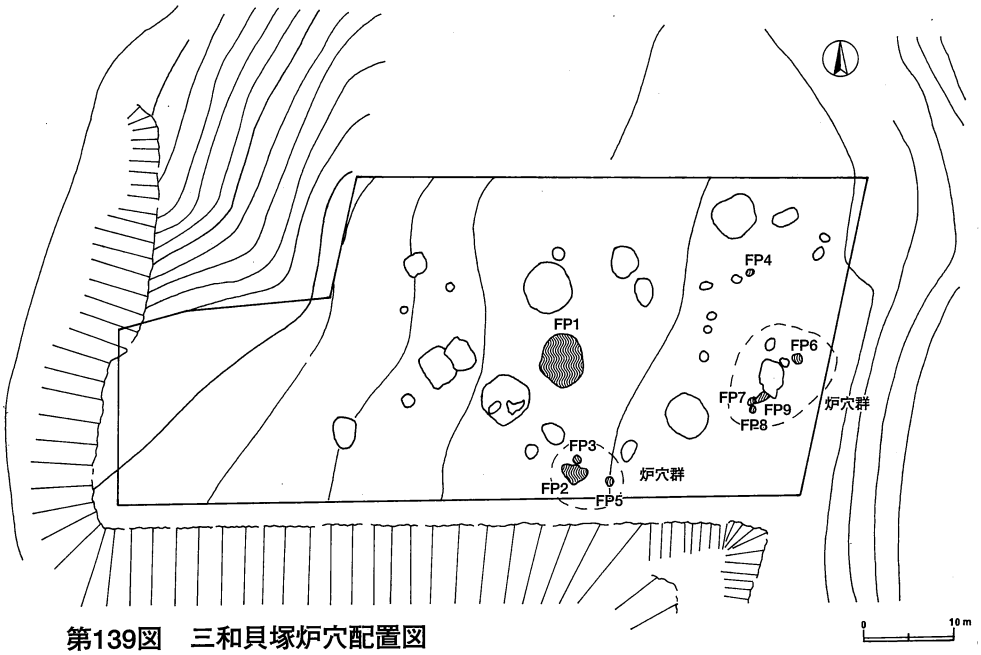
柱穴は，２本から８本まで見られ様々であるが，その中で主柱穴と考えられるものも１本～８本まで見られる。主柱穴の配列は，規則性の見られないものが多いが，炉跡を囲むように確認されるもの（第５号住居跡）や円形に回るもの（第４号住居跡）や多分中央に方形に並ぶもの（第１号住居跡）も見られる。

炉は，付設されているもの（第１・２・５号住居跡）と付設されていないもの（第４・６号住居跡）

とが見られ，付設されているものは，すべて地床炉である。炉の数は，１基のみのもの（第２号住居跡）と複数あるもの（第１・５号住居跡）とがある。炉の位置は，床面の中央部に位置するもの（第２・５号住居跡）と中央部から片寄った位置にあるもの（第１・４号住居跡）とが見られる。

2　炉穴について

今回の調査で，炉穴９基を検出した。炉穴と同じ時期の住居跡は確認されなかった。炉穴は，「北は青森県から，南は鹿児島県に至るまで検出されているが，その中心が関東地方にあることは近年の資料増加をみても明らかである。とくに，現在の茨城県南部・千葉県・埼玉県・東京都・神奈川県といった南関東は分布密度が極めて高い[3]」との斎藤進氏の指摘があるように，茨城県においても，100を超す遺跡から炉穴が確認されている。町内でも，菖蒲沢遺跡[4]から５基の炉穴，今山遺跡[5]から２基の炉穴が確認されている。当遺跡の炉穴を，平面形と炉床の位置の２点から，以下のように分類した[6]。



第139図　三和貝塚炉穴配置図

平面形
- 楕円形・・・・・Ⅰ類
- 円　形・・・・・Ⅱ類
- 不定形・・・・・Ⅲ類
- 双円形・・・・・Ⅳ類

炉床
- 片寄っている・・・・・・・A類
- 中央部・・・・・・・・・・B類
- ２か所以上あるもの・・・・C類
- ほぼ全面焼土・・・・・・・D類

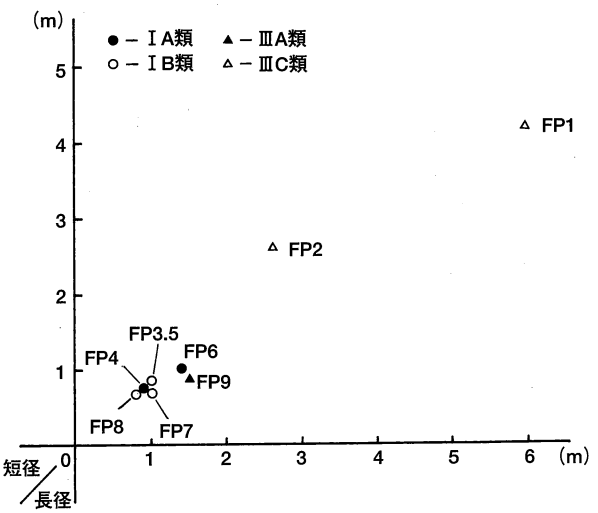
上記の基準により分類すると，以下のようになる。

ⅠA・・・第４・６号炉穴

ⅠB・・・第３・５・７・８号炉穴

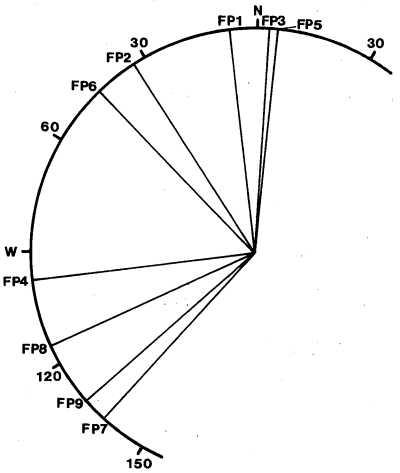
ⅢA・・・第９号炉穴

ⅢC・・・第１・２号炉穴



第140図　三和貝塚炉穴の規模分類

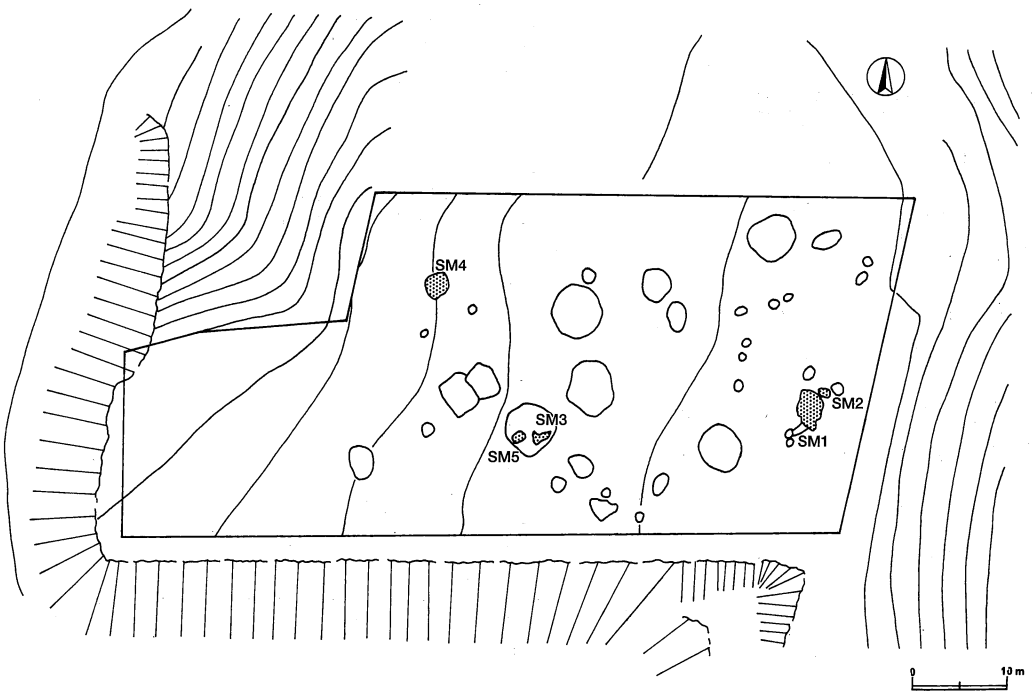
平面形が楕円形や不定形を示すⅠ・Ⅲ類が見られ，その中でもⅠB類が多く見られる。ⅢC類の第1号炉穴は炉床を2か所，第2号炉穴は炉床を4か所持っているが，その断面を観察すると，1つの炉床だけが長期間使用された痕跡は見られない。第1号炉穴は，通常の炉穴とは規模も形態も違うので炉穴でない可能性も考えられる。複数炉床を持つものは，炉穴としての規模は大きい。当遺跡における炉穴の一般的な規模は，1m前後の楕円形か不定形と言える（第140図参照）。炉床が片寄っているものは，必ずしも北側に寄らず，南側に広い空間を持ち得ない。これは，地形的制約による可能性が高い。調査エリア外の北・西側が土取りされているので，地形的な分析はしがたいが，調査エリア内での等高線の状況をみてみると，南北に等高線が入り，北西方向と南東方向に傾斜していることによると思われる。また，炉穴の主軸方向でみると，この等高線と直交あるいは交わるような方向に主軸方向を持つ場合が多い（第141図参照）。分布という観点でみると，第1・4号炉穴は単独の炉穴で，その他は炉穴群（第2・3・5号炉穴と第6・7・8・9号炉穴の二つの炉穴群）を構成している炉穴であり，このように炉穴群を構成する場合が多いようである（第139図参照）[7]。確認された位置は，台地全体から考えれば突端部に位置していると言える。これは，炉穴が火熱を利用する遺構であるので，熱効率や風通しを意識して，台地上における構築位置を考えたことによるものであろう。



第141図　三和貝塚炉穴主軸方向

3　地点貝塚について

貝塚の数を県別に見ると，茨城県は千葉県に次いで第2位の数である。茨城県の貝塚の総数は，『茨城県遺跡地図』[8]によると，現在所在不明のものや湮滅したものなどを含めて400か所程が知られている。県内全域を



第142図　三和貝塚地点貝塚配置図

見れば，霞ケ浦・北浦・外浪逆浦沿岸部に分布する貝塚は230か所程で全体の６割を占めている。[9]

町内の貝塚は，『北浦村文化財地図』[10]によれば15か所程が知られている。既に，歴史的環境の中で述べているが，ここで再び，当町内の貝塚研究の動向を年代を追って見てみたい。

昭和29年７月に，清水潤三氏によって森戸貝塚とも呼ばれる鬼越貝塚が調査され，後期の遺跡であることが判明している。[11]昭和47年７月に，北浦村教育委員会によって鶴ケ井貝塚が調査され，中期から後期の遺跡であることが判明している。[12]昭和55年には茨城県立歴史館の学術調査『県内貝塚における動物遺存体の研究』[13]によって今山貝塚と成田早川貝塚が踏査されている。前者は，加曾利Ｅ式期に形成された中期の貝塚である。大形のハマグリ・シオフキ・アカニシを主とする純鹹貝塚であり，サメ・スズキ・アジ・イワシ・エイなどの魚類も出土している。後者は，加曾利Ｂ式期の土器を中心に，堀之内式や安行１・２式期の土器も出土する，後期中葉を中心とし，後期にかけての貝塚である。主体貝種はハマグリで，以下，シオフキ・アカニシ・オキシジミ・カガミガイ等が続く。サメ・クロダイ・スズキ・ハゼ・フグ・エイ・ウナギ等の魚類，シカ・イノシシ等の獣類も出土している。以上が北浦町の貝塚の研究史である。

今回の調査で，地点貝塚５か所を検出した。時期は，集落と同じ縄文時代前期後半の浮島式の時期である。この時期の貝塚は，本町周辺では，鹿嶋市木滝貝塚[14]，玉造町の若海貝塚[15]等がある。確認できた地点貝塚の貝は土と一緒に取り上げ，１mmのメッシュの篩で分別したが，確認できたのは，斧足類（二枚貝）10種，腹足類（巻貝）４種の合計14種（表16参照）の貝[16]のみで，獣骨・魚骨は確認できなかった。

表16　各地点貝塚出土貝種

貝種名 / 地点貝塚番号 / 組成比(%)	斧足類（二枚貝）										腹足類（巻貝）				
	ハマグリ	シオフキ	オキシジミ	アサリ	サルボウ	オオノガイ	カガミガイ	カキ	ハイガイ	ヤマトシジミ	ツメタガイ	アカニシ	ウミニナ	ヘナタリ	
1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	93.1	0.9	1.3	0.8	0.1	−	1.4	0.8	0.1	−	0.2	1.2	0.1	−	100
2	○	○	○	○				○				○	○		
	96.0	1.9	0.2	1.1	0	0	0	0.1	0	0	0	0.4	0.3		100
3	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	
	89.1	6.0	0.3	0.7	0.2	−	0.2	2.3	0	0	0.2	0.9	0.1	−	100
4	○	○	○	○				○	○	○		○	○		
	82.1	1.3	0.3	0.4	0	0	0	0.9	1.1	0.6	0	13.3	−		100
5	○	○	○	○			○	○			○	○	○		
	82.5	2.5	2.6	0.4	0	0	5.5	2.0	0	0	2.1	1.5	0.6		100

第１号地点貝塚

出土した貝類は斧足類（二枚貝）10種，腹足類（巻貝）４種が同定された。貝種別の出土率の最も高いのはハマグリで，全体の93.1％を占め，殻長2.5～3.0cmのものが多く，最大は8.2cmである。次いでカガミガイ（1.4％）・オキシジミ（1.3％）・アカニシ（1.2％）である。他の貝種としては，シオフキ・アサリ・カキ・ツメタガイ・サルボウ・ウミニナ・ハイガイ・オオノガイ・ヤマトシジミ・ヘナタリが１％以下の低率で見られる。

第２号地点貝塚

出土した貝類は斧足類（二枚貝）５種，腹足類（巻貝）２種が同定された。貝種別の出土率の最も高いのはハマグリで，全体の96.0%を占め，殻長2.5～3.0㎝のものが多く，最大は5.4㎝である。次いでシオフキ（1.9%）・アサリ（1.1%）である。他の貝種としては，アカニシ・ウミニナ・オキシジミ・カキが１%以下の低率で見られる。

第３号地点貝塚

出土した貝類は斧足類（二枚貝）８種，腹足類（巻貝）４種が同定された。貝種別の出土率の最も高いのはハマグリで，全体の89.1%を占め，殻長2.5～3.0㎝のものが多く，最大は7.4cmである。次いでシオフキ（6.0%）・カキ（2.3%）である。他の貝種としては，アカニシ・アサリ・オキシジミ・サルボウ・カガミガイ・ツメタガイ・ウミニナ・オオノガイ・ヘナタリが１%以下の低率で見られる。

第４号地点貝塚

出土した貝類は斧足類（二枚貝）７種，腹足類（巻貝）２種が同定された。貝種別の出土率の最も高いのはハマグリで，全体の82.1%を占め，殻長2.5～3.0㎝のものが多く，最大は5.2㎝である。次いでアカニシ（13.3%）・シオフキ（1.3%）・ハイガイ（1.1%）である。他の貝種としては，カキ・ヤマトシジミ・アサリ・オキシジミ・ウミニナが１%以下の低率で見られる。

第５号地点貝塚

出土した貝類は斧足類（二枚貝）７種，腹足類（巻貝）３種が同定された。貝種別の出土率の最も高いのはハマグリで，全体の82.5%を占め，殻長2.0～2.5㎝のものが多く，最大は4.4cmである。次いでカガミガイ（5.5%）・オキシジミ（2.6%）・シオフキ（2.5%）・ツメタガイ（2.1%）・カキ（2.0%）・アカニシ（1.5%）である。他の貝種としては，ウミニナ・アサリが１%以下の低率で見られる。

以上から，ハマグリは殻長2.0～3.0㎝のものが中心で，非常に小型のものが大多数である。また，表16から分かるように，５か所の地点貝塚から共通して出土したものは，ハマグリ・シオフキ・オキシジミ・アサリ・アカニシ・ウミニナ・カキの７種で内湾浅海の砂底あるいは砂泥底に生息する貝種であり，このことから三和貝塚の周辺には当時砂底，砂泥底の内湾が大きく広がっていたことが想定できる。

《註》

(1)茨城県教育財団縄文時代研究班「茨城県における縄文時代前期後半の住居跡の形態について」『研究ノート』３号1994年６月によれば８遺跡58軒の集成がなされているが，これに若干の追加をする。

ひたちなか市①遠原貝塚１軒，茨城町②奥谷遺跡１軒，石岡市③大谷津Ａ１軒・④大谷津Ｂ遺跡４軒・⑤外山遺跡31軒・⑥新池台遺跡14軒，龍ヶ崎市⑦町田遺跡５軒，取手市⑧向山貝塚１軒・⑨甚五郎崎遺跡１軒，谷和原村⑩原遺跡１軒，江戸崎町⑪中佐倉貝塚10数軒，岩井市⑫高崎貝塚３軒等である。

・川崎純徳他『遠原貝塚調査報告書』勝田市教育委員会　1980年

・茨城県教育財団「一般国道６号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書　奥谷遺跡・小鶴遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集　1989年３月

・茨城県教育財団「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　大谷津Ａ遺跡・大谷津Ｂ遺跡・外山遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』XIII　1982年３月

・茨城県教育財団「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書２　新池台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第17集　1983年３月
・茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書９　町田遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』第25集　1984年３月
・西村正衛「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚」『学術研究』16　早稲田大学　1967年
・茨城県教育財団「取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　甚五郎崎遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』第107集　1996年３月
・山武考古学研究所『山武考古学研究所年報』No.11　1993年11月
・茨城県教育財団「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集　1994年３月

(2)註１茨城県教育財団縄文時代研究班の論文。また，住居跡の分析方法もこの論文に拠るところが大きい。

(3)斎藤進「炉穴の時代」『研究論集』Ｘ　東京都埋蔵文化財センター　1991年３月
(4)菖蒲沢遺跡調査会『菖蒲沢遺跡調査報告書』　1991年11月
(5)山田地区遺跡発掘調査会『今山遺跡発掘調査報告書』　1990年３月

(6)茨城県教育財団「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１　奥山Ｂ遺跡・奥山下根遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第29集　1985年３月　炉穴については，この報告書における分類方法を参考にした。

(7)遺構の主軸方向は北を中心に考えているが，この図における主軸方向は，三和貝塚が南東方向に傾斜していることから，この方向を風向きと仮定し，東に30°以上振れている炉穴の主軸方向を，180°西に振って主軸方向を考え直したことに基づいたものである。

(8)茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』1987年３月
(9)茨城県立歴史館『霞ケ浦の貝塚文化』1987年10月
(10)北浦村教育委員会『北浦村文化財地図』1986年８月
(11)清水潤三「森戸貝塚」『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』1979年
(12)北浦村教育委員会『北浦村鶴ケ居貝塚発掘調査報告』1972年
(13)茨城県歴史館『県内貝塚における動物遺存体の研究(3)』1981年
(14)森下松寿「木滝貝塚，北台遺跡分布確認調査報告」『文化財だより』第五号　1977年
(15)清水潤三「若海貝塚」『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』1979年

(16)貝種の分類は，江坂輝弥『化石の知識－貝塚の貝－』東京美術考古学シリーズ⑨　1983年12月による。

炭焼遺跡
住居跡
掘り込み作業

三和貝塚
除雪作業

成田古墳群
墳丘
測量作業

第6章　成　田　古　墳　群

第1節　遺跡の概要

成田古墳群は，北浦町の北東部に位置し，北浦西岸の行方台地の縁辺部に立地している。台地は，標高32～35mで，北浦西岸の低地面との比高は27～30mである。調査区域は東西165m，南北150m，面積12,156m²で，現況は畑である。当遺跡は，前述の札場古墳群同様埴輪は1片も出土しなかったので，埴輪の消滅した後の古墳群と考えられる。

今回の調査では，古墳時代中期初頭の竪穴住居跡1軒，古墳時代後期の古墳7基，土坑21基，埋設遺構1基，土塁状遺構1条，堀・溝4条を検出した。

遺物は，縄文土器片，土師器（坏・坩・高坏・手捏土器），須恵器（長頸瓶・横瓶・甕・坏），石製品（勾玉・紡錘車），金属製品（壺鐙・鉸具・杏葉・轡・鉄鏃・鉄斧），ガラス玉等が出土している。

第2節　基本層序

成田古墳群においては，調査区の北西部のB2$_{g6}$区にテストピットを設定し，第143図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は，厚さ18～28cmで，暗褐色土の耕作土である。

第2層は，厚さ16～20cmで，しまりのつよい褐色のソフトローム層である。

第3層は，厚さ16～18cmで，褐色のブラックバンド層である。

第4層は，厚さ18～20cmで，褐色のソフトローム層である。

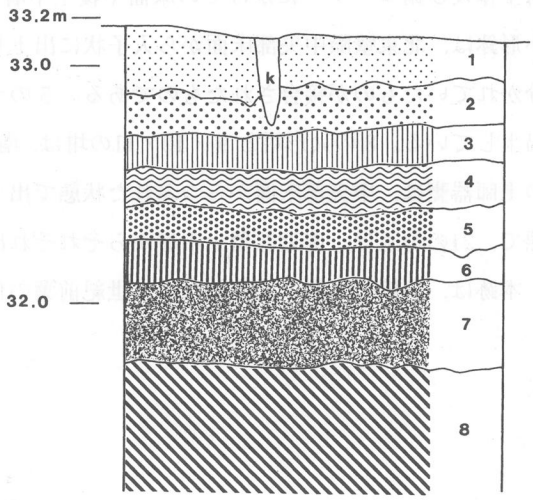
第5層は，厚さ14～20cmで，しまりのつよい明褐色のハードローム層への漸移層である。

第6層は，厚さ10～18cmで，しまりのつよい明褐色のハードローム層である。

第7層は，厚さ30～38cmで，粘性もしまりも6層よりもつよいハードローム層である。

第8層は，粘土ブロックを少量含む粘性の極めてつよいハードローム層である。

遺構は，第2層上面で確認できた。



第143図　成田古墳群基本土層図

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査では，古墳時代中期初頭の竪穴住居跡1軒を検出した。この住居跡の特徴や遺物について記載する。

第1号住居跡（第144図，PL55）

位置　調査区の中央部，C3i2区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の大部分は，土塁状遺構の下から確認されている。

規模と平面形　長軸6.90m，短軸6.85mの方形である。

主軸方向　N－61°－W

壁　壁高は32～40cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平担であるが，踏み固められた面は認められない。

炉　P_3・P_4を結んだ直線上に確認している。平面形は，長径76cm，短径70cmの円形で，床面をわずかに掘り凹めた地床炉である。炉床面は赤変している。

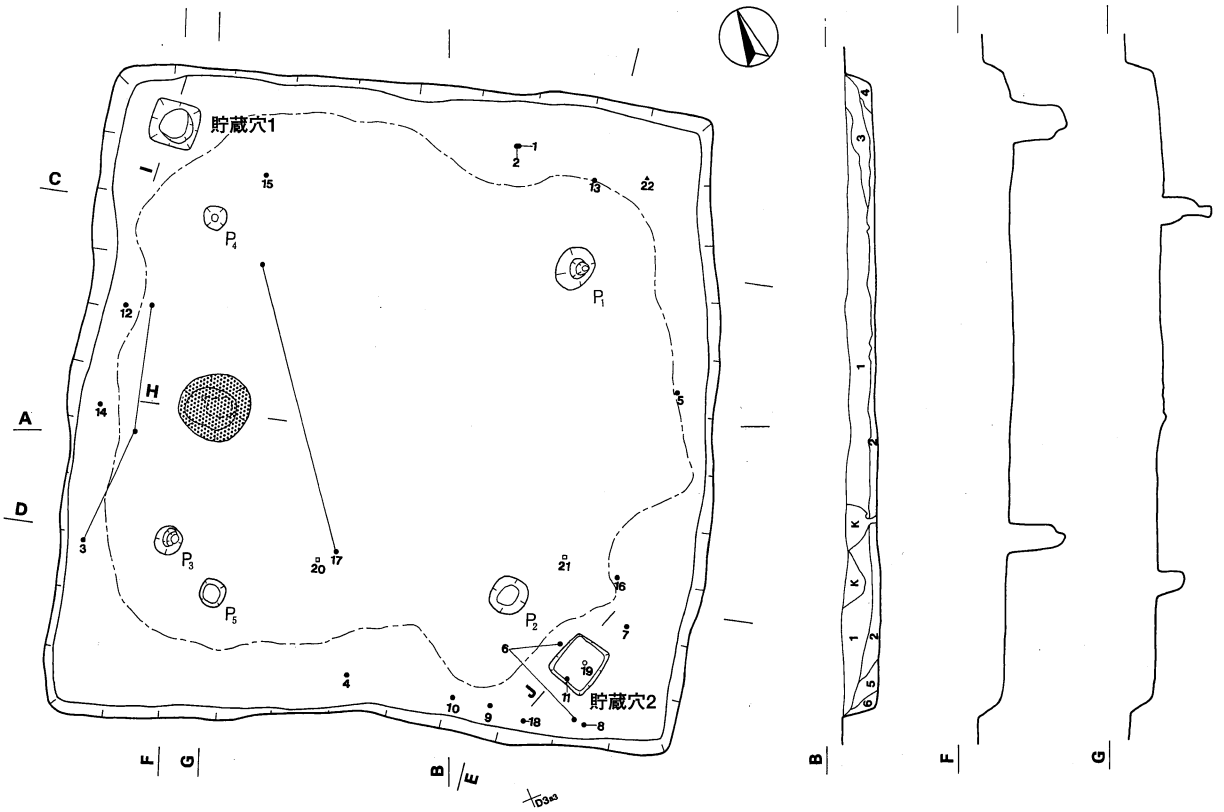
ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は，径26～48cmの円形，深さ52～68cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P_5は，径28cmの円形で，深さ30cmである。性格は不明であるが，補助柱穴の可能性も考えられる。

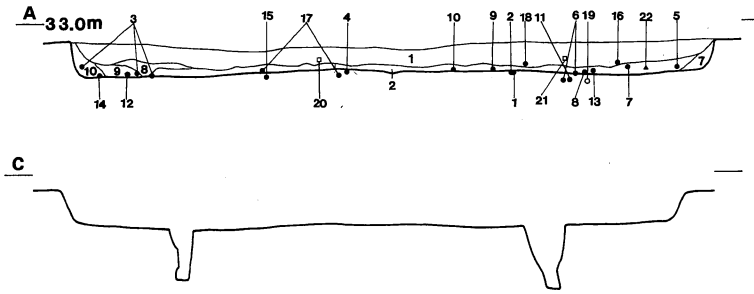
貯蔵穴　北コーナー（貯蔵穴1）と南コーナー（貯蔵穴2）とに付設されている。貯蔵穴1は，長軸52cm，短軸48cmの方形で，深さ55cmである。断面形は「U」字状をしている。底面は皿状で，壁は急激に外傾して立ち上がる。貯蔵穴2は，長軸54cm，短軸48cmの方形で，深さ5cmである。断面形は逆台形をしている。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がる。きわめて浅いので貯蔵穴でない可能性があるが，遺物が出土しているので貯蔵穴と判断した。

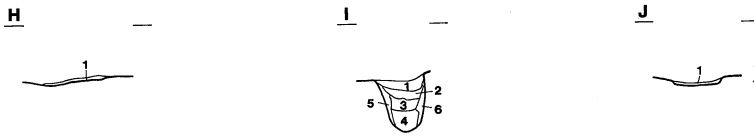
覆土　3層からなり，レンズ状の堆積を示す自然堆積である。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の土師器片305片（椀・坩片28片，高坏片11片，小鉢片3片，甕片263片）が，遺構全体及び南コーナーにかけての床面や覆土中層から下層にかけて出土している。第145図1・2の土師器小形鉢は，北東壁際中央部床面から入子状に出土している。3の土師器高坏は，北西壁際で坏部と脚部とが分かれていたものが接合されたものである。5の土師器高坏の坏部は，南東壁際覆土下層から逆位の状態で出土している。8の大形坩と9・10・11の坩は，南コーナー床面から横位の状態でそれぞれ出土している。18の土師器甕は，中央部床面からつぶれた状態で出土している。20の紡錘車は，中央部覆土中層から正位の状態で，21の勾玉は，南東部覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，遺構の形態と遺物等から5世紀前葉の住居跡と考えられる。







第１号住居跡土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子中量
5　暗褐色　ローム粒子少量
6　褐　色　ローム粒子中量
7　褐　色　ローム粒子多量
8　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，炭化材微量
10　褐　色　ローム粒子中量

炉跡土層解説

1　にぶい褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック中量，炭化物微量

貯蔵穴１土層解説

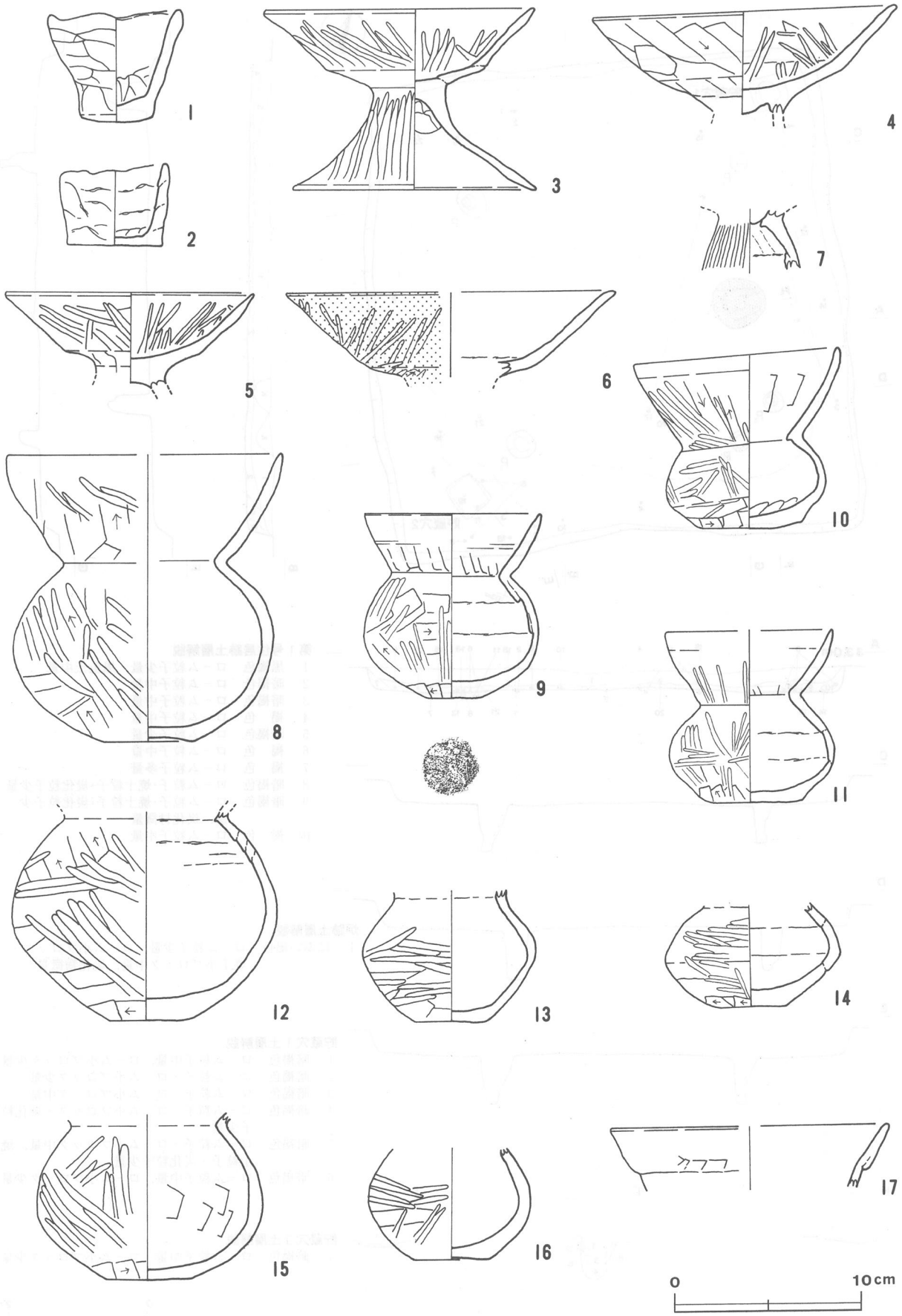
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

貯蔵穴２土層解説

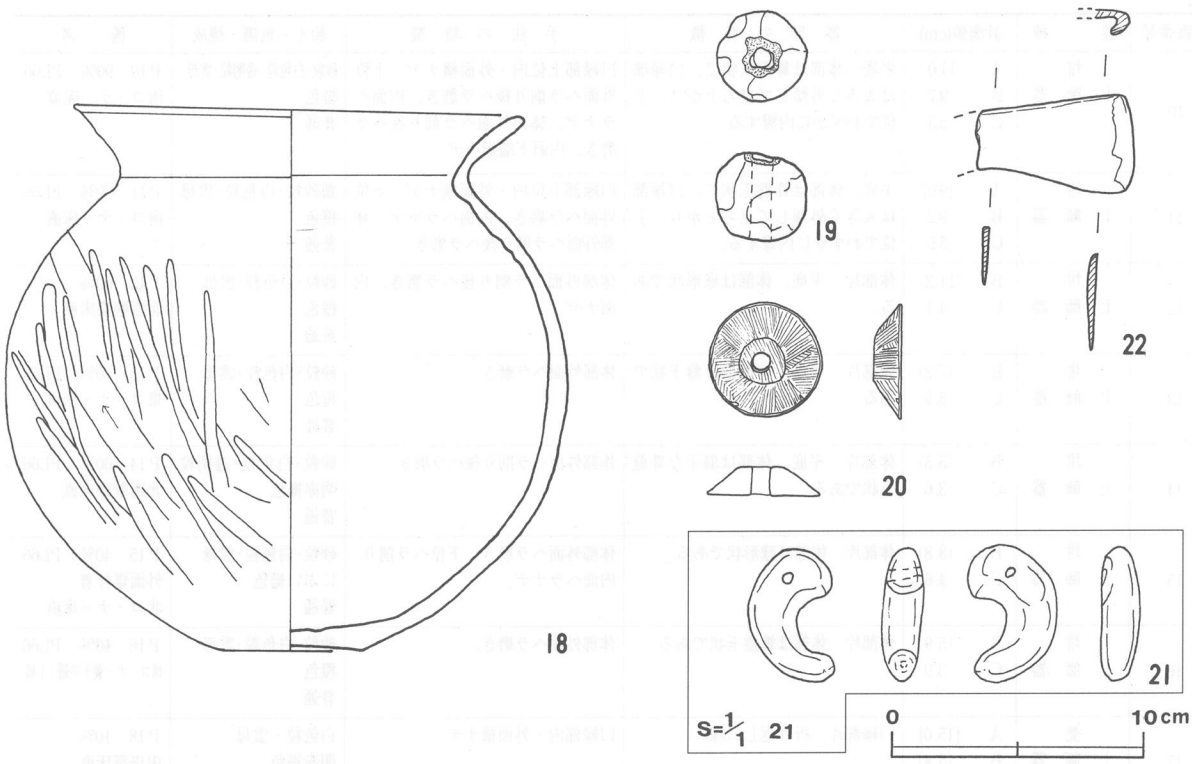
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

0　2m

第144図　第１号住居跡



第145図　第１号住居跡出土遺物(1)



第146図　第１号住居跡出土遺物(2)

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 1	小形鉢 土師器	A 7.3 B 6.0 C 4.0	やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面指ナデ。	砂粒･白色粒･雲母 橙色 普通	P１ 90% PL66 中央部床直
2	小形鉢 土師器	A 5.6 B 4.4 C 5.1	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面指ナデ。内・外面輪積み痕明瞭に残る。	砂粒･白色粒･雲母 橙色 普通	P２ 80% PL66 中央部床直
3	高坏 土師器	A 14.5 B 9.7 D 13.0 E 5.5	脚部は「ハ」の字状に大きく開く。坏体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部との境に稜をもつ。	坏口縁部から体部内・外面ヘラ磨き脚部外面ヘラ磨き，内面指ナデ。	砂粒･白色粒･雲母 橙色 普通	P３ 60% PL66 外面煤付着 北西壁際床直
4	高坏 土師器	A 16.4 B (5.9)	坏部片。坏体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部との境に稜をもつ。	坏口縁部から体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き，外面下位ヘラナデ。	砂粒･白色粒･雲母 明赤褐色 普通	P４ 50% PL66 南西壁際床直
5	高坏 土師器	A 13.4 B (5.0)	坏部片。坏体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部との境に稜をもつ。	口縁部から体部内・外面ヘラ磨き。	砂粒･白色粒･透明粒･雲母 にぶい橙色 普通	P５ 50% PL66 外面煤付着 覆土下層（２層）
6	高坏 土師器	A [17.6] B (4.5)	坏部片。坏体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部との境に弱い稜をもつ。	口縁部から体部外面ヘラ磨き。外面赤彩。	砂粒・白色粒 橙色 普通	P６ 30% PL66 内面摩滅 南コーナー床直
7	高坏 土師器	B (3.3)	脚部片。脚部は円筒状である。	脚部外面ヘラ磨き，内面指ナデ。	白色粒・雲母 明赤褐色 普通	P７ 10% 南コーナー覆土下層
8	大形坩 土師器	A [14.8] B 15.4 C 4.7	やや凹んで平底。体部は球形状で，口縁部は大きく外傾して立ち上がり，上位で内彎する。	口縁部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒･白色粒･雲母 赤褐色 普通	P８ 70% PL66 南コーナー床直
9	坩 土師器	A 9.5 B 9.9 C 3.0	平底。体部は球形状で，口縁部は大きく外傾して立ち上がり，上位でわずかに内彎する。	口縁部上位内・外面横ナデ，下位内・外面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	白色粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P９ 100% PL66 南コーナー床直

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	坩 土師器	A 11.0 B 9.7 C 5.3	平底。体部は算盤玉状で，口縁部は大きく外傾して立ち上がり，上位でわずかに内彎する。	口縁部上位内・外面横ナデ，下位外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面下端指ナデ。	砂粒・白色粒・透明粒・雲母 橙色 普通	P10 90% PL66 南コーナー床直
11	坩 土師器	A [9.0] B 9.2 C 5.5	平底。体部は算盤玉状で，口縁部は大きく外傾して立ち上がり，上位でわずかに内彎する。	口縁部上位内・外面横ナデ，下位外面ヘラ磨き，内面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	細砂粒・白色粒・雲母 橙色 普通	P11 90% PL66 南コーナー床直
12	坩 土師器	B (11.2) C 4.1	体部片。平底。体部は球形状である。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・白色粒・雲母 橙色 普通	P12 60% 北西壁際床直
13	坩 土師器	B (7.2) C 3.5	体部片。平底。体部は算盤玉状である。	体部外面ヘラ磨き。	砂粒・白色粒・雲母 橙色 普通	P13 60% PL66 東コーナー床直
14	坩 土師器	B (5.5) C 3.6	体部片。平底。体部は偏平な算盤玉状である。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒・白色粒・透明粒 明赤褐色 普通	P14 60% PL66 北西壁際床直
15	坩 土師器	B (8.8) C 4.6	体部片。体部は球形状である。	体部外面ヘラ磨き，下位ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・白色粒・雲母 にぶい褐色 普通	P15 40% PL66 外面煤付着 北コーナー床直
16	坩 土師器	B (5.9) C 3.9	体部片。体部は算盤玉状である。	体部外面ヘラ磨き。	砂粒・白色粒・雲母 橙色 普通	P16 40% PL66 南コーナー覆土中層(1層)
17	甕 土師器	A [15.0] B (3.4)	口縁部片。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。	白色粒・雲母 明赤褐色 普通	P18 10% 中央部床直
第146図 18	甕 土師器	A 18.1 B 21.3 C 6.0	平底。体部は球形状で，口縁部は頸部から「く」の字状に外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・白色粒・雲母 にぶい橙色 普通	P17 70% PL67 南コーナー覆土中層(1層)

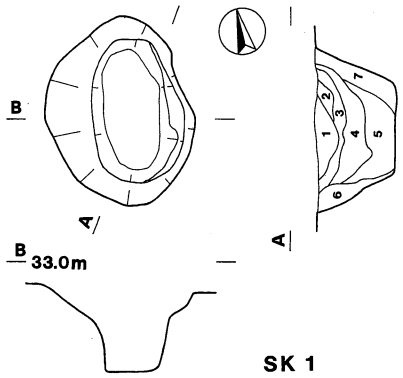
図版番号	種別	計測値(cm)			孔径(cm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第146図19	土玉	3.6	3.6	3.5	0.8	41.7	100	覆土中層	DP1 PL67

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第146図20	紡錘車	4.6	4.5	1.1	24.8	滑石	覆土中層	Q1孔径0.8cm表面をていねいに研磨している。 PL67
21	勾玉	1.8	1.2	0.6	1.4	滑石	覆土中層	Q2孔径0.1cm表面をていねいに研磨している。 PL67

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第146図22	鉄鎌	(6.2)	4.0	0.5	(22.9)	鉄	覆土中層	M1 曲刃鎌 PL67

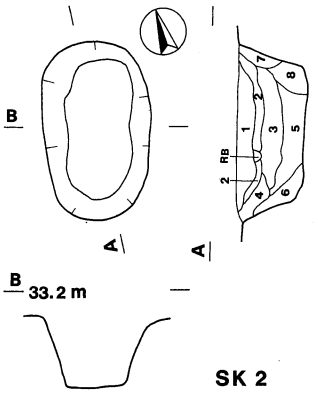
2 土坑

今回の調査では，土坑21基を検出した（SK 1 ～21）。時期や性格を明確にできた土坑はほとんどなかったので，以下，実測図と一覧表を掲載する。



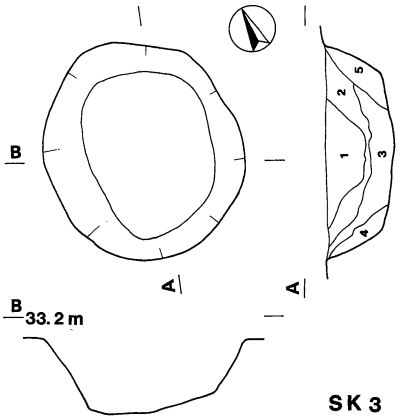
第1号土坑土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
3　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
6　明褐色　ローム粒子多量
7　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量



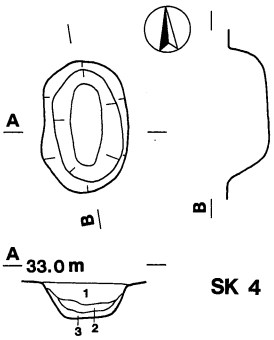
第2号土坑土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，黒色土多量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
6　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
7　明褐色　ローム粒子多量
8　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量



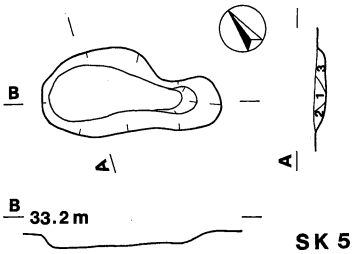
第3号土坑土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土多量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量



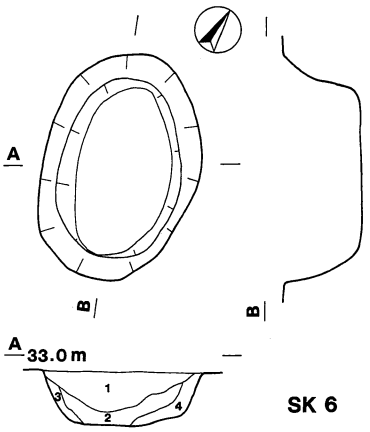
第4号土坑土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子少量



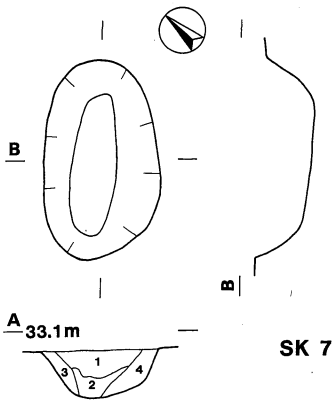
第5号土坑土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量



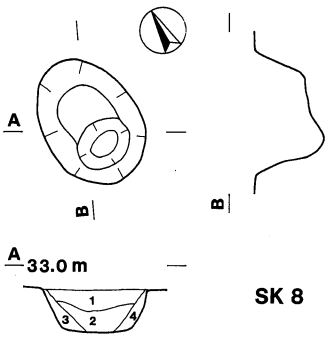
第6号土坑土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量
4　褐　色　ローム粒子多量



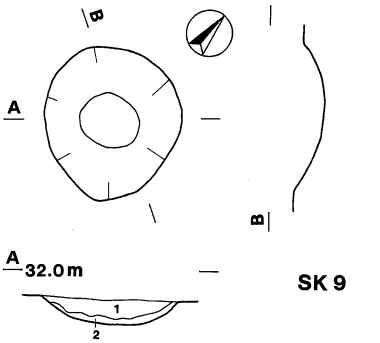
第7号土坑土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子多量



第8号土坑土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
3　褐　色　ローム粒子多量
4　褐　色　ローム粒子多量

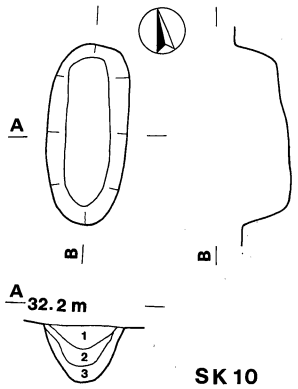


第9号土坑土層解説

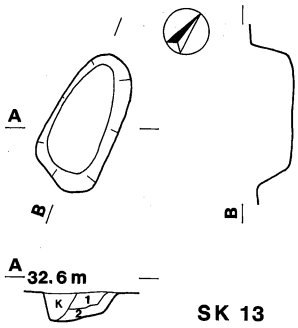
1　褐色　ローム粒子中量
2　褐色　ローム粒子中量

0　2m

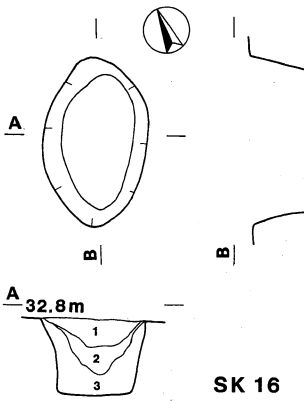
第147図　土坑(1)



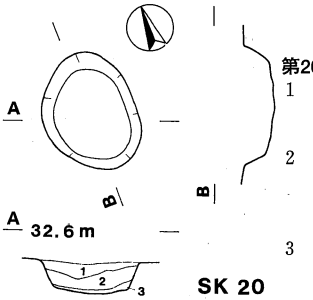
第10号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量



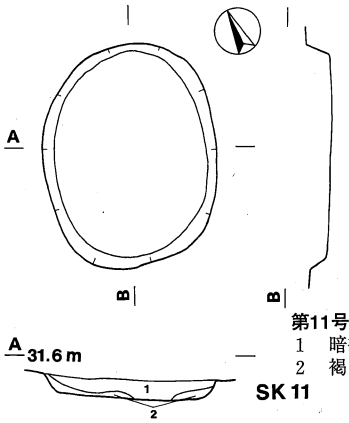
第13号土坑土層解説
1　灰褐色　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子中量



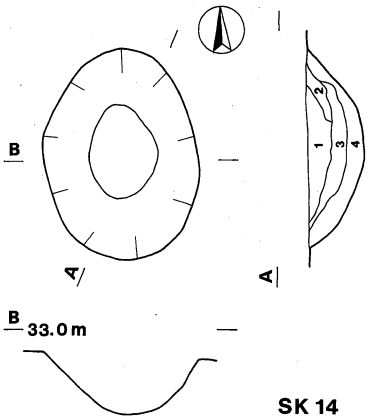
第16号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
3　暗褐色　ローム粒子中量



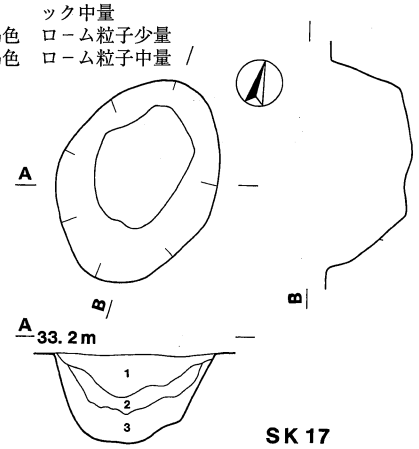
第20号土坑土層解説
1　黒暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物中量
3　暗褐色　ローム粒子中量



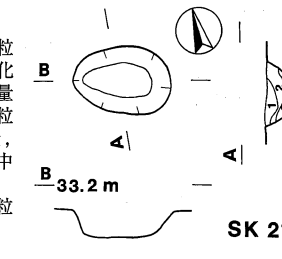
第11号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量



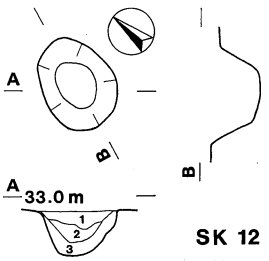
第14号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック中量
2　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック中量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子中量



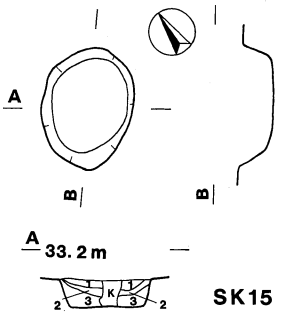
第17号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子中量



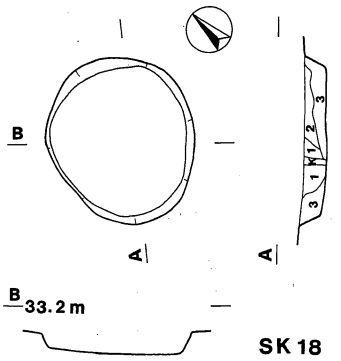
第21号土坑土層解説
1　黒　色　ローム粒子少量，黒色土多量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子中量



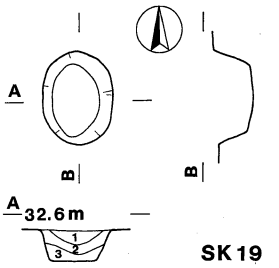
第12号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量



第15号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・炭化物中量，焼土小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物中量
3　にぶい褐色　ローム粒子多量



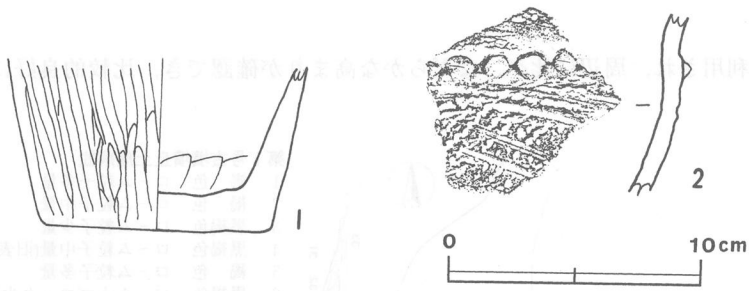
第18号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量
3　褐　色　ローム粒子中量



第19号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム粒子中量

0　2m

第148図　土坑(2)



第149図　第６号土坑出土遺物

第６号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第149図 1	深　鉢 縄文土器	B　(6.8) C　9.0	底部から胴部片。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面ヘラ磨き，内面指ナデ。	細砂粒・白色粒・雲母 橙色　普通	P 19　30%

第149図２(TP２）は縄文土器の胴部片で，隆帯上に指頭による押圧が施されている。

表17　成田古墳群土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
1	$C4_{a8}$	N－17°－W	楕円形	2.00×1.56	84	外傾	平坦	自然・人為		陥し穴の可能性あり	147
2	$C4_{b6}$	N－18°－E	楕円形	1.90×1.10	62	外傾	平坦	人為			147
3	$B4_{j6}$	－	円形	2.32×2.20	74	外傾	皿状	自然	縄文土器片		147
4	$C4_{e2}$	N－２°－W	楕円形	1.38×0.90	38	外傾	平坦	自然			147
5	$C4_{c2}$	N－47°－W	不整楕円形	1.90×0.96	13	外傾	平坦	自然			147
6	$C4_{e3}$	N－23°－W	楕円形	2.42×1.66	82	外傾	平坦	自然	縄文土器（深鉢）		147
7	$C4_{f1}$	N－51°－E	楕円形	2.12×1.22	50	外傾	皿状	自然		底面にピット状の落ち込みあり	147
8	$C4_{g4}$	N－７°－W	楕円形	1.42×1.02	58	外傾	皿状	自然			147
9	$D4_{b9}$	N－36°－W	楕円形	1.62×1.42	26	外傾	皿状	自然			147
10	$D4_{e6}$	N－14°－E	楕円形	1.92×0.86	61	外傾	皿状	自然			148
11	$D4_{j5}$	N－24°－E	楕円形	2.38×1.84	22	外傾	平坦	自然			148
12	$E3_{i8}$	N－24°－E	楕円形	1.02×0.80	47	外傾	皿状	自然			148
13	$D4_{g2}$	N－12°－W	楕円形	1.28×0.72	30	外傾	平坦	自然			148
14	$D3_{d9}$	N－２°－W	楕円形	2.26×1.63	60	外傾	皿状	自然			148
15	$D3_{c3}$	N－41°－E	楕円形	1.28×0.98	34	外傾	平坦	自然			148
16	$D3_{h0}$	N－20°－E	楕円形	1.81×1.11	80	外傾	平坦	自然			148
17	$D3_{g4}$	N－５°－W	楕円形	2.20×1.68	94	外傾	皿状	自然			148
18	$D3_{d4}$	N－23°－E	楕円形	1.80×1.56	24	垂直	平坦	人為			148
19	$E3_{a0}$	N－11°－W	楕円形	1.00×0.76	33	外傾	平坦	自然			148
20	$E3_{b0}$	N－５°－W	楕円形	1.28×0.98	31	外傾	皿状	自然			148
21	$C3_{h9}$	N－71°－W	楕円形	1.06×0.72	26	外傾	皿状	自然			148

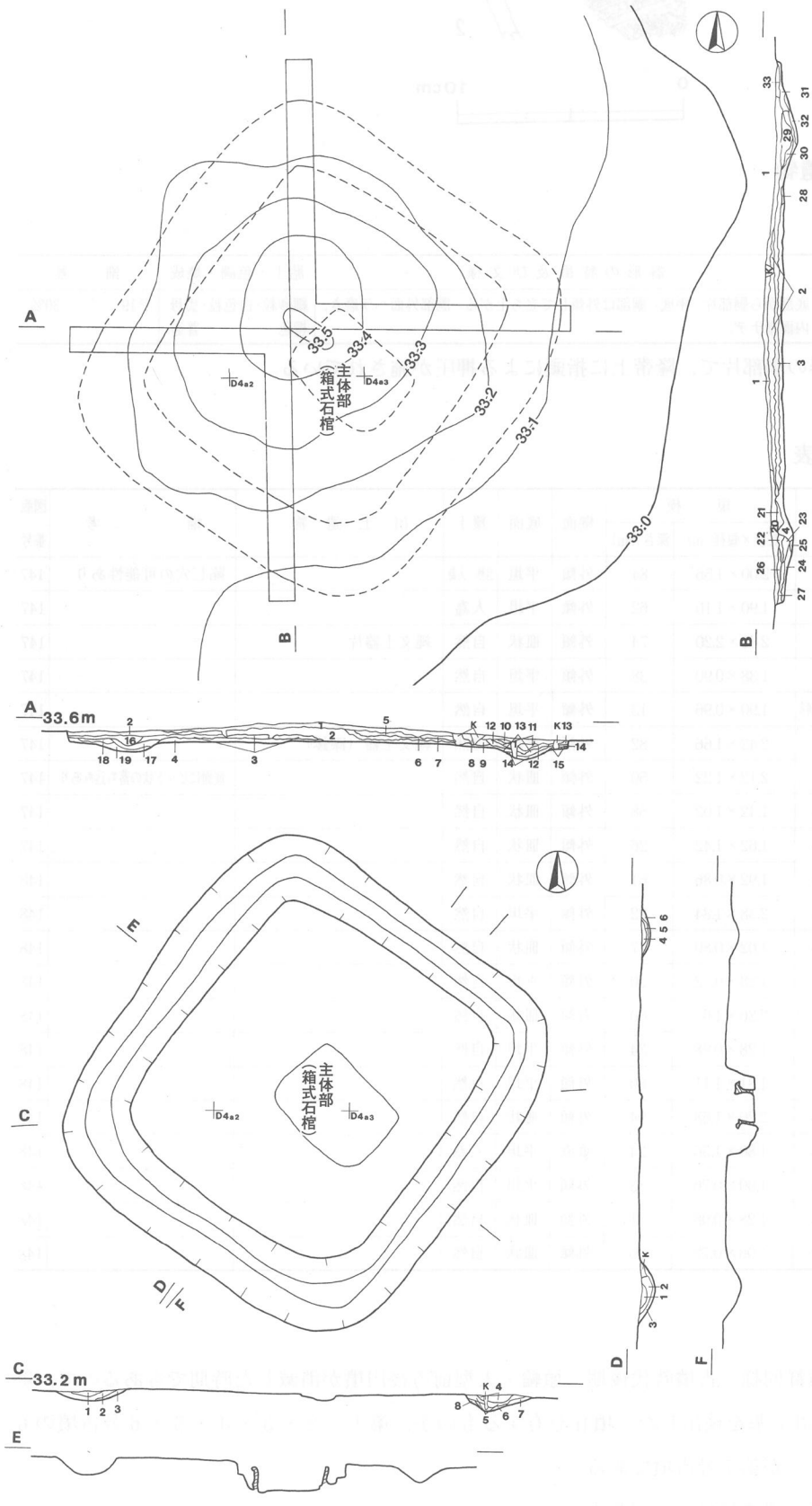
３　古墳

今回の調査では，札場古墳群同様，古墳時代後期（埴輪・大型前方後円墳が消滅した時期でもあるので，終末期古墳とも言える。）の古墳７基を検出した。墳丘を有するものが，第１・２・３・４・５・６号古墳の６基，墳丘を全く失っているものが第７号古墳である。

以下，検出した古墳の特徴や遺物に付いて記載する。

第１号古墳（第150・151図，PL55）

現況と確認状況　調査前まで山林として利用され，周辺に比べ，なだらかな高まりが確認でき，比較的良好に墳丘が遺存していた。



第１号古墳墳丘土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　黒褐色　ローム粒子少量
4　黒褐色　ローム粒子中量(旧表土)
5　褐　色　ローム粒子多量
6　黒褐色　ローム小ブロック少量
7　灰褐色　ローム粒子少量
8　褐　色　ローム粒子中量
9　黒褐色　ローム中ブロック少量
10　黒褐色　ローム粒子少量
11　黒褐色　ローム小ブロック少量
12　黒褐色　ローム小ブロック少量
13　黒褐色　ローム中ブロック中量
14　極暗褐色　ローム中ブロック中量
15　暗褐色　ローム粒子中量
16　黒褐色　ローム小ブロック少量
17　黒褐色　ローム粒子少量
18　暗褐色　ローム粒子中量
19　褐　色　ローム粒子多量
20　褐　色　ローム粒子中量
21　暗褐色　ローム粒子中量，黒色土少量
22　暗褐色　黒色土中量
23　黒褐色　ローム小ブロック少量
24　黒褐色　ローム粒子少量
25　黒褐色　ローム粒子少量
26　黒褐色　ローム粒子中量
27　黒暗褐色　ローム粒子中量
28　暗褐色　ローム粒子中量
29　黒褐色　ローム小ブロック少量
30　黒褐色　ローム小ブロック少量
31　暗褐色　ローム粒子中量
32　暗褐色　ローム粒子多量
33　灰褐色　ローム粒子中量

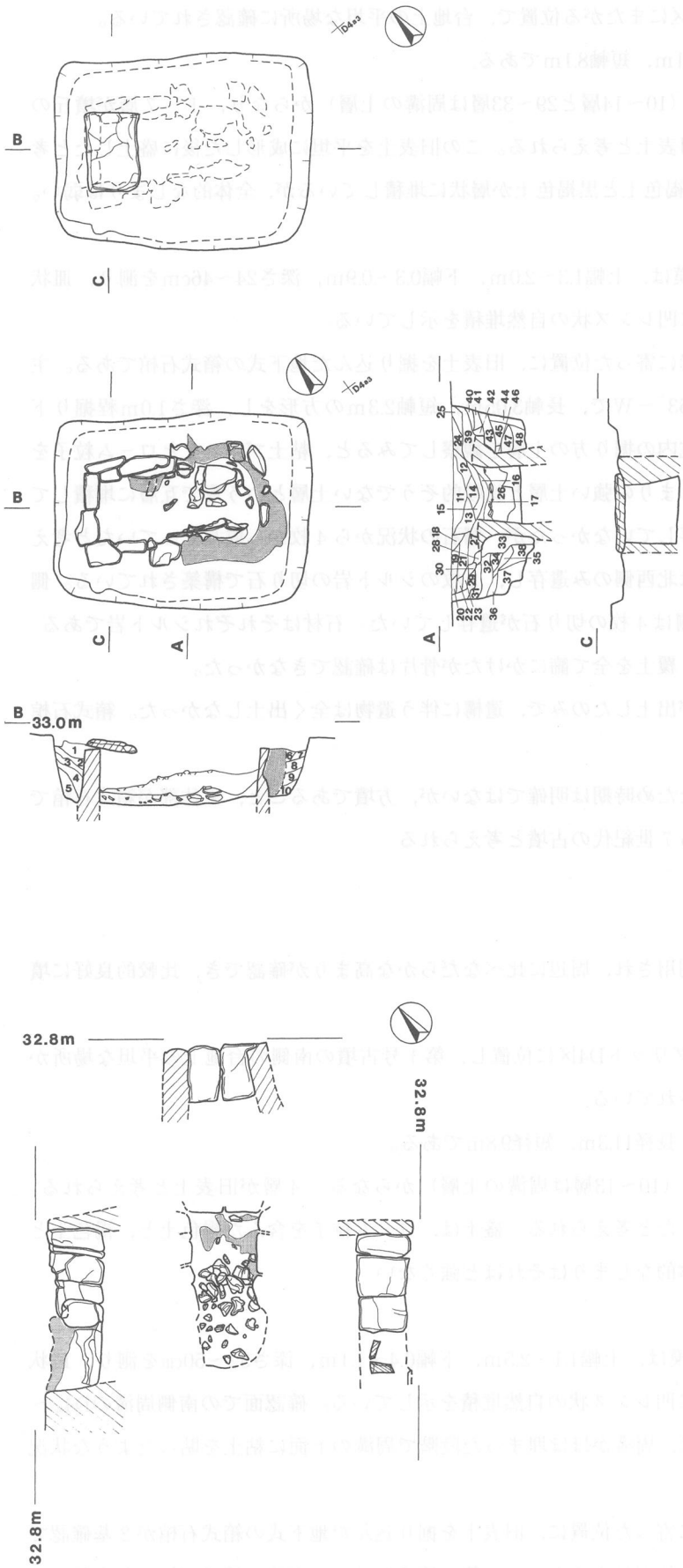
周溝土層解説C－C'

1　暗褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
2　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量，黒色土中量
5　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
6　暗褐色　ローム粒子中量
7　褐　色　ローム粒子中量
8　褐　色　ローム粒子中量

D－D'

1　黒褐色　ローム粒子・黒色土少量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
6　褐　色　ローム粒子少量

第150図　第１号古墳(1)



箱式石棺土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量，黒色土中量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，黒色土中量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
6　黒褐色　ローム粒子・雲母片岩少量，黒色土中量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・雲母片岩少量
8　褐　色　ローム粒子中量
9　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
10　褐　色　ローム粒子中量
11　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
12　褐　色　ローム粒子中量
13　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量
14　暗褐色　ローム粒子・粘土ブロック少量
15　暗褐色　ローム粒子・粘土ブロック中量
16　暗褐色　ローム粒子少量，雲母片岩中量
17　暗灰黄色　粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも極めて強い
18　黄褐色　ローム粒子少量，粘土ブロック中量
19　褐　色　ローム粒子中量
20　黄褐色　粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
21　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・砂少量，黒色土中量
22　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
23　オリーブ褐色　ローム粒子・粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
24　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・泥岩中量
25　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，粘土ブロック少量
26　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・粘土ブロック少量
27　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・粘土ブロック少量
28　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・粘土ブロック少量
29　暗灰黄色　ローム粒子少量，粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも極めて強い
30　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
31　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，粘土ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
32　暗灰黄色　ローム粒子少量，粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも極めて強い
33　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
34　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
35　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
36　暗灰黄色　粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
37　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
38　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
39　褐　色　ローム小ブロック少量，泥岩多量含み，粘性もしまりも強い
40　にぶい褐色　ローム小ブロック少量
41　明褐色　ローム小ブロック少量
42　褐　色　泥岩ブロック中量
43　褐　色　泥岩ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
44　褐　色　ローム小ブロック少量，泥岩多量含み，粘性もしまりも強い
45　褐　色　ローム小ブロック少量，泥岩中量
46　暗褐色　ローム小ブロック少量
47　暗褐色　ローム小ブロック少量
48　暗褐色　ローム小ブロック少量含み，粘性もしまりも強い

第151図　第1号古墳(2)

位置　調査区中央部の大グリットC4・D4区にまたがる位置で，台地上の平坦な場所に確認されている。

墳形及び規模　方墳。周溝内法で，長軸9.1m，短軸8.1mである。

墳丘　高さは，0.6mである。土層は33層（10～14層と29～33層は周溝の土層）からなり，1～7層が墳丘の基本となる土層と考えられる。4層が旧表土と考えられる。この旧表土を平坦に成形した後に盛土したと考えられる。盛土は，ローム粒子を含んだ褐色土と黒褐色土が層状に堆積しているが，全体的なしまりは弱い。

墳丘主軸方向　N－37°－E

周溝　全周している。確認面における規模は，上幅1.3～2.0m，下幅0.3～0.9m，深さ24～46cmを測り，皿状に掘り込まれている。覆土は，基本的に凹レンズ状の自然堆積を示している。

埋葬施設　墳丘中央部からやや南東部周溝に寄った位置に，旧表土を掘り込んだ地下式の箱式石棺である。主軸方向は，墳丘軸とほぼ直交するN－53°－Wで，長軸3.05m，短軸2.3mの方形をし，深さ1.0m程掘り下げた土坑内に構築されている。この土坑内の掘り方の土層を観察してみると，粘土ブロックとローム粒子を含んだ褐色土や暗褐色土や黄褐色土がしまりの強い土層と比較的そうでない土層という形で互層に堆積している。盗掘を受け，蓋石は1枚しか遺存していなかったが，側石の状況から4枚から成り立っていたと考えられる。石材は雲母片岩である。妻石は北西側のみ遺存し，2枚のシルト岩の切り石で構築されている。側石は，北東側は3枚の切り石が，南西側は4枚の切り石が遺存していた。石材はそれぞれシルト岩である。底石は雲母片岩の割石が敷かれている。覆土を全て篩にかけたが骨片は確認できなかった。

遺物　周溝からは，わずかに縄文土器片が出土したのみで，遺構に伴う遺物は全く出土しなかった。箱式石棺からも遺物は全く出土しなかった。

所見　本跡は，遺物が全く出土しなかったため時期は明確ではないが，方墳であること，主体部が箱式石棺であること，また，その石材の組み方から7世紀代の古墳と考えられる。

第2号古墳（第152・153図，PL56）

現況と確認状況　調査前まで山林として利用され，周辺に比べなだらかな高まりが確認でき，比較的良好に墳丘が遺存していた。

位置　調査区中央部からやや南寄りの大グリットD4区に位置し，第1号古墳の南側の台地上の平坦な場所からややなだらかに傾斜した場所で確認されている。

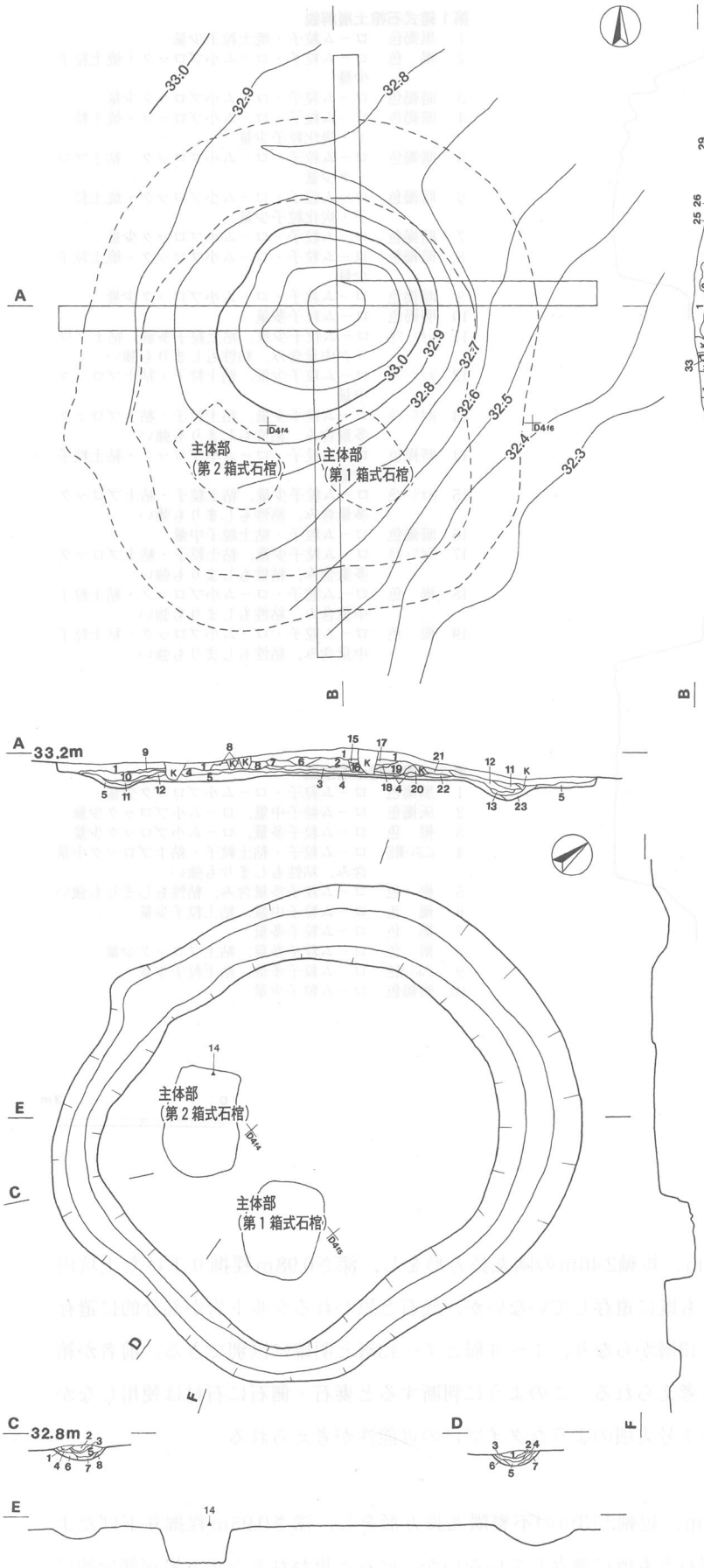
墳形及び規模　不整な円墳。周溝内径で，長径11.3m，短径9.8mである。

墳丘　高さは，0.7mである。土層は42層（10～13層は周溝の土層）からなる。4層が旧表土と考えられる。この旧表土を平坦に成形した後に盛土したと考えられる。盛土は，ローム粒子を含んだ褐色土と，褐色土と黒褐色土が層状に堆積しているが，全体的なしまりはそれほど強くない。

墳丘主軸方向　N－5°－E

周溝　全周している。確認面における規模は，上幅1.1～2.5m，下幅0.4～1.1m，深さ32～50cmを測り，皿状に掘り込まれている。覆土は，基本的に凹レンズ状の自然堆積を示している。確認面での南側周溝の$D4_{g3}$～$D4_{g4}$区で粘土の堆積が見られた。これは，周溝がほぼ埋まった段階で周溝の上面に粘土を貼ったような状況である。

埋葬施設　墳丘中央部からやや南側周溝に寄った位置に，旧表土を掘り込んだ地下式の箱式石棺が2基確認できた。両箱式石棺とも盗掘を受け，遺存状況はよくないが，第1箱式石棺の方が第2箱式石棺よりも新しいと考えられる。第1・2箱式石棺とも，覆土を全て篩にかけたが骨片は確認できなかった。



第152図　第2号古墳(1)

第2号古墳墳丘土層解説

1　耕作土
2　黒褐色　ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム粒子中量
4　黒褐色　ローム中ブロック少量(旧表土)
5　褐　色　ローム土
6　褐　色　ローム粒子中量
7　褐　色　ローム粒子少量
8　暗褐色　ローム粒子少量
9　黒褐色　ローム粒子少量
10　黒褐色　ローム粒子少量
11　黒褐色　ローム小ブロック少量
12　黒　色　ローム粒子少量
13　黒褐色　ローム粒子中量
14　暗褐色　ローム粒子多量
15　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
16　褐　色　ローム粒子中量
17　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
18　黒褐色　ローム粒子少量
19　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
20　黒褐色　ローム粒子少量
21　暗褐色　ローム粒子中量
22　黒褐色　ローム粒子少量
23　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
24　褐　色　ローム粒子多量
25　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
26　褐　色　ローム粒子多量
27　暗褐色　ローム粒子微量
28　黒褐色　ローム粒子少量
29　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
30　明褐色　ローム粒子多量
31　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
32　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
33　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
34　暗褐色　ローム粒子中量
35　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
36　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
37　暗褐色　ローム粒子少量
38　褐　色　ローム粒子中量
39　暗褐色　ローム粒子少量
40　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
41　暗褐色　ローム粒子微量
42　暗褐色　ローム粒子少量

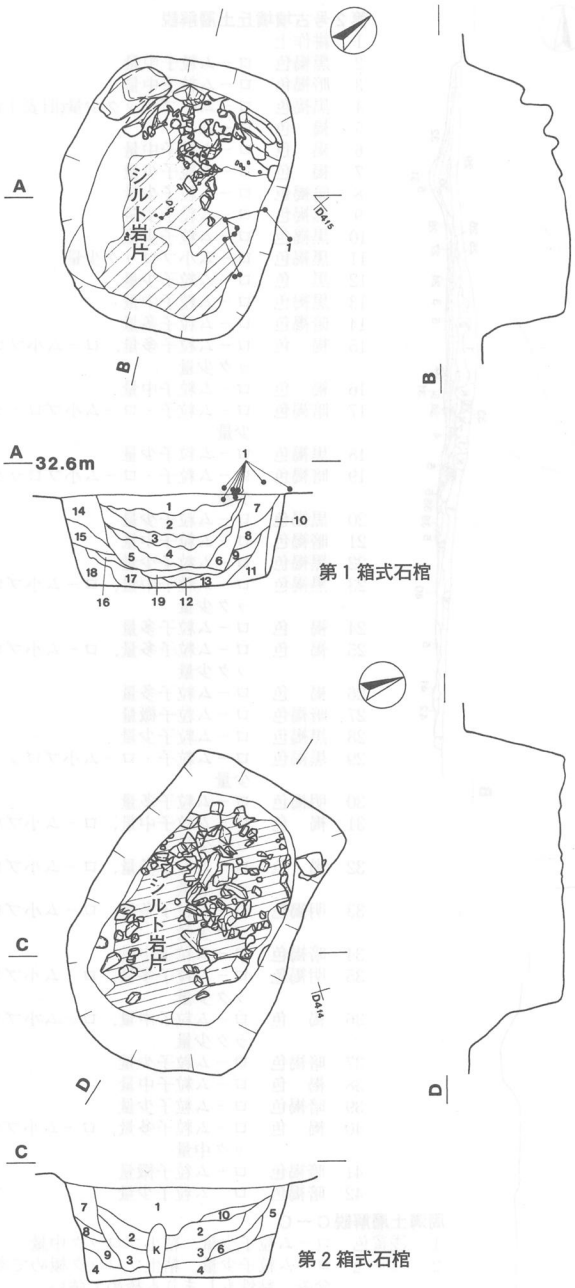
周溝土層解説C－C'

1　浅黄色　ローム粒子少量，粘土ブロック中量
2　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土ブロック極めて多量含み，粘性もしまりも極めて強い
3　浅黄色　ローム粒子少量，粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
4　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
6　明褐色　ローム粒子多量
7　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
8　褐　色　ローム粒子中量

D－D'

1　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも極めて強い
2　浅黄色　ローム粒子少量，粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
3　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子少量，粘土ブロック中量
5　褐　色　ローム粒子中量
6　明褐色　ローム粒子多量
7　褐　色　ローム粒子中量

0　5m



第１箱式石棺土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土ブロック少量
6　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
8　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
10　明褐色　ローム粒子多量
11　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土粒子多量，粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
12　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土粒子・粘土ブロック中量
13　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土粒子・粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
14　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子少量
15　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土粒子・粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
16　暗褐色　ローム粒子・粘土粒子中量
17　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土粒子・粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
18　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子中量含み，粘性もしまりも強い
19　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子中量含み，粘性もしまりも強い

第２箱式石棺土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　灰褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
4　にぶい褐色　ローム粒子・粘土粒子・粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
5　褐　色　ローム粒子多量含み，粘性もしまりも強い
6　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子少量
7　褐　色　ローム粒子多量
8　褐　色　ローム粒子多量，粘土ブロック少量
9　にぶい褐色　ローム粒子多量，粘土粒子少量
10　暗褐色　ローム粒子少量

0　2m

第153図　第２号古墳(2)

①第１箱式石棺

主軸方向は，N－34°－Wで，長軸2.87m，短軸2.46mの隅丸長方形をし，深さ0.98m程掘り下げた土坑内に構築されている。蓋石・妻石・側石とも既に遺存していないが，底石と思われるシルト岩が部分的に遺存している。ただし，覆土を観察すると，13層からなり，１～６層と７～13層と明確に区別できる。前者が箱式石棺内の土層，後者が掘り方の土層と考えられる。このように判断すると妻石・側石に石材は使用しなかったタイプの箱式石棺（札場古墳群の第１号古墳のようなタイプ）の可能性が考えられる。

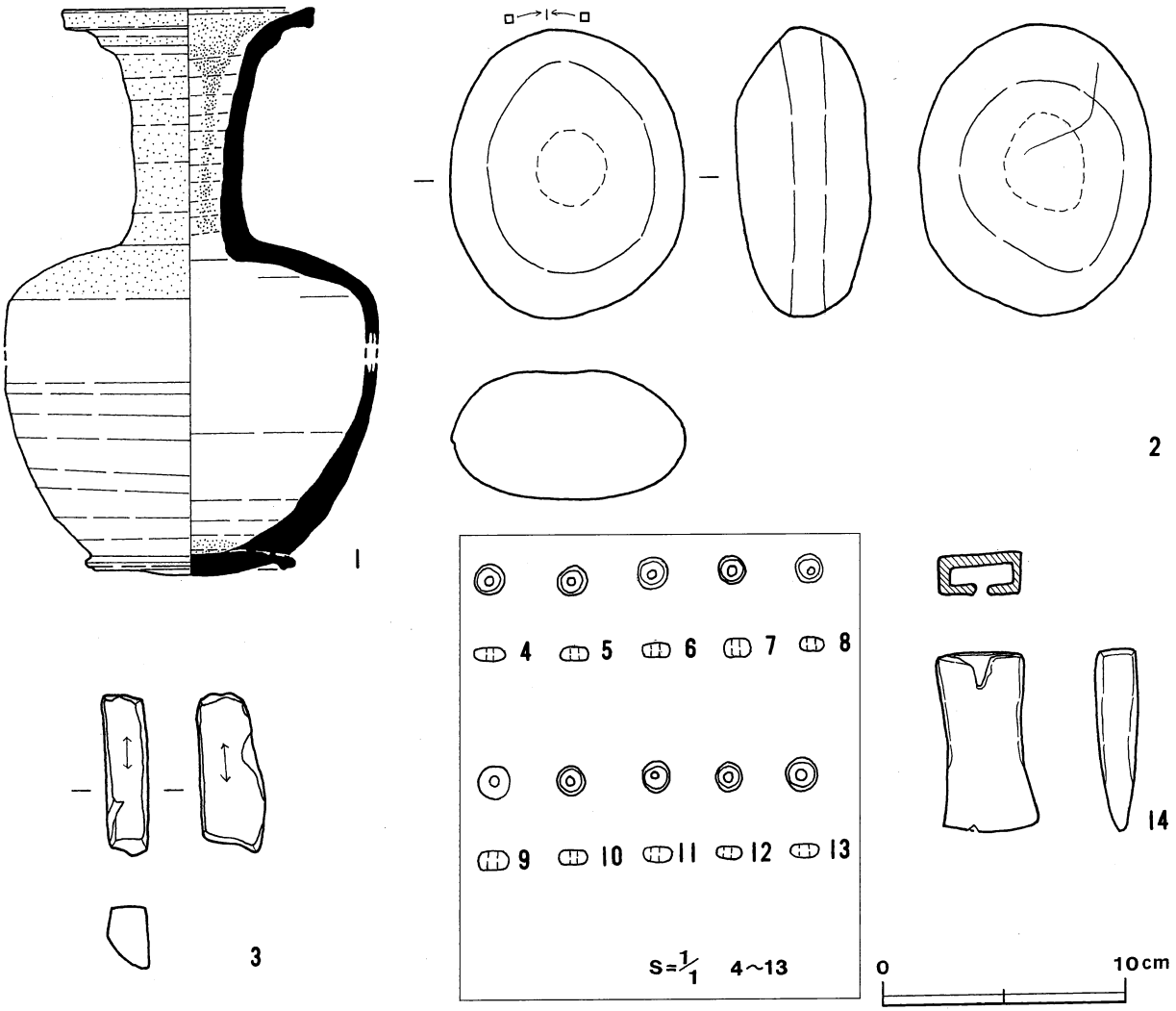
②第２箱式石棺

主軸方向は，N－44°－Wで，長軸3.31m，短軸2.13mの不整隅丸長方形をし，深さ0.95m程掘り下げた土坑内に構築されている。蓋石・妻石・側石とも既に遺存していないが，底石と思われるシルト岩が部分的に遺存している。覆土を観察すると，10層からなるが，西側の状況は良好で，第１号箱式石棺と同じような構

造のものと考えられる。

遺物　第154図１の須恵器長頸瓶は，南側周溝確認面から出土したものと第１箱式石棺の確認面から出土したものとが接合されたものである。墳丘の最下層面のD4f3区から14の鉄斧が出土している。墳丘中から第187図１～６の『寛永通宝』が出土している。第２箱式石棺からは遺物は出土しなかった。

所見　本跡は，第１・２箱式石棺とも盗掘を受け遺存状況はよくなく，箱式石棺の構造等から時期は追うことはできないが，湖西産の須恵器長頸瓶から判断すると，７世紀末葉から８世紀初頭と考えられる。



第154図　第２号古墳出土遺物

第２号古墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 1	長頸瓶 須恵器	A 10.3 B [23.4] D 7.8 E 0.7	高台よりも突出した丸底で，「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は内彎して立ち上がり，上半部でなだらかに屈曲し，頸部は直線的に立上がり，上端部で段をもち，端部は上下につまみ出す。	ロクロ成形。体部内面に焼きぶくれあり。口縁部から体部上位に自然釉付着。	白色粒・黒色斑点 褐灰色 (釉)暗オリーブ色 普通	P21　30%　PL67 第１箱式石棺 湖西産

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第154図2	磨石	11.9	9.65	5.5	874.4	砂岩	周溝覆土	Q5
3	砥石	6.65	1.9	2.6	35.5	凝灰岩	周溝覆土	Q6 PL67
4	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q7 孔径0.1cm PL67
5	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q8 孔径0.1cm PL67
6	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q9 孔径0.1cm PL67
7	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q10 孔径0.1cm PL67
8	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q11 孔径0.1cm PL67
9	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q12 孔径0.1cm PL67
10	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q13 孔径0.1cm PL67
11	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q14 孔径0.1cm PL67
12	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q15 孔径0.1cm PL67
13	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	第2箱式石棺	Q16 孔径0.2cm PL67

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第154図14	鉄斧	7.9	4.3	2.2	84.4	鉄	墳丘確認面	M3

第3号古墳（第155・156・157・158図，PL57・58・59）

現況と確認状況　調査前まで山林として利用され，周辺に比べなだらかな高まりが明確に確認でき，比較的良好に墳丘が遺存していた。

位置　調査区中央部からやや東寄りの大グリットC4区に位置し，台地上の平坦な場所に確認されている。本跡を取り囲むように，北東側に第4号古墳，東側に第5号古墳，南西側に第1号古墳が確認されている。

墳形及び規模　円墳。周溝内径で，18.0mである。

墳丘　高さは，1.28mである。土層は45層（11～13・17～21・30～32・41～45層は周溝の土層）からなる。5層が旧表土と考えられる。この旧表土を平坦に成形した後に盛土したと考えられる。盛土は，ローム粒子やローム小ブロックを含んだ褐色土や暗褐色土を主とし，黒色土を含んだ黒褐色土が帯状に堆積している。

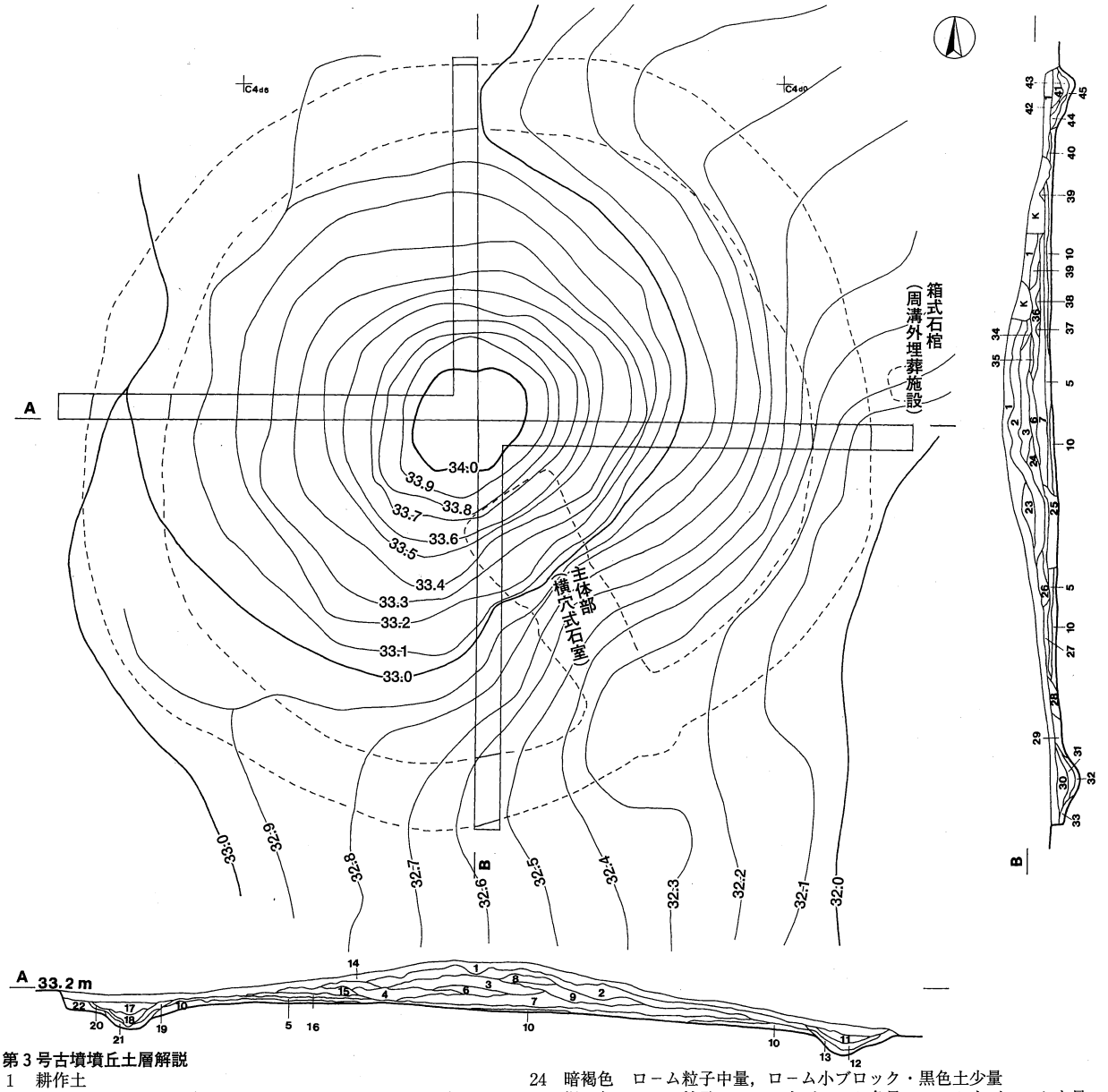
墳丘主軸方向　N－33°－W

周溝　全周している。確認面における規模は，上幅1.7～2.5m，下幅0.2～1.0m，深さ58～80cmを測り，皿状からやや逆台形状に掘り込まれている。覆土は，基本的に凹レンズ状の自然堆積を示している。

埋葬施設　周溝外東側のC4ro区の位置に確認された箱式石棺と，墳頂部から南東周溝寄りの位置で，旧表土を掘り込んだ地下式の横穴式石室が確認できた。

①箱式石棺

主軸方向は，N－11°－Wで，長軸0.95m，短軸0.82mの隅丸長方形をし，深さ0.45m程掘り下げた土坑内に構築されているが，この掘り方は石棺が入るだけのギリギリの大きさである。箱式石棺はシルト岩を石材とした非常に小規模のもので，妻石と側石はそれぞれ40～55×40×15cm程の切り石を1枚ずつ使用して構築した組合せ式の石棺である。調査時には，既に蓋石は遺存していないが，底石は最初から敷かなかったものと考えられる。覆土を全て篩にかけたところがわずかに骨片が確認できた。

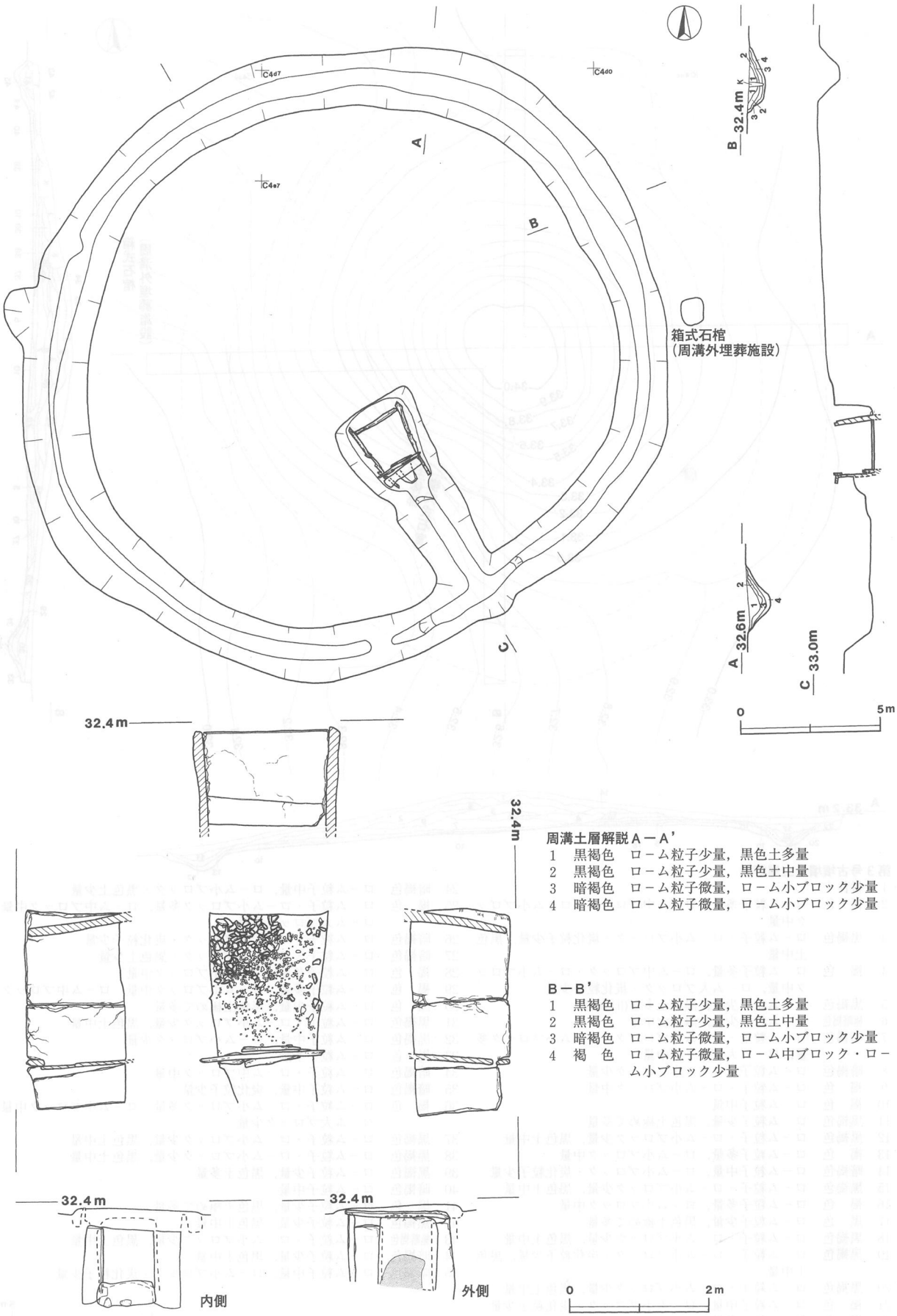


第3号古墳墳丘土層解説

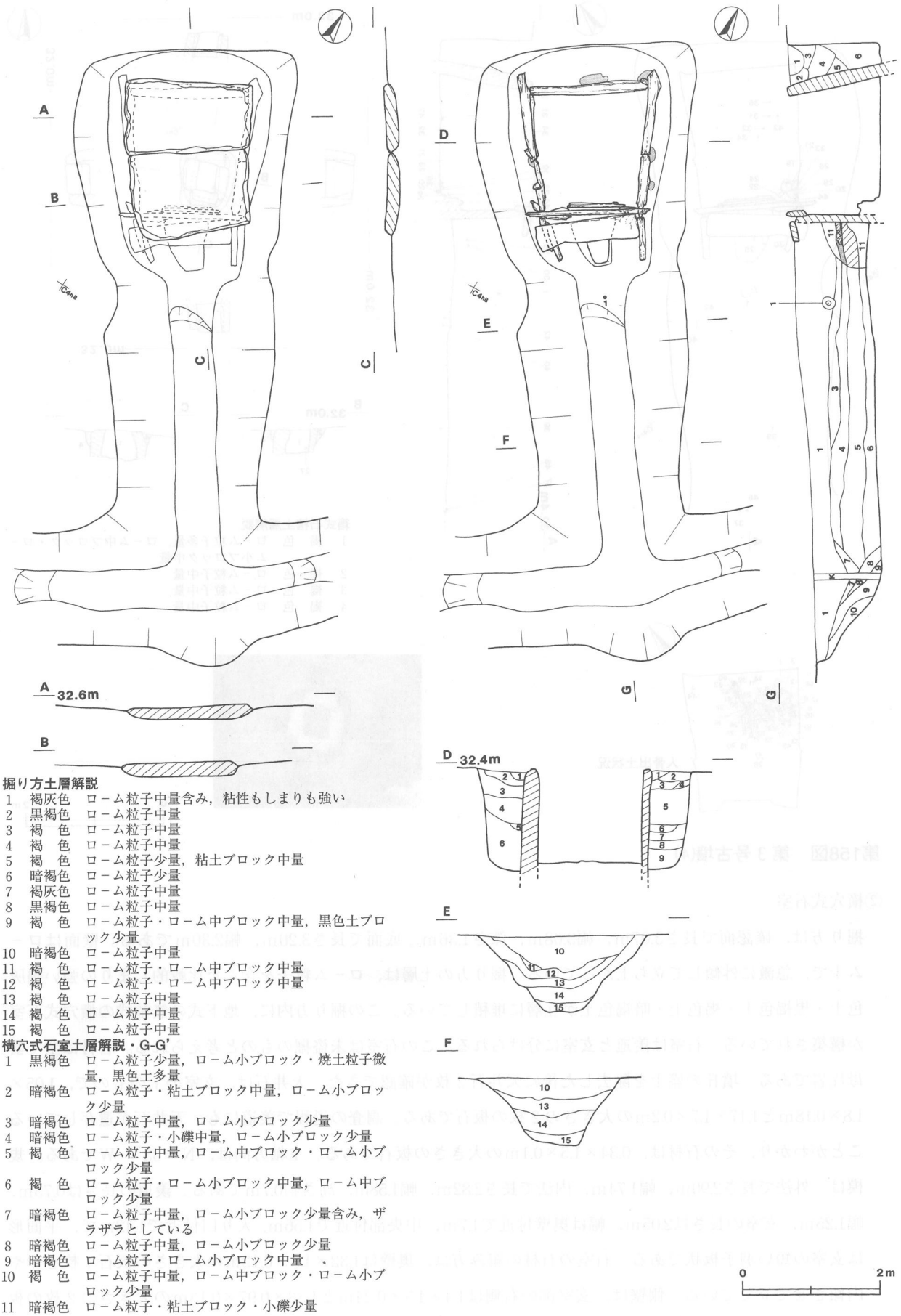
1 耕作土
2 褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
3 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量，黒色土中量
4 褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・炭化粒子少量
5 黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量(旧表土)
6 極暗褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
7 明褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック多量，ローム大ブロック中量
8 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
9 褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
10 褐　色　ローム粒子中量
11 黒褐色　ローム粒子少量，黒色土極めて多量
12 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
13 褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
14 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
15 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
16 褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
17 黒　色　ローム粒子少量，黒色土極めて多量
18 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
19 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量，黒色土中量
20 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
21 褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
22 褐　色　ローム粒子多量
23 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
24 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土少量
25 褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量
26 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
27 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土少量
28 褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
29 褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
30 黒　色　ローム粒子少量，黒色土極めて多量
31 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
32 黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
33 褐　色　ローム粒子多量
34 暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック中量
35 暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
36 褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量
37 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
38 黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
39 黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
40 暗褐色　ローム粒子中量
41 黒　色　ローム粒子少量，黒色土極めて多量
42 黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
43 極暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
44 暗褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
45 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量

0　5m

第155図　第3号古墳(1)



第156図　第3号古墳(2)



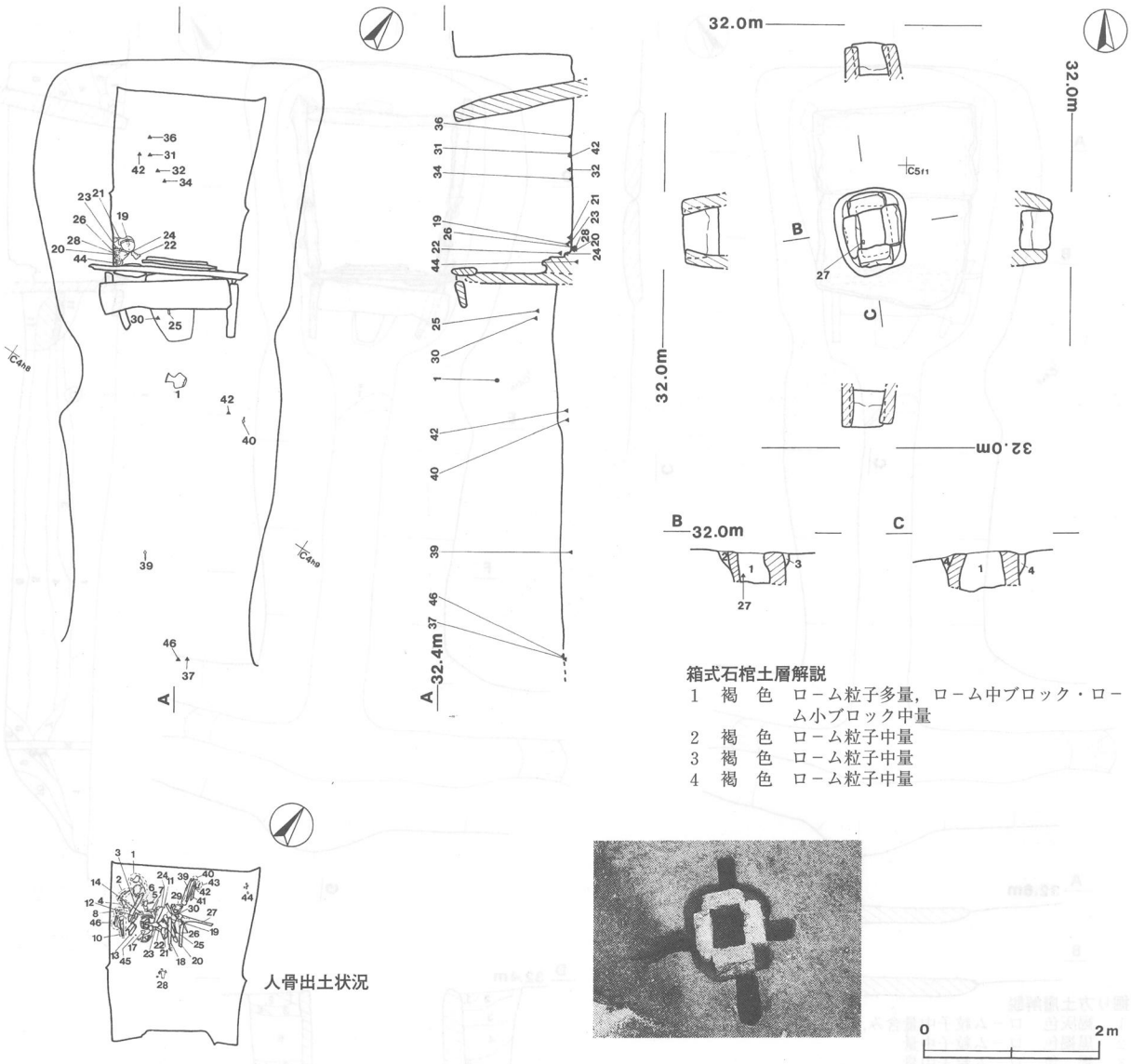
掘り方土層解説

1　褐灰色　ローム粒子中量含み，粘性もしまりも強い
2　黒褐色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子中量
5　褐　色　ローム粒子少量，粘土ブロック中量
6　暗褐色　ローム粒子少量
7　褐灰色　ローム粒子中量
8　黒褐色　ローム粒子中量
9　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック中量，黒色土ブロック少量
10　暗褐色　ローム粒子中量
11　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック中量
12　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック中量
13　褐　色　ローム粒子中量
14　褐　色　ローム粒子中量
15　褐　色　ローム粒子中量

横穴式石室土層解説・G-G'

1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量，黒色土多量
2　暗褐色　ローム粒子・粘土ブロック中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子・小礫中量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
7　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量含み，ザラザラとしている
8　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
9　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
10　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
11　暗褐色　ローム粒子・粘土ブロック・小礫少量

第157図　第3号古墳(3)



第158図　第３号古墳(4)

②横穴式石室

掘り方は，確認面で長さ3.07m，幅3.08m，深さ1.36m，底面で長さ3.20m，幅2.30mである。壁面はローム土で，急激に外傾して立ち上がっている。掘り方の土層は，ローム粒子を含んだ比較的しまりの強い褐灰色土・黒褐色土・褐色土・暗褐色土が互層に堆積している。この掘り方内に，地下式の無袖式の横穴式石室が構築されている。石室は羨道と玄室に分けられる。この石室は未盗掘のものと考えられる。石材は全て雲母片岩である。墳丘の盛土を除去した後に天井石２枚が確認できた。天井石は，玄室の上のもので，1.05×1.8×0.18mと1.17×1.7×0.2mの大きさの２枚の板石である。調査の過程で羨道にも，天井石が遺存していることがわかり，その石材は，0.34×1.5×0.1mの大きさの板石である。主軸方向は，N－33°－Wである。規模は，外法で長さ2.90m，幅1.74m，内法で長さ2.82m，幅1.58m，高さ約0.7mである。羨道の長さは0.75m，幅1.25m，玄室の長さは2.05m，幅は奥壁付近で1.7m，中央部付近で1.56m，入り口付近で1.42mで，平面形は玄室の短い羽子板状である。石室の石材の組み方は，奥壁は1.32×1.8×0.12mの大きさの板石１枚をやや内傾させて立てている。側壁は，玄室部の右側は1.4×1.3×0.24mと1.38×0.97×0.13mの大きさの２枚の板石を，左側は1.35×1.31×0.12mと1.4×1.02×0.10mの大きさの２枚の板石をそれぞれ直立させている。羨道

部は右側で1.2×0.63×0.08mの大きさの１枚の板石を，左側で1.3×0.47×0.08mの大きさの１枚の板石を墓道方向をやや内傾させて縦位に立てている。高さは，玄室に比べて10～15cm程低くなっている。この羨道部の両側壁の上に，0.34×1.5×0.1mの天井石がやや傾いて確認できた。玄門部の構造は，玄室側に0.35×0.85×0.1mの梱石を据え，袖石は右側で0.28×1.1×0.14m，左側で0.38×1.1×0.1mの大きさの板石をそれぞれ縦位に立てて門柱状にしている。その上に，0.3×1.84×0.8mの大きさの楣石がのせてある。しかも，両側壁に切り込みを入れて，楣石を受けるような鳥井状の構造をとっている。外側の羨道側には，1.1×0.85×0.12mの大きさの板石で完全に閉塞し，その閉塞用の板石をさらにシルト岩と粘土で支えている。しかし，このシルト岩と粘土の高まりの中から１枚の杏葉が出土しているので，単なる支えとは考えらない。玄室の床面は，雲母片岩の割石と川原石が敷かれている。人骨は，中央部から奥壁左側に集積されていた。人骨の個体数は，壮年後半から熟年の男性１体，壮年後半と20歳前後の男性２体，10歳前後と６～７歳の小児２体の計５体である（付章２参照）。最後に埋葬されたと考えられる壮年後半から熟年の男性１体も集積されていた。

遺物　第159図１の須恵器長頸瓶は，横穴式石室の墓道から横位の状態で出土している。39の鉄鏃も墓道から出土している。横穴式石室の玄室内の玄門近くの南コーナーから第160図19・第161図20の壺鐙，第162図22の鉸具，44の不明鉄製品が，その壺鐙の下から21の轡，23の鉸具が，第163図24の杏葉が出土している。25の杏葉は玄門部の閉塞用の板石を支えているシルト岩と粘土の高まりの中から出土している。第163図31・32の飾金具は玄室中央部から出土している。箱式石棺からは第164図27の杏葉造出（立聞）部が出土している。次に，それぞれの遺物について詳細に記述する。

①壺鐙

２個体出土。19・20共に同じ形で，同じ構造であり，玄室内の玄門近くの南コーナーから出土している。壺部と鉸具をそれぞれ別々につくり組み合わせている。壺部は鋳銅に鍍金を施し，先端を切断するような状態で丸く整え，壺の上部から先端にかけてわずかに稜をたてている。鉸具は鉄製で，壺開口部の覆輪及び踏込の後方に広くだした舌と一体のつくりである。舌には５つの孔（幅08cm，長さ1.8cm程）が穿たれている。先端の具頭は，壺の主軸方向に平行して立て，方孔を大きく取り，上端に突起が見られる。

②杏葉

６点出土。２点(24・25)は全体の形が分かるもので，４点（26・27・28・30）は造出(立聞)部と考えられる。杏葉は全て金銅製の棘付花弁形杏葉である。後者の４点は帯先金具の可能性も考えられる。24は，玄室内の玄門近くの南コーナーから出土した壺鐙の下に銹着して出土している。表面に６段に円弧文の放射状線文が施されている。25は，玄門部の閉塞用の板石を支えているシルト岩と粘土の高まりの中から出土している。表面に９段に円弧文の放射状線文が施されている。24・25とも造出部は山形を型どりし，鋲は３か所からなり，裏側にワッシャー的なものが見られるので，革に止める様な使用方法と考えられる。26は，玄門部から出土し，表面にわずかに毛彫りが見られる。27は，箱式石棺内から出土し，表面に毛彫りが見られる。28は，掘り方内覆土から出土し，表面に３段に円弧文の放射状線文が施されている。30は，25の脇から出土し，表面にわずかに毛彫りが見られる。

③轡

１点出土。壺鐙の下に銹着して，バラバラになって出土している。接合すると１個体の長方形透鏡板付轡となる。

④飾金具

８点出土。31・32は玄室中央部床面から出土している。共に円形で，表面に八葉の花弁の毛彫りが見られ，

鋲にはワッシャー的なものが見られる。33は，玄室中央部やや西寄り床面から出土している。円形で，鋲にはワッシャーが見られない。34は玄室中央部床面から出土している。円形で，摩滅しているが，表面に花弁の毛彫りが見られ，31・32と同じようなものと考えられる。35は玄室覆土から出土している。円形で，四葉の花弁の毛彫りが見られ，鋲にはワッシャー的なものが見られる。36は墓道覆土からの出土で，六花形で，表面にかすかに毛彫りが見られ，鋲にはワッシャー的なものが見られる。29は羨道覆土からの出土で，推定すると方形で，表面にかすかに毛彫りが見られる。37は墓道覆土からの出土で，円形で，表面にかすかに毛彫りが見られる。

⑤鉄鏃

バラバラな状態で出土しているが，3個体と考えられる。39は完形での出土である。鏃身や柄部のみのものも見られ，形状は三角鏃で，頸部は長頸である。関は両関で，茎は断面形が四角形で，茎尻に至るに従い細くなる。また，茎には木質が遺存し，その上に木皮により口巻が堅固にされている。

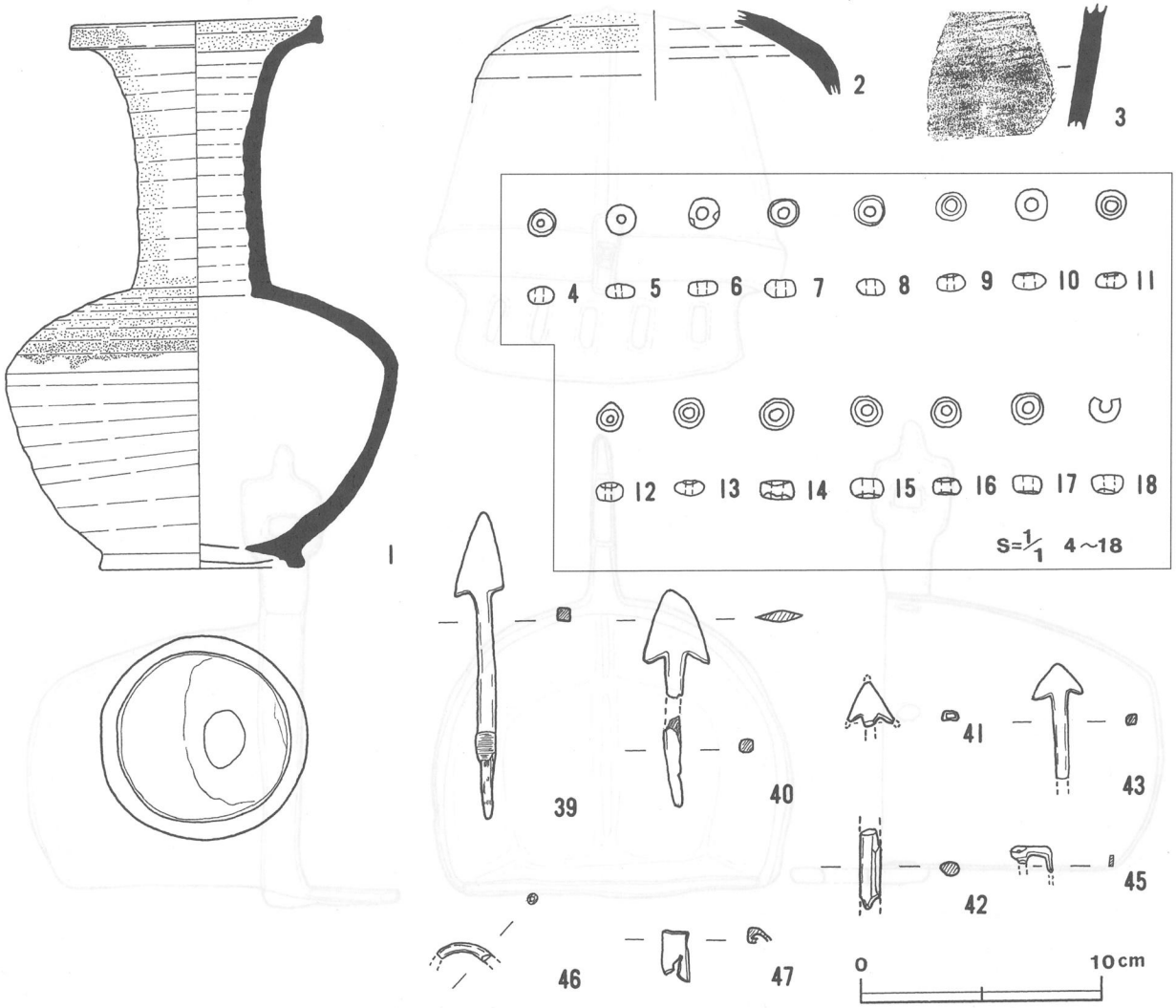
所見　本跡は，横穴室石室の墓道から出土した湖西産の須恵器長頸瓶から判断すると，7世紀末葉から8世紀初頭の時期が考えられるが，玄室内から出土した馬具から考えると7世紀中葉から後葉の時期が考えられ，明らかに時期差がある。これは，古墳が造営された後に，何度かの追葬が行われた。しかも，最後に壮年後半から熟年の男性1体の埋葬をした後に，この石室内に入り，副葬品のひとつである杏葉を持ち出した。この後に玄門を完全に閉塞し，その閉塞用の板石をさらに，シルト岩と粘土で支えている高まりの中に，この杏葉を葬りこんだと考えられるような，葬送的な行為を行なったものと考えられる。湖西産の須恵器長頸瓶はこの時のものと考えられる。このため，時期差が生じたものと判断している。また，副葬品の立派さと大形の雲母片岩（雲母片岩1枚当たり400～500kgと判断している。通常の箱式石棺の1枚の当たりの重さから換算するとこのくらいになると考えられる。これ程の重さの雲母片岩を筑波山の南東部の地域から運べたということ）で石室を構築していることから，この地域でのかなりの権力をもった首長の墓と判断できるのではないだろうか。

第3号古墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 1	長頸瓶 須恵器	A 10.3 B 23.2 D 8.7 E 0.7	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は内彎して立ち上がり，上半部で屈曲し，頸部は直線的に立上がり，上端部で大きく開き，口縁端部は上下につまみ出す。	ロクロ成形。底部焼成後穿孔。口縁部から体部上位に自然釉付着。	白色粒 灰白色 (釉)暗オリーブ色 良好	P22 100% PL67 横穴式石室墓道覆土 湖西産
2	長頸瓶 須恵器	B (3.6)	体部上端片。体部上端はなだらかに屈曲する。	ロクロ整形。体部上位に自然釉付着。	白色粒少 黄灰色 (釉)ｵﾘｰﾌﾞ灰色 良好	P23 5% 横穴式石室墓道覆土 湖西産

第159図3（TP14）は須恵器甕の体部片で，横位の平行叩きが見られる。

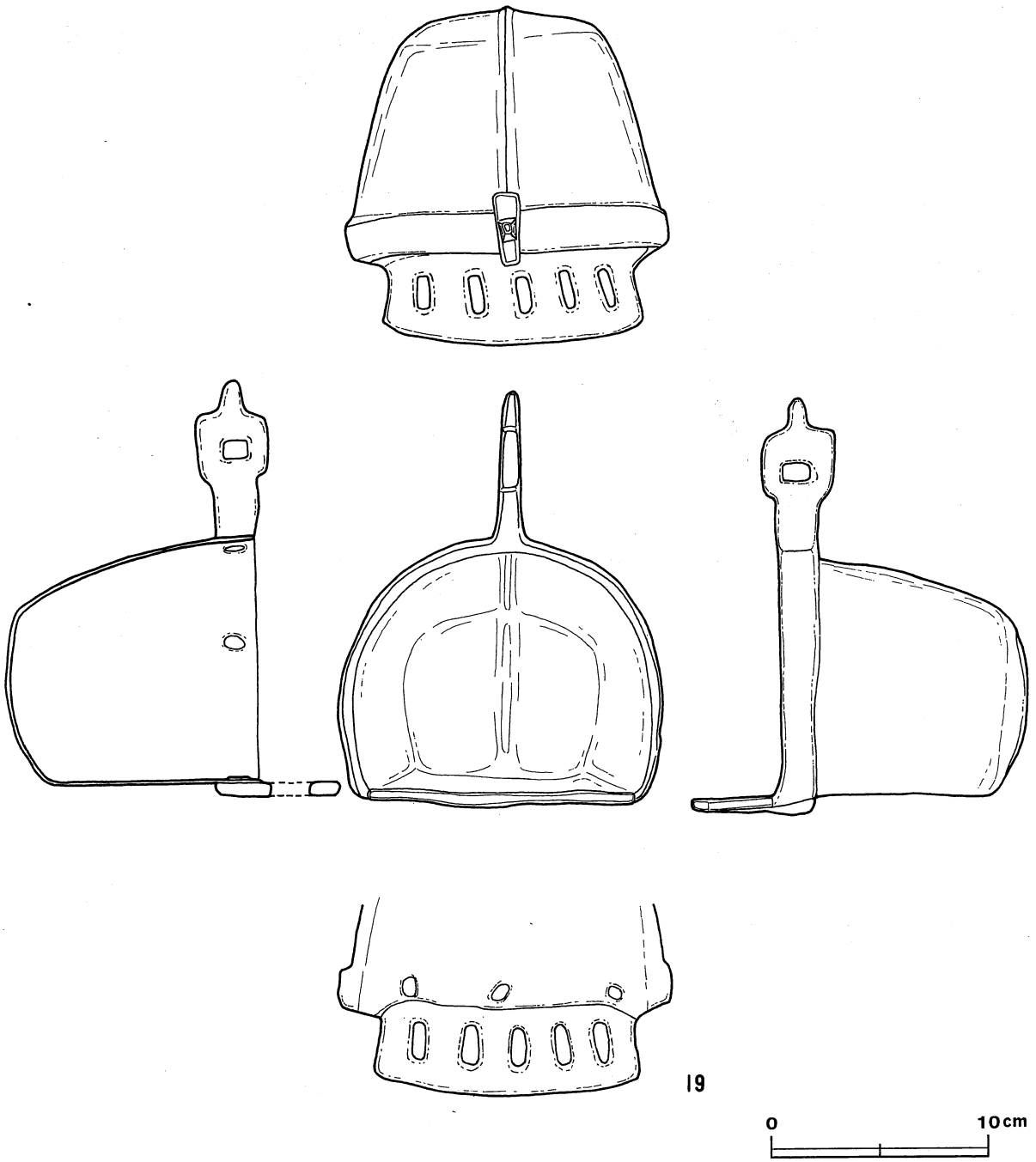
図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第159図4	小玉	0.3	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q17 孔径0.1cm	PL69
5	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q18 孔径0.1cm	PL69
6	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q19 孔径0.15cm	PL69
7	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q20 孔径0.15cm	PL69
8	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q21 孔径0.15cm	PL69
9	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	横穴式石室	Q22 孔径0.1cm	PL69
10	小玉	0.5	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q23 孔径0.2cm	PL69
11	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q24 孔径0.2cm	PL69



第159図　第３号古墳出土遺物(1)

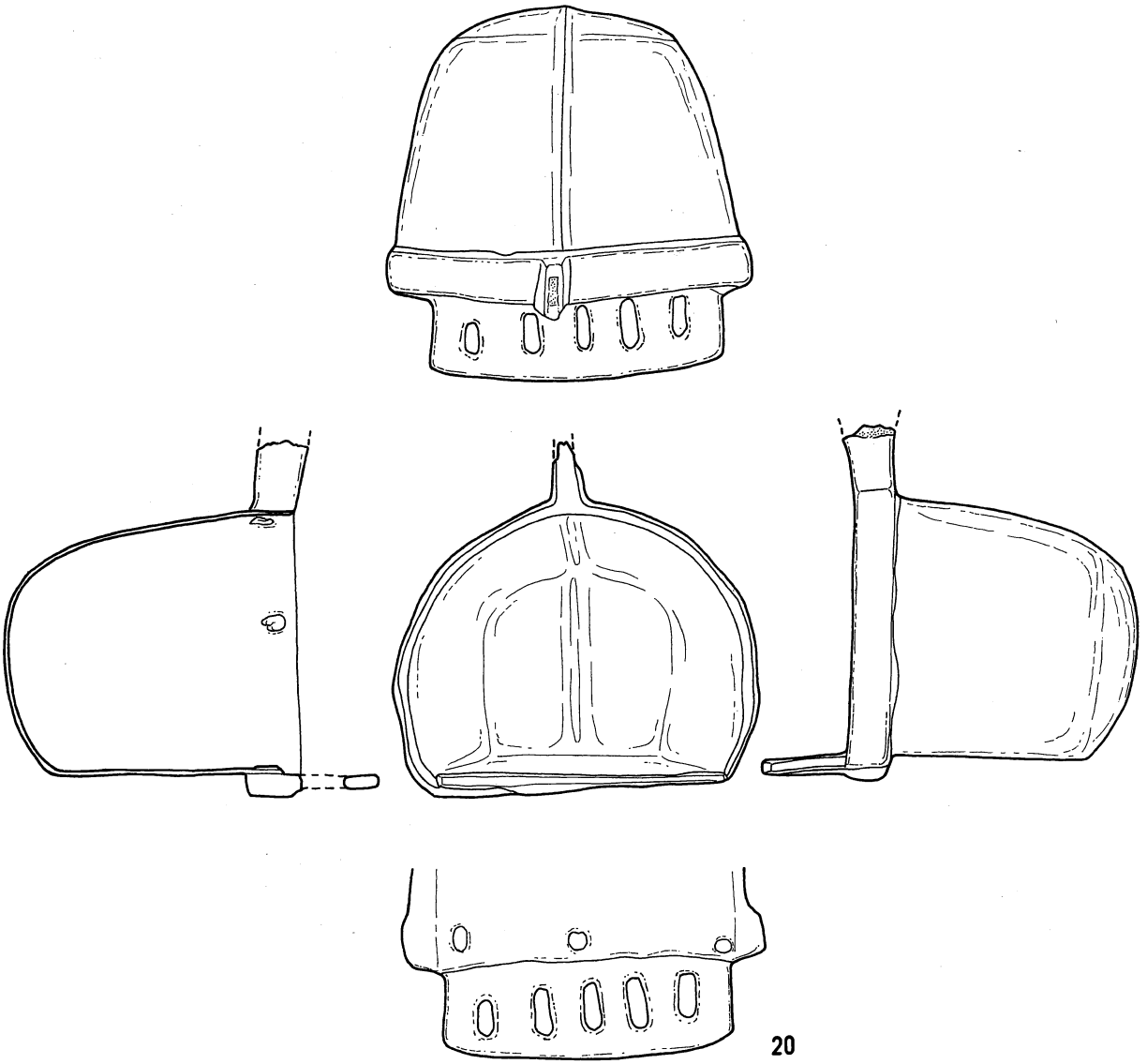
図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考	
12	小玉	0.5	0.4	0.3	0.05	ガラス	横穴式石室	Q25　孔径0.1cm	PL69
13	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q26　孔径0.1cm	PL69
14	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q27　孔径0.2cm	PL69
15	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q28　孔径0.1cm	PL69
16	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q29　孔径0.1cm	PL69
17	小玉	0.4	0.4	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q30　孔径0.1cm	PL69
18	小玉	0.35	0.45	0.2	0.05	ガラス	横穴式石室	Q31　孔径0.2cm	PL69

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	出土地点	備考	
第160図19	壺鐙	長さ15.7cm，幅15.0cm，高さ19.3cm			(505.0)	鉄・銅	横穴式石室玄室	M9	PL68
第161図20	壺鐙	長さ15.8cm，幅15.3cm，高さ(15.0)cm			(581.2)	鉄・銅	横穴式石室玄室	M10	PL68
第162図21	轡	喰部長[17.8]cm，引手長(18.2)cm			(156.6)	鉄	横穴式石室玄室	M11　長方形透鏡板付轡　喰部は二連	PL69
22	鉸具	(9.9)	4.7	0.9	(41.2)	鉄	横穴式石室玄室	M12	PL69
23	鉸具	(10.0)	4.7	0.8	(41.7)	鉄	横穴式石室玄室	M13	PL69
第163図24	杏葉	8.6	(4.4)	0.6	(10.7)	銅	横穴式石室玄室	M18　銅地金張り，身部に円弧紋の放射状線紋が鋲間に施されている	PL69
25	杏葉	(7.4)	5.1	0.8	(8.8)	銅	横穴式石室玄室	M19　銅地金張り，身部に円弧紋の放射状線紋が鋲間に施されている	PL69



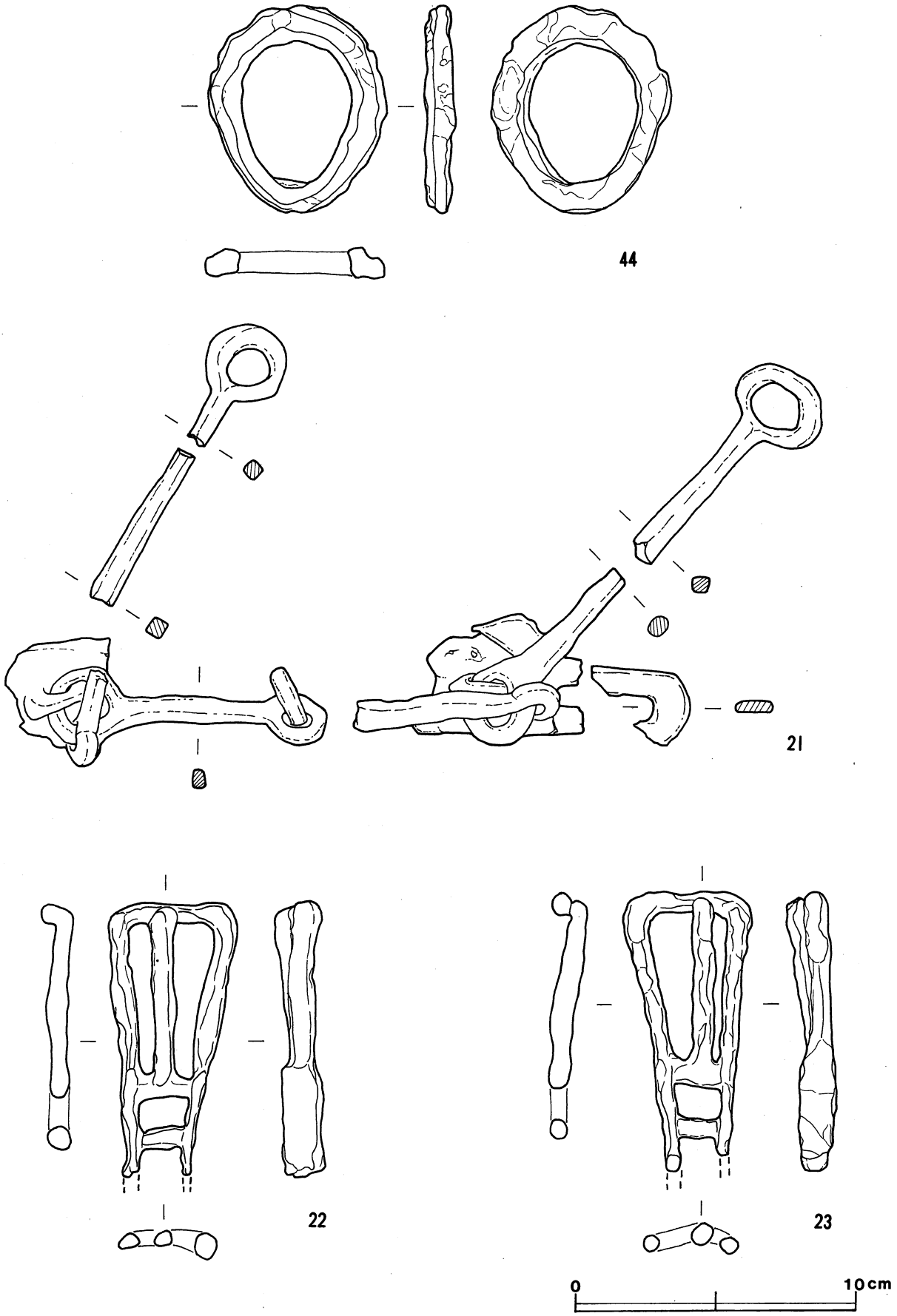
第160図　第3号古墳出土遺物(2)

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	出土地点	備考
第164図26	杏葉	(2.6)	2.8	0.4	(4.1)	銅	横穴式石室玄室	M20　銅地金張り，造出部(立門部)　PL69
27	杏葉	(2.3)	(2.7)	(0.5)	(1.8)	銅	箱式石棺覆土	M36　銅地金張り，造出部(立門部)，表面に円弧紋の放射状線紋の毛彫り　PL69
28	杏葉	2.0	2.8	0.5	(2.9)	銅	横穴式石室玄室	M38　銅地金張り，造出部(立門部)，表面に円弧紋の放射状線紋の毛彫り　PL69
第163図29	杏葉	(1.6)	(2.3)	(0.1)	(0.4)	銅	横穴式石室玄室	M41　銅地金張り，造出部(立門部)，表面に円弧紋の毛彫り
30	杏葉	(1.1)	(1.9)	0.7	(0.5)	銅	横穴式石室玄室	M42　銅地金張り，造出部(立門部)，表面に円弧紋の毛彫り
31	飾金具	3.0	2.9	1.5	6.2	銅	横穴式石室床面	M33　銅地金張り，表面に花弁形の毛彫り　PL69
32	飾金具	2.9	2.8	1.5	6.3	銅	横穴式石室床面	M34　銅地金張り，表面に花弁形の毛彫り　PL69
第164図33	飾金具	(2.2)	(2.0)	(0.5)	(1.1)	銅	横穴式石室床面	M35　銅地金張り　PL69
34	飾金具	2.9	(2.8)	2.2	(3.3)	銅	横穴式石室床面	M37　銅地金張り，表面に花弁形の毛彫り

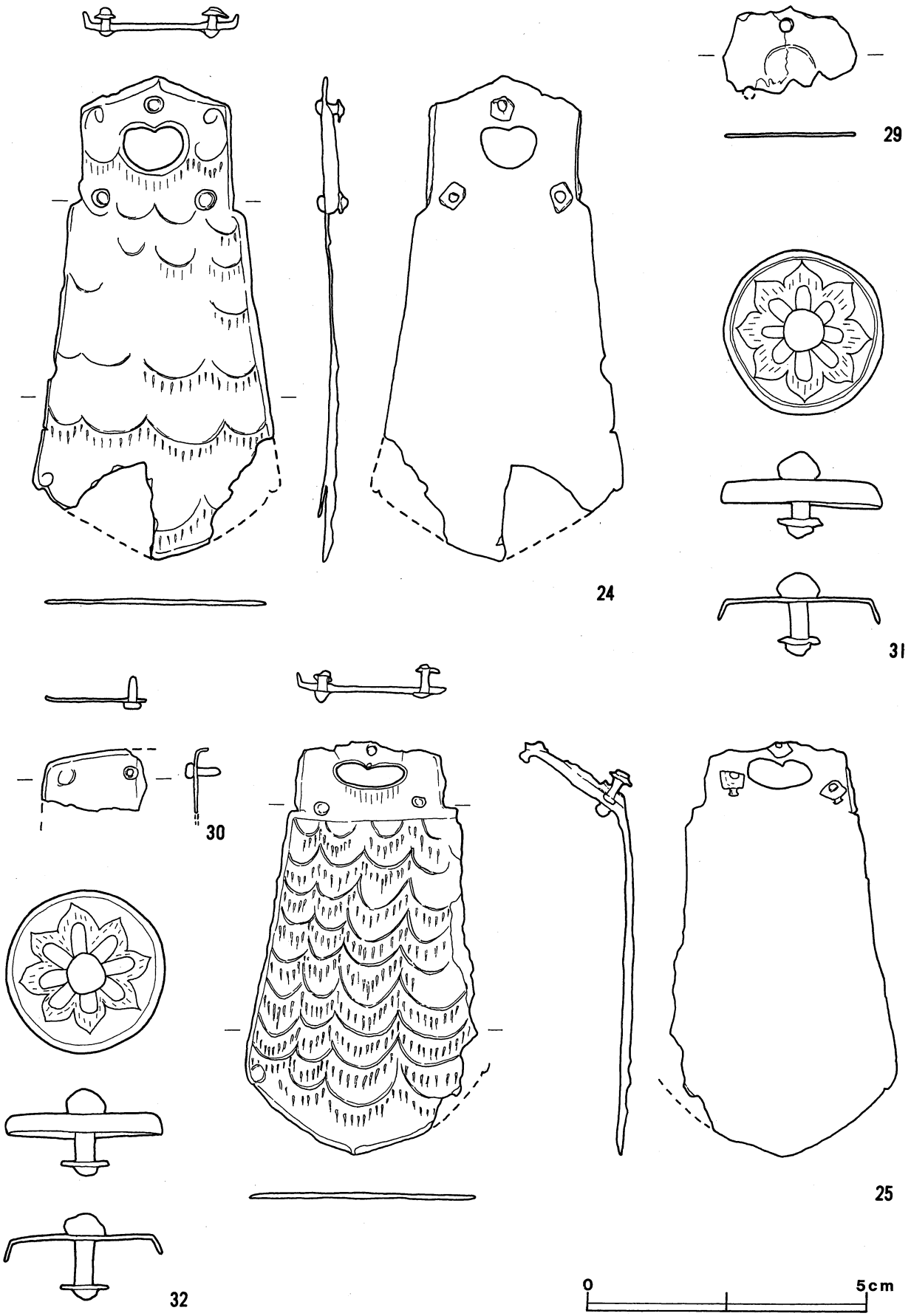


第161図　第3号古墳出土遺物(3)

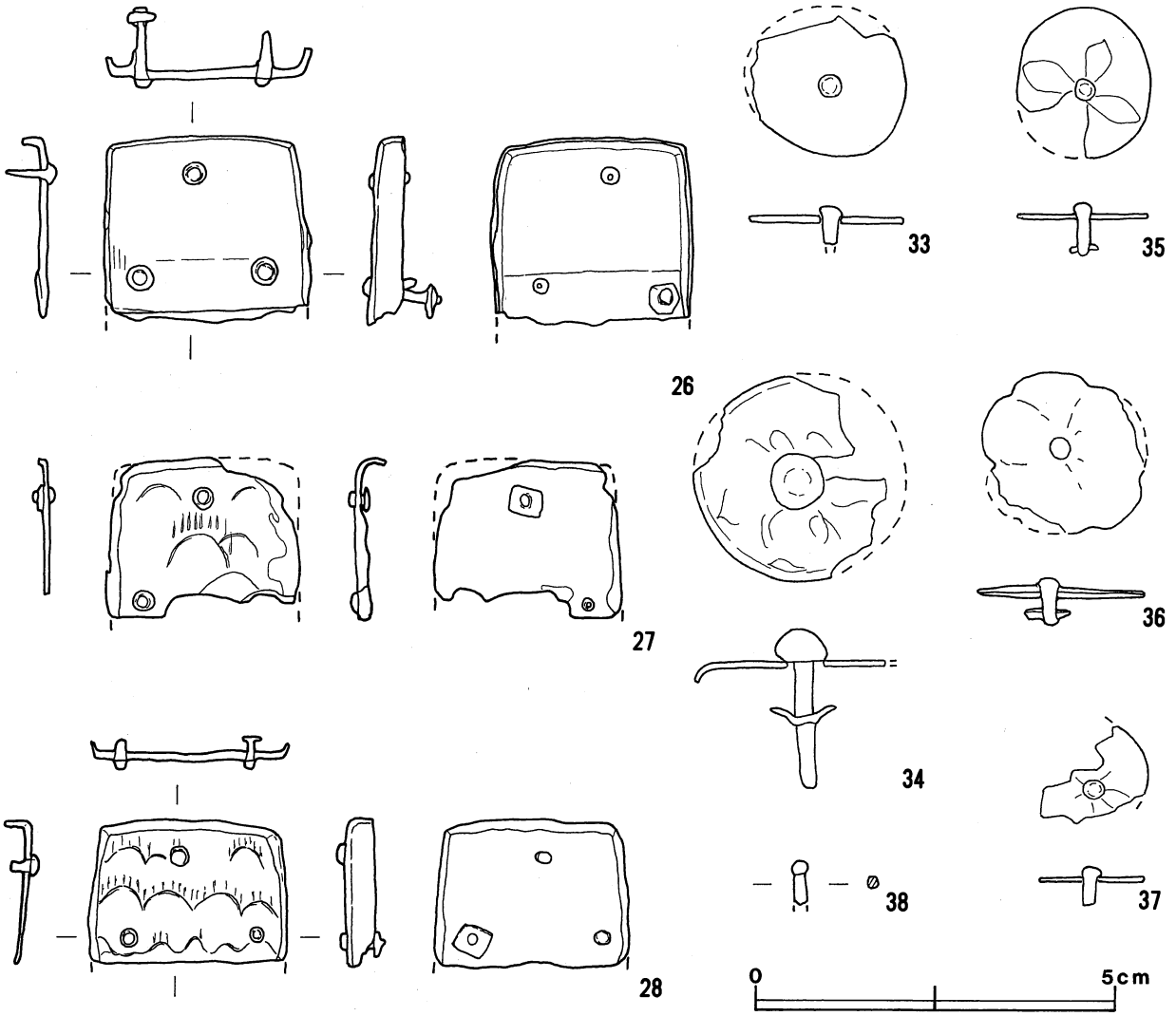
図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	出土地点	備考
35	飾金具	1.9	2.1	0.7	0.4	銅	横穴式石室	M39　銅地金張り，表面に花弁形の毛彫り
36	飾金具	(2.2)	2.4	(0.65)	(1.1)	銅	横穴式石室	M40　六花紋，銅地金張り，表面に花弁形の毛彫り　PL69
37	飾金具	(1.5)	(1.3)	0.5	(0.2)	銅	横穴式石室	M45　銅地金張り，表面に花弁形の毛彫り
38	鋲	0.6	0.2	0.2	(0.05)	銅	横穴式石室	M44　銅地金張り，杏葉か飾金具の鋲
第159図39	鉄鏃	12.9	2.1	0.5	13.3	鉄	横穴式石室	M23　三角鏃，ほぼ完形，木質の一部遺存，長頸　PL68
40	鉄鏃	(8.5)	4.4	0.5	(12.3)	鉄	横穴式石室	M21　三角鏃，鏃身部から頸部片，長頸　PL68
41	鉄鏃	(1.8)	(2.0)	0.4	(2.2)	鉄	横穴式石室	M26　三角鏃，鏃身部片
42	鉄鏃	(3.4)	0.8	0.5	(3.4)	鉄	横穴式石室	M29　頸部片
43	鉄鏃	(4.8)	2.1	0.5	(5.5)	鉄	横穴式石室	M30　三角鏃，鏃身部から頸部片
第162図44	不明鉄製品	7.4	6.4	1.1	27.4	鉄	横穴式石室玄室	M15　PL69
第159図45	不明鉄製品	(1.2)	1.9	0.5	(1.2)	鉄	横穴式石室	M27
46	不明鉄製品	(2.3)	0.4	0.4	(2.4)	鉄	横穴式石室	M28
47	不明鉄製品	(2.2)	(1.2)	0.7	(1.3)	鉄	横穴式石室	M31



第162図　第３号古墳出土遺物(4)



第163図　第３号古墳出土遺物(5)



第164図　第３号古墳出土遺物(6)

第４号古墳（第165・166図，PL60）

現況と確認状況　調査前まで雑木林として利用され，周辺に比べなだらかな高まりが確認できた。

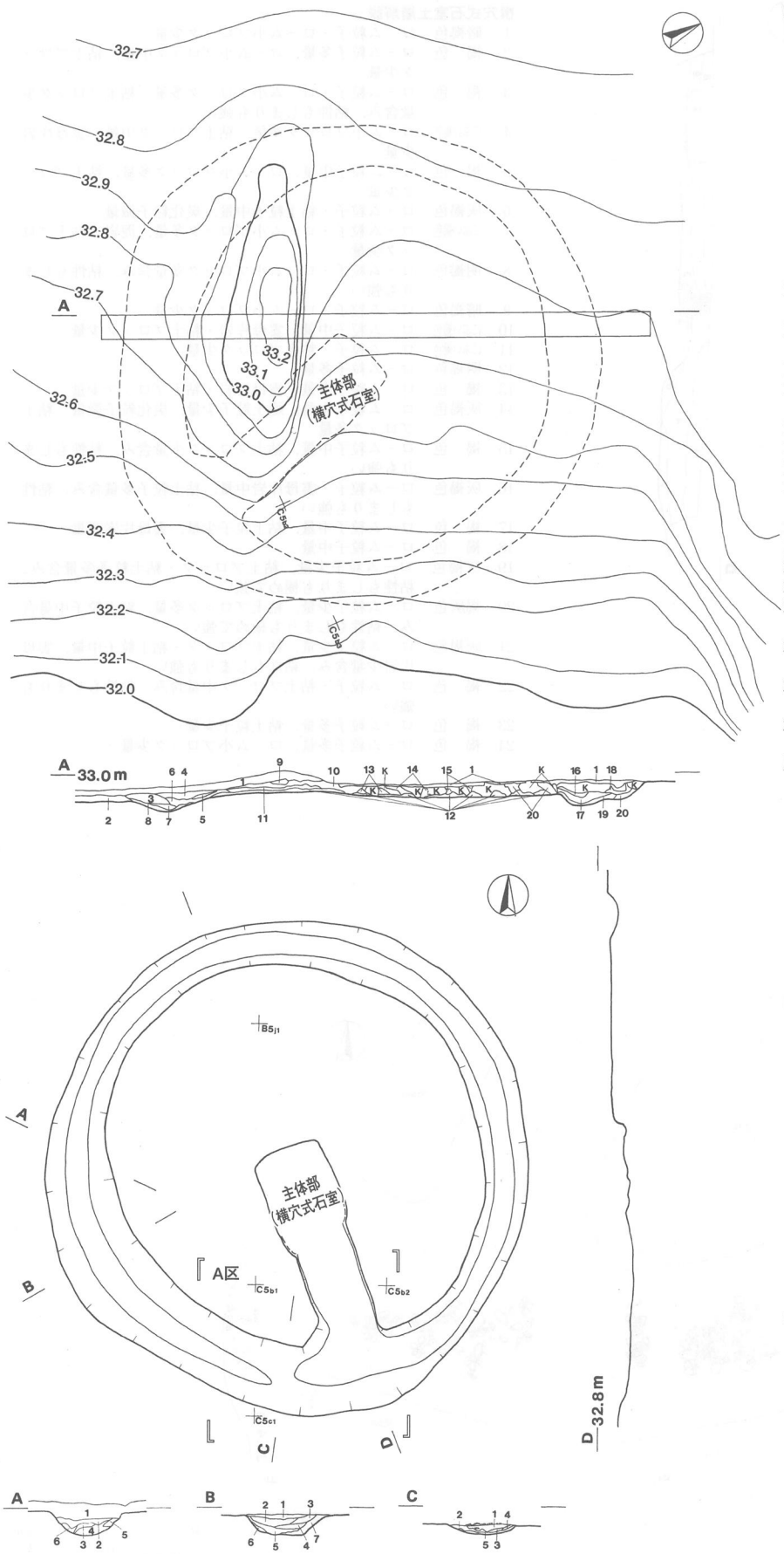
位置　調査区東部の大グリットB4・B5・C4・C5区にまたがる位置で，第３号古墳の北東側の台地上の平坦な場所に確認されている。

墳形及び規模　円墳。周溝内径で，11.8mである。

墳丘　高さは，0.58mであるが，後世の撹乱が多く，盛土と判断できるものは少ない。土層は17層（３～８・13～17層は周溝の土層）からなり，わずかに確認できた11層が旧表土と考えられる。東側は撹乱が激しく盛土らしきものは確認できなかった。

墳丘主軸方向　N－23°－W

周溝　全周している。確認面における規模は，上幅1.1～2.5m，下幅0.5～0.8m，深さ26～62cmを測り，皿状に掘り込まれている。覆土は，基本的に凹レンズ状の自然堆積を示している。



第165図　第４号古墳(1)

第４号古墳墳丘土層解説

1　耕作土
2　明褐色　ローム土
3　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
4　暗褐色　ローム粒子中量，黒色土少量
5　褐　色　ローム粒子中量
6　暗褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
7　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
8　褐　色　ローム粒子中量
9　褐　色　ローム粒子中量
10　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
11　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量(旧表土)
12　褐　色　ローム粒子多量
13　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
14　褐　色　ローム粒子・黒色土中量
15　黒褐色　ローム粒子・黒色土中量
16　暗褐色　ローム粒子中量
17　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
18　褐　色　ローム粒子中量
19　褐　色　ローム粒子中量
20　褐　色　ローム粒子中量
21　黒褐色　ローム中ブロック中量
22　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック中量
23　暗褐色　ローム中ブロック・黒色土ブロック中量
24　暗褐色　ローム粒子多量，黒色土ブロック少量
25　暗褐色　ローム中ブロック・黒色土ブロック中量

周溝土層解説Ａ－Ａ'

1　耕作土
2　黒褐色　ローム粒子・黒色土中量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
5　暗褐色　ローム粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子少量

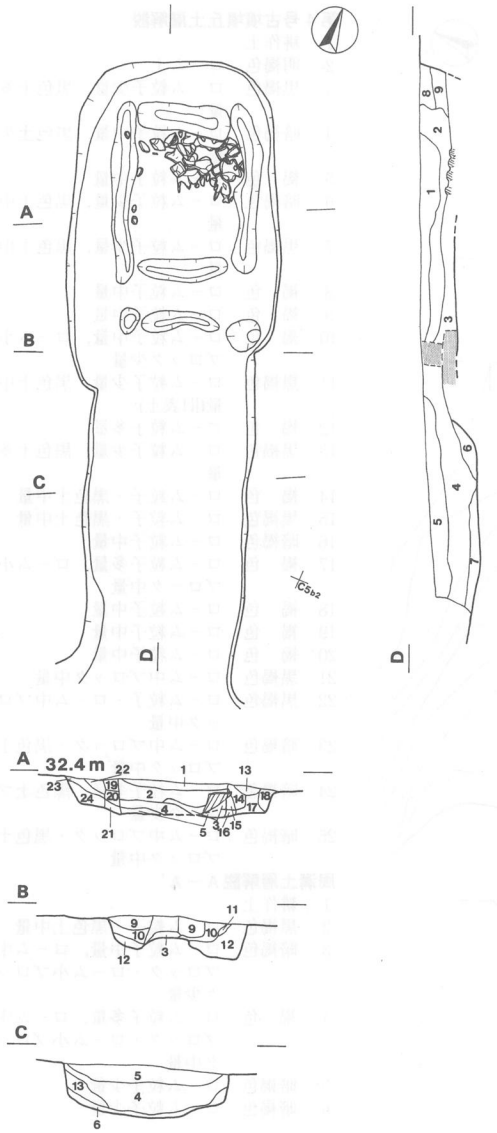
Ｂ－Ｂ'

1　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
2　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，黒色土中量
3　暗褐色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

Ｃ－Ｃ'

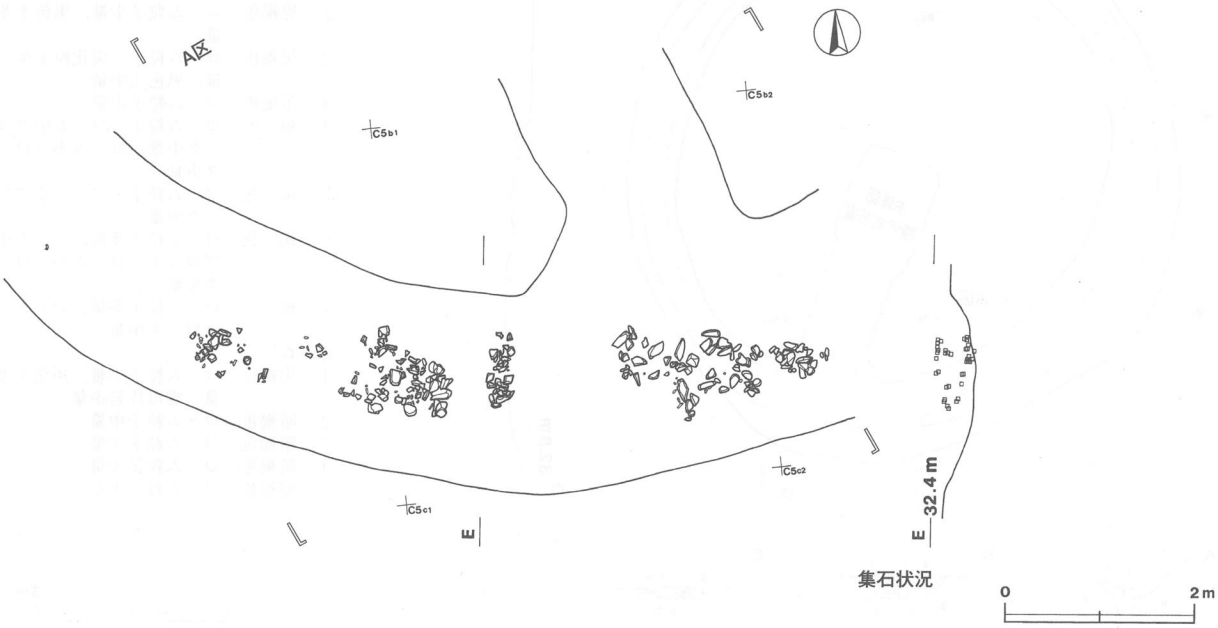
1　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量，雲母片岩中量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子中量

0　5m



横穴式石室土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，粘土ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，粘土ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
4　にぶい褐色　ローム小ブロック多量，粘土ブロック中量，雲母片岩少量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック多量，粘土ブロック少量
6　灰褐色　ローム粒子・粘土粒子中量，炭化粒子微量
7　にぶい褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，泥岩・粘土ブロック少量
8　明褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
9　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
10　にぶい褐色　ローム粒子中量，雲母片岩・粘土ブロック少量
11　にぶい褐色　ローム粒子・粘土ブロック少量
12　明褐色　ローム粒子多量
13　褐　色　ローム粒子中量，雲母片岩・粘土ブロック少量
14　灰褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量，粘土ブロック多量
15　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
16　灰褐色　ローム粒子・雲母片岩中量，粘土粒子多量含み，粘性もしまりも強い
17　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子少量，雲母片岩微量
18　褐　色　ローム粒子中量
19　灰褐色　ローム粒子少量，粘土ブロック・粘土粒子多量含み，粘性もしまりも極めて強い
20　褐灰色　ローム粒子少量，粘土ブロック多量，粘土粒子中量含み，粘性もしまりも極めて強い
21　灰褐色　ローム粒子少量，粘土ブロック・粘土粒子中量，雲母片岩少量含み，粘性もしまりも強い
22　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
23　褐　色　ローム粒子多量，粘土粒子少量
24　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量



第166図　第４号古墳(2)

埋葬施設　墳丘中央部からやや南側周溝に寄った位置に，旧表土を掘り込んだ地下式の横穴式石室が確認できた。主軸方向はN－23°－Wである。盗掘を受け，遺存状況はよくなく，床石のみが遺存しているだけである。掘り方は，確認面で長さ3.48m，幅2.14mである。床石には，雲母片岩の割石とシルト岩の割石が使用されていたと考えられる。この雲母片岩に混じって炭化材が確認できた。床面を精査したところ，石材の抜き取り痕と考えられる溝が確認できた。この溝から判断すると石室は，玄室と羨道に分けられる。玄室は奥壁は1枚の板石を，玄室側壁も左右共に1枚の板石を使用していたと考えられる。羨道部分については不明である。この石室から周溝にかけて幅1.7mの墓道が延びている。覆土を全て篩にかけたが骨片は確認できなかった。

遺物　周溝からは，主体部の墓道につながるC4$_{b0}$・C5$_{b1}$・C5$_{b2}$区を中心に雲母片岩の集石が確認された。外に遺物は出土しなかった。

所見　本跡に伴う遺物がなく，横穴式石室は盗掘を受け遺存状況はよくなく，時期は判断しにくいが，横穴式石室の石材の組み方から判断すると，7世紀代の古墳と考えられる。

第5号古墳（第167・168・169図，PL60・61）

現況と確認状況　調査前まで雑木林として利用され，周辺に比べなだらかな高まりが確認できた。

位置　調査区東部の大グリットC5区の位置で，第3号古墳の東側，第6号古墳の南東側の台地上の平坦な場所から緩やかに傾斜した場所に確認されている。本跡の南東側には，平安時代の埋設遺構が確認されている。

墳形及び規模　不整な円墳。周溝内径で，長径18.3m，短径14.7mである。

墳丘　高さは，0.62mである。東部は後世の撹乱が多いが，西部は比較的良好に盛土が遺存している。土層は31層（2～5・10・11層は周溝の土層）からなり，9層が旧表土と考えられる。1・6・7・8層が盛土と考えられる。東部は撹乱が激しく盛土らしきものは確認できなかった。

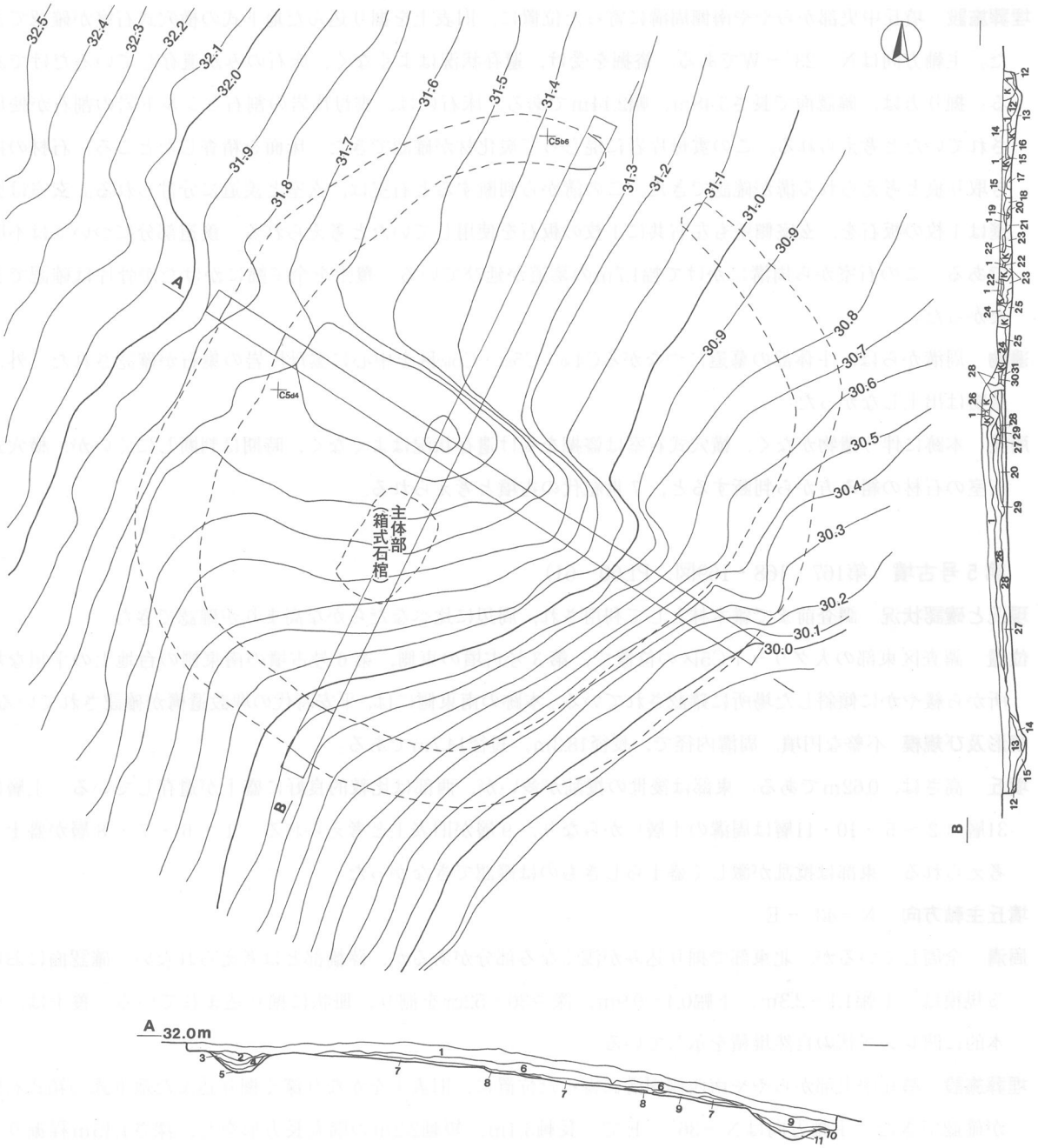
墳丘主軸方向　N－43°－E

周溝　全周しているが，北東部で掘り込みが浅くなる部分があるが，陸橋部とは考えられない。確認面における規模は，上幅1.1～2.3m，下幅0.4～0.9m，深さ30～52cmを測り，皿状に掘り込まれている。覆土は，基本的に凹レンズ状の自然堆積を示している。

埋葬施設　墳丘中央部からやや南西側周溝に寄った位置に，旧表土をかなり深く掘り込んだ地下式の箱式石棺が確認できた。主軸方向はN－36°－Eで，長軸3.4m，短軸2.2mの隅丸長方形をし，深さ1.45m程掘り下げた土坑内に構築されている。この土坑内の掘り方の土層を観察してみると，ローム粒子を含んだ褐色土が，粘土ブロックを含む層と含まない層とに互層に堆積している。全体的にしまりは強い。この箱式石棺は，未盗掘で遺存状況は極めてよい。石材は全て雲母片岩である。蓋石は，50×90×10cm前後の板石を4枚使用している。この蓋石のつなぎ目やまわりに目張りの粘土が使用されている。妻石は，それぞれ50×90×10cm前後の板石を1枚横位に使用している。側石は，南東側で155×70×10cmの長い板石と40×70×10cmの短い板石の2枚を横位に使用している。北西側で50×70×10cm前後の板石を4枚横位に使用している。底石は，40×65×10cm前後の板石2枚と5～20cm前後の割石を敷き詰めている。人骨は，中央部から北西部に集積されて出土している。人骨の個体数は，壮年前半と4～5才の小児の2個体である（付章2参照）。

遺物　周溝からは，南側確認面で第170図2の須恵器横瓶が出土している。箱式石棺からは3・4のガラス製小玉が2個，8の小形の耳環が出土している。箱式石棺の掘り方内から5・6の鉄鏃が出土している。

所見　本跡は，須恵器横瓶や鉄鏃の形態や箱式石棺の構造から，7世紀代中葉以降の古墳と考えられる。

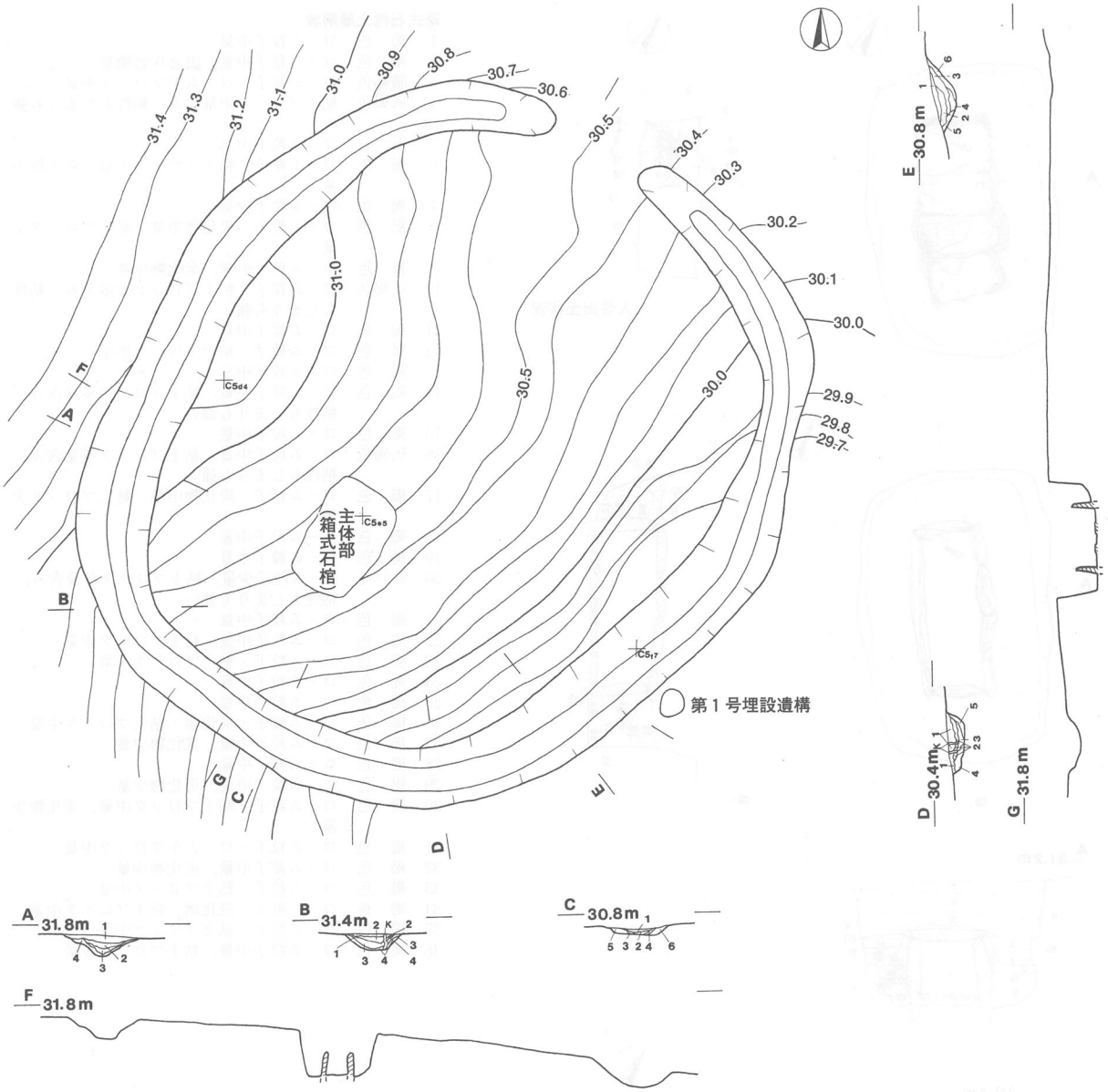


第5号古墳墳丘土層解説

1　耕作土
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック中量
3　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子中量
6　褐　色　ローム粒子多量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
8　黒褐色　旧表土
9　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，黒色土中量
10　暗褐色　ローム粒子中量
11　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
12　暗褐色　ローム粒子中量
13　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
14　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
15　褐　色　ローム粒子中量
16　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
17　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック中量
18　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
19　明褐色　ローム粒子多量
20　褐　色　ローム粒子中量
21　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
22　明褐色　ローム粒子多量
23　褐　色　ローム粒子中量
24　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
25　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック中量
26　褐　色　ローム粒子中量
27　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
28　褐　色　ローム大ブロック多量
29　黒褐色　ローム小ブロック中量
30　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
31　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量

0　5m

第167図　第5号古墳(1)



周溝土層解説A－A'

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

B－B'

1　暗褐色　ローム粒子微量
2　褐　色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

C－C'

1　暗褐色　ローム粒子・黒色土中量，ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　明褐色　ローム粒子多量
6　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

D－D'

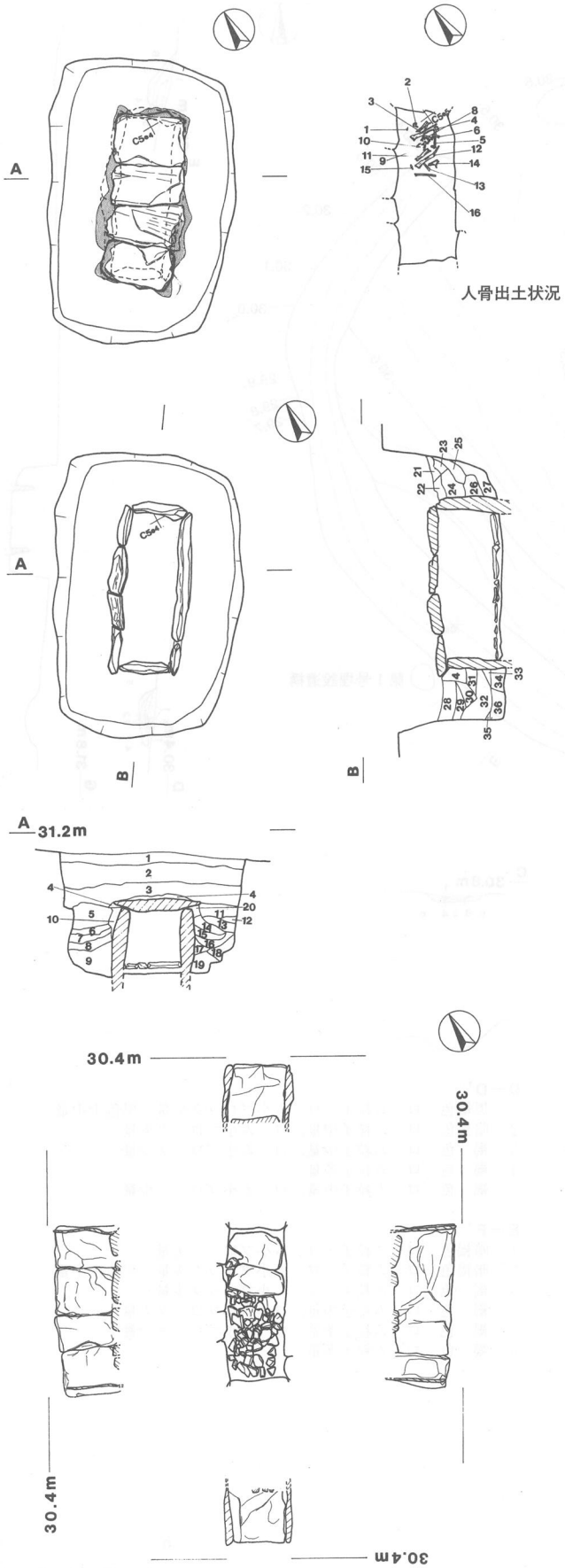
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

E－E'

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
3　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子多量

0　5m

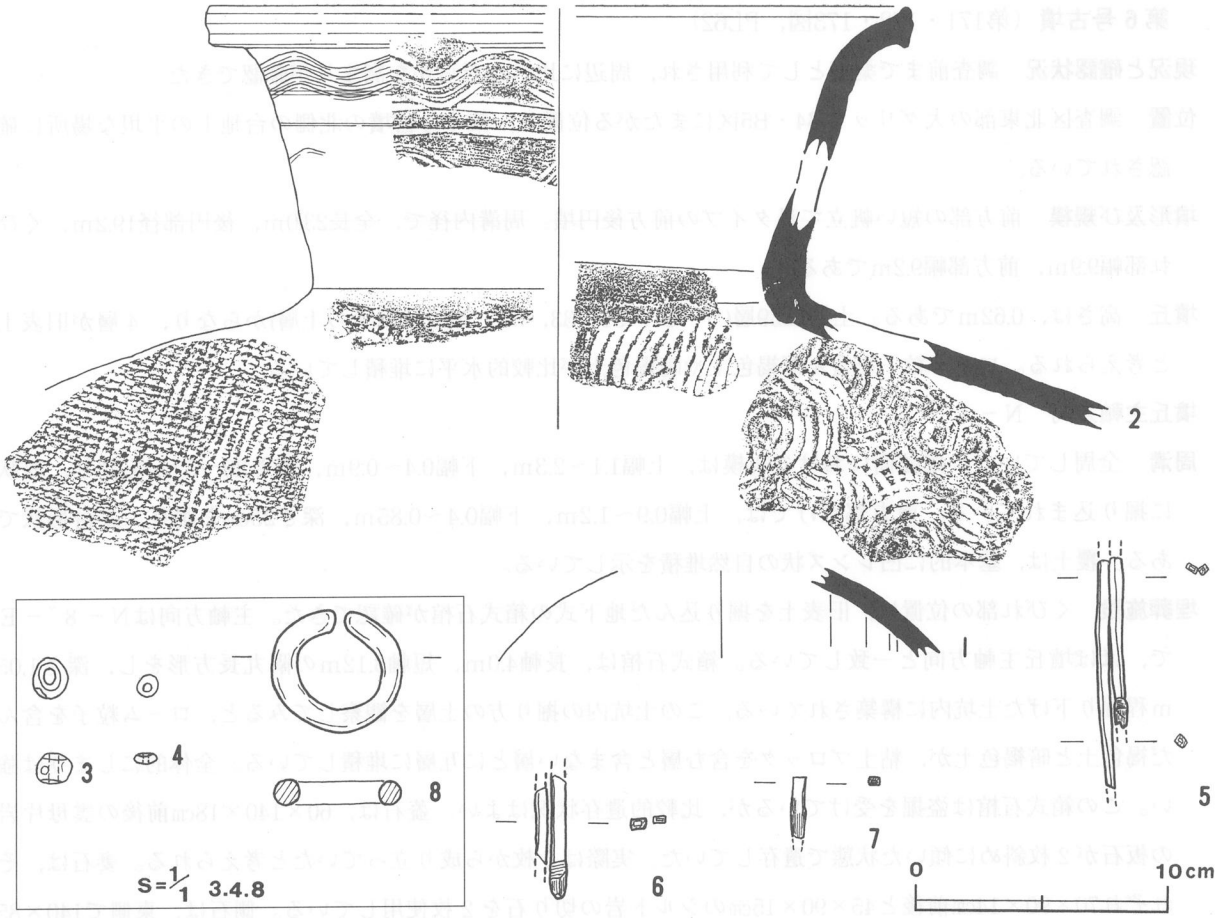
第168図　第5号古墳(2)



箱式石棺土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子中量，雲母片岩微量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック中量
4　灰褐色　粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
5　褐　色　ローム粒子中量
6　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量，炭化物少量
7　褐　色　ローム粒子中量
8　褐　色　ローム粒子・炭化物中量，粘土ブロック少量
9　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量
10　灰褐色　ローム粒子・粘土ブロック中量含み，粘性もしまりも強い
11　褐　色　ローム粒子中量
12　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量
13　褐　色　ローム粒子中量
14　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
15　褐　色　ローム粒子中量
16　灰褐色　ローム粒子中量，粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
17　褐　色　ローム粒子・炭化物中量，粘土ブロック少量
18　褐　色　ローム粒子中量
19　褐　色　ローム粒子中量
20　灰オリーブ色　ローム粒子少量，粘土ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
21　褐　色　ローム粒子中量
22　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック少量
23　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量
24　褐　色　ローム粒子中量
25　褐　色　ローム粒子中量
26　褐　色　ローム粒子・炭化物・粘土ブロック中量
27　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量
28　褐　色　ローム粒子中量
29　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量
30　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量，炭化物少量
31　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
32　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量
33　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量
34　褐　色　ローム粒子・炭化物・粘土ブロック中量
35　褐　色　ローム粒子・粘土ブロック中量
36　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック少量

第169図　第5号古墳(3)



第170図　第５号古墳出土遺物

第５号古墳出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第170図 1	横　瓶 須恵器	B　(3.5)	体部片。	ロクロ整形。体部外面カキ目。	細砂粒・白色粒 褐灰色 普通	P58　5％ 周溝覆土 在地産Ⅳ
2	甕 須恵器	A　[28.0] B　23.2	体部上端から口縁部片。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。端部は上下につまみ出す。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面沈線で区画し，その間に櫛描波状文が見られる。体部外面格子叩き，内面同心円当て具痕。	砂粒少・白色粒・雲母 灰色 普通	P24　15%　PL70 墳丘表採 新治産

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第170図 3	小　玉	0.5	0.5	0.4	0.1	ガラス	箱式石棺覆土	Q33　孔径0.1cm　PL70
4	小　玉	0.3	0.3	0.1	0.05	ガラス	箱式石棺覆土	Q34　孔径0.1cm　PL70

図版番号	種　別	計測値				材　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第170図 5	鉄　鏃	(9.2)	(1.3)	0.5	(13.0)	鉄	箱式石棺掘り方	M46　2本が付着，鏃身部欠損，木質の一部遺存，長頸　PL70
6	鉄　鏃	(4.9)	(1.2)	0.6	(5.3)	鉄	箱式石棺掘り方	M47　2本が付着，茎部片，木質の一部遺存，長頸　PL70
7	鉄　鏃	(2.4)	0.6	0.3	(0.7)	鉄	箱式石棺掘り方	M50　茎部片，木質の一部遺存
8	耳　環	1.7	1.6	0.3	1.4	銅	箱式石棺覆土	M51　銅地金張り　小形　中実　PL70

第6号古墳（第171・172・173図，PL62）

現況と確認状況　調査前まで桑畑として利用され，周辺に比べなだらかな高まりが確認できた。

位置　調査区北東部の大グリットB4・B5区にまたがる位置で，第4号古墳の北側の台地上の平坦な場所に確認されている。

墳形及び規模　前方部の短い帆立て貝タイプの前方後円墳。周溝内径で，全長23.0m，後円部径19.2m，くびれ部幅9.9m，前方部幅9.2mである。

墳丘　高さは，0.62mである。土層は39層(9～17，31～33，38・39層は周溝の土層)からなり，4層が旧表土と考えられる。ローム粒子を含んだ褐色土や暗褐色土が比較的水平に堆積している。

墳丘主軸方向　N－4°－E

周溝　全周している。確認面における規模は，上幅1.1～2.3m，下幅0.4～0.9m，深さ30～52cmを測り，皿状に掘り込まれている。前方部だけでは，上幅0.9～1.2m，下幅0.4～0.85m，深さ25cmを測り，逆台形状である。覆土は，基本的に凹レンズ状の自然堆積を示している。

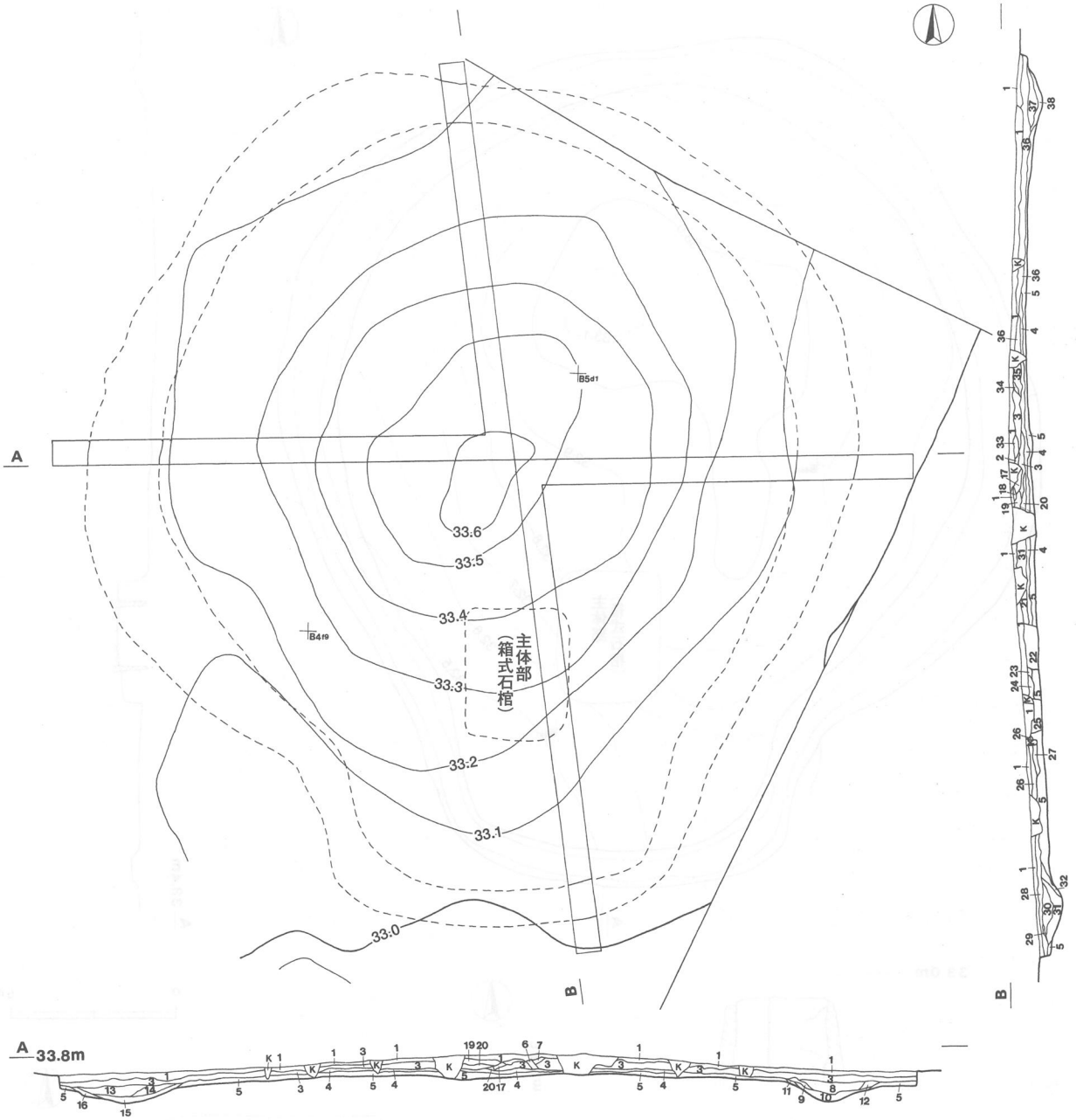
埋葬施設　くびれ部の位置に，旧表土を掘り込んだ地下式の箱式石棺が確認できた。主軸方向はN－8°－Eで，ほぼ墳丘主軸方向と一致している。箱式石棺は，長軸4.0m，短軸3.12mの隅丸長方形をし，深さ1.05m程掘り下げた土坑内に構築されている。この土坑内の掘り方の土層を観察してみると，ローム粒子を含んだ褐色土と暗褐色土が，粘土ブロックを含む層と含まない層とに互層に堆積している。全体的にしまりは強い。この箱式石棺は盗掘を受けているが，比較的遺存状況はよい。蓋石は，60×140×18cm前後の雲母片岩の板石が2枚斜めに傾いた状態で遺存していた。実際は4枚から成り立っていたと考えられる。妻石は，それぞれ70×90×14cm前後と45×90×15cmのシルト岩の切り石を2枚使用している。側石は，東側で140×85×20cm前後と78×70×18cm前後のシルト岩の切り石を，西側で70×85×16cm前後と125×[85]×18cm前後の切り石をそれぞれ2枚ずつ使用している。底石は，5～20cm前後の雲母片岩の割石を敷き詰めている。人骨は，箱式石棺の北西部に集積されて出土している。人骨の個体数は，2個体で，2個体とも青年から壮年の始であり，1体は男性であるが，もう1体の性別は不明である（付章2参照）。

遺物　箱式石棺からは，第174図4・7の須恵器長頸瓶が中央部覆土中層から出土している。周溝・盛土内からは遺物は出土しなかった。

所見　本跡は，箱式石棺の構造や湖西産の須恵器長頸瓶から7世紀代後葉の古墳と考えられる。

第6号古墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 1	長頸瓶 須恵器	A [8.0] B (3.5)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり，上位に稜をもつ。端部は上下につまみ出す。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内・外面釉付着。	白色粒・緻密 灰白色 (釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P25 5% 箱式石棺覆土 湖西産
2	長頸瓶 須恵器	A [4.7] B (2.2)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内・外面釉付着。	緻密 褐灰色 (釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P26 5% 箱式石棺覆土 湖西産
3	長頸瓶 須恵器	A [5.5] B (3.4)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒やや多・白色粒 褐灰色 普通	P27 5% 箱式石棺覆土 搬入品
4	ﾌﾗｽｺ形長頸瓶 須恵器	B (9.4)	体部上位から口縁部下位片。体部上位は内彎して立ち上がり，口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内・外面及び体部外面釉付着。	白色粒・黒色斑点 褐灰色 (釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P28 25% PL70 箱式石棺覆土 湖西産

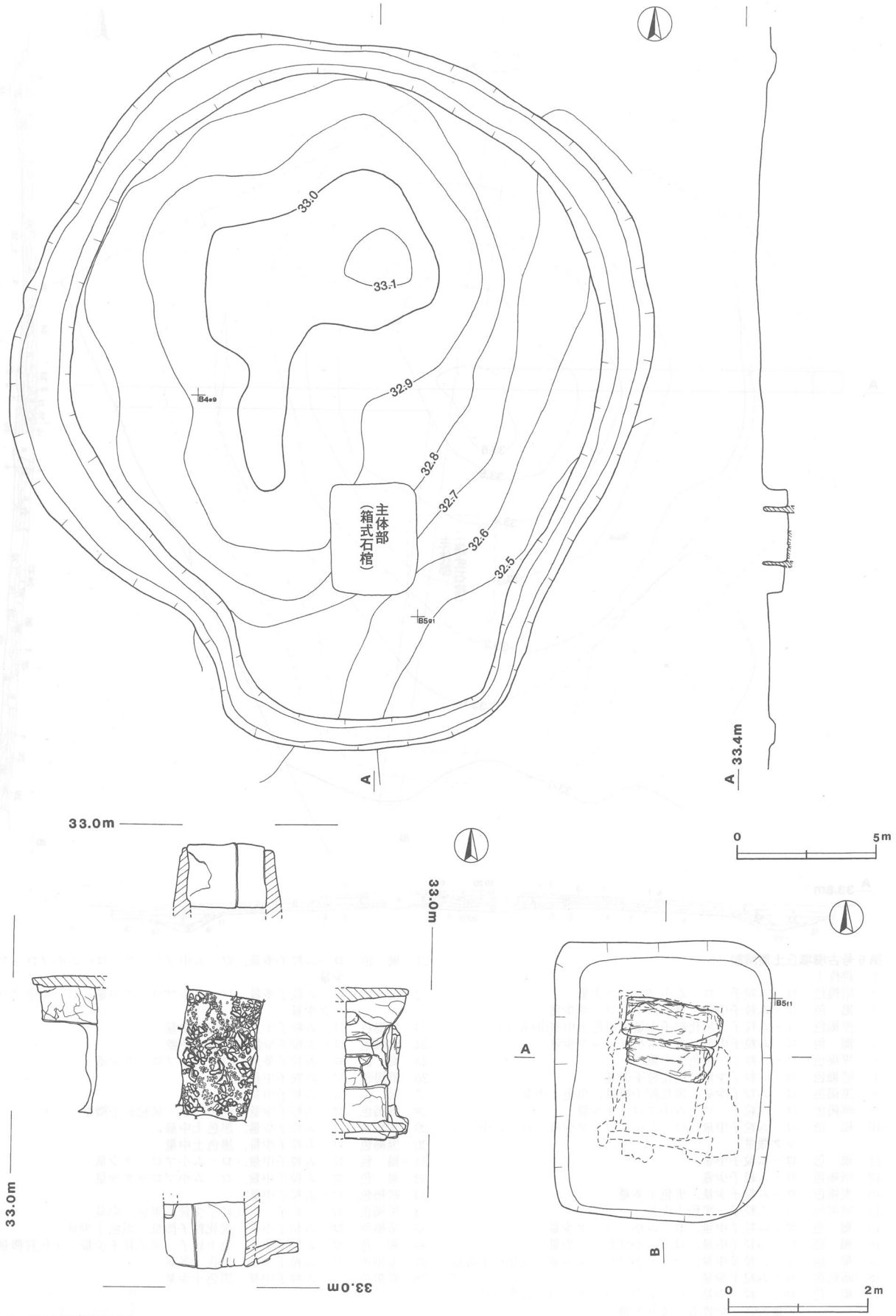


第6号古墳墳丘土層解説

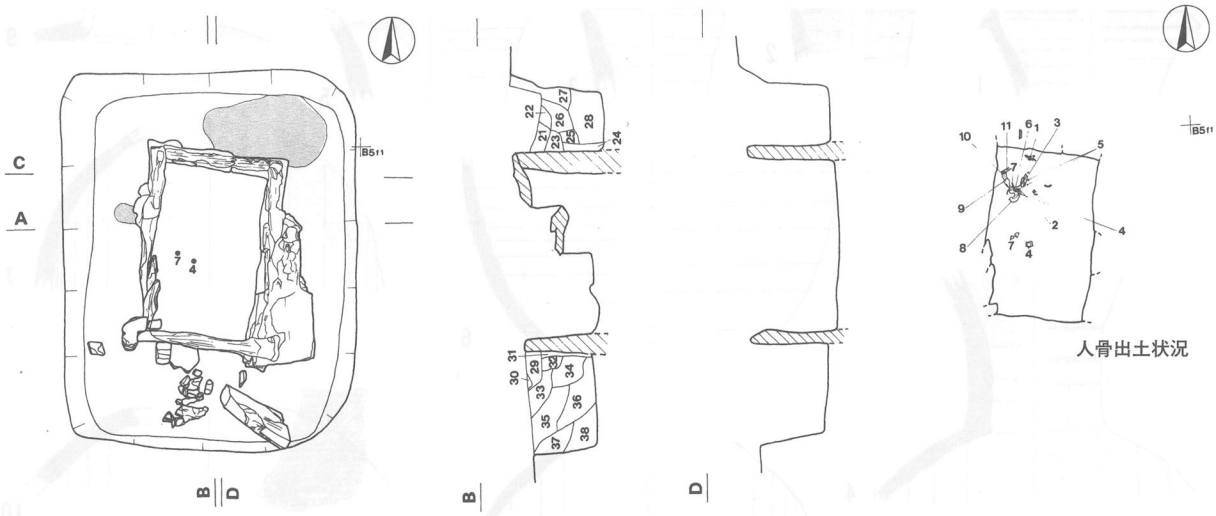
1　耕作土
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，黒色土中量(旧表土)
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　黒褐色　ローム粒子・黒色土中量
7　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
8　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量，黒色土中量
9　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
10　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
11　褐　色　ローム粒子中量
12　暗褐色　ローム粒子少量
13　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
14　暗褐色　ローム粒子・黒色土少量
15　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
16　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
17　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
18　暗褐色　ローム粒子少量
19　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
20　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
21　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
22　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
23　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
24　極暗褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
25　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
26　暗褐色　ローム粒子中量
27　褐　色　ローム粒子中量
28　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
29　暗褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
30　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
31　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
32　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
33　暗褐色　ローム粒子中量
34　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，黒色土中量
35　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子微量，黒色土少量
36　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，炭化材微量
37　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
38　暗褐色　ローム粒子中量，黒色土少量

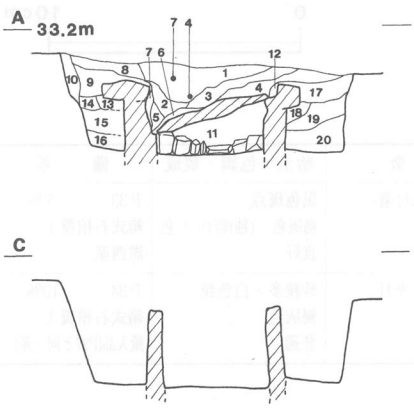
0　5m

第171図　第6号古墳(1)



第172図　第６号古墳(2)





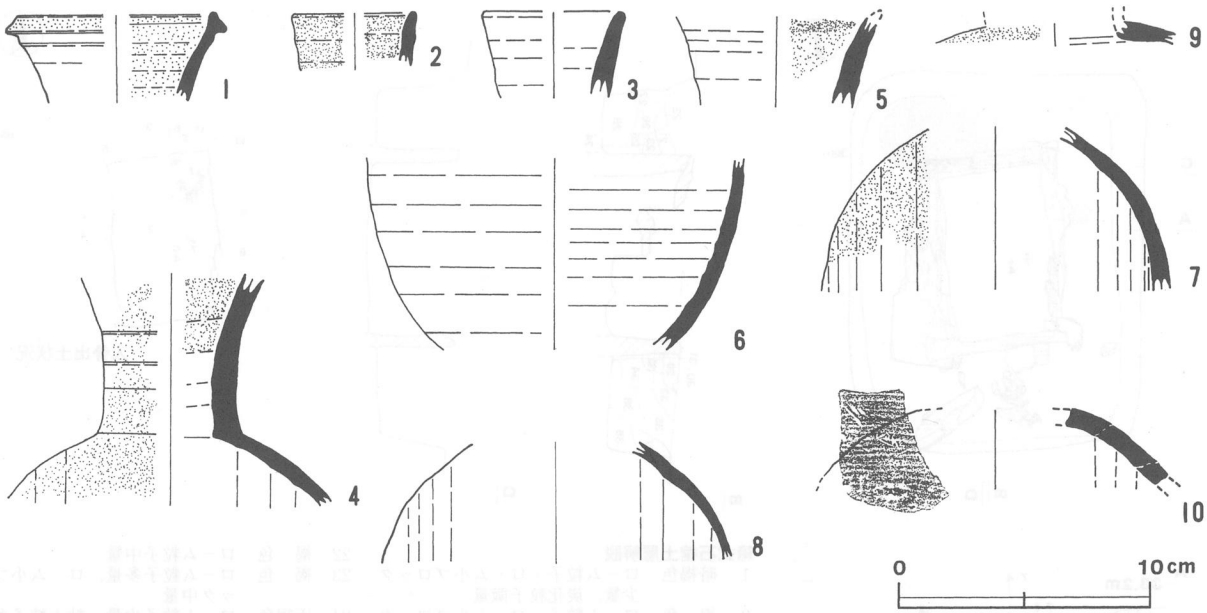
箱式石棺土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
2 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック少量，砂粒微量
3 褐 色 ローム粒子多量，粘土粒子少量
4 褐 色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・粘土ブロック少量
5 褐 色 ローム粒子・ローム中ブロック多量，粘土ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
6 褐 色 ローム粒子・粘土ブロック中量
7 明褐色 ローム粒子多量，粘土ブロック中量
8 褐 色 ローム粒子多量，炭化粒子微量
9 褐 色 ローム粒子多量，粘土ブロック中量
10 明褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
11 黒褐色 ローム粒子少量
12 暗褐色 ローム粒子少量，粘土粒子中量
13 暗褐色 ローム粒子・粘土ブロック中量，シルト岩少量
14 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
15 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
16 暗褐色 ローム粒子少量
17 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，シルト岩中量
18 褐 色 ローム粒子中量
19 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
20 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
21 灰褐色 ローム粒子少量，粘土粒子多量
22 褐 色 ローム粒子中量
23 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
24 灰褐色 ローム粒子少量，粘土粒子多量
25 にぶい褐色 ローム粒子・粘土粒子中量，シルト岩少量
26 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
27 褐 色 ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
28 褐 色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
29 灰褐色 ローム粒子中量，粘土粒子多量含み，粘性もしまりも極めて強い
30 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
31 褐灰色 ローム粒子少量，粘土粒子多量
32 灰褐色 ローム粒子中量，粘土粒子少量，シルト岩多量含み，粘性もしまりも強い
33 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
34 褐 色 ローム粒子中量，粘土粒子・シルト岩少量
35 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
36 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
37 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
38 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

0 2m

第173図　第6号古墳(3)

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第174図 5	長頸瓶 須恵器	B (3.1)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面釉付着。	緻密 黄灰色 (釉)暗オリーブ色 良好	P29 5% 箱式石棺覆土 湖西産
6	長頸瓶 須恵器	B (7.1)	体部片。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。	白色粒 黄灰色 良好	P30 10% 箱式石棺覆土 湖西産
7	フラスコ形長頸瓶 須恵器	B (6.5)	体部片。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。体部上位釉付着。	白色粒・黒色斑点 褐灰色 (釉)オリーブ褐色 良好	P31 10% 箱式石棺覆土 湖西産
8	フラスコ形長頸瓶 須恵器	B (4.9)	体部片。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。	白色粒・黒色斑点 褐灰色 普通	P32 10% 箱式石棺覆土 湖西産



第174図　第６号古墳出土遺物

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 9	長頸瓶 須恵器	B (0.9)	体部上端片。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。体部上位釉付着。	黒色斑点 褐灰色 (釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P33 5% 箱式石棺覆土 湖西産
10	瓶 須恵器	B (3.1)	体部上端片。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。体部外面カキ目。	砂粒多・白色粒 褐灰色 普通	P34 10% 箱式石棺覆土 搬入品(P27と同一産)

第７号古墳（第175・176・177図，PL63・64）

現況と確認状況　調査前まで山林として利用されていた。事前調査の段階では，墳丘が既に失われていたため，全くその存在は不明であった。古墳は，試掘・表土除去・遺構確認の一連の調査の過程で，周溝が確認され，始めてその存在が明かになったものである。

位置　調査区南西部の大グリットD3の位置で，第２号古墳の西側の台地上の平坦な場所に確認されている。

墳形及び規模　長方墳。周溝内法で，長軸12.5m，短軸8.0mである。

墳丘　既に隠滅され，封土の状況は不明である。

墳丘主軸方向　N－14°－E

周溝　ほぼ全周しているが，東側中央部から北寄りの部分に陸橋部としての掘り残しが見られる。確認面における規模は，上幅1.4～2.5m，下幅0.5～1.65m，深さ24～48cmを測り，皿状に掘り込まれている。覆土は，基本的に凹レンズ状の自然堆積を示している。

埋葬施設　墳丘中央部からやや南側周溝に寄った位置に，旧表土を掘り込んだ地下式の箱式石棺が確認できた。主軸方向はN－６°－Eで，ほぼ墳丘主軸方向と一致している。箱式石棺は，長軸3.0m，短軸1.63mの隅丸長方形をし，深さ1.08m程掘り下げた土坑内に構築されている。この土坑内の掘り方の土層を観察してみると，ローム粒子を含んだ褐色土が，しまりの強い層と普通の層とで互層に堆積している。この箱式石棺は盗掘を受けているが，比較的遺存状況はよい。蓋石は，65×112×９cm前後の雲母片岩の板石が１枚遺存していた。実際は３枚から成り立っていたと考えられる。妻石は，北側のみ遺存し，80×80×10cm前後の雲母片岩の板石１枚横位に使用している。側石は，東側・西側共に北側妻石に接する１枚のみが遺存している。東

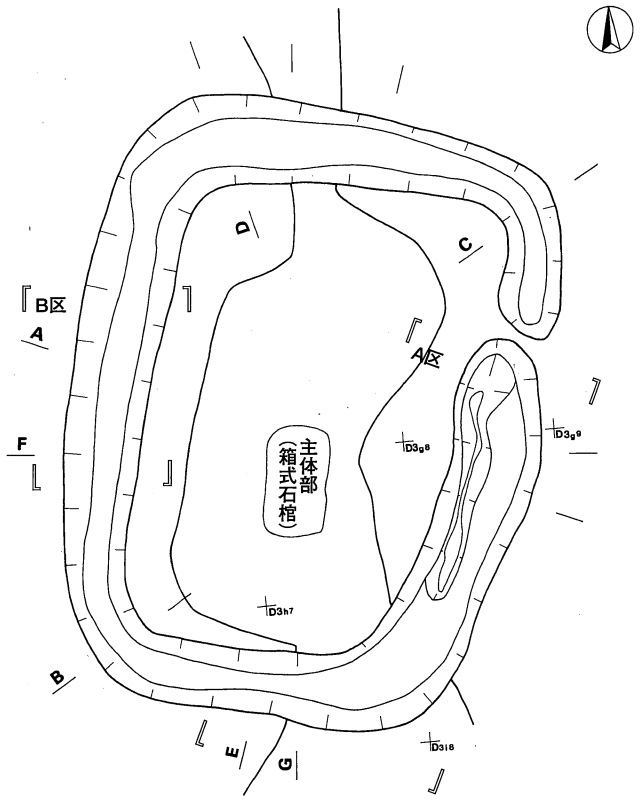
側で，68×80×12cm前後の雲母片岩の板石１枚，西側で72×80×15cm前後の雲母片岩の板石１枚を，それぞれ横位に使用している。底面の石材の抜き取り痕から，実際は南側妻石は１枚の板石を，側石は東・西側両方とも３枚の板石を使用していたものと考えられる。底石は，５～15cm前後の雲母片岩の割石を部分的に敷いている。覆土を全て篩にかけたが骨片は確認できなかった。

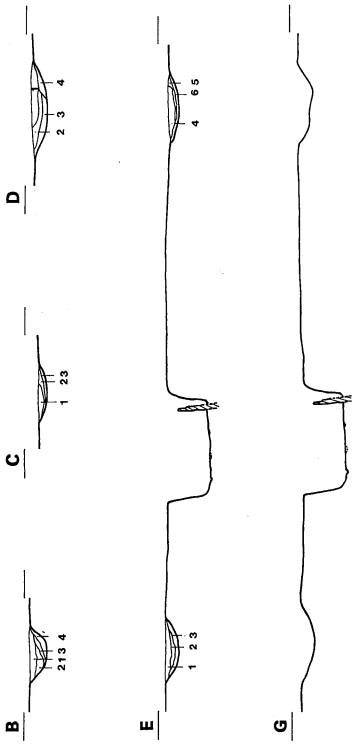
遺物　箱式石棺からは，第178図６・７の須恵器長頸瓶が南部覆土中層から出土している。５の須恵器長頸瓶は，箱式石棺と周溝内から出土したものが接合されたものである。東部南側周溝から南部東側周溝にかけては，つぶれた状態で極めて多量の須恵器が出土しているので，意図的に投棄したような様相である。また，この部分からは雲母片岩の割石も多量に出土している。周溝のこの部分から１の須恵器坏，２の須恵器横瓶，３のフラスコ形長頸瓶，８の須恵器高坏の脚部が出土している。

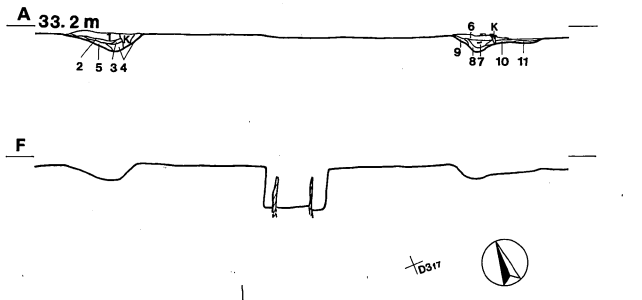
所見　本跡は，箱式石棺の構造や湖西産の須恵器長頸瓶，新治産の須恵器坏・蓋から７世紀代末葉から８世紀初頭の古墳と考えられる。周溝からは猿投産のフラスコ形長頸瓶が出土しているが，これは伝世と考えられる。

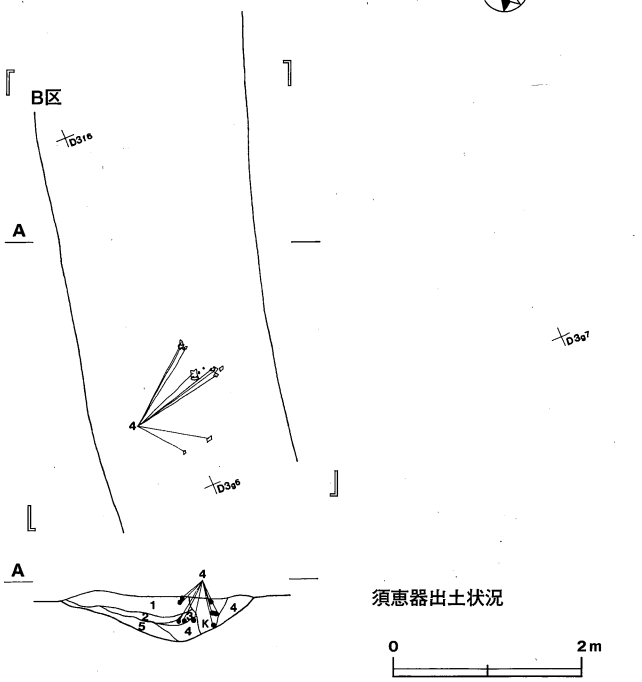
第７号古墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第178図 1	坏 須恵器	A [13.7] B (4.0)	体部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁端部内面凹線が巡る。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。	透明粒・雲母 灰白色 普通	P35 20% PL70 周溝覆土 新治産
2	横瓶 須恵器	B (23.0) 最大径 (44.0)	体部片。体部は横長の球形(ラグビーボール)状である。体部の側面を円形の粘土板で閉鎖している。	輪積み整形。体部外面平行叩きと平行叩き後ヘラナデ，内面回転ナデ。	白色粒・黒色斑点 灰黄褐色 普通	P36 40% PL70 周溝覆土 湖西産
3	ﾌﾗｽｺ形長頸瓶 須恵器	B (20.5)	口縁部一部欠損。体部は球形状で，口縁部は直立して立ち上がり，上位で外傾する。	ロクロ整形。口縁部から体部上位に釉付着。	白色粒・黒色斑点 褐灰色 (釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P37 60% 周溝覆土 猿投産
4	ﾌﾗｽｺ形長頸瓶 須恵器	A 9.0 B (16.5)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立して立ち上がり，上位で段を持ち，外反する。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部から体部外面釉付着。	白色粒・黒色斑点 灰白色 (釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P38 40% 周溝覆土 湖西産
5	長頸瓶 須恵器	A [11.2] B (22.2)	体部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり，上位で屈曲する。口縁部は直立して立ち上がり，上位で外反し，端部は上下につまみ出す。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面及び体部外面上位釉付着。	白色粒・黒色斑点 黄灰色 (釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P39 50% PL70 周溝と箱式石棺覆土 湖西産
6	長頸瓶 須恵器	B (11.4)	頸部から口縁部片。口縁部は直立して立ち上がる。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面釉付着。	礫少・白色粒 灰白色 (釉)ｵﾘｰﾌﾞ褐色 良好	P40 25% PL70 箱式石棺覆土 湖西産
7	ﾌﾗｽｺ形長頸瓶 須恵器	A [12.1] B (3.8)	口縁部片。口縁部は上位で段を持ち外反し，端部は上下につまみ出す。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面釉付着。	白色粒 灰黄褐色 (釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P41 10% 箱式石棺覆土 湖西産
8	高坏 須恵器	B (4.0) D [10.3]	脚部片。脚部はラッパ状に開き，裾部に稜を有する。	ロクロ整形。脚部内・外面横ナデ。	白色粒 褐灰色 普通	P42 10% PL70 周溝覆土 湖西産
9	ﾌﾗｽｺ形長頸瓶 須恵器	A [12.4] B (4.2)	口縁部片。口縁部は上位で段を持ち，外反し，端部は上下につまみ出す。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。	黒色粒・緻密 灰黄褐色 良好	P43 5% 箱式石棺覆土 湖西産
10	長頸瓶 須恵器	A [10.8] B (1.9)	口縁部片。口縁部は上位で段を持ち，外反し，端部は上下につまみ出す。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面釉付着。	黒色斑点 灰白色 (釉)ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P44 5% 周溝覆土 湖西産
11	細頸瓶 須恵器	B (2.4)	頸部片。頸部は直立する。	ロクロ整形。頸部内・外面横ナデ。	白色粒・黒色斑点 褐灰色 (釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P45 5% 周溝覆土 猿投産
12	長頸瓶 須恵器	B (2.6)	体部上端片。体部上端は屈曲する。	ロクロ整形。	白色粒 褐灰色 普通	P46 5% 周溝覆土 湖西産









須恵器出土状況

0　2m

0　5m

第7号古墳周溝土層解説

A－A′
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
9　褐　色　ローム粒子中量
10　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
11　褐　色　ローム粒子中量

B－B′
1　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子・黒色土ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子多量

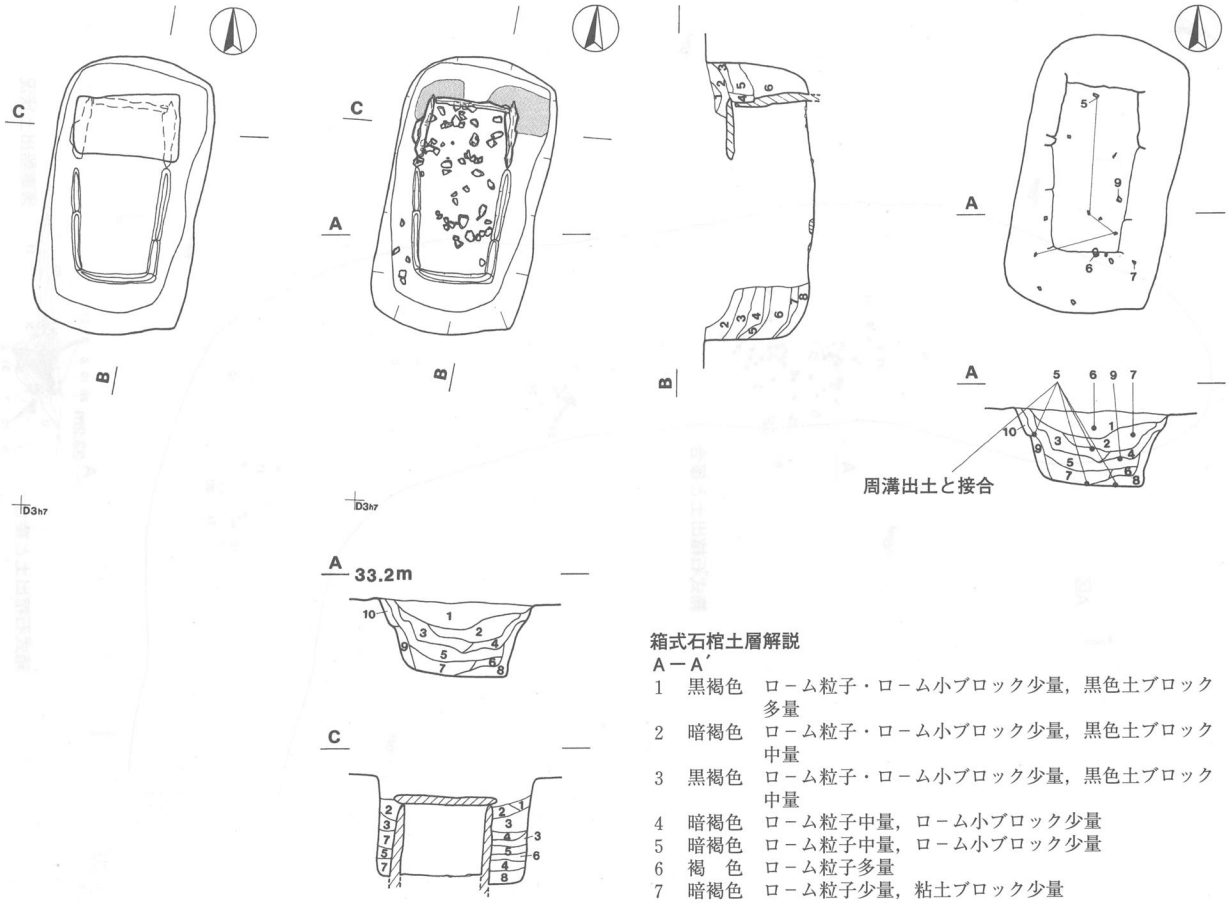
C－C′
1　褐　色　ローム粒子中量含み，粘性もしまりも強い
2　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子多量

D－D′
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子少量

E－E′
1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子微量
3　褐　色　ローム粒子多量
4　黒褐色　ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子中量
6　褐　色　ローム粒子多量

第175図　第7号古墳(1)

第176図　第７号古墳(2)



箱式石棺土層解説

A－A′

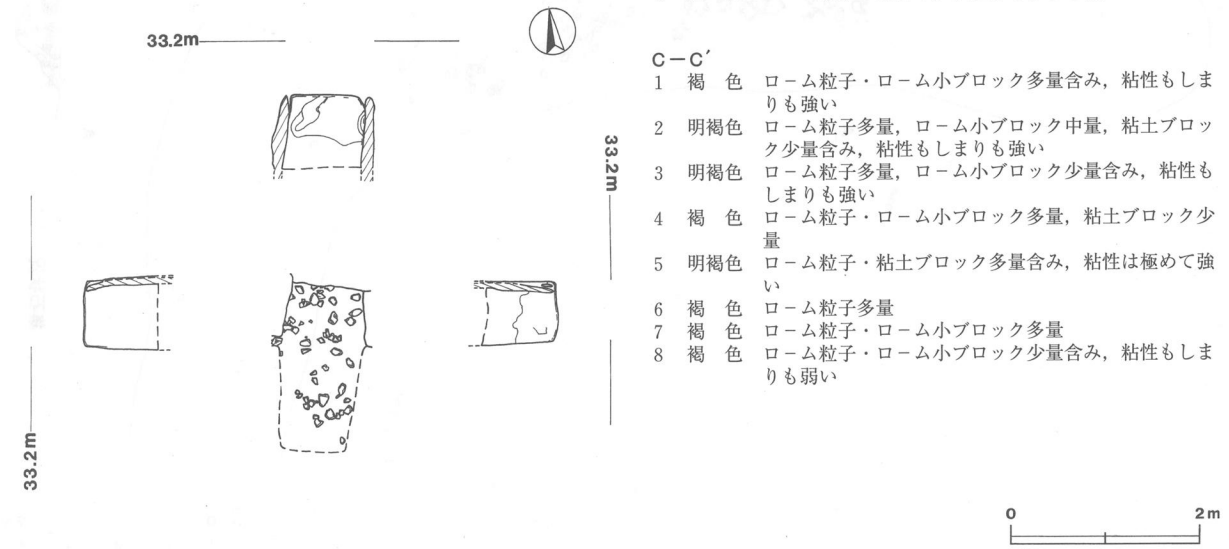
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック多量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
3　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子多量
7　暗褐色　ローム粒子少量，粘土ブロック少量
8　褐　色　ローム粒子中量
9　暗褐色　ローム粒子・粘土ブロック中量
10　褐　色　ローム粒子多量

B－B′

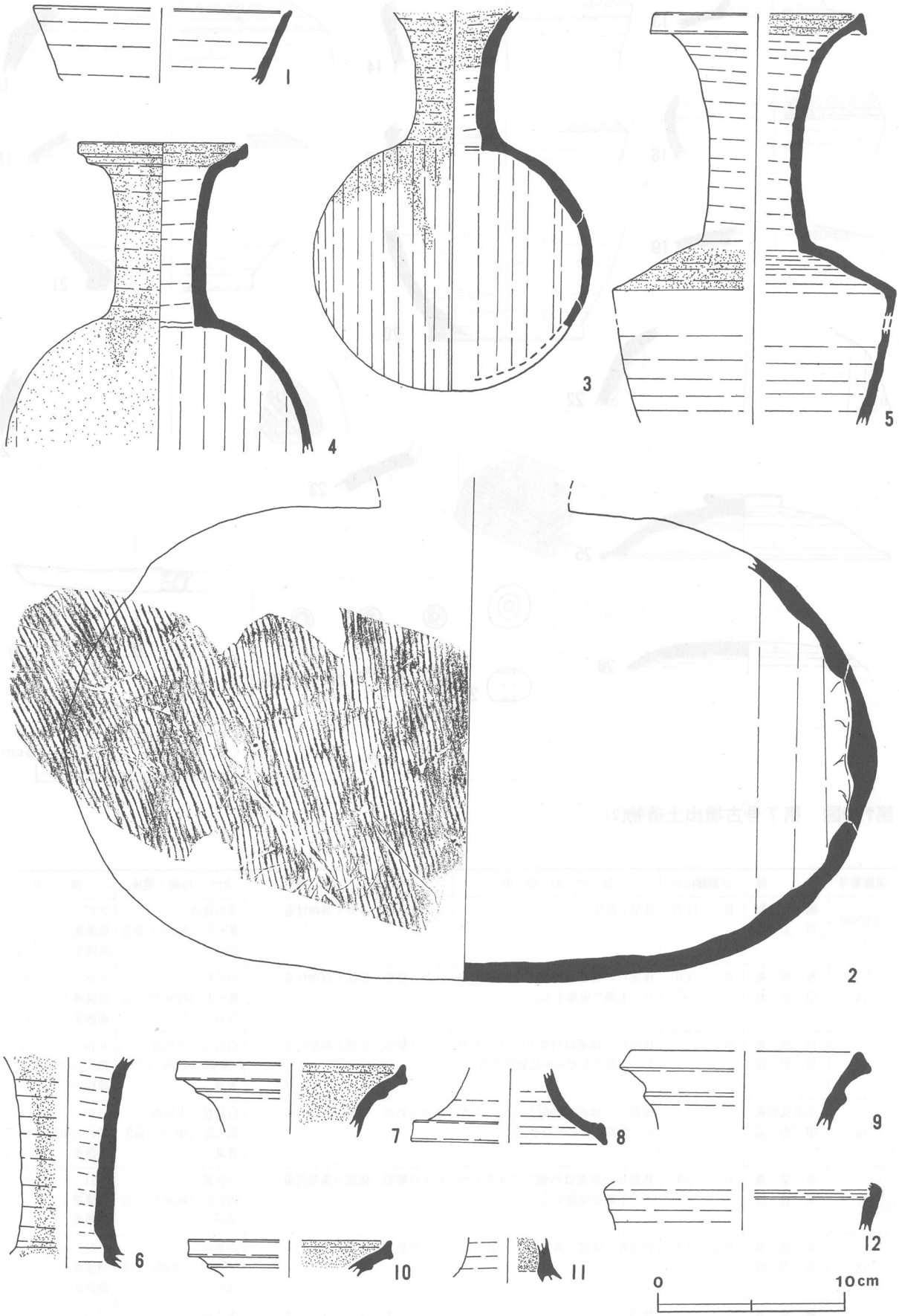
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子中量
8　褐　色　ローム粒子中量含み，粘性もしまりも強い

C－C′

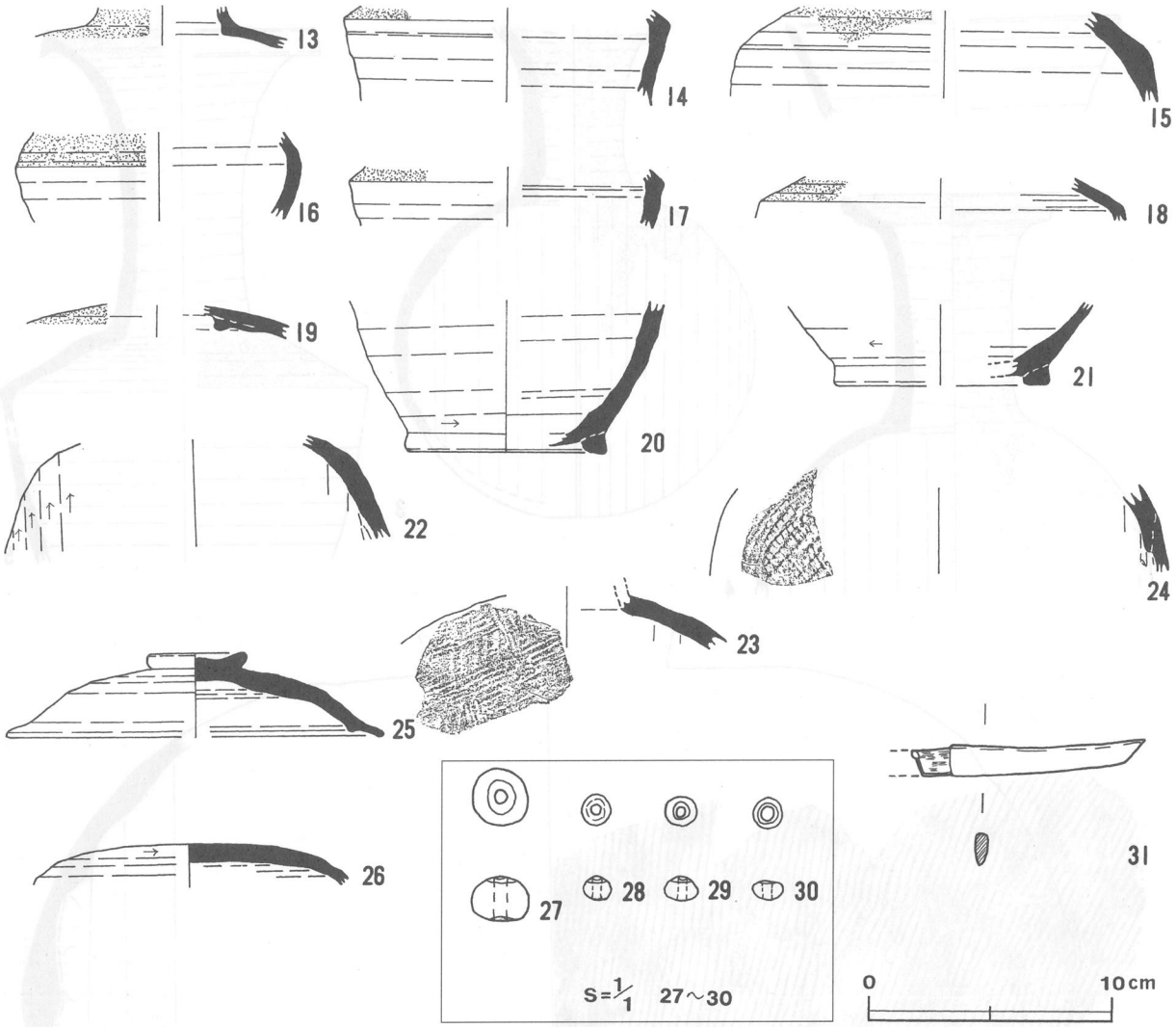
1　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量含み，粘性もしまりも強い
2　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，粘土ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
3　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量含み，粘性もしまりも強い
4　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，粘土ブロック少量
5　明褐色　ローム粒子・粘土ブロック多量含み，粘性は極めて強い
6　褐　色　ローム粒子多量
7　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量
8　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量含み，粘性もしまりも弱い



第177図　第７号古墳(3)



第178図　第７号古墳出土遺物(1)



第179図　第７号古墳出土遺物(2)

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第179図 13	細頸瓶 須恵器	B　(1.7)	体部上端片。	ロクロ整形。体部上端釉付着。	黒色斑点 褐灰色　(釉)ｵﾘｰﾌﾞ褐色 良好	P47　5％ 周溝覆土 湖西産
14	長頸瓶 須恵器	B　(4.0)	体部片。体部は外傾して立ち上がり，上端で屈曲する。	ロクロ整形。体部上端釉付着。	白色粒 褐灰色　(釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P48　5％ 周溝覆土 湖西産
15	長頸瓶 須恵器	B　(3.7)	体部片。体部は外傾して立ち上がり，上端でなだらかに屈曲する。	ロクロ整形。体部上端釉付着。	白色粒・黒色斑点 灰黄褐色　(釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P49　5％ 箱式石棺確認面 湖西産
16	小形長頸瓶 須恵器	B　(3.7)	体部片。体部は内彎して立ち上がり，体部上位に凹線が巡る。	ロクロ整形。体部上位釉付着。	白色粒・黒色斑点 褐灰色　(釉)ｵﾘｰﾌﾞ褐色 普通	P50　5％ 箱式石棺確認面 湖西産
17	長頸瓶 須恵器	B　(2.5)	体部片。体部は外傾して立ち上がり，上端で屈曲する。	ロクロ整形。体部上端釉付着。	白色粒 褐灰色　(釉)灰ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P51　5％ 周溝覆土 湖西産
18	長頸瓶 須恵器	B　(1.8)	体部片。体部上端で屈曲する。	ロクロ整形。体部上端釉付着。	白色粒 灰黄褐色　(釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 良好	P52　5％ 周溝覆土 湖西産
19	細頸瓶 須恵器	B　(1.2)	体部片。	ロクロ整形。体部上端釉付着。	黒色斑点 灰黄褐色　(釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ色 普通	P53　5％ 周溝覆土 湖西産

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 20	長頸瓶 須恵器	B (6.4) D 8.0 E 0.8	丸底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。体部下端回転ヘラ削り。	白色粒 褐灰色 普通	P54 15% PL70 周溝覆土 湖西産
21	長頸瓶 須恵器	B (3.4) D [8.8] E 0.9	丸底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒少・白色粒 褐灰色 普通	P55 10% PL70 周溝覆土 湖西産
22	横瓶 須恵器	B (4.4)	体部片。	ロクロ整形。体部回転ヘラ削り。	礫多・白色粒多 褐灰色 普通	P56 5% 周溝覆土 在地産Ⅲ
23	横瓶 須恵器	B (2.2)	体部片。	ロクロ整形。体部外面カキ目。	礫少・白色粒・透明粒 黄灰色 普通	P57 5% 周溝覆土 在地産Ⅳ
24	横瓶 須恵器	B (3.1)	体部片。	ロクロ整形。体部外面格子叩き。	細砂粒・白色粒 褐灰色 普通	P59 5% 周溝確認面 在地産Ⅳ
25	蓋 須恵器	A [15.4] B 3.5 F 3.8 G 0.7	天井部から緩やかに内彎しながら口縁部に至る。内面にかえりが付く。つまみは偏平で，中央部はわずかに突出する。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	細砂粒多・白色粒・透明粒・雲母 褐灰色 不良	P60 40% PL70 周溝覆土 新治産
26	蓋 須恵器	B (1.8)	天井部は平坦で，緩やかに内彎しながら垂下する。	天井部回転ヘラ削り。	白色粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P61 30% PL70 周溝覆土 新治産

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第179図27	小玉	0.8	0.8	0.6	0.5	ガラス	箱式石棺覆土	Q35 孔径0.2cm PL71
28	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	箱式石棺覆土	Q36 孔径0.1cm PL71
29	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	箱式石棺覆土	Q37 孔径0.1cm PL71
30	小玉	0.4	0.4	0.3	0.05	ガラス	箱式石棺覆土	Q38 孔径0.1cm PL71

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第179図31	刀子	(9.8)	1.0	0.5	(17.2)	鉄	箱式石棺覆土	M52 木質の一部遺存 PL70

表18 成田古墳群古墳一覧表

古墳名	位置(区)	墳形	墳丘規模（m）					墳丘主軸方向	埋葬施設			周溝			備考 旧 → 新
			全長	後円部径	くびれ部幅	前方部幅	残存高		主体部	主軸方向	遺物	幅(m)	深さ(cm)	遺物	
1	C4・D4	方墳	長軸 9.1 短軸 8.1		－	－	0.6	N-37°-E	箱式石棺	N-53°-W		上幅1.3～2.0 下幅0.3～0.9	24～46		7世紀代
2	D4	円墳	長径 11.3 短径 9.8		－	－	0.7	N-5°-E	第1箱式石棺	N-34°-W	須恵器(長頸瓶)，ガラス製小玉	上幅1.1～2.5 下幅0.4～1.1	32～50		第2箱式石棺→第1箱式石棺 7世紀末葉～8世紀初頭 墳丘から鉄斧出土
									第2箱式石棺	N-44°-W					
3	C4	円墳	18.0	－	－	－	1.28	N-33°-W	横穴式石室	N-33°-W	玄室（壺鐙・鞍具・轡・飾金具・杏葉・人骨・ガラス製小玉） 羨道（杏葉） 墓道（長頸瓶・鉄鏃）	上幅1.7～2.5 下幅0.2～1.0	58～80		7世紀中葉から8世紀初頭
									箱式石棺	N-11°-W	杏葉				
4	B4・B5 C4・C5	円墳	11.8	－	－	－	0.58	N-23°-W	横穴式石室	N-23°-W		上幅1.1～2.5 下幅0.5～0.8	26～62	集石あり	7世紀代
5	C5	円墳	長径 18.3 短径 14.7		－	－	0.62	N-43°-E	箱式石棺	N-36°-E	ガラス製小玉，鉄鏃，人骨	上幅1.1～2.3 下幅0.4～0.9	30～52	須恵器（横瓶）	墳丘から須恵器甕出土 7世紀中葉以降
6	B4・B5	前方後円墳	23.0	19.2	9.9	9.2	0.62	N-4°-E	箱式石棺	N-8°-E	須恵器（長頸瓶・フラスコ形長頸瓶），人骨	上幅0.9～2.3 下幅0.4～0.9	25～52		7世紀後葉
7	D3	長方墳	長軸 12.5 短軸 8.0		－	－	－	N-14°-E	箱式石棺	N-6°-E	須恵器(長頸瓶)，ガラス製小玉	上幅1.4～2.5 下幅0.5～1.65	24～48	須恵器（坏・横瓶・フラスコ形長頸瓶・高坏・蓋），集石あり	7世紀末葉～8世紀初頭

4　埋設遺構

今回の調査では，平安時代の埋設遺構１基を検出した。以下，検出した埋設遺構の特徴や遺物に付いて記載する。

第１号埋設遺構（第180図，PL64）

位置　調査区東部，C5f7区に確認されている。本跡は，第５号古墳の南側に位置し，なだらかに傾斜した位置である。

規模と形状　直径75cmの不整な円形で，深さ38cmである。

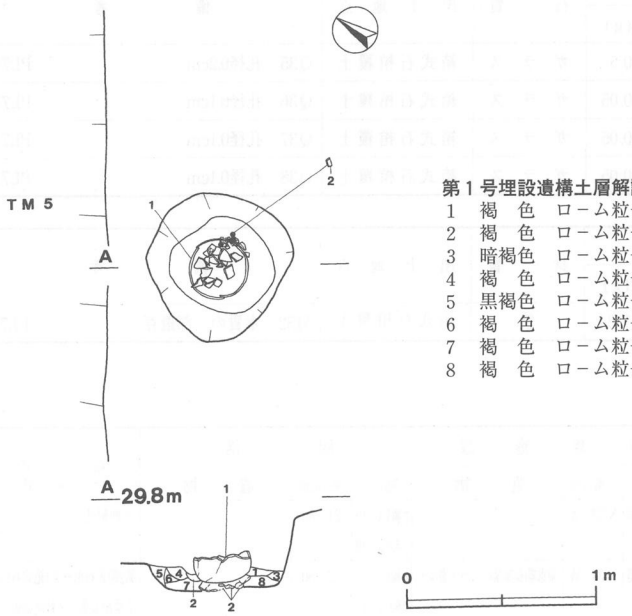
長径方向　N－37°－W

壁　壁高38cm程で，垂直に立ち上がっている。

底面　平坦。

覆土　８層からなり，ローム粒子を少量含んだ褐色土や暗褐色土や黒褐色土が堆積し，人為的に埋め戻した様相を示している。

遺物　土坑内から第181図１の須恵器甕は逆位の状態で，その下から２の須恵器坏がつぶれた状態で出土している。底部片の出土状況から，実際には坏は正位の状態であったものと推測される。甕内にはローム粒子を少量含んだ黒褐色土が堆積し，この土を篩にかけたところ，わずかな骨片が確認できた。



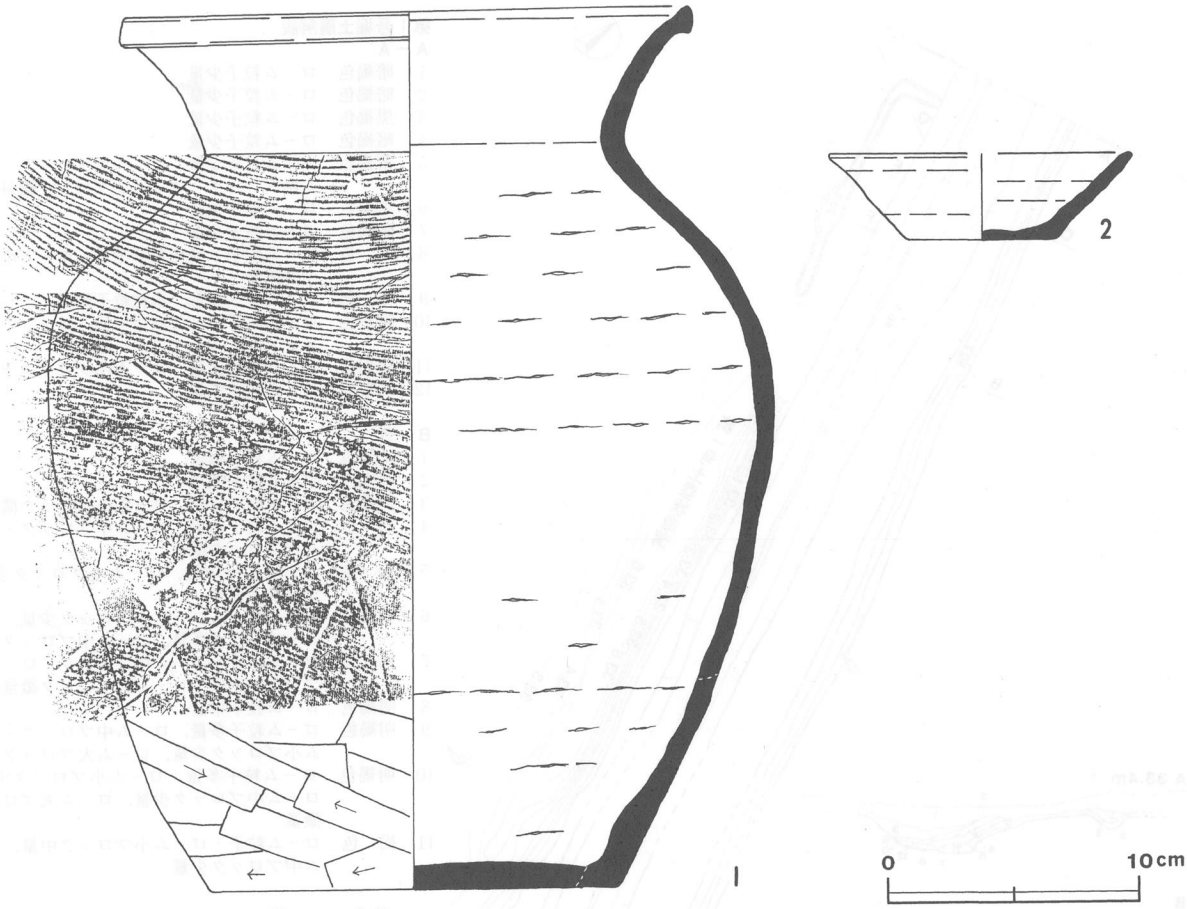
第１号埋設遺構土層解説

1　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子微量
5　黒褐色　ローム粒子少量
6　褐　色　ローム粒子微量
7　褐　色　ローム粒子微量
8　褐　色　ローム粒子微量

第180図　第１号埋設遺構

第１号埋設遺構出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第181図 1	甕 須恵器	A 22.7 B 35.2 C 16.4	平底。体部は長胴気味に内彎して立ち上がり，口縁部は頸部から外反して立ち上がる。口縁端部は上下につまみ出す。	粘土紐巻き上げ後横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位の平行叩き，下端ヘラ削り。	細砂粒・白色粒・雲母 褐灰色 普通	P62　70%　PL71 新治産
2	坏 須恵器	A [11.9] B 3.4 C 6.0	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	ロクロ整形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒多・白色粒・透明粒・雲母多 にぶい橙色 普通	P63　30%　PL71 新治産 内・外面摩滅



第181図　第１号埋設遺構出土遺物

所見　出土した須恵器は共に新治産で，甕は８世紀代，坏は９世紀中葉のものであることから，本跡の年代は９世紀中葉と考えられる。

5　堀・溝

今回の調査では，堀・溝４条を検出した。以下，検出した堀・溝の特徴や遺物に付いて記載する。

第１号堀（SD１　第182・183図，PL64）

位置　調査区北東部から南西部に向かって，大グリッドB3，C2・3，D2・3区を横切って確認されている。本跡に並行して，第２号溝と第１号土塁状遺構が確認されている。

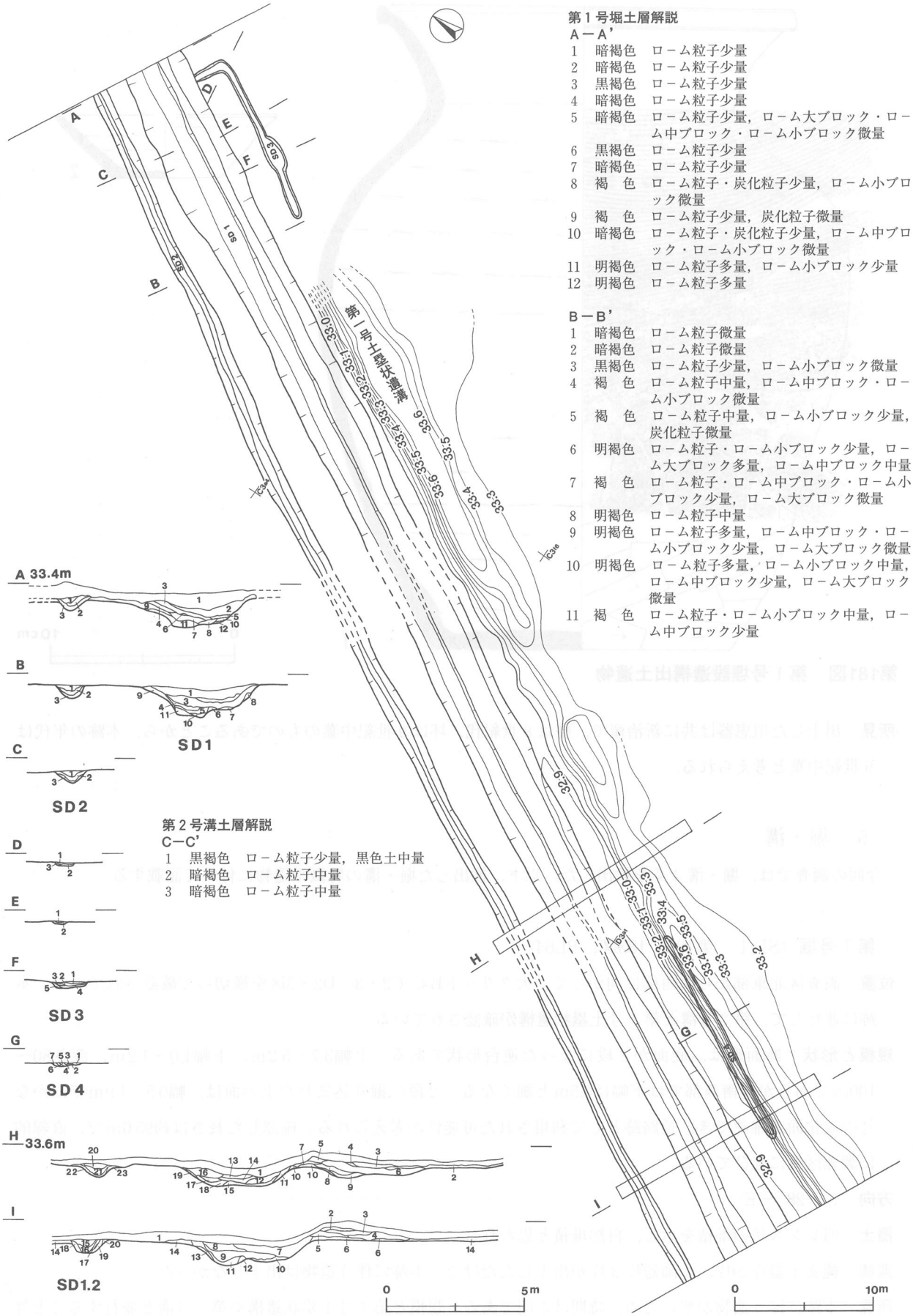
規模と形状　断面形は，底面が２段になった逆台形状である。上幅3.7～5.2m，下幅1.0～1.2m，深さ80～100cmであるが，南西部では下幅は0.5mと細くなる。２段に掘り込まれた上の面は，幅0.5～1.9mで，かなりの硬化面が確認でき，道路跡として利用された可能性が考えられる。確認した長さは約95.0mで，直線的に調査区外に延びている。

方向　N－28°－E

覆土　凹レンズ状の堆積を示し，自然堆積と思われる。

遺物　縄文土器片29片，土師器片３片が出土しただけで，本跡に伴う遺物は出土しなかった。

所見　本跡に伴う遺物が無いため，時期は不明である。規模と第１号土塁状遺構や第２号溝と並行すること等から，館跡に関わる堀の可能性も考えられる。



第182図　第1号堀，第2・3・4号溝，第1号土塁状遺構

第3号溝土層解説

D—D'

1　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム粒子中量

E—E'

1　暗褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量

F—F'

1　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
2　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子中量

第4号溝土層解説

G—G'

1　褐　色　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
4　暗褐色　ローム粒子・黒色土少量，ローム小ブロック微量
5　黒褐色　ローム粒子・黒色土少量，ローム小ブロック微量
6　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，黒色土中量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量

第1号堀，第2号溝，第1号土塁状遺構土層解説

H—H'

1　耕作土
2　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
3　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土多量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・小礫少量
5　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
7　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
8　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土多量
9　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，黒色土中量
10　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
11　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
12　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
13　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
14　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
15　黒褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，黒色土中量含み，粘性もしまりも強い
16　黒　色　ローム粒子少量，黒色土多量
17　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
18　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土中量
19　暗褐色　ローム粒子中量
20　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量，黒色土多量
21　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
22　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
23　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量

I—I'

1　耕作土
2　褐　色　ローム粒子・黒色土中量，ローム小ブロック少量
3　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
4　黒褐色　ローム粒子・黒色土少量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土少量
6　褐　色　ローム粒子中量
7　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・炭化材少量
8　黒　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土多量
9　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
10　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
11　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
12　褐　色　ローム粒子多量
13　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
14　褐　色　ローム粒子多量
15　黒　色　ローム粒子少量，黒色土多量
16　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土中量
17　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
18　暗褐色　ローム粒子中量
19　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
20　褐　色　ローム粒子中量

第2号溝（SD 2　第182・183図，PL64）

位置　調査区北東部から南西部に向かって，大グリッドB3，C2・3，D3区を横切って確認されている。本跡に並行して，第1号堀と第1号土塁状遺構が確認されている。

規模と形状　断面形は緩やかな「U」字状である。上幅0.9～1.6m，下幅0.2～0.7m，深さ44～74cmである。確認した長さは，第1号堀と同じく，約95.0mで，直線的に調査区外に延びている。

方向　N－27°－E

覆土　凹レンズ状の堆積を示し，自然堆積と思われる。

遺物　全く出土しなかった。

所見　出土遺物が無いため，時期は不明である。第1号土塁状遺構や第1号堀と並行することから，館跡に関わる溝の可能性も考えられる。

第3号溝（SD 3　第182・183図）

位置　調査区北東部，大グリッドB3区に確認されている。第1号堀に並行する様に確認されているが，途中で直角に折れ曲がる。

重複関係　本跡は第1号堀に掘り込まれている。

規模と形状　断面形は浅い逆台形状である。上幅0.5～0.8m，下幅0.3～0.5m，深さ10～22cmである。途中，上幅1.2m，下幅1.0mと広くなる部分が見られる。北東側で直角に折れ曲がり，第1号堀に掘り込まれている。

方向　N－27°－E

覆土　凹レンズ状の堆積を示し，自然堆積と思われる。

遺物　全く出土しなかった。

所見　出土遺物が無いため，時期は不明である。第1号堀に掘り込まれているので，第1号堀よりも古い。性格は不明である。

第4号溝（SD 4　第182・183図，PL64）

位置　調査区南西部，大グリッドD2・3区に確認されている。第1号堀に並行する様に確認されている。

重複関係　本跡は，第1号土塁状遺構の下から確認されている。

規模と形状　断面形は緩やかな「U」字状である。上幅0.6～0.9m，下幅0.3～0.7m，深さ10cmである。

方向　N－28°－E

覆土　ローム小ブロックや黒色土を少量含んだ褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積し，人為的に埋め戻した様相を示している。

遺物　土師器片3片が出土しただけで，本跡に伴う遺物は出土しなかった。

所見　本跡に伴う遺物が無いため，時期は不明である。第1号土塁状遺構の下から確認されたので，第1号土塁状遺構よりも古い。性格は不明である。

6　土塁状遺構

今回の調査では，土塁状遺構1基を検出した。以下，検出した土塁状遺構の特徴に付いて記載する。

第1号土塁状遺構（第182・183図，PL64）

位置　調査区北東部から南西部に向かって，大グリッドC2・3，D2・3区を横切って，第1号堀・第2号溝に並行する様に確認されている。調査区の北東部では確認できなかったが，本来は存在していたものと考えられる。

重複関係　本跡の下から，第4号溝が確認されている。

規模と形状　基底部は，現況で最大幅8.0m，頂上部での幅1.0mである。高さ0.7mで，斜度は17°とかなり崩れた状況である。確認した長さは約82mであるが，調査区外に延びている。

方向　N－29°－E

構築状況　基底部を旧地表面に置き，ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土を少量から中量含んだ褐色土・暗褐色土・黒褐色土を盛土している。あまりしまりは見られず，第1号堀を掘った際の土を積み上げて構築

したものと考えられる。

遺物　全く出土しなかった。

所見　出土遺物が無いため，時期は不明である。本跡の下から第４号溝が確認されたので，第４号溝よりも新しく，第１号堀や第２号溝と並行する様に確認されているので，館跡に伴う土塁状遺構の可能性も考えられる。

7　塚

今回の調査では，塚９基を検出した。以下，検出した塚の特徴に付いて記載する。

第１号塚（SX１，第184図，PL65）

位置　調査区北西部，大グリッドC2区に確認されている。

規模と形状　基底面は，長軸9.8m，短軸8.9mの不整方形を示し，現地表面から塚頂部までの高さは2.1mである。この盛土を除去したら，方形に巡る溝が確認できた。規模は，内法で，長軸11m，短軸7.0mである。

長軸方向　N－９°－E。方形に巡る溝の長軸方向はN－27°－Eである。

構築状況　基底部を旧地表面に置き，この旧地表面に浅く緩やかな「U」字状に掘り込まれた方形に巡る溝の上に，ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土を少量から中量含んだ褐色土や暗褐色土や黒褐色土を盛土している。あまりしまりは見られない。

遺物　図化した遺物及びそれ以外の縄文土器片12片，土師器片３片が出土している。第184図８・９の砥石と10の煙管は盛土中からの出土である。

所見　本跡に伴うと考えられる遺物が無いため，時期は不明であるが，構築状況から近世の塚と考えられる。また，本跡の様に盛土の下から，方形に巡る溝の確認される例は比較的珍しく，竜ヶ崎市の前清水遺跡[(1)]に見られる程度である。

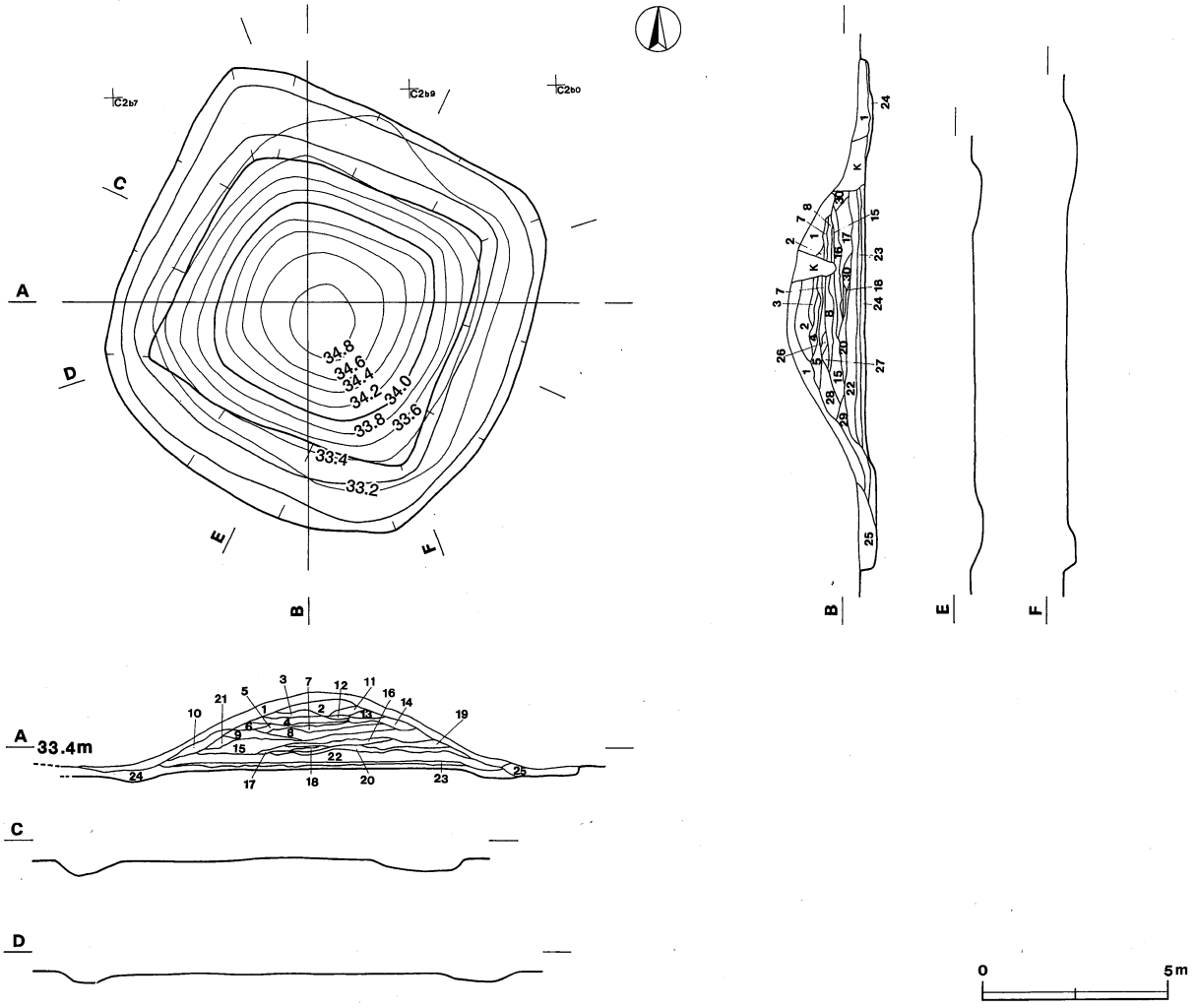
註（１）　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書　前清水遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』Ⅶ　1981年３月

第184図１(TP３)は縄文土器の口縁部片で，波状口縁で，４単位の突起が見られ，突起および瘤の上にはキザミ目が見られる。２(TP４)は縄文土器の口縁部片で，隆帯上にキザミ目が見られ，隆帯に沿って沈線が巡る。３～５(TP５～７)は縄文土器の胴部片で，地文は単節RLの縄文である。

第１号塚出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
第184図８	砥石	13.3	3.05	4.1	171.5	凝灰岩	盛土中	Q３　PL71
９	砥石	6.6	3.6	1.7	56.2	凝灰岩	盛土中	Q４

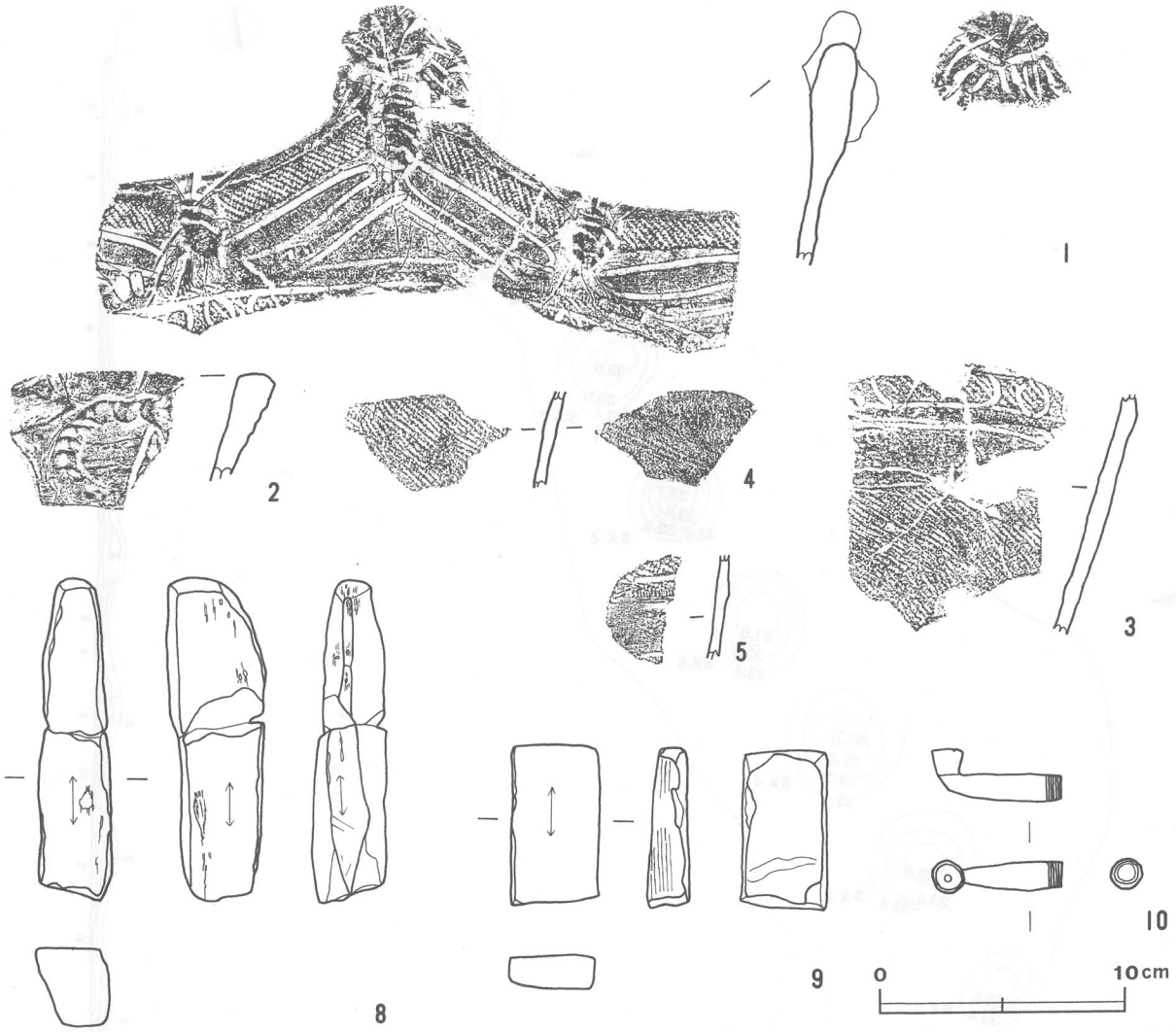
図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	出土地点	備考
第184図10	煙管	(5.4)	1.3	1.3	(13.8)	銅	盛土中	M54　雁首



第１号塚土層解説

1　耕作土
2　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土ブロック中量
3　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック少量
5　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
6　暗褐色　ローム粒子・黒色土ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・黒色土ブロック少量
8　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
9　褐　色　ローム粒子・黒色土ブロック中量，ローム小ブロック少量
10　暗褐色　ローム粒子少量
11　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土ブロック少量
12　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・黒色土ブロック少量
13　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土ブロック中量
14　暗褐色　ローム粒子少量，黒色土ブロック中量
15　褐　色　ローム粒子中量，黒色土ブロック少量
16　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
17　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
18　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土ブロック多量
19　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・黒色土ブロック少量
20　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量
21　暗褐色　ローム粒子少量
22　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック多量
23　黒　色　ローム粒子少量，黒色土ブロック多量
24　暗褐色　ローム粒子中量，黒色土ブロック少量
25　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・炭化材少量
26　黒褐色　ローム粒子少量，黒色土ブロック中量
27　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，黒色土ブロック少量
28　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土ブロック少量
29　極暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
30　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，黒色土ブロック中量

第183図　第１号塚



第184図　第１号塚出土遺物

第２～９号塚（SX２～９，第186図，PL65）

位置　調査区北部，大グリッドB2・3区に，ほぼ一直線上に並んで確認されている。

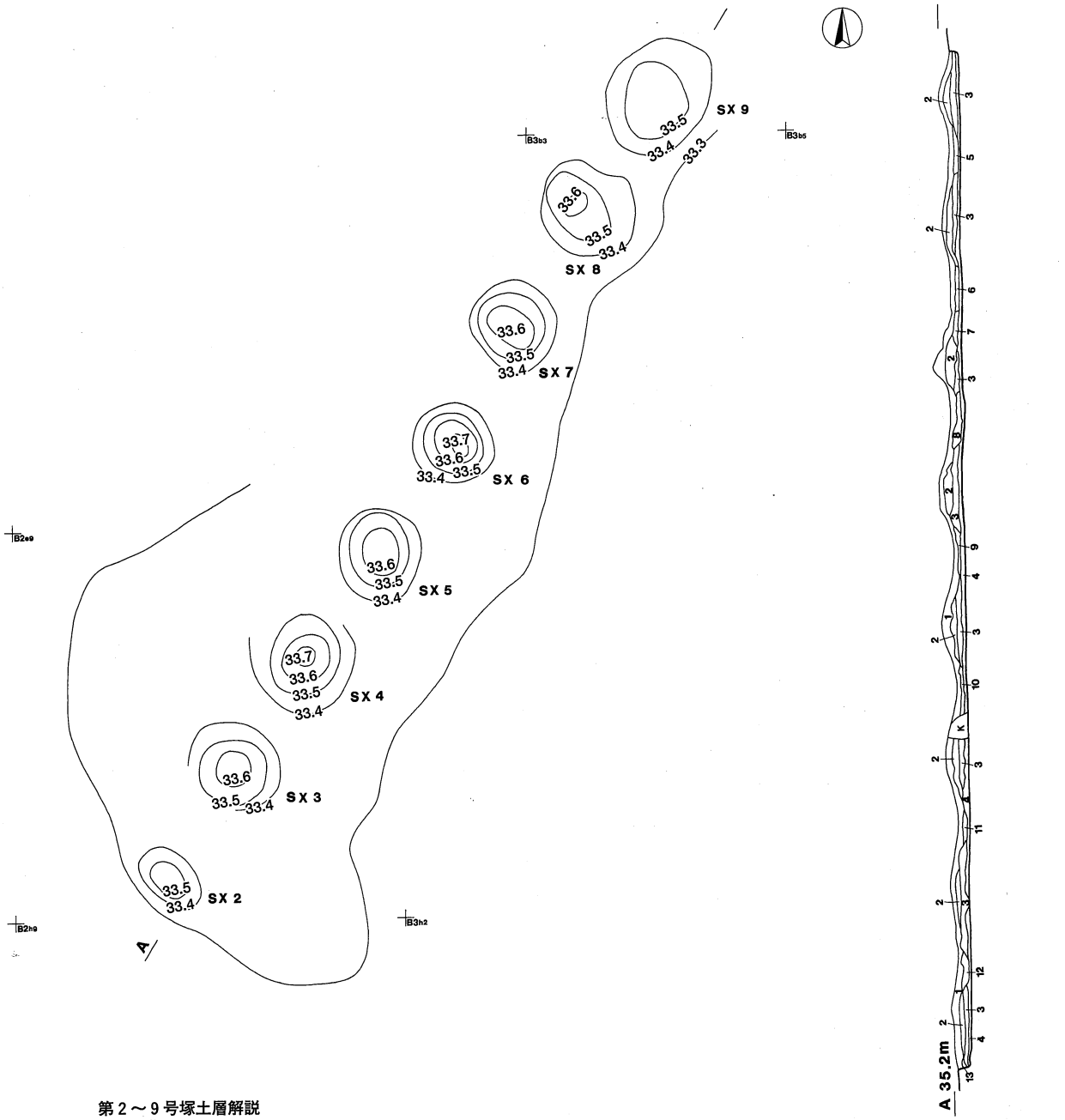
規模と形状　基底面は，それぞれの塚で長径2.2～3.8mの円形や楕円形を示し，現地表面から塚頂部までの高さはそれぞれの塚で0.19～0.45mとかなり低いものである。

軸方向　N－34°－E　この方向でほぼ一直線に並んでいる。

構築状況　基底部を旧地表面に置き，この旧地表面に平坦にした後にローム粒子やローム小ブロックを少量から中量含んだ褐色土・暗褐色土・黒褐色土を盛土している。全体的にしまりは弱い。

遺物　全く出土しなかった。

所見　出土遺物が無いため，時期は不明であるが，構築状況から近世の塚と考えられる。また，８基の塚がほぼ一直線上に並んでいるので，信仰的意味合いがあるのではないかと思われる。



第２～９号塚土層解説

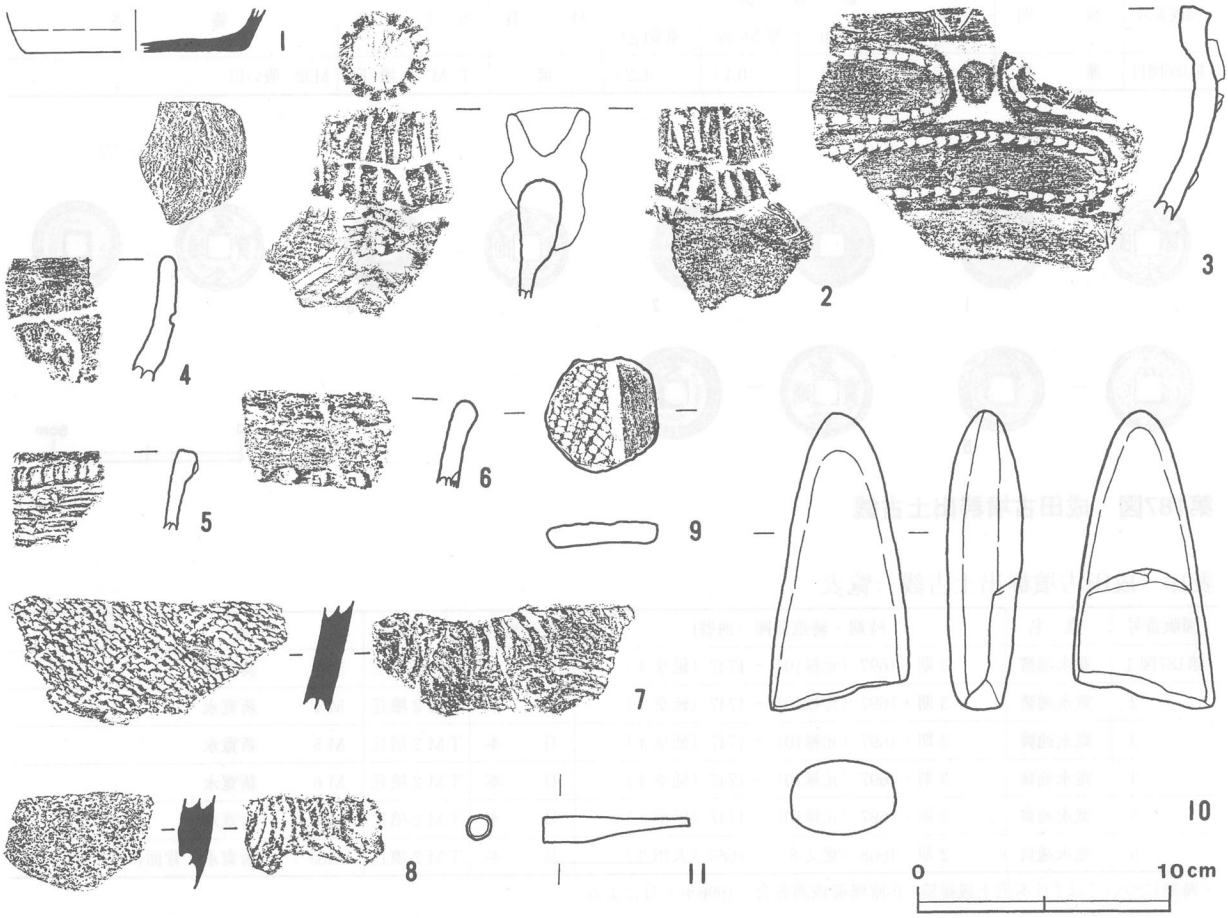
1　耕作土
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　黒　色　ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子中量
5　黒褐色　ローム粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子少量
7　黒褐色　ローム小ブロック少量
8　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
9　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
10　暗褐色　ローム粒子中量
11　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
12　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
13　黒褐色　ローム粒子中量

0　5m

第185図　第２～９号塚

8　遺構外出土遺物

当遺跡からは，表土層及び遺構確認面から遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは，主なものの実測図及び拓撮図を掲載した。



第186図　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

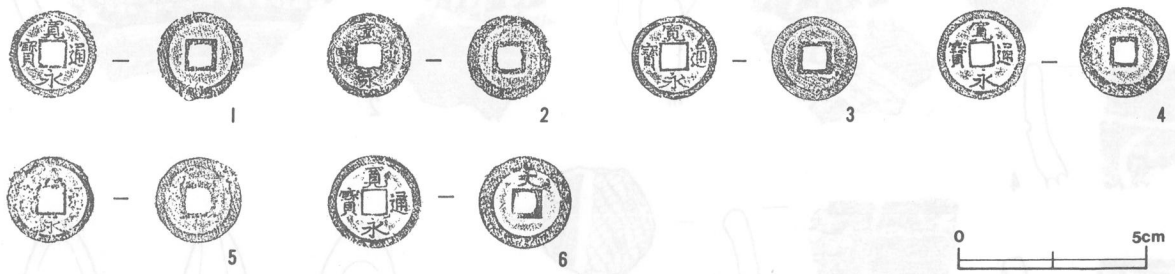
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第186図 1	須恵器 坏	B　(1.7) C　[8.4]	底部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ヘラ削り。	白色粒・黒色斑点 橙色 普通	P20　10% 表採 新治産

第186図2(TP8)は縄文土器の口縁部片で，突起が見られ，突起と瘤の上にはキザミ目が見られる。3(TP9)は縄文土器の口縁部片で，隆帯に沿って角押文が見られる。4(TP10)は縄文土器の口縁部片で，沈線が施されている。5(TP11)は縄文土器の口縁部片で，口縁部にキザミ目が見られる。6(TP1)は縄文土器の口縁部片で，隆帯上に指頭による押圧が見られる。7(TP12)は須恵器甕の体部片で，外面に格子目叩き，内面に同心円の当て具痕が見られる。8(TP13)は須恵器甕の体部片で，外面に平行叩き，内面同心円の当て具痕が見られる。

図版番号	種　別	計測値(cm)			孔径(cm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚					
第186図9	土製円板	4.5	4.5	0.9	－	23.4	100	SD1　覆土	DP2 表面に磨消縄文と単節LRの縄文が施されている。

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第186図10	磨製石斧	(11.8)	5.1	2.9	(241.5)	安山岩	TM4周溝覆土	Q32　刃部欠損

図版番号	種　別	計測値				材　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第186図11	煙　管	(5.9)	1.0	(0.1)	(6.2)	銅	TM3墳丘	M32　吸い口



第187図　成田古墳群出土古銭

表19　成田古墳群出土古銭一覧表

図版番号	銭　名	時期・鋳造期間（西暦）	鋳造地名	出土地点	備　考
第187図1	寛永通寶	3期・1697（元禄10）～1747（延享4）	日　本	SD1覆土	M2　新寛永
2	寛永通寶	3期・1697（元禄10）～1747（延享4）	日　本	TM2墳丘	M4　新寛永
3	寛永通寶	3期・1697（元禄10）～1747（延享4）	日　本	TM2墳丘	M5　新寛永
4	寛永通寶	3期・1697（元禄10）～1747（延享4）	日　本	TM2墳丘	M6　新寛永
5	寛永通寶	3期・1697（元禄10）～1747（延享4）	日　本	TM2墳丘	M7　新寛永
6	寛永通寶	2期・1668（寛文8）～1683（天和3）	日　本	TM2墳丘	M55　新寛永　背面に「文」字あり

・時期については『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会　1996年5月による。

成田古墳群第3号古墳横穴式石室天井石除去

第4節　まとめ

今回の調査で検出した遺構は，古墳時代中期初頭の竪穴住居跡1軒，古墳時代後期の古墳7基，土坑21基，埋設遺構1基，土塁状遺構1条，堀・溝4条を検出した。

成田古墳群で主体となるのは，7基の古墳である。ここでは，この7基の古墳を中心に，この地域の古墳の様相を考えてみたい。

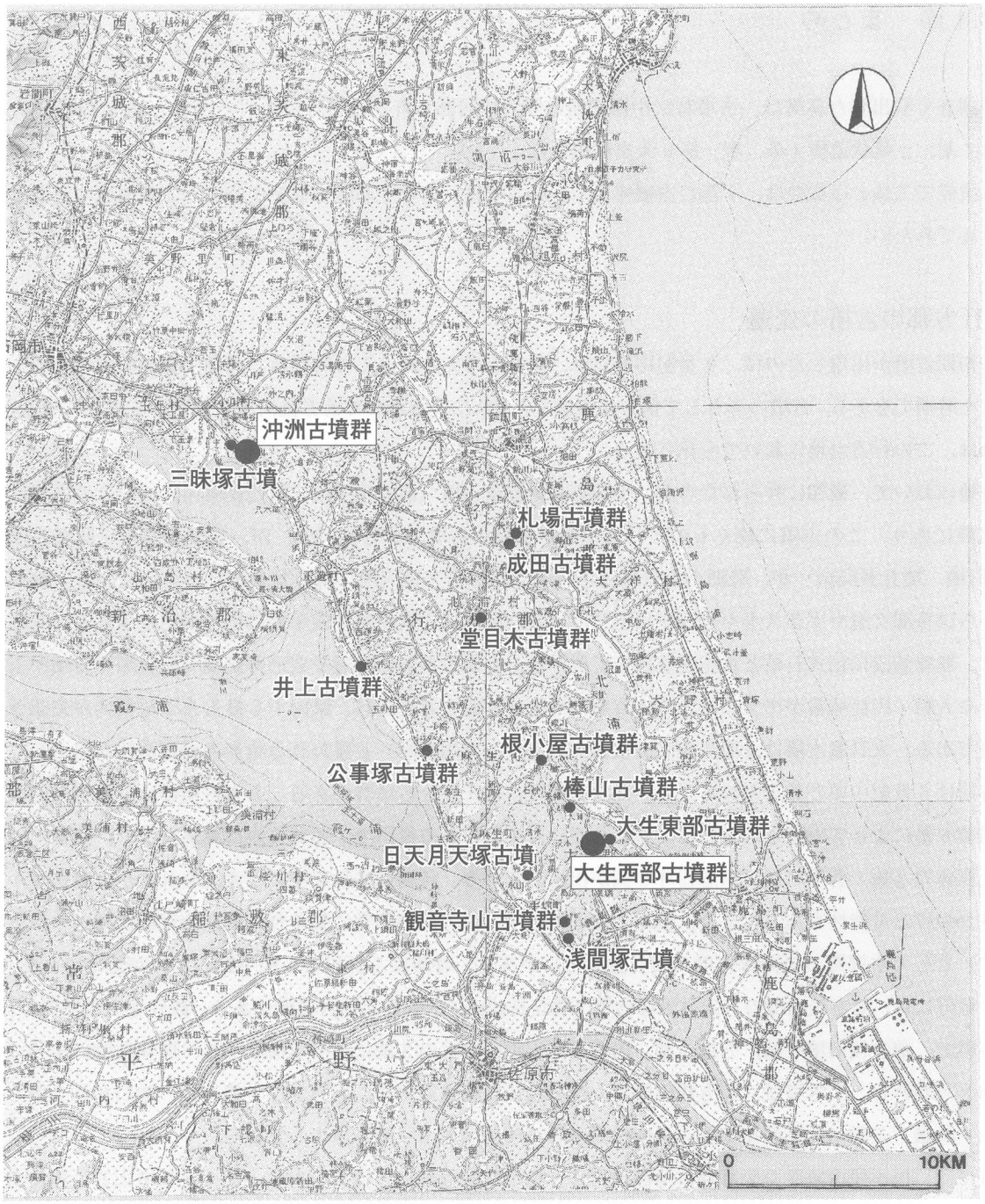
1　行方郡の古墳の変遷[1]

本県に初期古墳が出現したのは，4世紀中頃以降，後葉と考えられ，この時期は，大和王権の東国への制圧が行われた時期でもある。古墳の形として前方後方墳で，それに若干遅れて前方後円墳が作られるようになる。この現象は，この行方台地においても見られる。

行方台地において，最初に作られたのが，玉造町の勅使塚古墳（前方後方墳，墳丘長64m）で，この古墳は沖洲古墳群にあり，この古墳に続くものとして中期の権現山古墳（前方後円墳）が，後期初頭の三昧塚古墳[2]（前方後円墳，墳丘長85m）が，後期の大日塚古墳（帆立貝形前方後円墳，墳丘長40m）が続いている。勅使塚古墳からは重圏文鏡やガラス玉や管玉が出土している。時期は4世紀第4四半期の年代が想定される。三昧塚古墳は，埋葬施設は箱式石棺と木棺が並列して置かれ，金銅製馬形飾付冠や変形神獣鏡や馬具類や刀類や玉類や鉄斧や人物・円筒埴輪が出土している。時期は6世紀初頭と考えられ，県内でも最も古く埴輪列が確認された古墳である。大日塚古墳は，埋葬施設は横穴式石室で，全国で唯一と思われる猿形の動物埴輪が出土している。時期は6世紀中頃と考えられる。この他，玉造町には，井上古墳群がある。井上古墳群[3]は，前方後円墳1基と円墳6基によって構成されている。第4号墳は，小型の前方後円墳，埋葬施設は箱式石棺で，円筒埴輪や直刀・鹿角刀2振・管玉11個・須恵器坏2個が出土している。時期は6世紀中葉と考えられるが，鹿角刀から若干さかのぼる可能性もある。また，初期の前方後円墳（前方部の非常に細く長い典型的な前期型式の前方部を示す）として牛堀町の浅間塚古墳[4]（墳丘長84m）があり，時期は5世紀第1四半期の年代が想定される。この他牛堀町には，前方後円墳の日天月天塚古墳[5]（墳丘長42m）や観音寺山古墳群[6]がある。観音寺山古墳群は，17基の古墳で，前方後円墳4基，方墳1基，円墳9基，不明のもの3基によって構成され，埋葬施設はすべて箱式石棺と思われる。7号墳は，前方後円墳で，埋葬施設は箱式石棺で，直刀2振・鍔1個・鞘口金具1個・鉄鉾1口・鉄鏃・玉類（水晶製切子玉1・琥珀棗玉2・琥珀臼玉1）等が出土している。

麻生町には，根小屋古墳群や公事塚古墳群がある。根小屋古墳群[7]は，14基の古墳（2～3基増える可能性あり）によって構成され，6基が前方後円墳と思われる。4号墳は，前方後円墳，埋葬施設は箱式石棺で，時期は6世紀中頃以降の古墳と考えられる。13号墳は，墳丘長22.4m程の前方後円墳，埋葬施設は箱式石棺で，時期は6世紀後半頃の古墳と考えられる。公事塚古墳群[8]は，前方後円墳1基と円墳3基によって構成されている。1号墳は，墳丘長27mの円墳，埋葬施設は木棺直葬で，直刀1振・鉄剣2振・鉄鏃7本や玉類（滑石製臼玉・瑪瑙製勾玉・管玉・ガラス玉・琥珀棗玉）等が出土している。時期は5世紀後半と考えられる。この古墳から1片の埴輪も採取されなかったことは，この地域における埴輪樹立という点で，今後考えて行かなければならない問題をもっている。2号墳は，墳丘長20～25mと想定される円墳である。

5世紀中葉から後半にかけて，この地域に大型前方後円墳が出現しないのは，全長186mの石岡市舟塚山古墳，全長136mの水戸市愛宕山古墳の両古墳の影響下にあったものかもしれず，このことは行方台地の地域性による可能性が考えられる[9]。これ以後古墳の規模は小型化する。



第188図　行方郡内古墳分布図

潮来町には，大生古墳群[10]と棒山古墳群[11]がある。大生古墳群は，西部古墳群と東部古墳群に分けられ，大生西部古墳群は6世紀代の古墳群であり，子子（孫）舞塚古墳（大生西1号墳，前方後円墳，墳丘長72m），鹿見塚古墳（大生西2号墳，前方後円墳，墳丘長58m），天神塚古墳（大生西4号墳，前方後円墳，墳丘長63m），大生西5号墳（前方後円墳，墳丘長60m）等がある。子子舞塚古墳の埋葬施設は箱式石棺で，人骨2体と直刀9振や鉄鏃や金環・銀環・銅環や多数の玉類が出土している。大生東部古墳群には，稲荷塚古墳（前方後円墳，墳丘長61m，高さ4m），大殿塚等がある。大殿塚は，町史編纂委員会の測量調査の結果，塚の周りに周溝と思われる落ち込みが確認され，一辺23m，高さ3.5m程の二段構築の方墳であることが分かり，時期は7世紀中頃と考えられる。棒山古墳群は，2基の前方後円墳と7基の円墳によって構成されている。棒山1号墳[12]は前

方後円墳で，埋葬施設は粘土槨であり，時期は5世紀後半と考えられる。棒山2号墳（人形塚[13]）は，墳丘長15m程の円墳で，人物埴輪や県内で類例のない須恵器子持ち器台が出土している。この子持ち器台は東海地方産の可能性が高い。棒山7号墳（庚申塚[14]）は，墳丘長26mの円墳で，埋葬施設は箱式石棺で，人骨5体と直刀1振や刀子・鉄鏃や耳環が出土している。時期は6世紀末に築造され，7世紀初頭まで追葬が行われたものと考えられる。

本町の堂目木古墳群には，前方後円墳の双子塚古墳，堂目木1号墳（墳丘長約30m）があり，後者はくびれ部から箱式石棺(第1図)が確認され，玉類が出土している。箱式石棺の構造から7世紀代の古墳と考えられる。

以上の点から，北部の沖洲古墳群，南部の大生西古墳群が6世紀代の在地勢力と考えられ，これらの在地勢力に続くものが，札場古墳群であり，成田古墳群であると考えられる。とりわけ，札場古墳群第2号古墳，そして成田古墳群第3号古墳の被葬者は，6世紀末葉から7世紀代の在地勢力の中でも首長と捕らえられる。

2　古墳の形態

墳形を見てみると，本古墳群も札場古墳群同様，円墳・方墳・前方後円墳とバラエティに富んでいる。円墳は，第2・3・4・5号古墳であるが，第2・5号古墳は，方墳に近いような円墳である。しかも，第5号古墳は長方墳に近いような形である。方墳は，第1・7号古墳で，第7号古墳は長軸が短軸に比べて長い，長方墳である。前方後円墳は，第6号古墳で，前方部の短い帆立て貝形で，くびれ部も不明瞭な古墳である。

周溝に集石（石敷き）が見られる古墳に，第4・7号古墳がある。石材はすべて雲母片岩である。この集石の位置は，埋葬施設に近い周溝の部分からである。埋葬施設の石材との関係は，第4号古墳の横穴式石室と第7号古墳の箱式石棺は雲母片岩であり，埋葬施設の石材と周溝で確認された石材は同じである。この集石の現象は，札場古墳群の4基すべての古墳でも見られる。しかし，札場古墳群では，第1・4号古墳の箱式石棺と第3号古墳の第1箱式石棺が雲母片岩であるが，第2号古墳の横穴式石室と第3号古墳の第2箱式石棺がシルト岩であり，必ずしも埋葬施設と同じ石材が周溝から確認される訳ではない。県内では，本町の北側に位置する鹿島郡鉾田町の安房西古墳第1号古墳[15]や平出久保遺跡第1号墳[16]，北浦の対岸に位置する鹿嶋市の宮中野第79・81・83・84・85・90・97・99号墳の8基の古墳[17]の周溝から集石が確認されている。平出久保遺跡第1号墳では，「これら石材は，埋葬施設から出土している雲母片岩と同じ石質で，埋葬施設が破壊された際に周溝付近に投棄されたものと推定される」と捕らえている。宮中野古墳群では，総括として市毛勲氏は「本古墳群の調査結果として，とくにとりあげることのできるものは，石敷きである。石敷きはその検出状況の記述にあるとおり周溝上にある点にその意義が認められるものであろう。箱式石棺は合葬・追葬を普通としており，実際84号墳で明らかにしたように2度の追葬が行なわれているのである。このためには周溝を渡って石棺に到達するので，周溝が凹んでいたのでは不便なこと，云うをまたないであろう。（中略）石敷きは追葬のための通路であり，従って石棺に最も近い周溝上に発見されることは当然といえよう。」と捕らえている。ただし，第83－K号墳をまとめた杉山晋作氏は「周溝内の雲母片岩の石敷きは，（中略）周溝を埋める土層4層のうち下から2層目の暗褐色土層面にのみ見られるものであり，周溝底面には存在しない。」とし，「石敷きの性格に関しては，本墳の場合，送葬儀礼よりも，石棺の石材抜き取りの際に派生したものであると考えた方が妥当である」としている。確かに集石は埋葬施設に近い周溝から確認されている。しかし，杉山氏も指摘しているように周溝の覆土の底面からは確認されず，周溝がかなり埋まった後の面で確認できている。以上のように考えると，市毛氏の様に周溝内の集石を追葬のための通路と考えるには無理があろう。また，札場古墳群の第2号古墳の場合を除くと，石材の確認状況があたかも石を投棄したような状況であることから，杉山氏の様に埋葬施設の石材

の抜き取りの際に派生したものと考えることには納得が行く（札場古墳群の第３号古墳は第１箱式石棺の石材を抜き取り，その後に第２箱式石棺をシルト岩で構築したと考える）。ただし，札場古墳群第２号古墳の横穴式石室のように埋葬施設の石材と周溝から確認された石材が違う場合も見られることは，どう考えたらよいだろうか。この点は今後の課題としたい。

埋葬施設は，横穴式石室と箱式石棺である[18]。横穴式石室は，第３・４号古墳である。箱式石棺は，第１・２・５・６・７号古墳である。また，第３号古墳の周溝外埋葬施設は，泥岩製切り石を使った小型の箱式石棺である。第２号古墳は箱式石棺を二つもつ。第４号古墳の横穴式石室は遺存状況が悪く，雲母片岩の割り石の敷石のみの確認である。第３号古墳の横穴式石室は，阿久津久氏の分類[19]によれば，Ⅴ型Ａ類－無袖形板石箱形組横穴式石室－と言えよう。石橋充氏の横穴式石室の型式設定[20]の中に当てはまるものはない。この横穴式石室は構造的に言えば，塩谷修氏の分類[21]のⅢ類（永国タイプ）－南側に開口する墓道をもつ。石室は，天井及び側壁と奥壁が板石で構成され，床は，片岩の割り石を敷きつめている。入口部に片岩の框石を置き，側壁からハの字状に開く羨道が板石で構築されている。框石の両側には，細身の板石を用いた擬似袖石が立てられる場合もある。－や石橋氏の分類[22]の石棺系石室Ａ類－箱式石棺に短い羨道を付けたような構造をしており，墓道を有する。－と捕らえることも可能である。

第１・２・６号古墳の箱式石棺は，シルト岩製の切り石で構築している。第２号古墳の二つの箱式石棺は遺存状況が極めて悪く，底石のみ確認である。第１・６号古墳の箱式石棺は札場古墳群第３号古墳の第２箱式石棺に構造が類似している。第５号古墳の箱式石棺は，雲母片岩で構築している。この箱式石棺は，側石を右側で２枚の板石，左側で４枚の板石を使用し，底石は２枚のやや大きい板石と細かな割り石を使用している。黒沢彰哉氏の分類によれば，Ｂ類又はＣ類と考えられる。石橋氏の分類によれば，Ⅲ類と考えられる。第７号古墳の箱式石棺は，遺存状況はあまり良くなく，北側妻石と蓋石と左右側石がそれぞれ１枚，底石は小さな割り石が遺存しているのみである。ただし，側石は抜き取り痕から，左右共３枚の板石で構築していたと思われる。これらのことから，黒沢氏の分類によれば，Ｃ類と考えられる。石橋氏の分類によれば，Ⅳ型式と考えられる。

３　遺物

(1)須恵器

図化した古墳出土の須恵器は総数41個体であり，第１・４号古墳を除く，５基の古墳から須恵器が出土している[23]。窯式は，湖西産が27個体，猿投産が４個体，新治産が４個体，同一窯の搬入品が２個体，在地産[24]と考えられるが，胎土から２つの窯式に分けられるものが，４個体である。第２号古墳からは湖西産長頸瓶が，第１箱式石棺から出土している。第３号古墳からは湖西産長頸瓶が２点出土している。１点は底部に穿孔されているもので，横穴式石室の墓道から横位の状態で出土している。覆土の中層からの出土であるが，何か墓前祭祀でも行われたような感じもする。第５号古墳から横瓶と甕の２点が出土している。横瓶は南側周溝からの出土である。甕は，体部に格子目の叩きが見られる新治産のもので，古墳の構築時期と時期差があると思われる。第６号古墳からは長頸瓶がすべて箱式石棺から出土している。第７号古墳からは図化した遺物以外に細片が59片出土している。とりわけ周溝南東部からは極めて多量の須恵器が出土している。これらの須恵器は明かに破壊して投棄したものと考えられる。この古墳からは，猿投産の須恵器が４点出土している。細頸瓶で時期は７世紀前葉に位置づけられるので，湖西産の須恵器と時期差が生じている。

本古墳群からこれ程多量の湖西産須恵器が出土しているが，同様の事例は県内ではない（ただし，須恵器の窯跡についての分析がおこなわれていないことによるかもしれない）。７世紀中葉以降８世紀初頭まで，かな

りの湖西産須恵器が本古墳群にもたらされたと考えられる。また，6世紀末葉から7世紀前葉には，猿投産須恵器ももたらされたと考えられる。

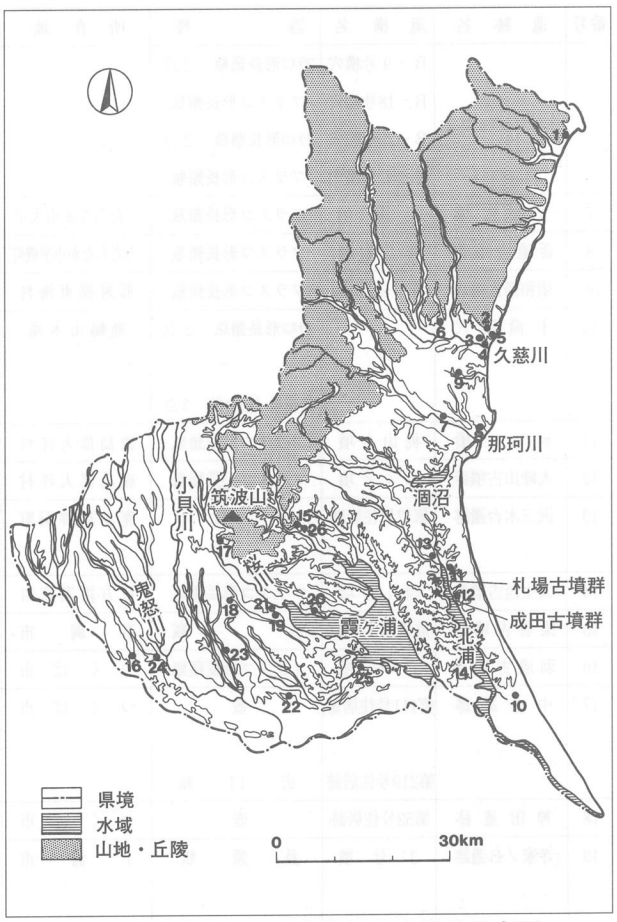
(2)玉類

玉類は総計31個出土し，すべてガラス玉である。第2号古墳の第2箱式石棺から10個，第3号古墳の横穴式石室から15個，第5号古墳の箱式石棺から2個，第7号古墳の箱式石棺から4個出土している。ガラス玉の作り方は，管切り方法でなく，鋳型作りと考えられる。

(3)武器

武器としては，鉄鏃が出土している。鉄鏃は，第3号古墳と第5号古墳から出土している。第3号古墳からは，5点出土し，4点が三角鏃で，1点は鏃身部のみのものである。第5号古墳からは，5点出土し，すべて鏃身部のみのものである。

武器は，鉄鏃のみの出土で，直刀類は出土しない。茨城県内の古墳を概観してみると，直刀類は7世紀前葉まではわずかに出土するが，中葉以降は全くと言っていいほど出土しない。これは，何を意味するのであろうか。『日本書紀』大化元年八月丙申朔庚子条[29]に「又於閑曠之所，起造兵庫，収聚國郡刀甲弓矢，邊國近與蝦夷接境處者，可盡數集其兵，而猶假授本主」にあるように，国々に兵庫を造って武器を納めさせ，蝦夷と接する辺国では武器を元の所有者に預けさせたことによるものかもしれない。



第189図　茨城県内湖西産須恵器出土遺跡分布図
（表20の番号に対応する）

表20　茨城県内湖西産須恵器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺構名	器種	所在地	文献
1	神岡上古墳群	3号墳	フラスコ形長頸瓶	北茨城市	北茨城市教育委員会「神岡上古墳群」『北茨城市文化財調査報告』Ⅵ　1995年
2	坂下横穴墓群	第9号横穴	坏蓋	日立市石名坂町	生田目和利『坂下横穴墓群』日立市教育委員会　1991年
		第13号横穴	長頸瓶（高台付）		
		第13号横穴	坏		
		第13号横穴	フラスコ形長頸瓶		
		第13号横穴	高台付坏		
		第19号横穴	フラスコ形長頸瓶		
3	赤羽横穴墓群	D－15横穴	長頸瓶	日立市久慈町	佐藤政則他『日立市赤羽横穴墓群発掘調査報告書』日立市教育委員会　1977年
4	千福寺下横穴	第37号横穴	長頸瓶	日立市久慈町	鈴木裕芳『千福寺下横穴群－第2次発掘調査－』日立市教育委員会　1986年
		(第7号横穴)	長頸瓶	日立市久慈町	佐藤政則他『久慈千福寺下横穴群』日立市教育委員会　1985年
5	六ツケ塚古墳	六ツケ塚古墳	フラスコ形長頸瓶	日立市大みか	佐藤政則『日立市六ツケ塚遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会　1978年
6	幡山遺跡	A－5号横穴	フラスコ形長頸瓶 2点	常陸太田市	海老澤稔他『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1977年
		B－1号横穴	フラスコ形長頸瓶		
		B－4号横穴	フラスコ形長頸瓶		
		B－8号横穴	フラスコ形長頸瓶		

番号	遺跡名	遺構名	器種	所在地	文献
		B－9号横穴 B－18号横穴 B－22号横穴 C－7号横穴	ﾌﾗｽｺ形長頸瓶　2点 フラスコ形長頸瓶 ﾌﾗｽｺ形長頸瓶　2点 フラスコ形長頸瓶		
7	大平古墳	1号墳	フラスコ形長頸瓶	ひたちなか市大平	鴨志田篤二『大平古墳群』大平古墳群調査会　1986年
8	新道古墳群	第2号墳	フラスコ形長頸瓶	ひたちなか市平磯町	斎藤新『新道古墳群発掘調査報告書』那珂湊市教育委員会　1987年
9	須和間古墳群	第12号墳	フラスコ形長頸瓶	那珂郡東海村	茂木雅博『須和間12号墳の調査』東海村教育委員会　1989年
10	木滝横穴		ﾌﾗｽｺ形長頸瓶　2点 長頸瓶（高台付）3点	鹿嶋市木滝	田口崇「（伝）木滝横穴古墳（横穴）出土土器」文化財だより7 鹿島町文化財愛護協会　1979年
11	梶山古墳	梶山古墳	フラスコ形長頸瓶	鹿島郡大洋村	汀安衛・橋本博文他『梶山古墳調査報告書』大洋村教育委員会　1981年
12	大峰山古墳群	第4号墳	フラスコ形長頸瓶	鹿島郡大洋村	田口崇他『大峰山古墳群調査報告書』大洋村教育委員会　1983年
13	沢三木台遺跡	第17号住居跡	高台付坏	鹿島郡鉾田町	茨城県教育財団「餓鬼塚・沢三木台」『茨城県教育財団文化財調査報告』第70集　1991年
14	大生西古墳群	西1号墳	フラスコ形長頸瓶	行方郡潮来町	大場岩雄他『常陸大生古墳群』行方郡潮来町教育委員会　1971年
15	染谷古墳群	道祖神1号墳	平瓶	石岡市	石岡市教育委員会『茨城県石岡市　道祖神古墳発掘調査報告』　1995年
16	羽成古墳群	7号墳	フラスコ形長頸瓶	つくば市	『羽成7号墳』つくば市教育委員会　1990年
17	中台遺跡	第111号住居跡 第219号住居跡	壺 広口瓶	つくば市	茨城県教育財団「中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集　1995年
18	神田遺跡	第52号住居跡	壺	つくば市	茨城県教育財団「神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第121集　1997年
19	寺家ノB遺跡	3号墳	長頸瓶	土浦市	茨城県教育財団「寺家ノ後A遺跡・寺家ノ後B遺跡・十三塚A遺跡・十三塚B遺跡・永国十三塚遺跡・旧鎌倉街道」『茨城県教育財団文化財調査報告』第60集　1990年
20	寿行地古墳	寿行地古墳	フラスコ形長頸瓶	土浦市	土浦・出島合同遺跡調査会『茨城県土浦市沖宿町所在 寿行地古墳発掘調査報告書』　1995年
21	うぐいす平遺跡	第6号住居跡 第38号住居跡	鉢 長頸瓶	土浦市	茨城県教育財団「寄居遺跡・うぐいす平遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第84集　1994年
22	長峰遺跡	遺構外	長頸瓶	竜ヶ崎市	茨城県教育財団「長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集　1990年
23	大塚戸古墳群	第5号古墳	平瓶 長頸瓶(高台付)	水海道市	水海道市教育委員会「大塚戸古墳群　第5号古墳発掘調査報告」『水海道市埋蔵文化財調査報告』第2集　1993年
24	館下遺跡		甕	水海道市	水海道市教育委員会『水海道市埋蔵文化財分布地図』　1992年
25	柏木古墳群	第52号住居跡 第79号住居跡	甕 フラスコ形長頸瓶	稲敷郡桜川村	茨城県教育財団「柏木古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第74集　1992年
26	鹿の子遺跡	8号住居跡	平瓶	石岡市	石岡市教育委員会『鹿の子遺跡－鹿の子地域の調査報告11－』　1997年

(4)馬具

馬具は，第3号古墳の横穴式石室と箱式石棺(周溝外埋葬施設)から出土している。種類は，壺鐙と杏葉と轡と鉸具と飾金具である。

金属製壺鐙は，県内では猿島郡総和町前林古墳[28]に次いで2例目である。全国的に見れば20数例[27]（表21参照）あろう。金属製壺鐙については，斎藤弘氏の編年[28]がある。斎藤氏によれば，壺鐙の柄の部分の形態変化で編年をたてている。まず，鐙靴受の孔が壺部の口に対して平行なものと直交するもの，壺部の舌の有無，柄の形態

で突起の有るもの，無いもの，柄が中心に有るものと前方に張りだすもので，

A′ ―― 鐙靴受の孔が平行で，無舌で，柄は中心に有り，突起が有り，長柄

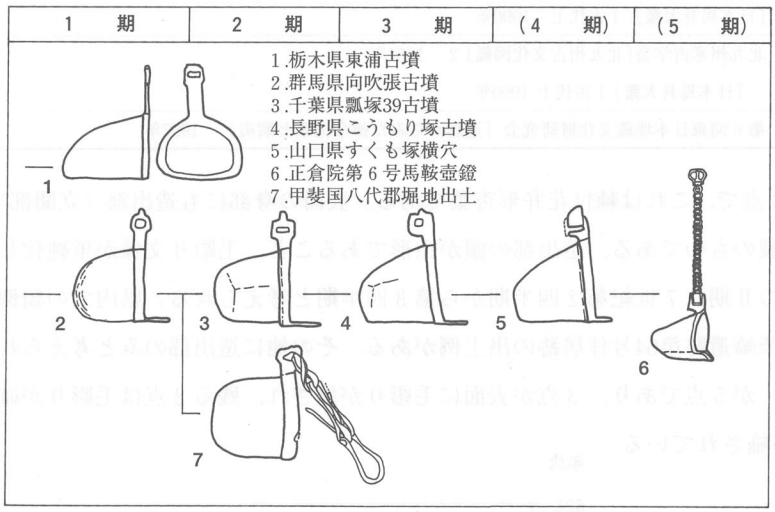
A(古) ― 鐙靴受の孔が直交で，有舌で，柄は中心に有り，突起が有り，長柄

A(新) ― 鐙靴受の孔が直交で，有舌で，柄は中心に有り，突起が有り，短柄，鐙靴は兵庫鎮

B ―― 鐙靴受の孔が直交で，有舌で，柄は中心に有り，突起が無し，短柄

C ―― 鐙靴受の孔が直交で，有舌で，柄は前方に張り出し，突起が無し，短柄

のように分類している。そして，A（古）・A'→A（新）・B→Cの３段階の変化（第191図参照）を想定している。斎藤氏の年代観は，A（古）・A'型式を１期とし６世紀末葉から７世紀初頭，A（新）・B型式を２期とし７世紀前葉，C型式を３期とし７世紀後半の年代を与えている。この斎藤案に基づけば，本古墳群出土の壺鐙は，A（新）段階に位置づけられ，この編年観によれば，７世紀前葉と言うことになる。



第190図　金属製壺鐙の編年（註27より再トレース）

表21　古墳時代の金属製壺鐙出土遺跡一覧表

番号	古墳名	所在地	文献
1	綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	『日本馬具大鑑』１古代上　1990年
2	しどめ塚古墳	群馬県群馬郡榛名町	『群馬県史資料編３原始古代３古墳』群馬県史編纂委員会　1981年
3	前山古墳	群馬県群馬郡滝川町	関亀齢「慈眼寺境内前山古墳と其発掘品」『上毛及上毛人』第86号　1924年
4		群馬県群馬郡倉賀野	後藤守一「原始時代の武器と武装」『考古学講座』第６号　1928年 『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅱ）』東京国立博物館　1983年
5	諏訪神社古墳	群馬県藤岡市	柴田常恵「上野藤岡町の諏訪神社古墳」『東京人類学雑誌』第25巻－288・289号　1910年
6	(美土里村出土)	群馬県藤岡市	山田良三「古墳出土の鐙の形態的変遷」『橿原考古学研究所論集・創立三十五周年記念』　1975年
7	向吹張古墳	群馬県勢多郡富士見村	『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅱ）』東京国立博物館　1983年
8	奈良カ号墳	群馬県沼田市	『群馬県史資料編３原始古代３古墳』群馬県史編纂委員会　1981年
9	足利公園麓古墳	栃木県足利市	『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅰ）』東京国立博物館　1980年
10	藤井38号墳	栃木県下都賀郡壬生町	壬生町教育委員会『藤井古墳群発掘調査報告書』　1967年 『日本馬具大鑑』１古代上　1990年
11	東浦古墳	栃木県芳賀郡二宮町	斎藤弘「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』第２号　1985年
12	前林古墳	茨城県猿島郡総和町	『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅰ）』東京国立博物館　1980年
13	瓢塚39墳	千葉県成田市	千葉県企業庁『公津原』　1975年
14	天王・船塚４号墳	千葉県成田市	千葉県企業庁『公津原』　1975年

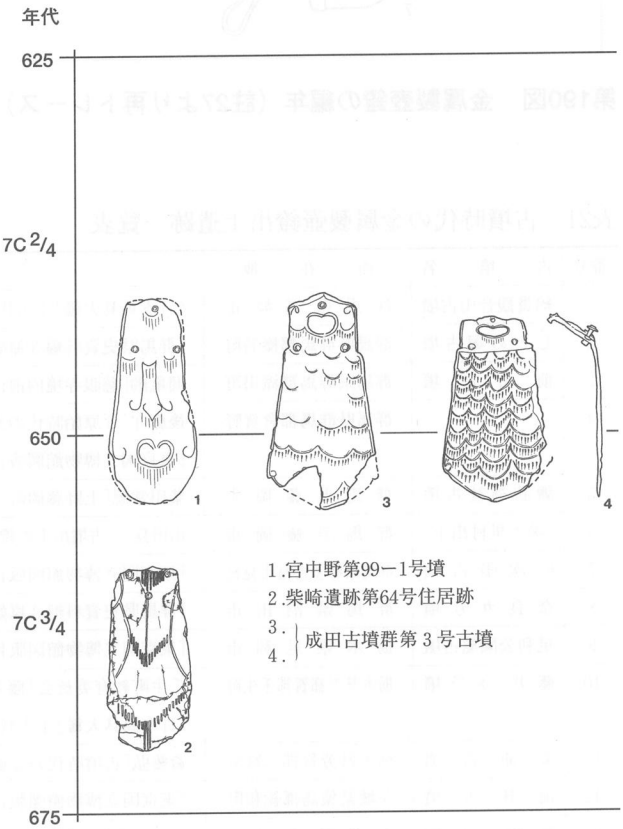
番号	古　墳　名	所　在　地	文　　献
15	玉造古墳	千葉県香取郡多古町	荻悦久「下総東部における終末期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集　1992年3月
16	古凍14号墳	埼玉県東松山市	現在報告書作成中
17	コウモリ塚古墳	長野県岡谷市	藤森栄一他「岡谷市コウモリ塚古墳」『松本諏訪地区新産業都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』長野県考古学会　1966年　『日本馬具大鑑』1古代上　1990年
18	さんごじ塚古墳	山梨県東山梨郡岡部村	後藤守一「原始時代の武器と武装」『考古学講座』第6巻　1928年
19	古柳塚古墳	山梨県八代郡八代町	『帝京大学山梨文科財研究所報』第28号　1997年2月
20	姥口村古墳	山梨県八代郡姥口村	増田精一「鐙考」『史学研究』第89号　1971年
21	宮原古墳	静岡県沼津市上香貫	後藤守一他「丁字形利器発見古墳」『考古学雑誌』第12巻7号　1922年　『静岡県史』第1巻 1930年
22	半兵衛奥古墳	静岡県静岡市幸庵新田	川江秀孝「銅製壺鐙を出土した静岡市半兵衛奥古墳とその遺物」『月刊文化財』第190号　1978－9　『日本馬具大鑑』1古代上 1990年
23	藤ノ木古墳	奈良県斑鳩町	奈良県立橿原考古学研究所編『斑鳩藤ノ木古墳』第1次調査報告書　1990年
24	スクモ塚横穴	山口県長門市	『日本馬具大鑑』1古代上　1990年
25	宮地獄神社古墳	福岡県宗像郡郡津屋崎町	北九州考古学会『北九州古文化図鑑』2　1951年　『日本馬具大鑑』1古代上 1990年
26	藤沢狄森古墳群	岩手県紫波郡	第6回東日本埋蔵文化財研究会『遺物からみた律令国家と蝦夷』　1997年

杏葉はほぼ全体の形が分かるものが2点で，これは棘付花弁形杏葉である。表面の身部にも造出部（立聞部）にも毛彫りが施され，鍍金された金銅製のものである。造出部の頭が山形であること，毛彫り文様が単純化してないこと等から，田中新史氏の編年[29]のⅡ期，7世紀第2四半期から第3四半期と考えられる[30]。県内での類例は，宮中野第99－1号墳[31]とつくば市の柴崎遺跡第64号住居跡[32]の出土例がある。その他に造出部のみと考えられるもの（帯先金具の可能性もあるもの）が5点であり，3点が表面に毛彫りが施され，残る2点は毛彫りが確認できなかったものである（毛彫りが施されている可能性もある）。

轡は鉄製の長方形透鏡板付轡で，県内での類例は少なく，宮中野第99－1号墳[33]の出土事例のみである。鉄製から金銅製に移る直前の時期のもので，7世紀第2四半期と考えられる。

鉸具は2点ともほぼ同じタイプの長さ10㎝前後の大形のものである。多分，手綱や馬を装飾するための革製のベルト等を結ぶためのものであろう。

飾金具は7点出土している。円形のものと花形(六花文)のものとが見られる。断面形は板状のものと「∩」のものとが見られる。花形のものは板状のものである。「∩」のものには，ほぼ完形のものが2点有る。この2点は，ほぼ同じ形のもので，円形上面に毛彫り(八花弁形)が施され，金銅製のものである。県内での類例は見当たらず，毛彫り文様は，長野県東一本柳古墳[34]や愛知県上向嶋2号墳[35]の出土例に類似している。



第191図　茨城県内出土棘付花弁形杏葉図

(5)その他

その他に鉄斧1点と刀子1点と耳環1点が出土している。

鉄斧は第2号古墳から出土している。県内での鉄斧の出土事例は以外と少なく，管見の範囲では，24遺跡32個体程（表22参照）である。鉄斧は次の3形式[36]に分類できる。

表22　茨城県内鉄斧出土遺跡一覧表

番号	所在地	出土地	文献
1	日立市	久保遺跡第8号住居跡	日立市教育委員会「久保遺跡発掘調査報告書」『日立市文化財調査報告』第24集　1991年
2	日立市	金木場遺跡第6号住居跡	茨城県教育財団「金木場遺跡・向畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第59集　1990年
3		第9号住居跡	
4		第23号住居跡	
5		第30号住居跡	
6		第36号住居跡	
7	久慈郡金砂郷町	長者屋敷遺跡第5号溝	茨城県教育財団「長者屋敷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第117集　1997年
8	那珂郡那珂町	北郷C遺跡第11号住居跡	茨城県教育財団「北郷C遺跡・森戸遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第55集　1991年
9	水戸市	大塚新地遺跡第18号住居跡	茨城県教育財団「大塚新地遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』XI　1981年
10		第93号住居跡	
11	水戸市	梶内遺跡第47号住居跡	茨城県教育財団「梶内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第100集　1995年
12		第98号住居跡	
13	ひたちなか市	三反田下高井遺跡	茨城県教育財団『年報』13　1994年　　現在報告書作成中
14	笠間市	寺崎台地遺跡表採	笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会『茨城県笠間市　寺崎台地遺跡』　1991年
15	西茨城郡岩瀬町	狐塚古墳	西宮一男『常陸狐塚』岩瀬町教育委員会　1969年　短冊形鉄斧2個
16	石岡市	鹿の子遺跡22号住居址	茨城県石岡市教育委員会『鹿の子遺跡発掘調査報告書(第3次)』　1987年
17	つくば市	柴崎遺跡第142号住居跡	茨城県教育財団「柴崎遺跡Ⅱ区・中塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第63集　1991年
18	つくば市	熊の山遺跡第36号住居跡	茨城県教育財団「熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第120集　1997年
19	土浦市	烏山遺跡C－第1号住居跡	土浦市教育委員会『茨城県　烏山遺跡』　1988年
20	牛久市	行人田遺跡	茨城県教育財団「馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集　1996年
21	稲敷郡桜川村	尾島貝塚表採	茨城県教育財団「尾島貝塚他」『茨城県教育財団文化財調査報告』第46集　1988年
22	稲敷郡桜川村	原1号墳	茂木雅博「原古墳群」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　1974年　短冊形鉄斧1個
23	鹿島郡鉾田町	平出久保遺跡第20号住居跡	茨城県教育財団「平出久保遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第98集　1994年
24	行方郡玉造町	三昧塚古墳	後藤守一他『三昧塚』茨城県教育委員会　1960年
25	結城市	峯崎遺跡33号住居跡	結城市「峯崎遺跡」『結城市文化財調査報告書』第7集　1996年
26		114号住居跡	
27	岩井市	上出島古墳群第2号古墳	茨城県岩井市教育委員会『上出島古墳群』
28	真壁郡関城町	下木有戸C遺跡第7号竪穴住居跡	つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会『下木有戸B・C遺跡』　1991年
29	真壁郡協和町	寺山古墳群Ⅰ号墳	協和町小栗地内遺跡調査会「ｽﾌﾟﾘﾝｸﾞﾌｨﾙｽﾞｺﾞﾙﾌｸﾗﾌﾞ造成に伴う小栗地内遺跡発掘調査報告書寺山遺跡他」『茨城県協和町文化財調査報告書』第1集 1986年
30	真壁郡真壁町	八幡前遺跡第19号土坑	茨城県教育財団「八幡前遺跡・小山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第99集　1995年
31	猿島郡総和町	北新田A遺跡第2号住居跡	茨城県教育財団「北新田A遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』第38集　1987年

Ⅰ.－着柄分に何ら装置をもたないもの。これは弥生時代の板状鉄斧に系譜をもつ短冊形鉄斧が相当する。

Ⅱ.－ 柄をさしこむための袋部をもつ有袋鉄斧。外形によって，さらに，袋部から刃部に至る間に，肩部の張り出しを有するものとないものとがあり，前者を有袋鉄斧A類，後者を有袋鉄斧B類とする。

Ⅲ.－ 柄をさしこむための柲孔をもつ有柲鉄斧。

Ⅰ形式の相当するものは，西茨城郡岩瀬町狐塚古墳[37]出土の2例や稲敷郡桜川村原1号墳[38]出土の例があり，共に古墳時代前期の4世紀後葉のものと考えられる。Ⅲ形式の相当のものの県内での出土事例は知らない。Ⅱ形式

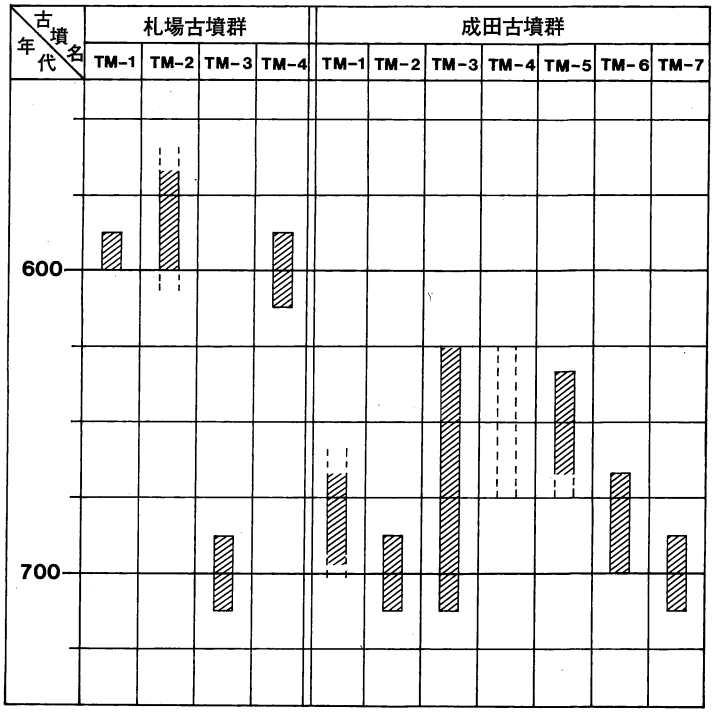
の有袋鉄斧は，県内での古墳時代のものは，三昧塚古墳[39]出土のものや真壁郡真壁町八幡前遺跡第19号土坑[40]出土のものと平出久保遺跡第20号住居跡[41]出土のものがあり，前者が6世紀初頭と考えられ，後者の2例は共に6世紀後葉のものと考えられる。すべて有袋鉄斧A類である。本跡出土のものは，有袋鉄斧B類である。

刀子は第7号古墳から出土している。

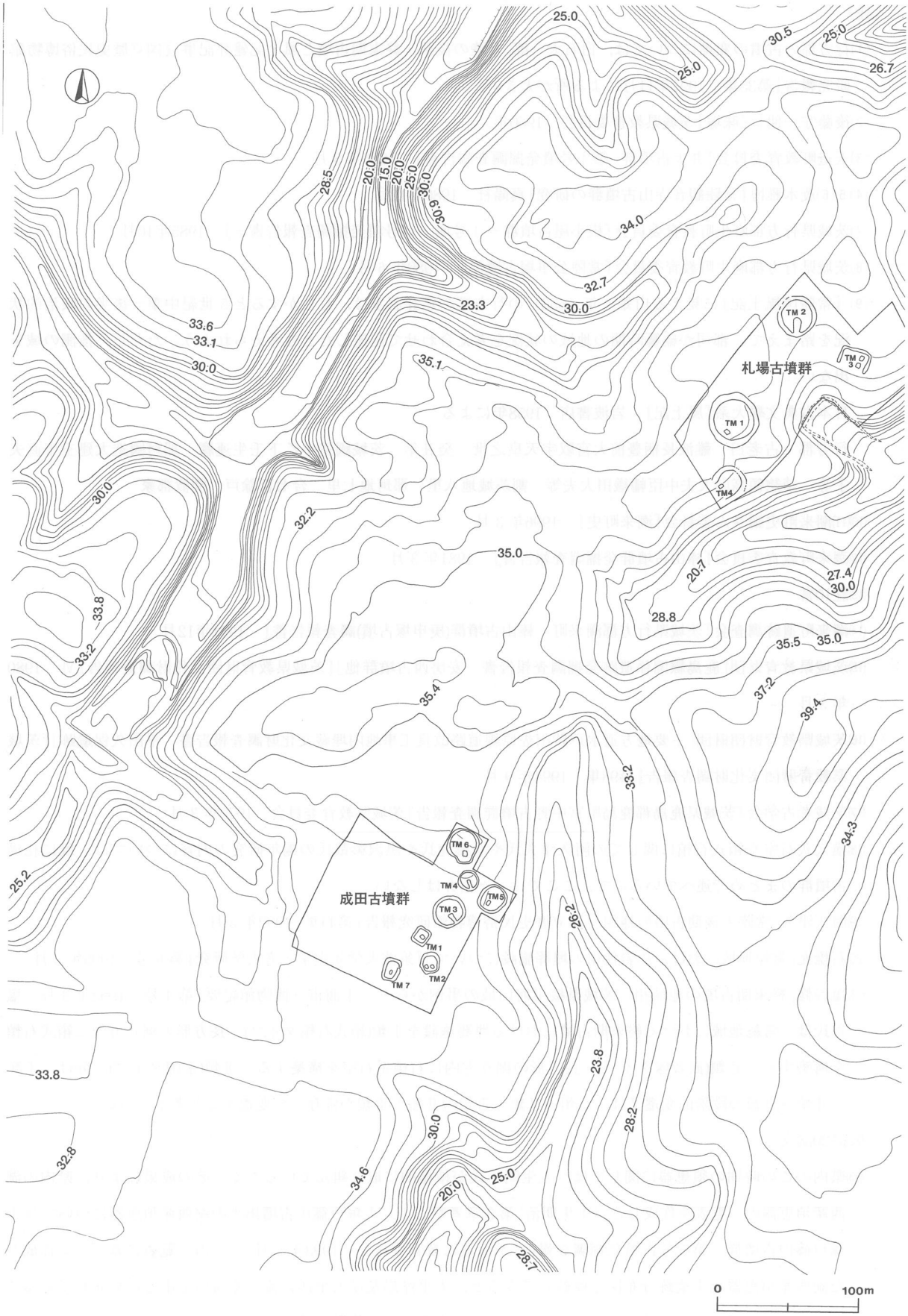
耳環は第5号古墳から出土している。やや小形で中実の銅地金張りのものである。

4　古墳の年代観について

第1号古墳に関しては，遺構に伴う遺物がなく，時期は明確ではないが，方墳であることや箱式石棺の石材の組み方から，さらに札場古墳群第3号古墳の第2箱式石棺に構造が類似していることから，7世紀代でも後葉の古墳と考えられる。第2号古墳に関しては，箱式石棺が底石のみの確認であるので，箱式石棺の構造からは時期は追えないが，箱式石棺が2つあること，湖西産の長頸瓶から判断すると7世紀末葉から8世紀初頭と考えられ，第3号古墳の最後の追葬や墓前祭祀の行われた時期と同じと考えられる。第3号古墳に関しては，馬具に関しても2時期が考えられ，金属製壺鐙と轡と鉸具はほぼ同じ時期で7世紀第2四半期と想定され，杏葉と飾金具は7世紀第3四半期と想定される。また，墓道から出土した湖西産須恵器は7世紀末葉から8世紀初頭の時期が想定され，この時期に石室内の杏葉を1点持ち出し，底部の穿孔された湖西産須恵器を使い，何か墓前祭祀でも行われたと考えられ，石室構築時期と何度かの追葬が行われたためと考えられる。第4号古墳に関しては，遺構に伴う遺物がなく，また，横穴式石室の遺存状況が悪く，時期は明確にしにくいが，横穴式石室の石材の組み方から，7世紀代の古墳と考えられる。第5号古墳に関しては，須恵器横瓶や鉄鏃の形態や箱式石棺の構造から7世紀中葉以降の古墳と考えられる。第6号古墳に関しては，湖西産の須恵器長頸瓶や箱式石棺の石材の組み方から，さらに札場古墳群第3号古墳の第2箱式石棺に構造が類似していることから，7世紀後葉の古墳と考えられる。第7号古墳に関しては，箱式石棺の石材の組み方や湖西産の須恵器長頸瓶や新治産の須恵器坏・蓋から7世紀末葉から8世紀初頭の古墳と考えられ，第3号古墳の最後の追葬や墓前祭祀の行われた時期と同じと考えられる。



第192図　札場古墳群・成田古墳群古墳変遷図



第193図　札場古墳群・成田古墳群古墳配置図

《註》

(1)行方郡の古墳の変遷については，白石太一郎「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　1991年11月による所が大きい。

(2)後藤守一他『三昧塚』茨城県教育委員会　1960年

(3)玉造町教育委員会『井上古墳群　第4号墳発掘調査報告書』　1986年3月

(4)(5)(6)茂木雅博『常陸観音寺山古墳群の研究』真陽社　1980年12月

(7)茨城県行方郡麻生町教育委員会『根小屋古墳群－4号墳・13号墳発掘調査報告書－』　1985年10月

(8)茨城県行方郡麻生町教育委員会『常陸公事塚古墳群』　1989年6月

(9)『常陸国風土記』に見える白雉4年（653）の行方郡の建評記事は，もしかすると5世紀中葉～後半の政治的状況を踏まえて，郡司が編纂時期の地域の状況を考え合わせて記述したとも考えられよう。ただし，推測の域を出ない。

日本古典文學大系『風土記』　岩波書店　1958年による

行方郡　古老曰　難波長柄豊前大宮馭宇天皇之世　癸丑年　茨城國造小乙下壬生連麿　那珂國造大建壬生直夫子等　請惣領高向大夫中臣幡織田大夫等　割茨城地八里　那珂地七里　合七百餘戸　別置郡家

(10)(11)潮来町史編さん委員会『潮来町史』　1996年3月

(12)潮来町教育委員会『棒山古墳群発掘調査報告書』　1981年3月

(13)註10書

(14)潮来町遺跡調査会『茨城県行方郡潮来町　棒山古墳群(庚申塚古墳)調査報告書』　1991年12月

(15)茨城県教育財団「鹿島線関係遺跡発掘調査報告書　安房西古墳群他」『茨城県教育財団文化財調査報告』Ⅵ　1980年3月

(16)茨城県教育財団財団「主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　平出久保遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第98集　1994年9月

(17)茨城考古学会『茨城県鹿島郡鹿島町宮中野古墳群調査報告』茨城県教育委員会　1970年3月

(18)横穴式石室や箱式石棺に関しての阿久津久氏や石橋充氏や黒沢彰哉氏の編年研究の内容については，既に札場古墳群のまとめで述べているので，ここでは一々紹介はしない。

(19)阿久津久「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集　1992年3月

(20)石橋充「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号　1995年3月

(21)塩谷修「終末期古墳の地域相－茨城県桜川河口域の事例から－」『土浦市立博物館紀要』第4号　1992年3月　塩谷氏は，常総地域における終末期古墳における埋葬施設をⅠ類(箱式石棺タイプ)－長方形の掘り方内に箱式石棺を構築する，Ⅱ類(武者塚タイプ)－長方形の掘り方内に石棺系石室を構築する，Ⅲ類(永国タイプ)に分け，Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類の段階的変遷又は，Ⅰ類→Ⅱ類・Ⅲ類のⅡ類とⅢ類が併存して変遷すると考えている。

(22)註20論文

(23)県内のこの時期の須恵器に関しては，土生朗治氏が積極的に取り組んでいるので，その成果により，県内の湖西産須恵器の一覧表を作成した（土生朗治「第3章考察　1　大塚戸篠山古墳出土の湖西産須恵器について」『大塚戸篠山古墳群　第5号古墳発掘調査報告』水海道市教育委員会　1993年3月）。この一覧表に基づいて作成した湖西産須恵器出土遺跡分布図を概観してみると，太平洋岸及び太平洋に流れる河川を中心に分布していることが分かる。湖西産須恵器の搬入経路については，太平洋岸の他県の状況を分析いなければ，明確なことはいえないが，やはり太平洋経路で持ち込まれたと考えるのが自然であろう。

(24)在地産須恵器に関しては，既に炭焼遺跡と札場古墳群のまとめでも触れている。成田古墳群から出土した在地産須恵器は，時期的には茨城県においても須恵器生産が開始されている7世紀後葉のものである。常陸太田市幡山窯跡や那珂郡東海村馬頭根窯跡出土の須恵器，さらに，炭焼遺跡や札場古墳群から出土した須恵器とは，胎土に違いがみられることから，仮に在地産Ⅲ式と在地産Ⅳ式としておく。

・海老澤稔他『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会　1977年3月

・茂木雅博『常陸馬頭根窯址』東海村教育委員会　1983年3月

(25)日本古典文學大系『日本書紀』下　岩波書店　1965年。『日本書紀』大化元年八月丙申朔庚子条が考古学的に言えるかどうかは，本県の状況及び他県の状況を詳細に分析して行かなければ明確なことは言えない。しかし，今後この条文は「大化の薄葬令」と同じように分析していかなければならないだろう。

(26)『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅰ）』東京国立博物館　1980年4月

(27)斎藤弘「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』第2号　1985年12月を基に，若干の追加をしたものである。

(28)註27論文，同氏「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号　1986年12月

(29)田中新史「東国終末期古墳出土の馬具－年代と系譜の検討－」『古代探叢』　1980年10月

(30)当遺跡出土の杏葉と毛彫り文様の類似しているものに，千葉県印旛郡栄町浅間山古墳出土例がある。この杏葉は7世紀第3四半期に位置づけられ，当遺跡出土のものよりも若干新しく，また，柴崎遺跡出土のものよりは古く位置づけられるのではないだろうか。

・千葉県史料研究財団『栄町浅間山古墳現地説明会資料』　1997年3月

(31)註17書

(32)茨城県教育財団「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）　柴崎遺跡・中塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第63集　1991年3月

(33)註17書

(34)竹内恒・土屋長久「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』13　長野県考古学会　1972年

(35)芳賀陽「上向嶋2号墳」『二本松古墳群』愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団　1976年

(36)古瀬清秀「4農工具－B鉄製工具－a鉄斧」『古墳時代の研究』8　古墳Ⅱ　副葬品　雄山閣　1991年11月

(37)西宮一男『常陸狐塚』　1969年

(38)茂木雅博「原古墳群」『茨城県資料　考古資料編　古墳時代』　1974年2月

(39)註2書

(40)茨城県教育財団「（仮称）真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書　八幡前遺跡・小山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第99集　1995年3月

(41)註16書

付　章

1　炭焼遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県では，これまでにも多くの遺跡で古墳時代から平安時代の住居構築材の樹種が明らかにされてきた。その結果，沿海地ではアカガシ亜属やシイノキ属など，暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成種が確認されている。一方，内陸の台地上では，クヌギ節やコナラ節など，二次林を構成する種類が多い。このような違いは，沿海地と内陸とで周辺植生が異なっていたことに起因すると考えられている（高橋・植木，1994）。この境界線がどの付近になるのかは現時点では不明な点が多く，今後さらに資料の蓄積をはかりたい。

本報告では，炭焼遺跡から出土した，住居構築材と考えられる炭化材の樹種を明らかにし，用材選択に関する資料を得る。

1．試料

試料は，古墳時代後期の焼失住居跡から出土した，住居構築材と考えられる炭化材3点（SI－18　№1，5，SI－29　№3）である。

2．方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

3．結果

SI－18　№1および№5はコナラ属アカガシ亜属に，SI－29　№3はハンノキ属にそれぞれ同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ハンノキ属（Alnus sp.）　　カバノキ科

散孔材で，管孔は単独または放射方向に2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し，壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性，単列，1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。柔組織は短接線状～散在状。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis sp.）　　ブナ科

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。

4．考察

住居構築材と考えられる炭化材は，常緑広葉樹のアカガシ亜属と落葉広葉樹のハンノキ属が確認された。茨城県内では，日立市諏訪遺跡（嶋倉，1980），水戸市白石遺跡（未公表資料），常北町前側遺跡（未公表資料），鉾田町平出久保遺跡（未公表資料）などで構築材にアカガシ亜属が認められた。これらの遺跡では，アカガシ亜属以外にも暖温帯常緑広葉樹林を構成する種類（シイノキ属・イヌガヤ・ムクロジなど）が確認されており，

いずれも沿海地に位置している。今回を含めた樹種同定結果により，古墳時代から奈良・平安時代にかけて常緑広葉樹を主とした植生が見られたことが推定される。なお，ハンノキ属は，遺跡周辺の低地に生育していたものを利用したと推定される。

古墳時代の構築材については，沿海地の他にやや内陸の牛久市や水海道市周辺でも多数行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1986a,1986b；未公開資料）。これらの調査ではアカガシ亜属は１点も確認されておらず，落葉広葉樹のクヌギ節やコナラ節を主とした樹種構成が確認できる。このことから，沿海地と内陸とで周辺植生に違いがあったことが推定される。

〈引用文献〉

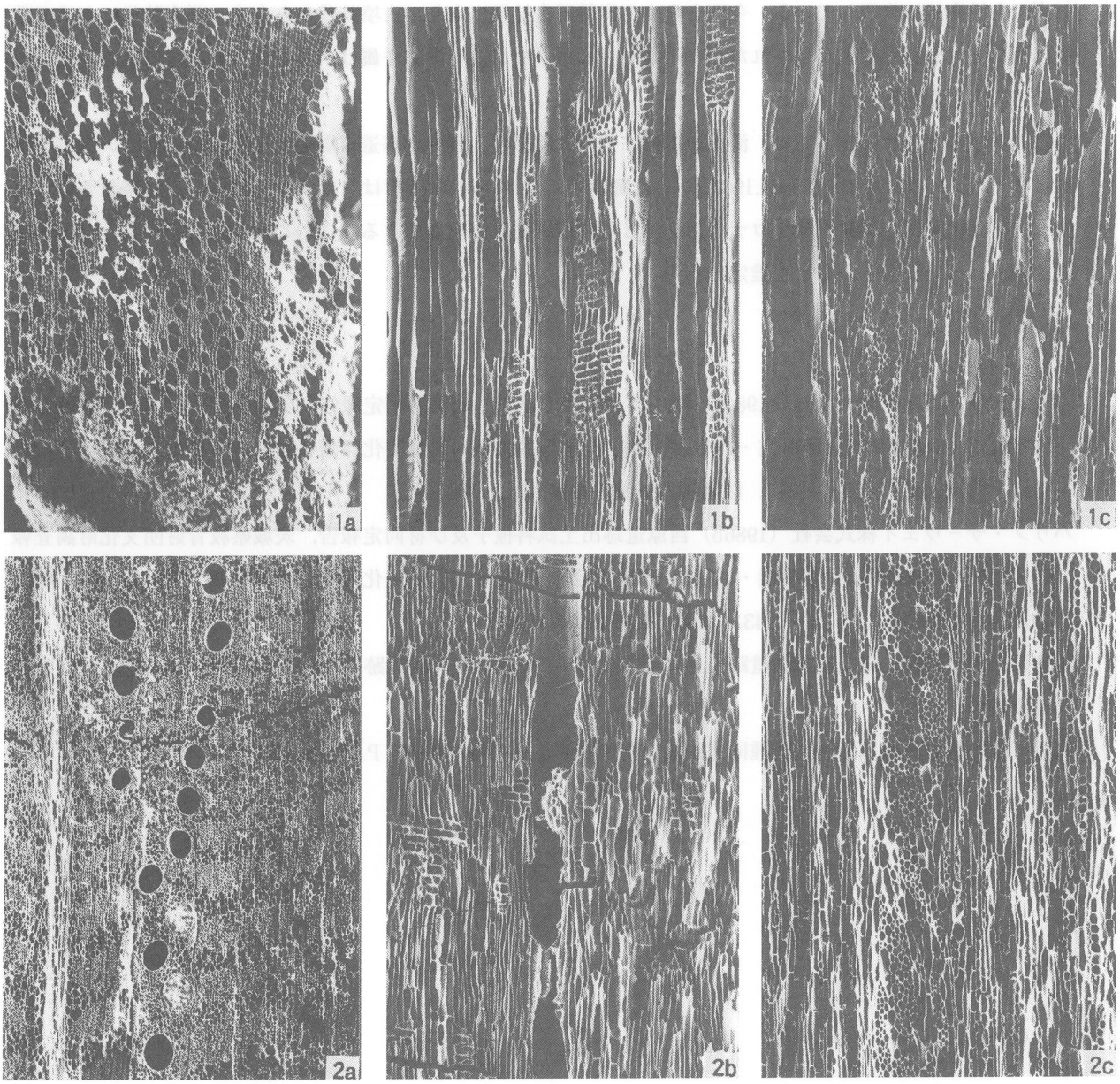
パリノ・サーヴェイ株式会社（1986a）奥山Ａ遺跡出土試料　炭化材同定報告．茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告２　奥山Ａ遺跡・奥山Ｃ遺跡・西原遺跡」，p.239－240，財団法人茨城県教育財団．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1986b）西原遺跡出土試料種子及び材同定報告．茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書２　奥山Ａ遺跡・奥山Ｃ遺跡・西原遺跡」，p.241－243，財団法人茨城県教育財団．

嶋倉巳三郎（1980）日立市諏訪遺跡出土木炭の樹種について．「諏訪遺跡発掘調査報告書」，p.188，日立市教育委員会．

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択．PALYNO,２，p.５－18.

図版1　炭化材



200μm：a
200μm：b，c

1. ハンノキ属（SI-29　No.3）
2. コナラ属アカガシ亜属（SI-18　No.5）
a：木口，b：柾目，c：板目

2　成田古墳群出土人骨

国立科学博物館人類研究部
梶ケ山真里・馬場悠男

はじめに

成田古墳群は，茨城県行方郡北浦町成田に所在する古墳群である。発掘調査は，平成８年７月から茨城県教育財団によって行われ，７基の古墳のうち３基（３号・５号・６号）から人骨が検出された。なお，本文中の数字の単位はミリメートル，示数はパーセントである。さらに，取り上げ番号は，実際取り上げの際につけられたもので，これに従った。

出土人骨

３号墳出土人骨

３号墳では，人骨が石棺の奥壁隅（北西）に集積されていた。個体骨として同定できたものは，壮年後半の男性（A）のみである。人骨の部位同定は表１の通りである。明らかにAのものと思われる骨から記述し，個体判定が困難な骨は部位ごとに記述した。

A人骨

下顎骨（No.29）は，下顎枝頭の一部が破損しているだけで，保存は良い。オトガイ隆起およびオトガイ結節は特に発達していない。下顎角はやや外反し，下顎枝幅が広い（40.5）。咬筋窩が発達し，下顎体も高い。全体的にしっかりした，強壮な男性の可能性が高い。歯は以下の通り植立している。

×７６５４３○×｜１×３４５６７８　　○は，歯が死後脱落し，歯槽が開放
×は，歯が生前に脱落し，歯槽は閉鎖

下顎切歯は，右中切歯と左側切歯が生前に脱落したと思われる。咬耗は，象牙質が大きく露出し，第１大臼歯では歯冠が半分にすりへっていることから，ブロカのⅢ～Ⅳに相当する。

（体幹骨・四肢骨）

体幹骨は，破損が著しく，椎骨片と肋骨がわずかに残っているだけである。

上肢骨では，左右鎖骨，肩甲骨片，左右上腕骨，左橈骨が残っている。

右鎖骨（No.37）は，両端が破損している。骨体は太くしっかりしており，胸鎖鈒帯痕，菱形鈒帯線，円錐結節などの発達が良好である。大胸筋付着部の発達も明瞭である。古墳時代人男性平均値（城　1939.）と比較しても中央矢状径，中央垂直径，中央周とも上回る。左鎖骨（No.36）は骨体が全体の１／４程度残っているにすぎない。筋付着部などの詳細は不明であるが，骨体は太い。

肩甲骨の残りは左右（No.27，No.７）とも悪い。右はかろうじて関節窩の一部と肩甲棘が残っている。関節窩は幅広で，肩甲棘は大きい。左は，烏口突起の一部が残っているだけである。

右上腕骨（No.35）は骨頭が破損し，左上腕骨（No.30）は骨頭および骨端の一部が破損している。左右とも骨体の中央部が残っている。三角筋粗面は良く発達し，最小周も大きい。骨体遠位部の外側縁の発達が特に良好である。

左橈骨（No.22）は，骨頭および骨端が破損している。橈骨粗面や回内筋粗面は，骨表面の風化が著しく観察できない。ただし，骨間縁は良く発達し，骨体も太く強壮な印象を受ける。中央矢状径，中央横径は，古墳時

代の男性平均値（城　1939.）を大きく上回る。

下肢骨では，左右寛骨，左右大腿骨，左右脛骨，（左右）腓骨が残っている。距骨は破損が著しい。

寛骨（№21，№15）は，腸骨や恥骨周辺が破損している。大坐骨切痕の湾入は鋭角で，寛骨臼も大きく深い。きわめて大きく強壮な印象である。明らかに男性のものである。

大腿骨（№18，№24）は，右では，骨頭と骨端が破損しているが，骨体部がほぼ完全に残り，左では骨体の遠位半部が保存されている。左右とも骨体は太く，しっかりしており，古墳時代男性の平均値を大きく上回る。後面の粗線は明瞭に隆起している。粗線の明瞭な発達は，いわゆる付柱の形成によるものではなく，骨棘が加齢により多量に形成されたためである。下端も大きく，全体的にきわめて強壮な個体である。

右脛骨（№26）は，骨端が破損し，骨体中央部が１／２程度残っている。左脛骨（№19）は，両端の一部が破損している。上端が大きく，関節面も広い。左右とも骨間縁と前縁が鋭い。ヒラメ筋線も明瞭で，後方に突出している。骨体の太さは，古墳時代人男性の平均値を大きく上回る。

腓骨は，左右の骨体中央部が３～４センチ残っているだけである（№25，№32）。前縁・後縁・骨間縁が鋭く，骨体は太い（最大径19.5：最小径15）。

距骨は破損が激しいので記述を省略する。

Ａ人骨は，頭蓋骨を除いて比較的保存が良好であった。四肢骨の形態的特徴から，強壮な男性であったと思われる。年齢は歯の咬耗の程度や骨棘の形成状態から，壮年後半から熟年に達していたと思われる。

Ａ人骨以外の骨および歯

（頭蓋）

左前頭骨の一部，頭頂骨片，後頭骨および，左錐体などが残っている（№１）。保存されている骨片として最も大きい後頭骨でも，長さ10センチ×幅７センチ程で，それぞれが断片的である。１体分の頭骨としては，残っている骨片が少ない。残っている左前頭骨片は，眉弓の隆起は確認できない。左眼窩上壁には，貧血に関係すると言われるクリブラ・オルビタリアは存在しない。頭頂骨片は，矢状縫合の一部が，内板では完全に癒合消失している。後頭骨の骨表面は，比較的なめらかで，外後頭隆起はない。この頭蓋骨が，Ａ人骨である可能性も捨て切れない。しかし，下顎骨以外の頭骨の保存状況はきわめて悪く，詳細な観察ができず，断定ができなかった。また，№１の頭骨とは別個体と思われる，大きさ５センチ×５センチの頭頂骨の一部が残っている（№28）。矢状縫合は内板でも，外板でも開いている。若い個体のものと思われる。それ以外の頭骨は，細かく断片的である。

遊離している歯は57本である。永久歯は53本（そのうち８～９才の個体の歯と同定できたものが15本，６～７才の個体と同定できたものが17本），乳歯は４本残っている。歯の形態的特徴や咬耗の状態から，その他に４体分の歯が保存されている。歯式は以下の通りである。

(6～7才)		7		5		3			3	4		
							2		2		V	
				6	V		2	1	1	2	V	6
		7		5						5		7

（10才前後）

5	3
7　　2 1	2
7 6 5	Ⅵ　6
4 3	3 4 5

（20才前後）

8	6　8
8 7 6 5	5 6 7 8

第３大臼歯が歯冠のみで，萌出して間もない。

（熟年）

	3 4 5 6
6　3　1	3 4　6

象牙質が大きく露出している。咬耗はブロカのⅣに相当する。

（体幹骨・四肢骨）

体幹骨は，破損が著しく，椎骨片と肋骨がわずかに残っているだけである。

四肢骨は，右尺骨，右の可能性が高い上腕骨，大腿骨４点（右２点，左１点，左右不明１点），右脛骨が２点保存されている。

（右尺骨）

右尺骨（№２）の骨体中央部が残っている。骨体は細いが，後縁や骨間縁はよく発達している。骨表面の風化が著しい。男性のものと思われる。

（上腕骨（右））

上腕骨（№40）は，骨体の中央部が12～13センチ残っている。三角筋粗面の観察も困難なほど骨表面の風化と破損が著しい。性別は不明である。

（大腿骨）

大腿骨は４点残っており，右１点，左２点，左右不明１点である。右大腿骨（№39）は，骨頭から骨体近位部が１／３程度破損している。また，骨体の前面が部分的に大きく破損している。後面の粗線は発達していないが，骨体自体は太くしっかりしている。男性のものと思われる。左大腿骨（№３，№27）は，両端がそれぞれ破損している。№27は骨体前面がやや剥離しているが，骨体部はほぼ完全である。２点とも粗線の発達は弱いが，骨体自体は太い（№３：体中央横径26；体中央矢状径26，№27：体中央横径25；体中央矢状径約29）。骨体の太さは，古墳時代男性平均値をやや上回る。№３は大殿筋粗面がやや凹んでいる。№27は，骨体上断面示数が小さく（71.1，骨体上横径33；骨体上矢上径約22），いわゆる超扁平大腿骨に属する。これら３点の大腿骨は，形態的にきわめて良く似ている。そのため，№39の右大腿骨は，№３，あるいは№27の左大腿骨と対になると思われるが，断定できない。しかし，どちらかといえば№３と№39が同一個体の可能性が高い。なお，左右不明の小児～若年のものと思われる細い（体中央横経20；体中央矢状径18）骨体が残っている。骨表面の風化による剥離が著しい。

（脛骨）

右脛骨（№13，41）は，骨体の中央部が，№13は10センチ程度，№41は20センチほど残っている。両方とも

扁平である（№13：中央横径19；中央最大矢状径30，№41：中央横径19.5；中央最大矢状径32.5）。２点とも男性であろう。２点とも残りが断片的であるが，骨体が扁平であり，骨体の太さや骨壁の厚さなどきわめて良く似ている。また，そのために，それぞれがどの大腿骨と同一個体であるか断定できない。

個体数・年齢・性別

３号墳より出土した人骨の個体数は，人骨や歯の保存状況から５体と思われる。まず，比較的保存状態の良い，年齢が壮年後半～熟年の男性と思われるＡ人骨が１体ある。Ａ人骨以外に，大腿骨および脛骨から男性が２体あることがわかる。この２体の男性の年齢は，歯の咬耗や萌出の状態より，壮年後半と20才前後である。さらに，３体の成人男性のほかに，６～７才と10才前後の小児が２体確認できる。

５号墳出土人骨

保存されている人骨は，表２の通りである。頭蓋骨は細かい骨片が残っているだけである。歯の保存状況は以下のとおりである。

（１）

８７	
６５　３２×	×２３　６７

×は，歯が生前に脱落し，歯槽が閉鎖

（２）

６ ⅤⅥ	６ ⅥⅤ
６	

（１）の咬耗は，象牙質が露出している部分があり，ブロカのⅡに相当する。（２）は，第１大臼歯の歯冠は形成されているが，萌出していないので４～５才の小児である。

四肢骨は，上腕骨・大腿骨・脛骨が確認できる。上腕骨は，遠位半部の前面が残っている。骨表面の風化も著しい。大腿骨は左右とも残っているが，左大腿骨は，二つに割れている。骨表面の風化が著しく，侵食され凹んでいる部分が多い。右大腿骨は，両端が破損し，骨体中央部が残っている。粗線の発達は弱いが，骨体は太くしっかりしている（体中央横径30：体中央矢状径31，中央断面示数：103.3）。右脛骨は，骨体外側面の一部が断片的に残っているだけである。左脛骨は，骨体後面に破損している部分があるが，右脛骨に比べ保存状態は良好である。骨体は太く，骨間縁も比較的発達して，扁平ではない（体中央横径23：体中央最大矢状径31，中央断面示数：70.6）。大腿骨および脛骨とも太さは，古墳時代男性平均値を上回る。

５号墳より出土した人骨は２体であった。四肢骨から性別は男性であると思われる。年齢は壮年前半と思われる。

６号墳出土人骨

保存されている骨は，表２の通りである。頭蓋骨は，前頭骨の一部から頭頂部，後頭骨の一部と，左右錐体が残っている。冠状縫合は外板では縫合の閉鎖はないが，内板では癒合が始まっている。矢状縫合の閉鎖状況は確認できない。後頭骨では，外後頭隆起がある。左右錐体は大きく強壮である。外耳孔も大きく丸い。男性のものと思われる。歯が17点確認できる。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。重複している歯があり，２体分である。

(1)	7 6　4 3	6 7 8
	8 7 6	6 7

(2)	7 6	
		6 7 8

咬耗は，(1) がエナメル質がわずかにすり減った程度で，ブロカのⅠに相当する。(2) は，(1) よりわずかに咬耗が進んでいるが，象牙質の露出はない。同じくブロカのⅠに相当する。歯の咬耗による歯冠の摩耗が少ない。歯冠は，2体ともやや小ぶりで（表4），形態的にも良く似ている。

6号墳より出土した人骨は2体である。2体とも青年～壮年の初めである。2体のうち1体の性別は男性である。もう1体の性別の判断は困難である。

ま　と　め

成田古墳群の3号墳からは5体，5号墳からは2体，6号墳からは2体の人骨が出土した。頭蓋骨の保存状況が悪く，古墳時代の時代的特徴を明確に検出できない。一部の脛骨がやや扁平な点は，縄文時代人的特徴といえる。大腿骨上部が扁平な点は古墳時代人以降の特徴に一致する。全体として見ると，これらは古墳時代人として矛盾するほどのものではない。

最　後　に

ここで，想像が許されるならば，埋葬状況，人骨の形態的特徴および保存状況から，埋葬や被葬者の関係を述べてみたい。

人骨が出土した古墳は，複数個体が埋葬されていた。しかし，どの古墳も解剖学的配列を保った，いわゆる「一次葬」が確認できる古墳はなかった。3号墳の場合，保存状況からA人骨が最後に埋葬されたと推測できる。しかし，その出土状況は，他の人骨とともに移動・集積された状態であった。よって，A人骨が埋葬されて，かなりの年月が経過した後，「埋葬」ではなく「集積」のために人の出入りがあったことがわかる。この人骨の集積は，葬送過程の一つと思われる。人骨の残りも少ないが，5号墳・6号墳でも同様のことが想像され，何らかの意味を持つ行為と思われる。推測の域をでないが，当古墳への埋葬終了の行為かもしれない。それが，解剖学的な配列の人骨が確認できない理由ともいえる。この点に関しては，今後，成田古墳群だけではなく，周辺地域の古墳出土人骨との比較検証が課題となろう。

また，被葬者間の親族関係については，3号墳から出土した大腿骨は，骨体上部に扁平傾向がみられ，骨体の形態や粗線の状態がきわめて似ている。また，脛骨も扁平脛骨である。さらに，歯の形態も咬耗の程度の差こそあれ，小ぶりである。これらのことから，3号墳に埋葬された成人人骨については，かなりの血縁関係があったと思われる。その具体的内容については，20才前後の個体と壮年後半の個体の埋葬の時間差がわからないので，解明できない。

参考文献

城　一郎　1938.　古墳時代日本人骨の人類学的研究　人類学輯報　1

表1　成田古墳群　3号墳出土人骨

NO.	部　位	NO.	部　位
1	頭蓋骨(左錘体・後頭骨)歯(4)	25	腓骨骨体(No.32と対)
2	右尺骨	26	右脛骨骨体，寛骨片
3	左大腿骨	27	左大腿骨
4	四肢骨片	28	頭蓋骨，下顎骨，歯(1本)
5	肋骨	29	下顎骨，肩甲骨，歯(4本)
6	頭蓋骨片	30	左上腕骨
7	右肩甲骨，椎骨	31	歯(1本)
8	歯(19本)	32	腓骨骨体(No.25と対)
9	四肢骨片(多数)	33	骨片
10	右大腿骨遠位半の後面	34	肋骨
11	大腿骨体(若年のもの)	35	右上腕骨骨片
12	四肢骨片	36	左鎖骨
13	左右不明上腕骨遠位部	37	右鎖骨
14	右脛骨骨体中央部	38	肋骨片，他
15	右寛骨	39	右大腿骨遠位半部
16	上腕骨片か？	40	(右)上腕骨
17	？	41	左脛骨骨体中央部
18	左大腿骨遠位半	42	四肢骨片
19	左脛骨	43	歯(5本)，下顎骨片
20	椎骨，肋骨	44	骨片
21	左寛骨	45	歯(1本)
22	左橈骨骨体	46	歯(4本)
23	距骨片	×	歯(9本)，歯冠片多数
24	右大腿骨		頭蓋骨片，骨片

表2　成田古墳群出土人骨

5　号　墳　出　土　人　骨

No.	部　位
1	骨片
2	骨片
3	四肢骨片
4	大腿骨片
5	右大腿骨骨体中央部
6	？
7	左脛骨骨体片
8	下顎骨，歯(1本)
9	肩甲骨
10	骨片
11	右脛骨骨体(内側面破)
12	左大腿骨骨体
13	骨片
14	肩甲骨片(他)
15	骨片，歯(1本)
16	上腕骨遠位半分
17	？
・	骨片，歯（1本）
・	頭骨片

6　号　墳　出　土　人　骨

No.	部　位
1	骨片
2	骨片
3	四肢骨片
4	骨片
5	歯(12本)
6	頭骨片
7	四肢骨片
8	頭蓋骨
9	骨片，歯(10本)
10	骨片
11	頭骨片，四肢骨片
・	椎骨片
・	歯

表3　3号墳出土A人骨計測値

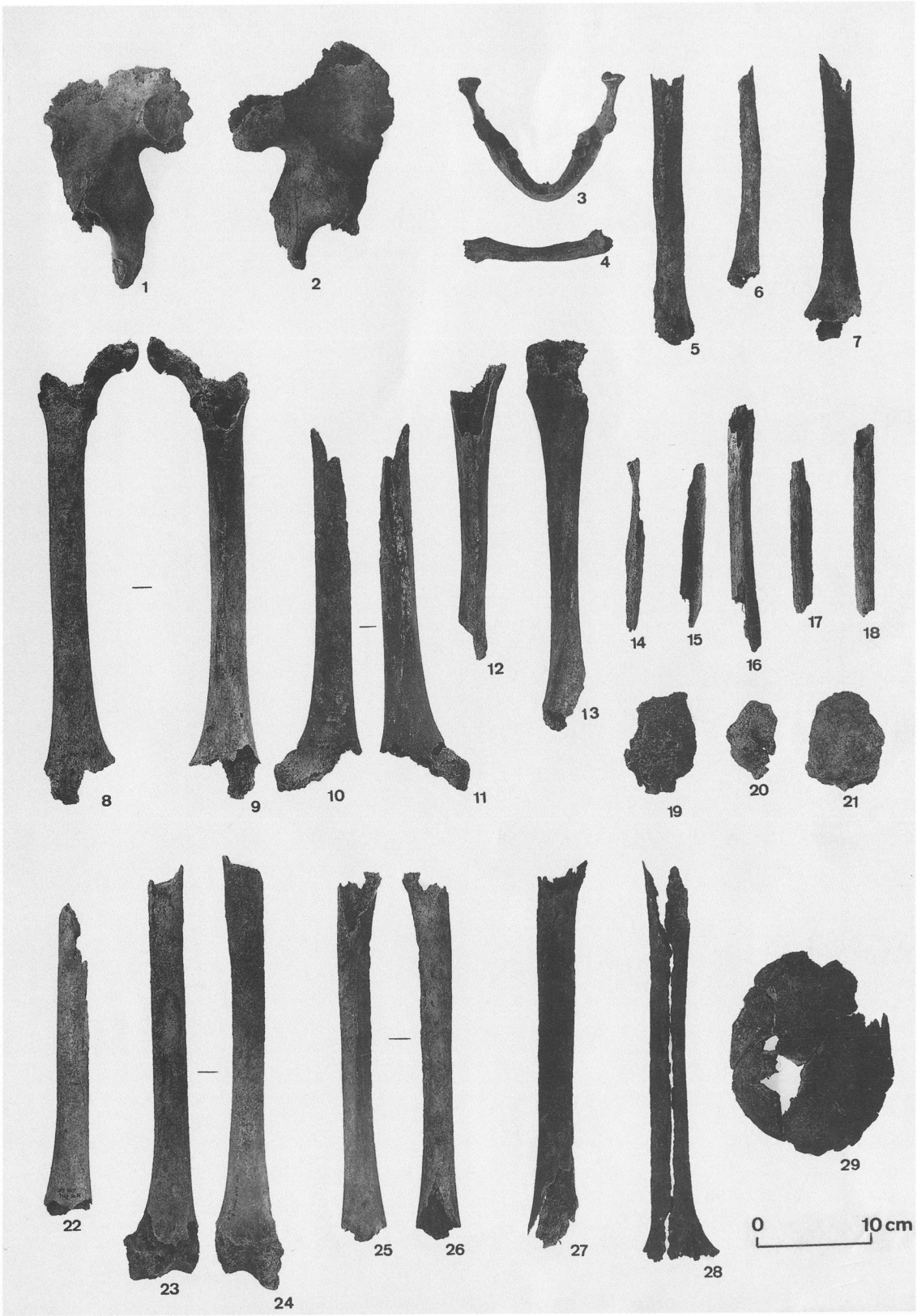
計測項目 (Martin番号)	A人骨 右	A人骨 左	古墳時代平均(城) (♂)	古墳時代平均(城) (♀)
上腕骨				
5：中央最大径	25	26.5	22	18
6：中央最小径	20	22	18	14
6/5：骨体横断示数			78	69
橈骨				
4：骨体横径		20	17	15
5：骨体矢状径		14.5	11	10
5/4：体横断示数			70	67
大腿骨				
6：骨体中央矢状径	32.2	32	27	24
7：骨体中央横径	32	30	27	24
6/7：中央横断示数			102	67
脛骨				
8：中央最大矢状径	35	32.5	29	27
9：中央横径	24.5	23	21	19
8/9：中央横断示数			72	74

表4　6号墳出土人骨歯冠計測値

歯種 ＼ 個体		(1)個体 近遠心径	(1)個体 頬舌径	(2)個体 近遠心径	(2)個体 頬舌径
上顎	右犬歯	8.0	8.1		
	右第1大臼歯	10.0	11.1	10.1	10.5
	右第2大臼歯	9.9	10.1	9.9	11.0
	左第1大臼歯	10.0	10.5		
	左第2大臼歯	9.9	11.2		
下顎	右第1大臼歯	12.0	10.5		
	右第2大臼歯	11.5	10.1	10.5	9.0
	左第1大臼歯	11.8	10.1		
	左第2大臼歯	11.0	10.0		

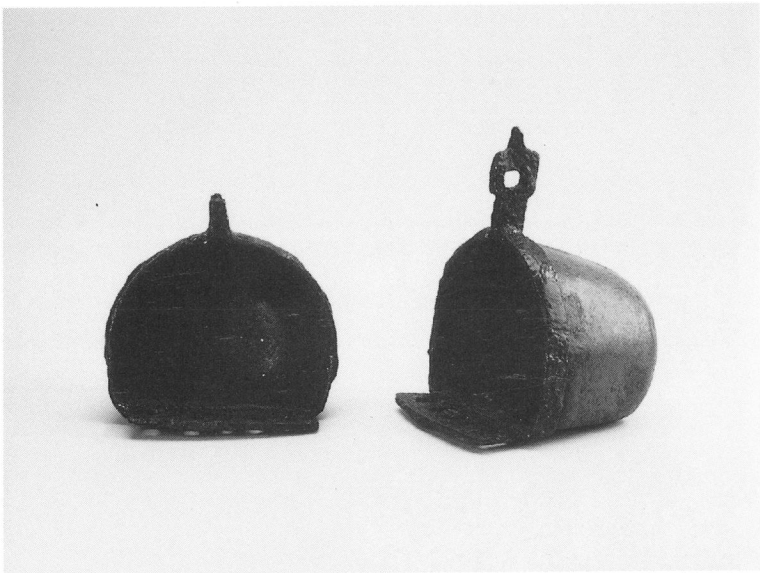
写真図版

1：右寛骨（No.15）
2：左寛骨（No.21）
3：下顎骨（No.29）
4：右鎖骨（No.37）
5：右上腕骨（No.35）
6：左橈骨（No.22）
7：左上腕骨（No.30）
8：右大腿骨前面（No.24）
9：右大腿骨後面
10：左大腿骨前面（No.18）
11：左大腿骨後面
12：右脛骨（No.26）
13：左脛骨（No.19）
14：右尺骨（No.2）
15：上腕骨（No.40）
16：右脛骨（No.41）
17：上腕骨片か？（No.16）
18：左右不明若年大腿骨（No.11）
19：頭蓋骨（No.1）
20：　〃
21：　〃
22：右大腿骨（No.39）
23：左大腿骨前面（No.27）
24：左大腿骨後面（No.27）
25：左大腿骨後面（No.3）
26：左大腿骨前面（No.3）
27：右大腿骨（5号墳，No.5）
28：左大腿骨（5号墳，No.12）
29：頭蓋骨（6号墳，No.8）

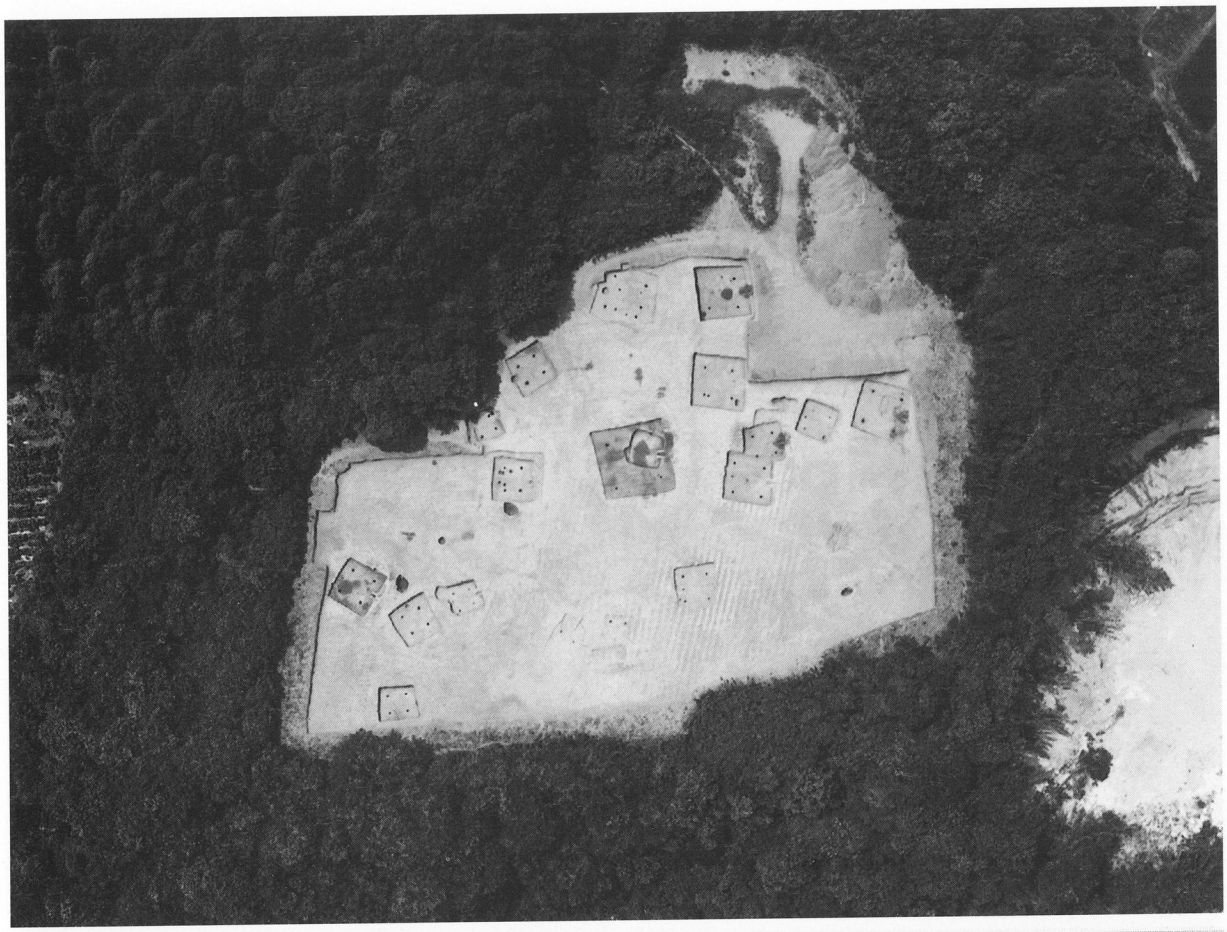

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10 cm

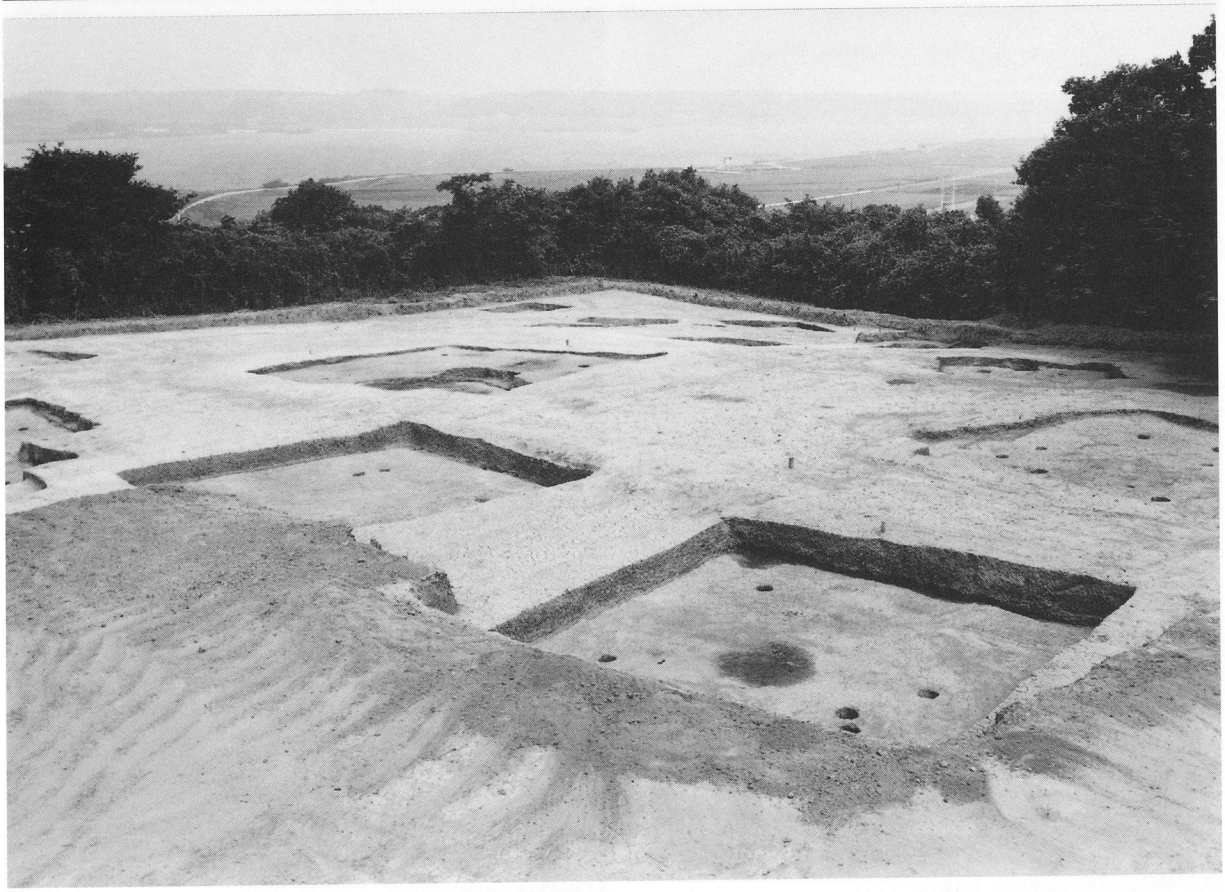
写　真　図　版

炭焼遺跡
札場古墳群
三和貝塚
成田古墳群

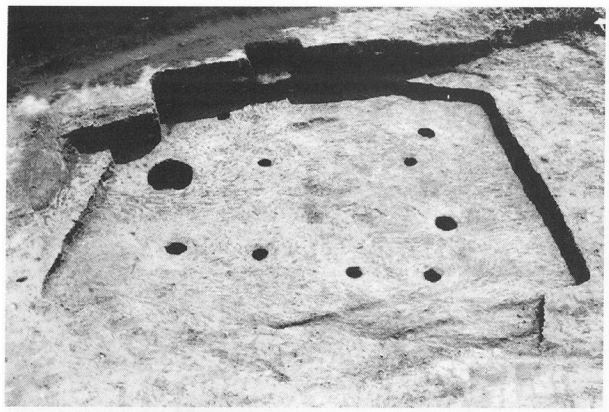


成田古墳群第３号古墳出土壺鐙

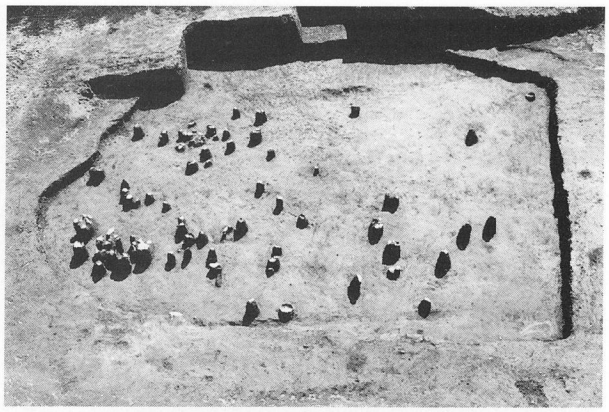




上　炭焼遺跡全景（真上から）　　下　完堀状況（西から）

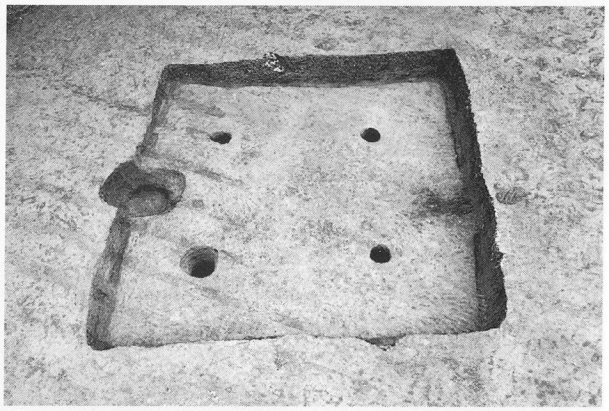


第１・30号住居跡（東から）



第１・30号住居跡遺物出土状況（1）

第１・30号住居跡遺物出土状況（2）



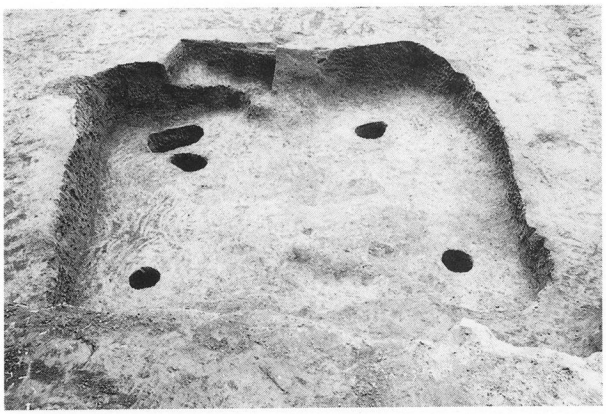
第2号住居跡（北東から）

第2号住居跡遺物出土状況（1）（北東から）

第2号住居跡遺物出土状況（2）

第2号住居跡遺物出土状況（3）

第2号住居跡遺物出土状況（4）

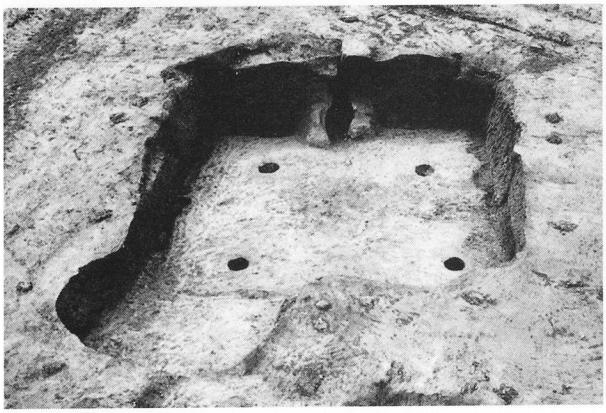


第3号住居跡（南東から）

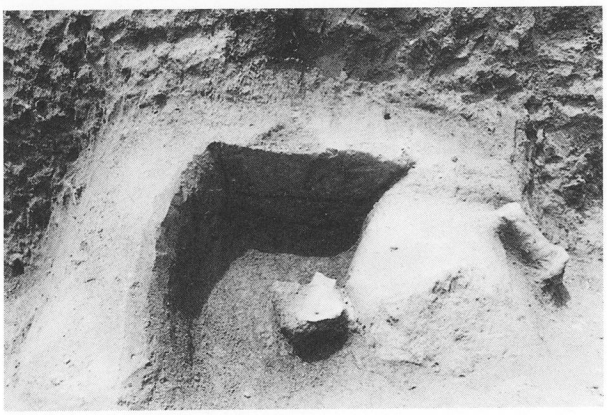
第3号住居跡遺物出土状況（1）（南東から）

第3号住居跡遺物出土状況（2）

第3号住居跡遺物出土状況（3）

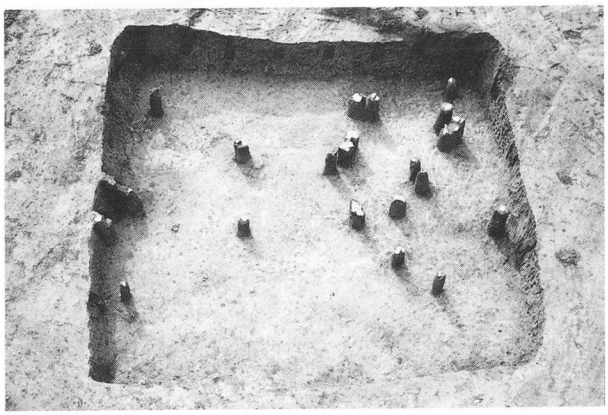


第4号住居跡，第2号土坑（南東から）

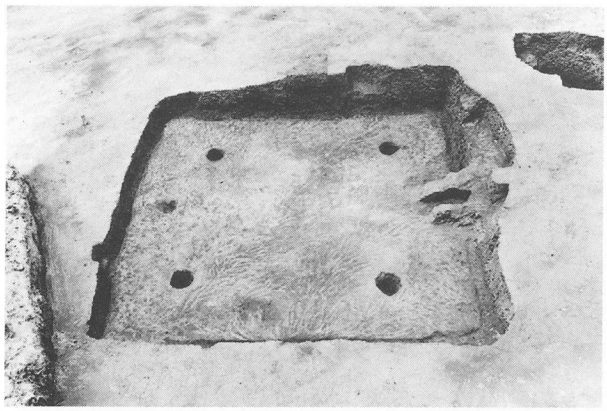


第4号住居跡竈遺物出土状況

第5号住居跡（南西から）



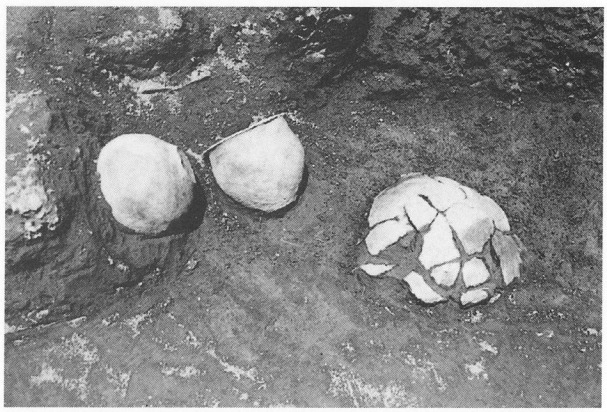
第5号住居跡遺物出土状況



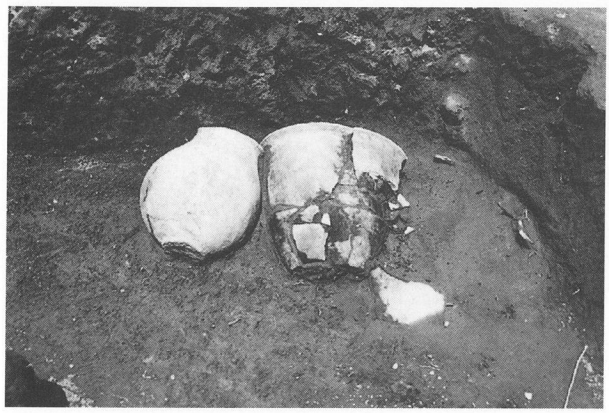
第6号住居跡（東から）

第6号住居跡遺物出土状況（1）（東から）

第6号住居跡遺物出土状況（2）

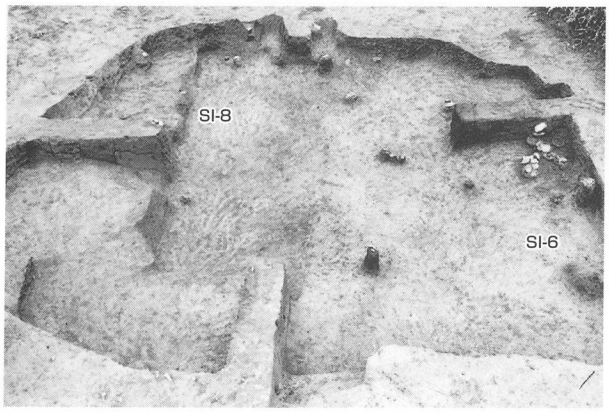


第6号住居跡遺物出土状況（3）

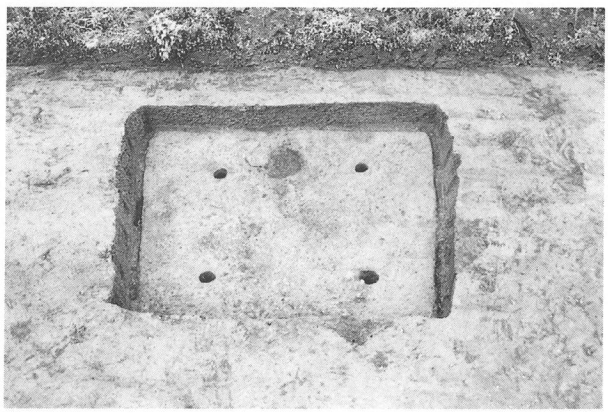


第6号住居跡遺物出土状況（4）

第8号住居跡（西から）



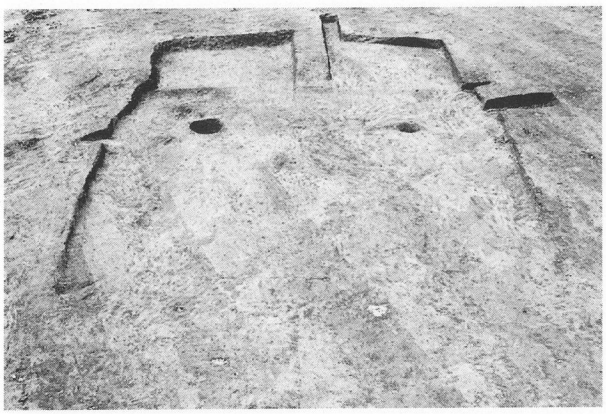
第8号住居跡遺物出土状況（西から）



第9号住居跡（南西から）

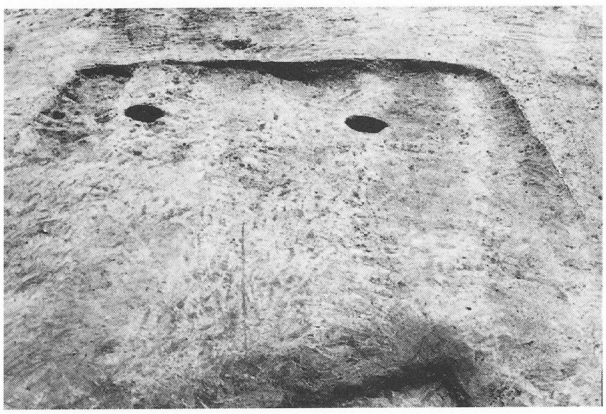
第9号住居跡遺物出土状況（1）（南西から）

第9号住居跡遺物出土状況（2）

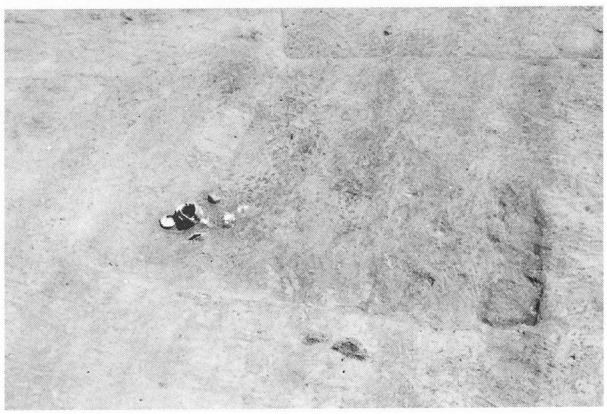


第11号住居跡（東から）

第11号住居跡遺物出土状況

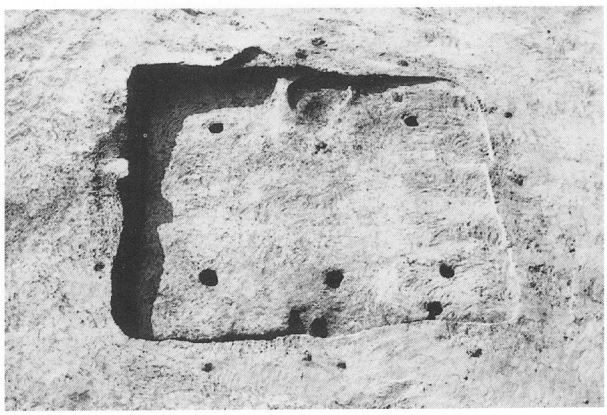


第12号住居跡（北東から）

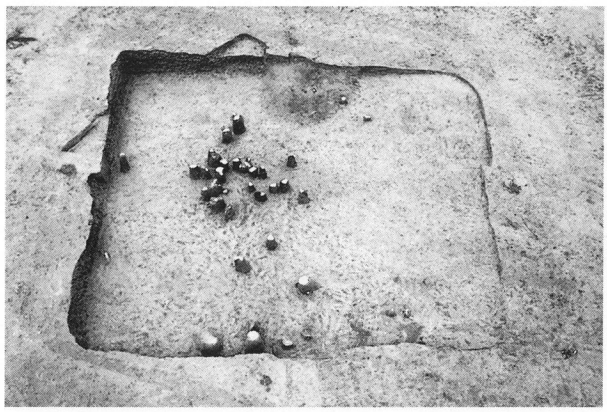


第12号住居跡遺物出土状況（1）

第12号住居跡遺物出土状況（2）

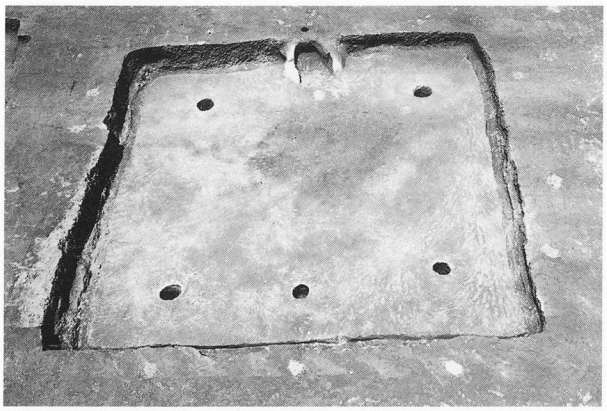


第13号住居跡（南東から）

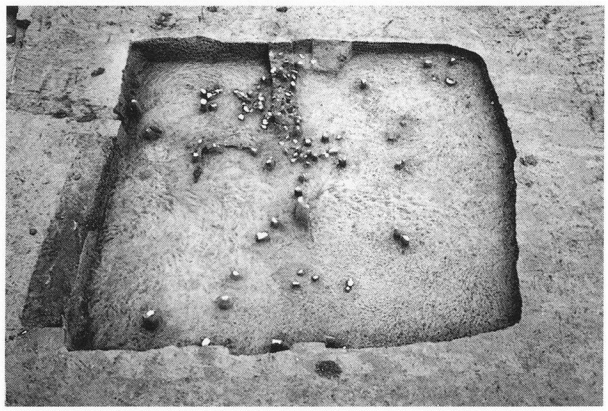


第13号住居跡遺物出土状況（1）（南東から）

第13住居跡遺物出土状況（2）



第14号住居跡（南から）



第14号住居跡遺物出土状況（1）（南から）

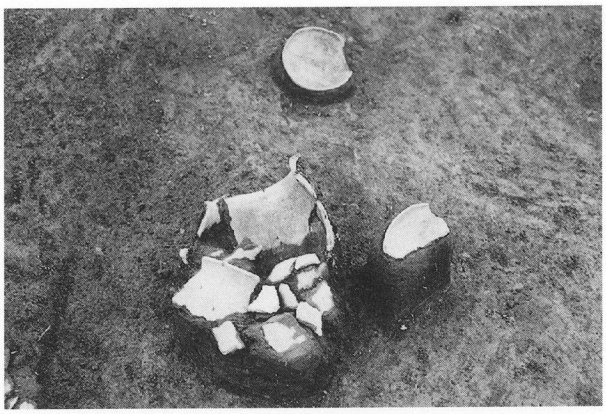
第14号住居跡遺物出土状況（2）

第14号住居跡竈

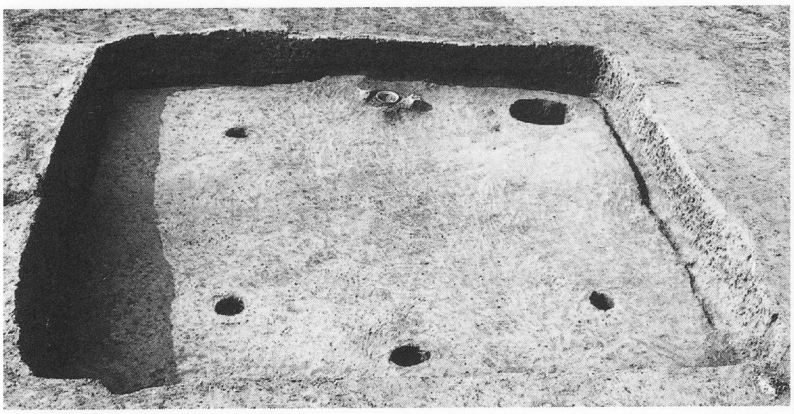
第14号住居跡竈袖部内遺物出土状況

第15号住居跡（南東から）

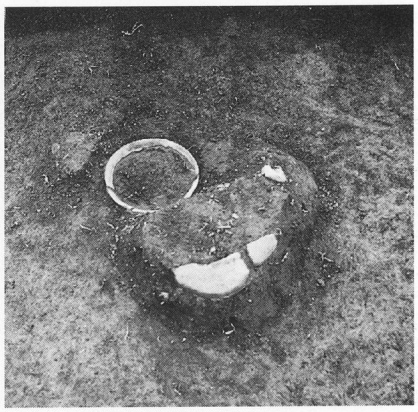
第15号住居跡遺物出土状況（1）（南東から）



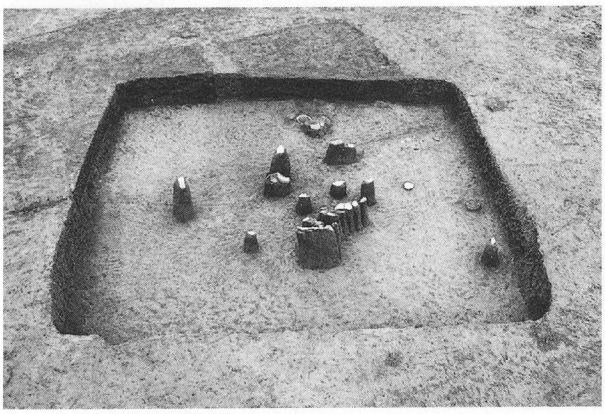
第15号住居跡遺物出土状況（2）



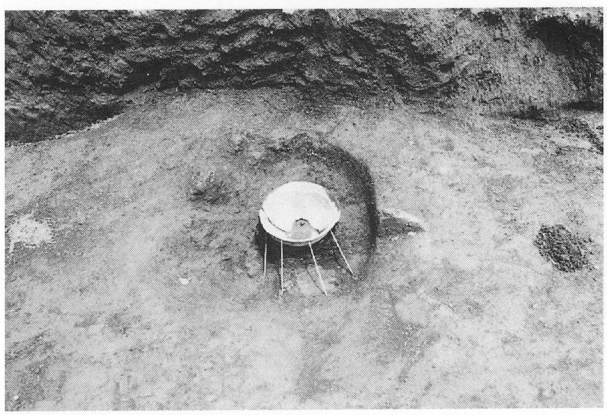
第16号住居跡（南から）



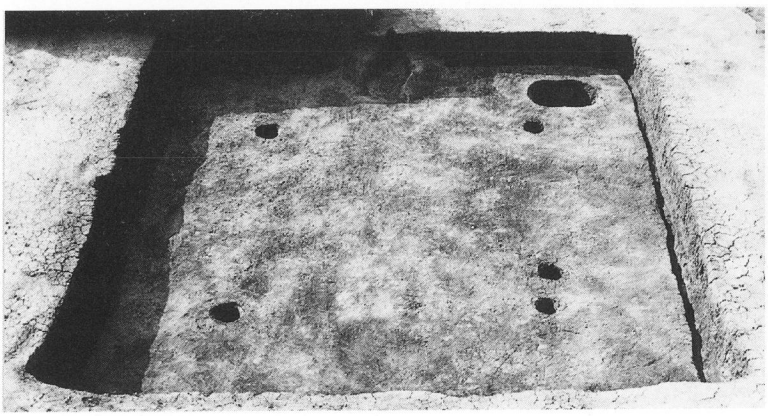
第16号住居跡竈遺物出土状況（1）



第16号住居跡遺物出土状況（南から）

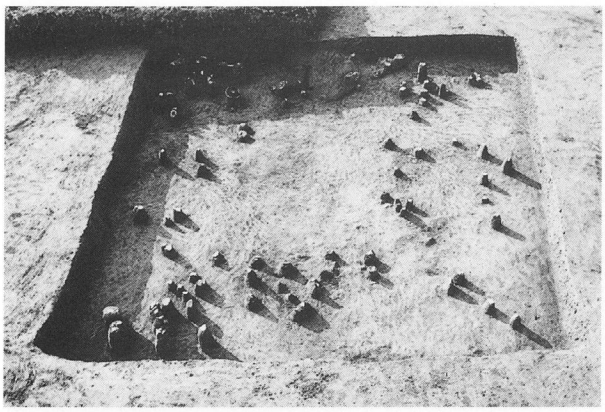


第16号住居跡竈遺物出土状況（2）

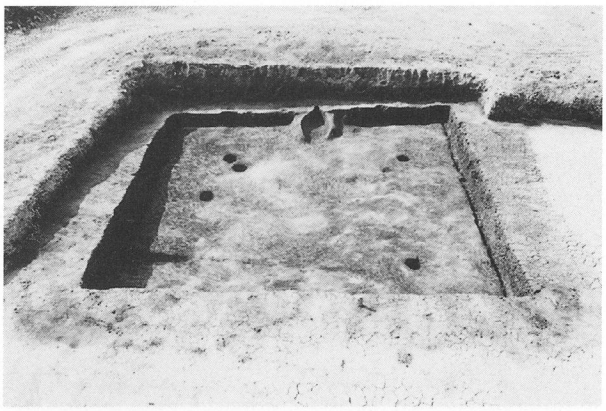


第17号住居跡（南から）

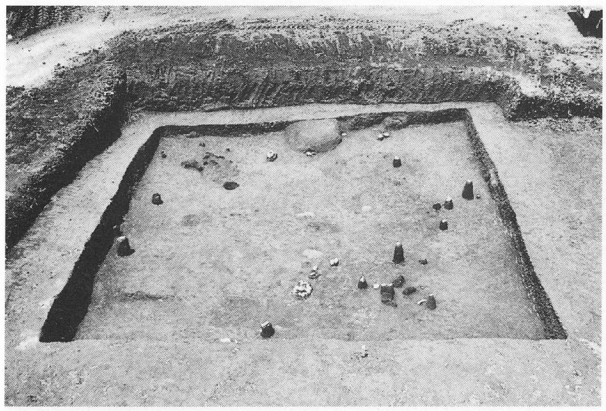
第17号住居跡遺物出土状況（1）



第17号住居跡遺物出土状況（2）（南から）



第18号住居跡（南東から）

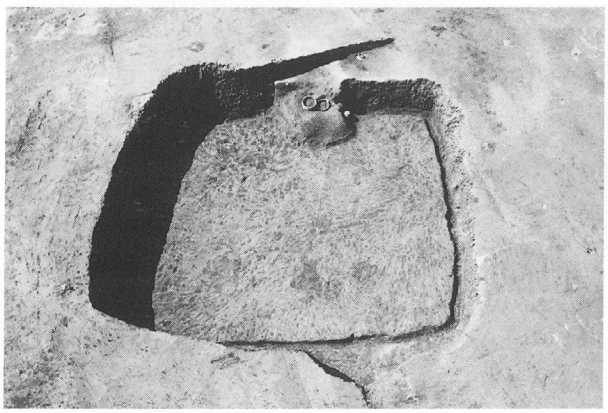


第18号住居跡遺物出土状況（1）（南東から）

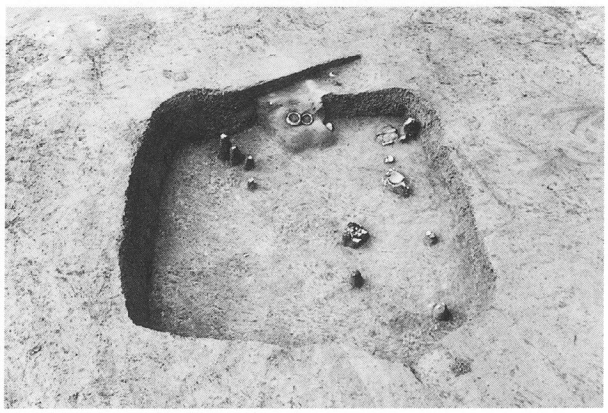
第18号住居跡遺物出土状況（2）

第18号住居跡遺物（紡錘車）出土状況（3）

第19号住居跡（1）（南東から）



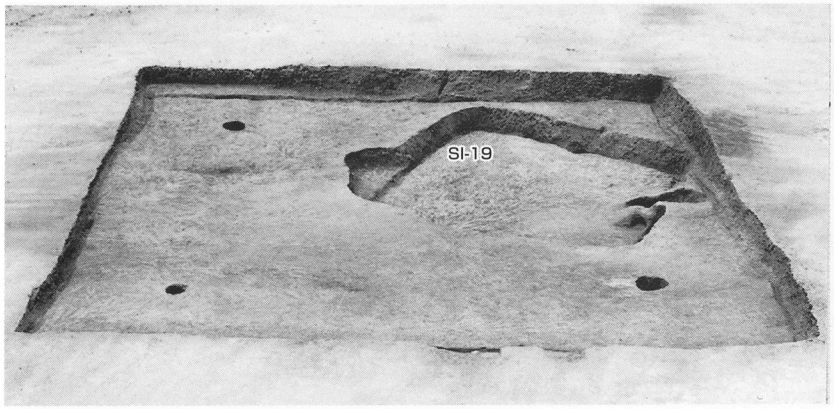
第19号住居跡（2）（南東から）



第19号住居跡遺物出土状況（南東から）

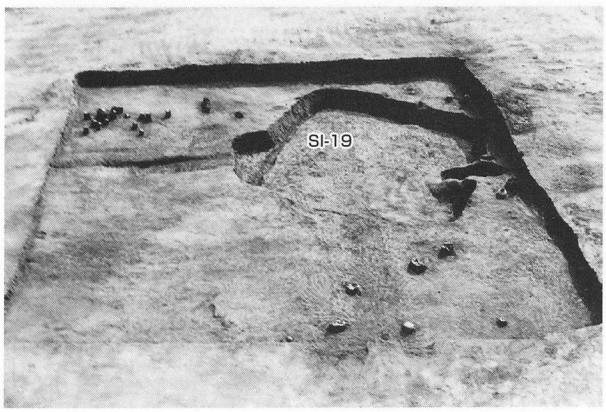
第19号住居跡竈遺物出土状況（1）

第19号住居跡竈遺物出土状況（2）



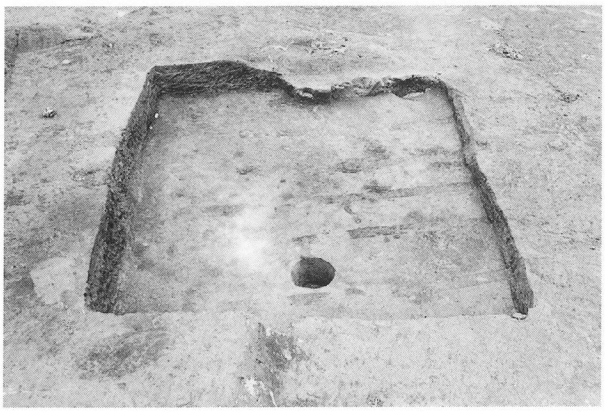
第20号住居跡（北東から）

第20号住居跡遺物出土状況（1）



第20号住居跡遺物出土状況（2）（北東から）

第20号住居跡遺物出土状況（3）

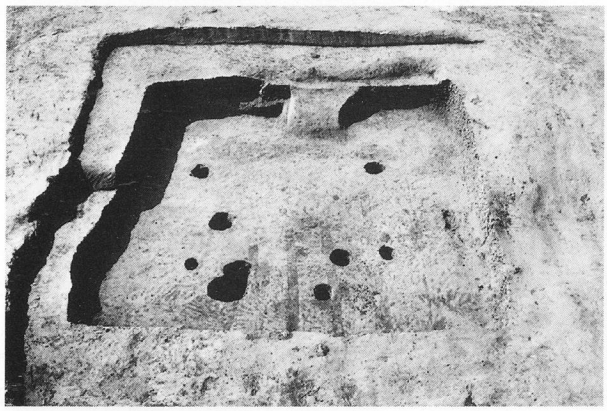


第22号住居跡（南西から）

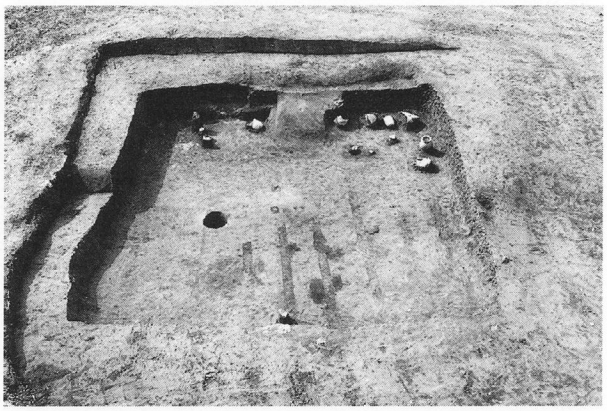
第22号住居跡遺物出土状況（1）（南西から）

第22号住居跡遺物出土状況（2）

第22号住居跡竈遺物出土状況

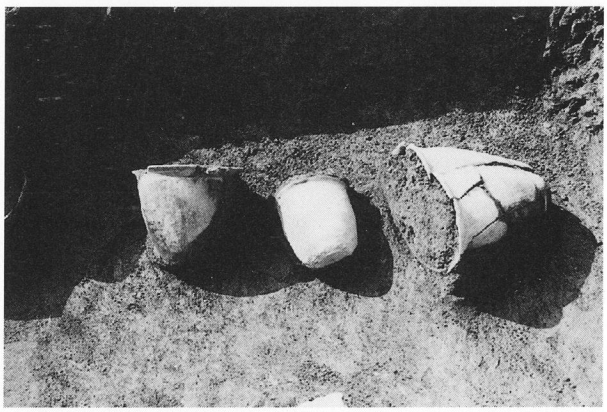


第23号住居跡（南から）

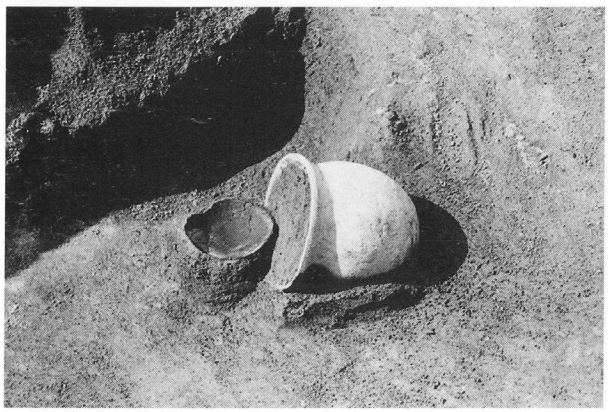


第23号住居跡遺物出土状況（1）（南から）

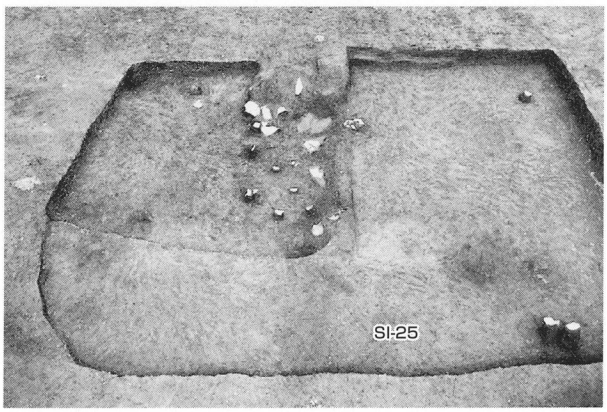
第23号住居跡遺物出土状況（2）



第23号住居跡遺物出土状況（3）

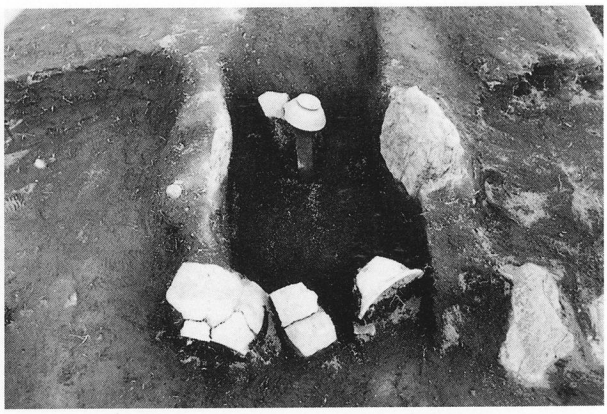


第23号住居跡遺物出土状況（4）

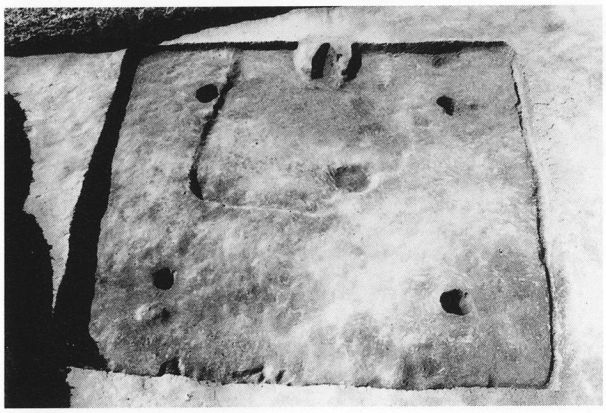


第24号住居跡遺物出土状況（1）（西から）

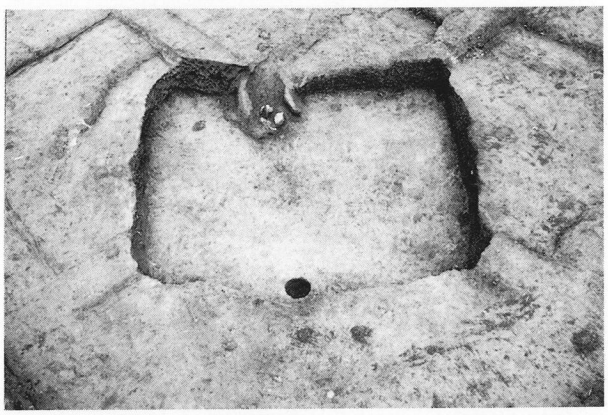
第24号住居跡遺物出土状況（2）



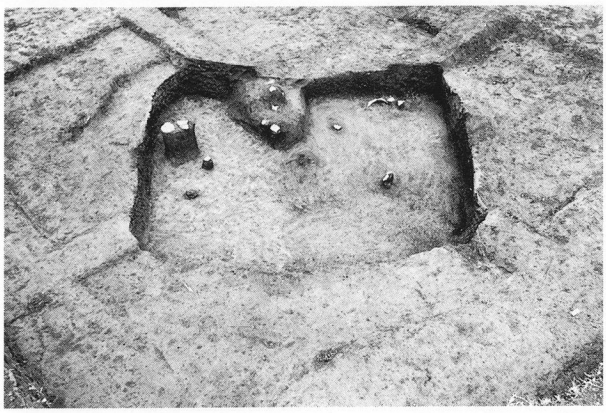
第24号住居跡竈遺物出土状況



第25号住居跡（南から）



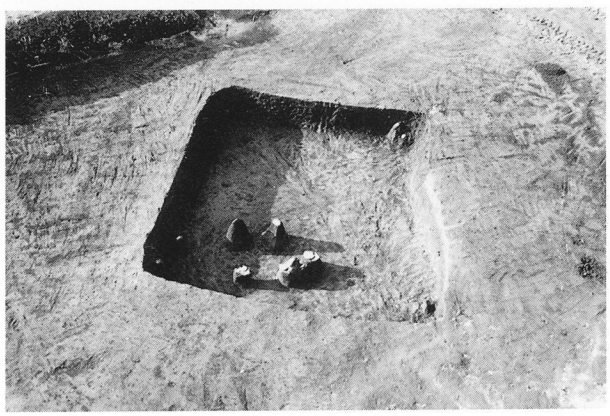
第27号住居跡（西から）



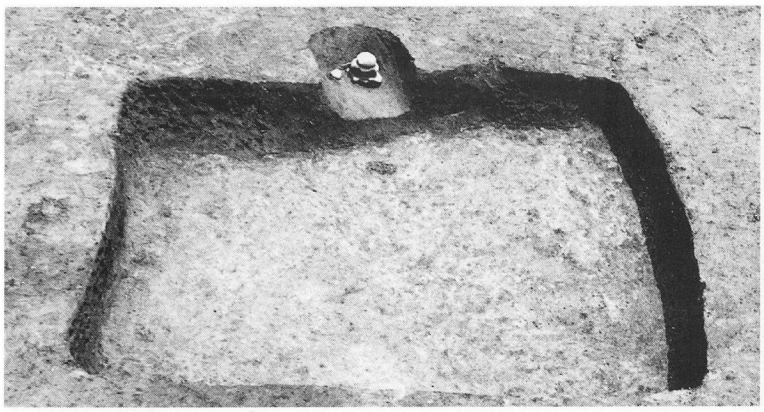
第27号住居跡遺物出土状況（1）（西から）

第27号住居跡遺物出土状況（2）

第27号住居跡竈遺物出土状況



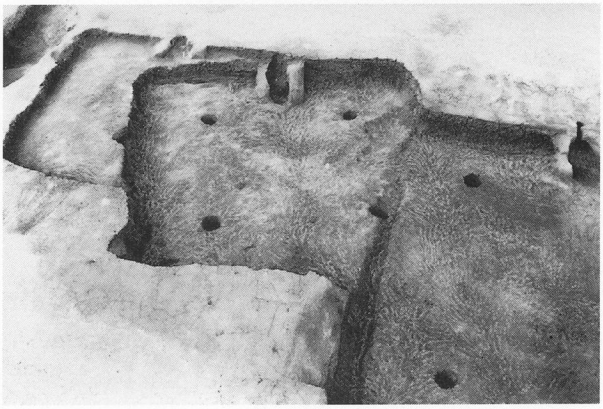
第28号住居跡遺物出土状況（1）（南から）



第28号住居跡（西から）

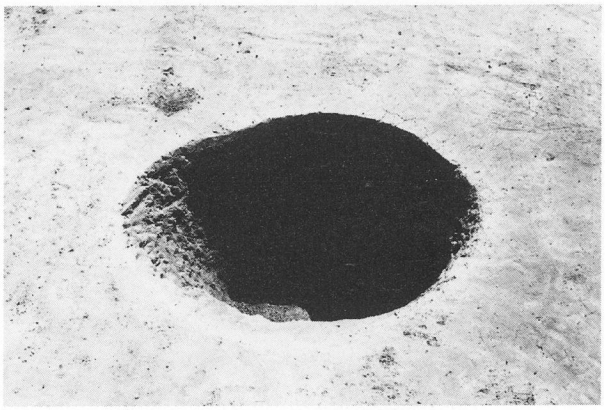
第28号住居跡遺物出土状況

第28号住居跡竈遺物出土状況



第29号住居跡

第29号住居跡炭化材出土状況



第4号土坑

第5号土坑

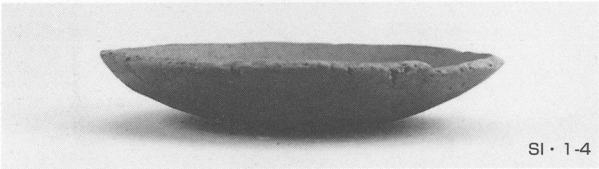
第7号土坑

SI・1-1

SI・1-3

SI・1-2

SI・1-7


SI・1-4

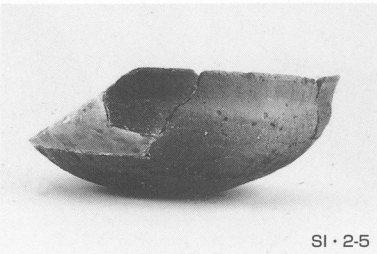
SI・1-6

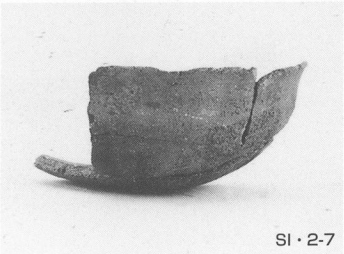
SI・1-8

SI・1-10

SI・1-11

SI・2-1


SI・2-5


SI・2-7

第1・2号住居跡出土遺物

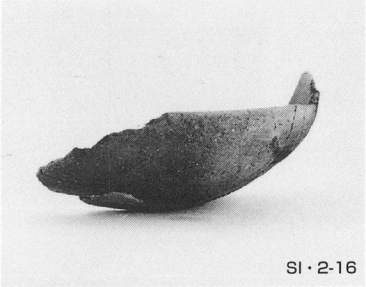
SI・2-2

SI・2-6

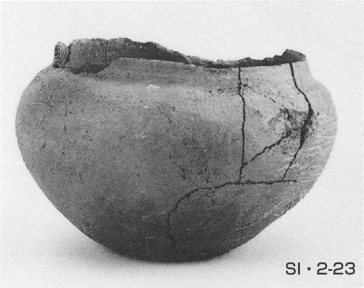
SI・2-8

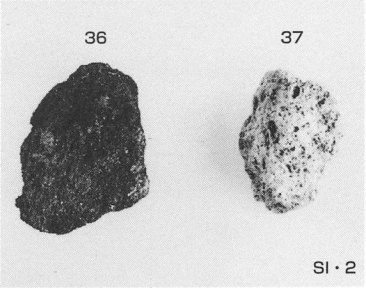
SI・2-3

SI・2-13


SI・2-16

SI・2-4


SI・2-23

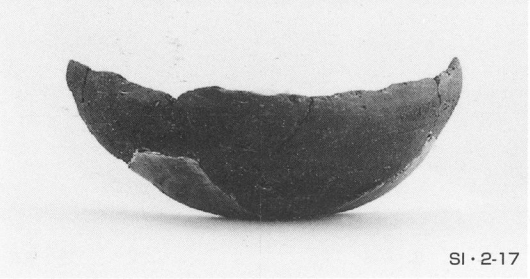


SI・2

SI・2-12

SI・2-26

SI・2-14


SI・2-17

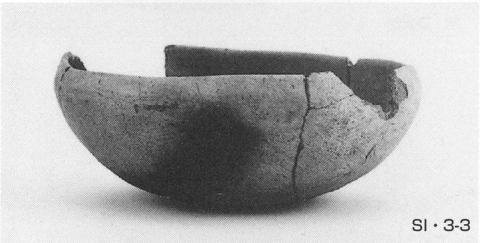
SI・3-13

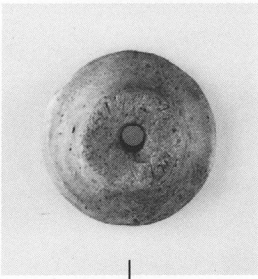
第2・3号住居跡出土遺物

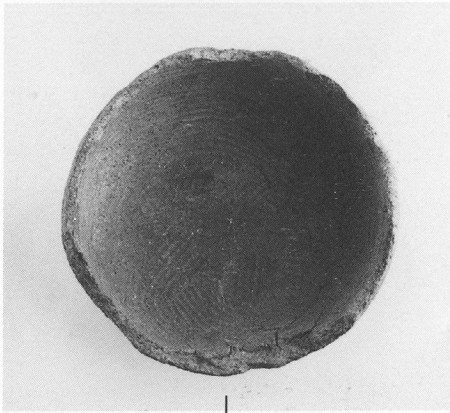
SI・3-1

SI・3-2

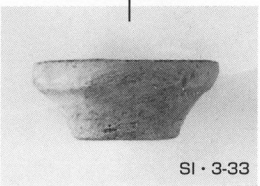
SI・3-11

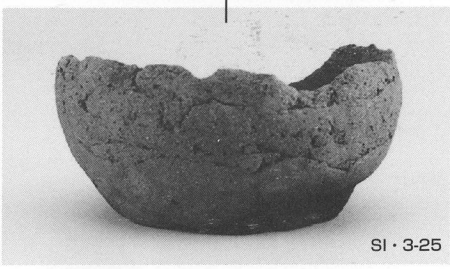

SI・3-3



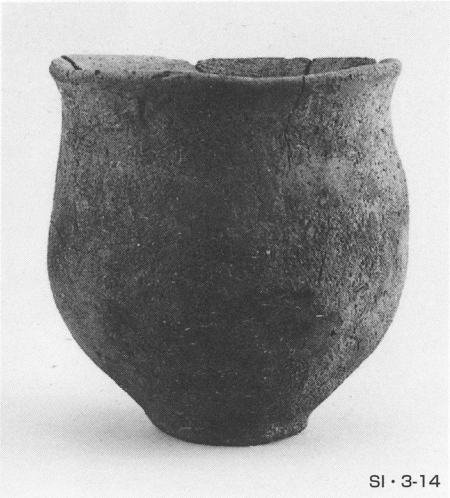


SI・3-6

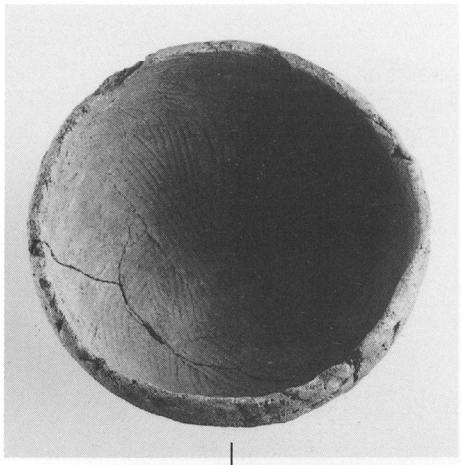

SI・3-33

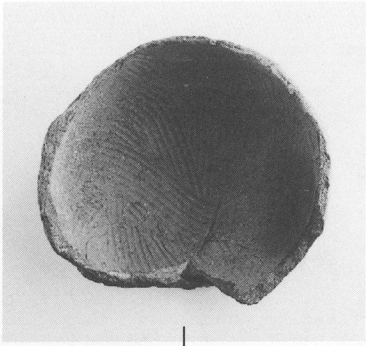

SI・3-25

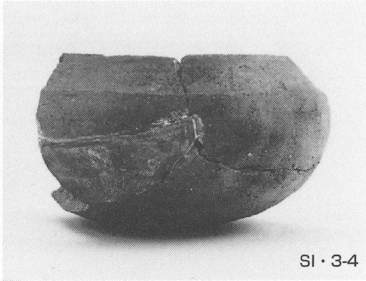
SI・3-12


SI・3-14

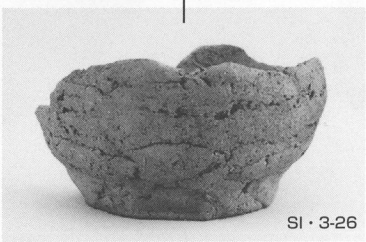
第3号住居跡出土遺物







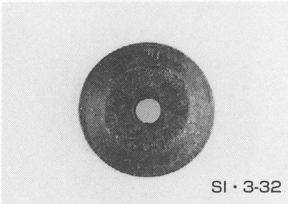
SI・3-4



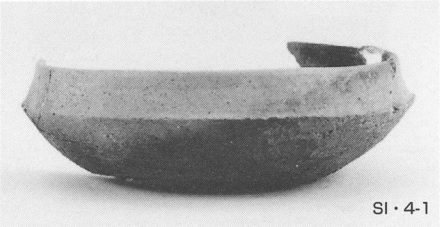
SI・3-26

SI・3-9

SI・3-24

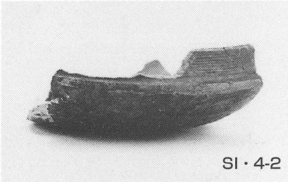


SI・3-32

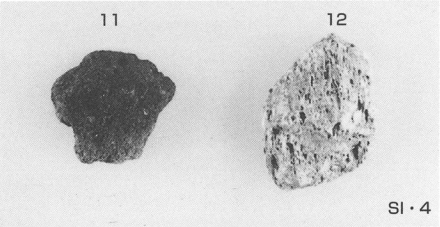


SI・4-1

SI・3-5

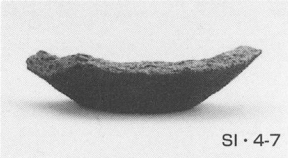


SI・4-2



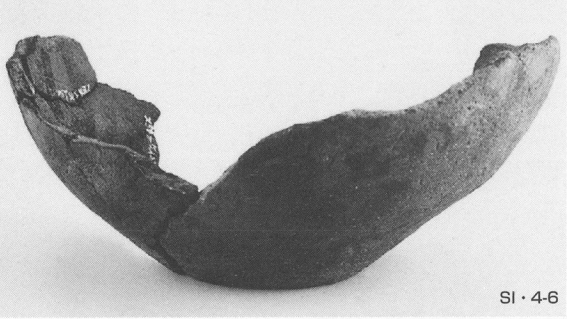
SI・4

SI・3-8



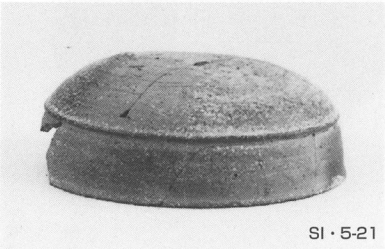
SI・4-7

SI・4-4



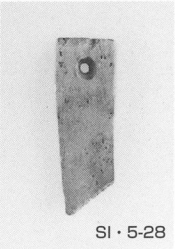
SI・4-6

SI・4-9



SI・5-21

SI・5-9



SI・5-28

SI・5-20

第3・4・5号住居跡出土遺物

SI・5-11

SI・6-1

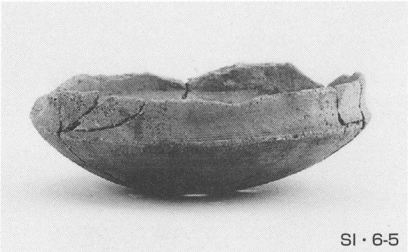
SI・6-2

SI・6-3

SI・5-12

SI・6-9

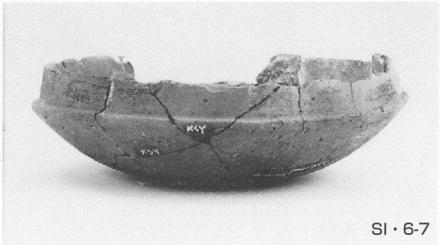
SI・6-4

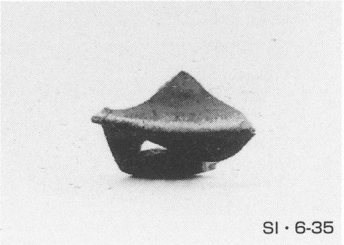

SI・6-5

SI・6-6

SI・6-13

SI・6-8


SI・6-7


SI・6-35

第5・6号住居跡出土遺物